

---

# エレノアＴＶ！

apapmk

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エレノアＴＶ！

### 【Zコード】

Z4514M

### 【作者名】

appaapk

### 【あらすじ】

エレノアは現実よりテレビが好きなテレビっ子だった。恋人のリックとアパートでだらだら暮らしている。ある日、部屋で監視カメラを見つける。するとテレビの神さまミーカがテレビの中から話しかけてきた。エレノアがテレビを見るように、ミーカもテレビ界からエレノアを見ていたのだった。

エレノア主演の番組を見たくなったミーカは、現実をテレビ番組化するのだが……。

## 1話 「あみを監視してこむ」（前書き）

アクセスありがとうございます。かなり長い作品ですが、楽しんでいただけたと思います。

出版準備中のため、そのうち削除します。

おじやんになりました。そのまま掲載をつづけます。

## 1話 「さみを監視している」

エレノアはテレビを見ている。床にじかに敷いたマットレスと布団のあいだでモゾモゾしながら、部屋どころか寝床からも一步も動かず、四角い箱の中で泣いたり笑つたり怒つたりさせられるなにかが起きるのを熱心に待ち構えていた。

いつ何時も目を離すわけにはいかない。たとえば壁の時計を見上げたとき、布団に鼻をこすりつけたとき、徹夜の疲れであぐびをしたとき　とにかくエレノアがテレビ以外に興味を示したときに限つて、ぜつたい必ず決まってなにか大事なことが起こるのだ。そしてぜつたい必ず決まって画面に目を引き戻される。

探偵はいきなり犯人の日星をつけて車を急発進させ、エキサイティングな音楽が流れ出す。ふたりは友情をだいなしにする決定的なひとことを言い、男女はキスし、兵器工場は大爆発した。クイズ王は前人未到の全問正解を狙い、犬はワンと言い猫はニャーと言った。CMでさえエレノアを飽きさせることはなかつた。一分三十秒のあいだにトイレへ行こうとすると、刺激的でカラフルなキャンディのコマーシャルとかが流れて、結局行きそびれて番組が終わるまで我慢するはめになるのだった。エレノアはずつと、自分がテレビを好きで見ていると思っていたが、最近ではテレビが自分のことを見ていて、好きでいてくれて、よく理解してくれているような気がしていた。

お気に入りの局は『ヴィッシュル』だった。外国のドラマやシットコム、視聴者参加の『デートクイズなど、気になる番組をたくさん持っている。『ヴィッシュル』のドラマはすべて欠かさず見ていた。シットコムはもつと大好きだつた。観客のあの笑い声がないと、はじまらない。登場人物がとぼけたことを言つたり大失敗したりすると、こっちが笑う前に観客の笑い声とか手を叩く音とかでいっぱいになつて、とくにおもしろくないジョークでも、これは笑わなければと

いつしょになつて笑うのだつた。

中でも『3-1』の主人公、若奥さまで未亡人のリン・タウンゼンドは、できることならなつてしまいたい人物のひとりだつた。子供がふたりいるとはとても思えない可愛さで、とくに驚いたときの顔がよかつた。ぽかーんと口を開けて、まるで八歳の女の子だ。エレノアもすっかり顔まねが癖になつて、驚いたときはいつも同じ顔になる。驚くことがなくとも、ショッちゅう驚いた顔をしてみせていた。

だけどリンとエレノアはなにひとつ似ていない。年齢はエレノアのほうが七歳と九ヶ月若いし、髪の毛もリンはつやつやの濃いブロンドで、エレノアはプラスチックの人形から生えていくようなぱさぱさのネコつ毛だつた。目の色はリンが茶色、エレノアは緑色だ。似ていのいのは、それだけじゃない。エレノアは常々思つていた。現実の世界でも、なにか言つたびに観客の笑い声が起こればいいのに。悲しい顔をすればため息が聞こえてくればいいのに。

ためしにエレノアは、テレビの前で口をへの字に曲げて思い切り悲しい顔をしてみた。

だれもなにも言つてくれない。よけい顔が悲しくなつた。

布団を巻きつけながら体を起こした。布団と体のあいだに鼻をつつこんで、一晩じゅう自分の体温であつたためた空氣を嗅いだ。安心する。さあ、テレビを見よう。テレビは楽しい。テレビは最高。できる」となら、テレビの中に入つてしまいたい。

『ヴィッシュル』は今日も朝から絶好調で、大いに楽しませてくれた。が、現地時間の十時四十六分、いきなりいい気分をだいなしにされた。エレノア的最低最悪のお天気キャスターであるミーカが突然テレビの画面にあらわされたのだ。『ヴィッシュル』の天気予報は番組表に載つておらず、時間帯も不定期で、しかも放送の長さもまちまちだつた。どうやらミーカの気分次第らしい。おなじみの「お天気といえば」から発展させるトークがノッてくると天気予報

そつちのけで一十分以上もしゃべりたおすし、かと思えばめんどくさそうにひとことふたこと天気を告げて五秒で終わるときもある。

エレノアはこの男が恐ろしかった。業界に詳しいわけではないけれど、少なくとも出演者の気分で時間が伸びたり縮んだりする番組など、あるわけがない。しかもときには、ほかの番組やCMの途中にいきなり割り込んでくる。『31』で、お隣に住む売れないと手小説家レイニーがリンとふたりきりで冷凍食品を食べる場面、妙にロマンチックな展開になり、エレノアは眼球以外の機能を停止させていた。キッチンでテーブルに向かい合い、互いに顔を近づけた瞬間、唐突に天気予報がはじまつたのだ。勝手にクリフハンガーにされてしまい、このときばかりはさすがに局へ苦情の電話を入れた（その後起こった内容を教えてもらい、「DVDを買ってください」と言われた）。

嫌いになつたのははるか昔のことだったが、このときからは憎むようになつていた。まともなのは予報の中身だけだ。つまり、当たり当たらなかつたりする。

「こんばんは！　また、ぼくだよ。ミーカの天気予報だ。  
えつ？　今は午前中なのにどうして『こんばんは』のかつて？  
じつはこの番組は録画放送で、一ヶ月も前に撮りためておいたものを少しづつ流してるんだ。だから予報が当たらないのかもね！　はは！」

エレノアの顔が険しくなつた。

「今日のフィヨルズルナカズル市は」お天気ボードにシールを叩きつける。「雪だ。大陸じゅうが大雪。みんな雪には慣れっこだと思うけど、今日の雪はハンパじゃない。今日の雪に比べたら、いつも雪なんて雪じゃない。あればただの

手を布団から出し、床にさまよわせた。レースのカーテン越しに外を見る。雪どころか久しぶりに黄色い日光がきらきら輝いている。食べ残しが入った冷凍食品のトレイや脱ぎ散らかした下着をかきわけて、リモコンを探した。

消してやる。

「さて、お天氣といえば、雨の降るメカニズムを知ってるかい？　ぼくはもちろん、専門家だから知ってるよ。いいかい、いうことなんだ。」

大気中に含まれる水蒸氣は、低温になると凝結して雲になる。そして雲の中の雨粒が大きくなると、雲の上に一戸建てを構えている雨の神さまが家じゅうの窓が結露するわ天井から雨漏りするわでとても悲しい気分になる。そしてその神さまが流した涙が地上に落下し、雨となるんだ。　今日は冴えてるな。もう

一丁いつてみようか」

エレノアは眉間に深いしわをこしらえながら、床に手を這わせつづけた。ちなみにリモコンがどこへ行つたのなら本体のスイッチを押せばいいじゃないかという意見もあったのだが、そんなことをすればストレスでどうにかなつてしまつような気がするのだつた。

洗濯物の下で、なにかに触れた。「コードだ。電源コード。天井に目をやりながらしばらく指先で感触を確かめていた。こんなところにコードがあつただろうか。あるわけがない。コード類はすべて束ねて部屋の隅に這わせてある。

ひつぱつてみる。マルチタップのひとつが動いた。

今度は反対側にたどつた。テレビのほうに向かつている。エレノアはお尻歩きで前へ進んだ。テレビがどんどん近づいてきて、お天気キヤスターも同様にどんどんアップになつた。

「電球ジョークだ。質問　　一個の電球を取り替えるのに何人の女優とスクワードレスとウェイトレスと看護婦が必要か？　答えはゼロ。そんな人たちは存在しない。わかるよね、この意味」

どうやらミークは舌好調のようだ。

「　ここでテレビの前のきみにお知らせだ。つまりぼくが言いたいのは、テレビは見るだけじゃないこと。ときとしてテレビもきみのことを見たいし、ぼくら出演者もきみのことが気になるんだ。観察したいと思ってるんだ。　　そう、そのコードだよ、エレノア」

テレビから自分の名前が出てきたので、エレノアは文字どおり飛

び上がった。耳から背骨が飛び出すかと思つた。エレノアはミーカの顔を凝視した。ミーカもまっすぐこちらを見ている。まっすぐ見ているのはつまりカメラを見ているわけで、いつもと変わらないはずなのだがいまはたしかにカメラではなくエレノアを見ていた。そんな気がした。

ミーカはしゃべるのをやめ、エレノアの手元をのぞきこむように見た。あんまりアップなので、画面から頭と肩が飛び出してきそうだった。

「コードをたどりて。そういう、どんどん近づいてる」

終点はテレビ台の中だった。まるで六が開いていて、その奥に消えていく。ミーカは下を指差した。

「台の左側の扉を開けてみて」

「コードを離し、ゆっくりと取つ手に手をかけた。

「 そうそう、きみに特ダネ情報だ。毎週欠かさず見ている『3<sup>1</sup>』だけど、きみのお気に入りのリン・タウンゼンドはじつはぼくの奥さんなんだ」

「え？」と思わず声を上げた。「うそ？」

「ほんともほんと。ひとつはつきりさせたいんだけど、リンを演じてる女優と結婚してるんじゃないくて、あのリン・タウンゼンドと結婚してるんだ。こつちは本物だしあつちはキャラクターだけど、不可能じゃない。テレビのパワーは偉大だし、ぼくはまあいいや。また話が逸れた。とにかく収納扉を開けてみて」

毒ガスが漏れ出してくるかもしないので、ゆっくりと隙間ひとつぶん開けた。なにも出でこない。それから全開にしたとき正面にいるとショットガンの銃弾かレーザー光線が飛び出してくるかもしれないでのわきによけた。そしてお待ちかね、扉を全開した。

なにも起こらない。扉越しにのぞきこむ。見覚えのない金属の箱が入っていた。大きさは手のひらくらいで、メタリックで長方形で、カメラのレンズがついていた。

「監視カメラだ」ミーカはにっこり笑つた。「ぼくが取りつけたん

だ

エレノアはカメラを手に取つて、呆然と見つめた。子供のころ「テレビばかり見てるとバカになるぞ」と親によく言っていたが、やつとその意味がわかつたような気がした。

「どうやつて」

「テレビ界からテレビ的にきみの家へ行つて、監視カメラを備えつけて、台に穴を開けて、プラグをソケットに差し込んだんだ」

「いつから」

「じつちの時間でいうと、半クール前つてどこかな」

エレノアはいまもつとも発したい質問を発した。「なぜ?」

するとカメラが引いて、ミーカの全身を映した。白一色のなにもない空間へ、スタッフが車輪つきの台を「じゅうじゅう押してミーカの前に持つてきた。

「ぼくに不可能はない。なぜならぼくは神さまだから。テレビの神さまね。できないことなんてない。ぼくはいつなんどきでもジョークが瞬時によどみなく頭に浮かぶし、しゃべりも絶対にかまないしお好きな時間に好きなだけテレビに出られるし、おまけにお天気もたまに当てることができる。さて」

もつたいぶるようになつて、腕まくりをし、台の上からトランプの箱をつまみあげた。中を開けて、カードを取り出す。ふたつに割つてシャツフルする。ディーラー顔負けの流れるような動作だったが、監視カメラとなるんの関係があるのかまったくわからなかつた。

カードを伏せた状態で扇状に開いた。すぐさまカメラが手元に寄る。

「一枚引いて」

「引けるわけない」

「どうして?」

「そつちはテレビだから。テレビに映つてるものをつかめるわけないでしょ」

「それは誤った考えだ。子供のころ親に徹底的に叩き込まれた常識

だ。『おまえにはそんなことができるはずがない。あとで苦労するんだからやめておけ』ってよく言われるんだけど、大人になるとそんなことはないと気づく。なにごとも、やってみなければ結果はわからないってね。テレビは好き?』

エレノアはうなずいた。

「そう、それがきみを選んだ理由だ。きみは選ばれたんだ」

「選ばれた?」

「そのとおり。なぜかというと、きみはフイヨルズルナカズル市でいちばんのテレビっ子だから。全大陸的に見てもかなりいい線いつてる。ただのテレビ好きじゃない。常人ではたどり着けない一線をはるかに越えてる。そのおかげで、きみは自分でも気づいていない大きな力を持つことができたんだ。ある目的のためにきみを選び、監視していた」

「どんな目的?」

「それはこのカードに書いてある」普段から芝居がかってはいるのだが、さらに大げさな調子でつづけた。「きみの運命、使命、未来なんでもいいけど、そんな感じのその他もろもろがわかりやすく大きな文字で簡潔に書いてあるんだ。気になるだろ? さあ、好きなのを一枚引いて」

ミークの言つたことには心当たりがあつた。小さいころのことはよく覚えていなかつたのだが、いつもだれかに見張られているような気がしていたのだ。親兄弟親戚には単なる妄想だと言われ、精神科に連れていかされた。頭のお医者は単なる妄想でしょうと言い、強力な睡眠薬を処方してくれた。言われたとおり睡眠薬を飲むと、親兄弟親戚が常に自分を見張り、陰でひそひそ悪口を言つているような気がしてきた。親兄弟親戚にそのことを話すと、単なる妄想だと言われてべつの精神科に連れていかされた。

そしていまに至る。あれは妄想ではなかつたのだ。エレノアはそれみたことかと親類縁者全員と市内すべての精神科医に言つてやりたくなつたが、もしかしたらこれ 자체が妄想かもしれないと思い直

した。それをたしかめるすべはひとつしかない。

エレノアは画面に手を伸ばした。テレビに映るカードの一枚を選び、指尖をテレビの中に入れようとした。

爪の先がブラウン管にこつりと当たった。

「ははは、ひつかつた」ミーカはトランプを放り投げて、喜劇役者のように大げさに笑い転げた。「テレビに映ってるものをつかめるわけないだろ」

カードが画面の上から下へ、ひらひらと揺れては落ちる。エレノアはこの男の後頭部をバールのようなもので強打したいと思つた。車庫入れのふりをしてバックでじわじわと轡き殺すのも悪くないと思つたが、それは無理な話だった。相手はテレビの中にいるのだし、そのためにはまず車の免許を取らなければならない。

そういうわけなので、エレノアは奇声を上げてテレビを突き飛ばすこととした。

プラスチックの擦れるがりつという音がして、テレビが台の上から半分はみだした。ミーカはまだ笑い転げている。もう一度。テレビはついにバランスを失い、画面が天井を向いたかと思うと台の向こう側に消えた。ブラウン管の重さで、プラスチックがぱきつとう音を立てた。笑い声はまだつづいている。

リュックは男で、どこその俳優に似ているというわけではないがそれなりに男前で、髪が黒くて、同じ年だった。といつてもテレビのキャラクターの話ではなく、このアパートにいつしょに住んでいる恋人のことだ。いつも笑顔で、まじめにいつさい関心がなかつた。働くことすら関心がなかつた。ひょっとしたら自分のことも関心がないのではと思わせるふしもあつたのだが、それでもエレノアはリュックを愛していた。二十四時間ぶつづけでテレビを見てもなにも言わないからだ。

先ほどテレビをぶつ飛ばしたエレノアは、しばらく呆然とし、荒い息をついていた。洗面所のドアが開いたので、さつと顔を向けた。

「どうかした？」リュックがドアのすきまから顔をのぞかせた。

「ミーカが

「ミーカってだれ？」

「お天気キヤスター。わたしに話しかけてきた」

「その人が来てるの？」リュックは玄関を見て、それから中央のリビング区画を見た。当然ながらだれもいない。

「ちがうつてば。テレビの中から話しかけてきたの！」エレノアは思わず叫び、それから自分がどれだけ頭のおかしなことを言つているのかに気づいた。「聞こえないの？　いまもわたしのことをバカにして笑つて」

あらためて耳に神経を集中させる。テレビはとくにだれに対してもバカにしたり笑つたりしてはいなかつた。

リュックはどう言つていいのかわからないといった様子で頭をかきながら出てきた。上は白いシャツを着ていたが、下はパンツ一丁だった。ドアの端っこが枯木を模したおしゃれなコートハンガーにぶつかり、てっぺんにひつかかっていた帽子がぱとりと落ちた。

「なにも聞こえないな。笑い声なんて」尻を向けてコートハンガーの前にかがみ、帽子を拾つた。「というか、スキージャンプの中継みたいに聞こえる」

リュックの言うとおりだつた。いつのまにかスピークーからは、控えめな歎声と間の抜けたホーンの音がうつすらと流れ出していた。実況のアナウンサー（たぶんロウスだ。もしロウスなら、選手の情報を探る延々ひとりごとのようにつぶやくはずだ）が、選手の情報を延々ひとりごとのようにつぶやいている。スキーの板が雪をすべるような音がし、次いで勢いよく踏み切つてジャンプするような音と、V字体型が風を切るような特徴的な音が聞こえた。

「いまはね。でもさつきまでミーカが

リュックは裸足でフローリングをひたひたと歩き、テレビの前にかがみこんだ。死体を調べる刑事のように、顔を上げてエレノアを見た。「テレビを突き飛ばしたの？」

なんとか説明しようと、エレノアは掛け布団を背中に乗せたままテレビのまゝにするする這つていつた。テレビを立たせ、地方局も含わせて三十一のチャンネルをひとつずつ切り替えてみる。

「どうかにいるはずよ。あいつが」

ミーカはどこにもいなかつた。思えば、本体の切り替えボタンでチャンネルを変えるのははじめてだ。なんとはなしにテレビを撫でる。側面の黒いプラスチックが大きく裂けていた。申しわけない気持ちでいっぱいになつた。エレノアは顔を上げてリュックを見、鼻をすすつた。そして知らぬまにリン・タウンゼンドの顔真似になつてこるのに気づき、不謹慎だと思い自分の顔に戻ろうと努力した。

「ごめん。悪いんだけど、なんの話かさっぱりわからない」

エレノアは掛け布団をわきにのけ、立ち上がつた。のろのろと寝床に戻り、部屋の隅っこにあるマルチタップを持ち上げた。プラグを抜いてコードをたどり、テレビ台のラックからメタリックで長方形の箱を取り出した。そして、どれだけメタリックで長方形であるかを相方にわからせようと田の前でぶらぶらせた。

しばらく眺めてから、リュックは言つた。「なんの箱？」

「カメラよ。監視カメラ。わたし、テレビのキャラクターに監視されてるみたい」

エレノアは起こつたことをこと細かに説明した。どんなセリフでなにを言われ、そもそもミーカとはだれか、なぜお天気キャスターをしているのかといった背景までも語つたのだが、聞いてるんだか聞いていないんだかわからない。返ってきたのは「ふうん」だけだつた。

「いつこうときつて、業者が警察に電話するんだっけ？」

「頭がおかしいと思つてるんでしょ」

「うーん」リュックは考え込むよつよつなつてから、答えた。「いや

「信じてくれるの？」

「もちろん。というか、ぼくも前々からそんな気がしてたんだ

よね

「ほんと?」

「いや。 言つてみただけ」

「なんだ」 Hレノアはがっくりした。

「あなたのへンテコつて?」  
「まじめな話、ぼくもいのところへンテコを実感してるよ」

「それは」 リュックは壁掛け時計を見やつた。「おつと時間が。

もうそろそろ行かなきや。じゃ」

Hレノアは急いで床につづ伏せて腕を伸ばし、なんとか足首を捕まえることに成功した。

「どこに行くの? こんなとき?」

「就職面接に出かけるの」

思わず足首から手を離した。

「就職?」

「そうだよ」

「そうだよ?」

「なんで繰り返すの?」

「べつに。驚いたときはそうするでしょ」

Hレノアは目玉をぐるりとまわした。

「まあいいや。ところでネクタイの結びかたって知ってる?」

と書うつロゴックは いまはじめて気づいたのだが 見慣れない黒くてつやつやした紐のようなものを首にかけていた。ついでに見慣れないパリッシュとしたワイシャツを着ている。あらためて眺めてみると、上半分はまるでまじめに見えた。ズボンをはけば、立派な立派な あれみたいになるじゃないか。

「ビジネスマン?」 Hレノアは自分自身の問いかけに答えてから、かぶりを振った。「ネクタイなんてしたことない」

「ぼくもだよ。とにかく、就職するつて決めたんだ。いつまでもお気楽じやまざいと思つて。いろいろ調べたよ。面接の心得その一スーシとネクタイで望むこと。そうすれば、どんなバカでも受け

させてもらえるんだつてさ。ぼくがバカって意味じゃないよ。いや、バカなのかも。面接に落ちたらバカってことなのかな。わかんないや。ネクタイの結びかたも調べただけど、なかなかうまくいかない。見て」

リュックは立ち上がりつて、胸の前でネクタイをこねくりまわす。あっちをまわしてこっちをとおし下にひっぱったのだが、どういうわけかもとの状態に戻つてしまつた。なんとか成功したけど下手すぎておもしろくないマジックを見ているようだつた。あと少し練習すれば首抜けができるようになるかもしれない。

これがシットコムの一場面で、ここがスタジオだつたら、観客は大爆笑まちがいなしなのに。エレノアはなぜかさみしい気持ちになつた。ほかに笑つてくれる人がいないので、エレノアは手を叩いて爆笑してみせた。リュックは恥ずかしそうに頭をかいだ。

「少なくとも、スーツはまともに着られるみたい。ネクタイは受付の女の子にでも聞くよ」

ふたたびおケツを向けて、床に散らばる「//」を器用に避けながら走つて洗面所に消えた。ばたんとドアが閉まる。

エレノアはドアの向こうに呼びかけた。「どうしてなの？」

「お金を稼ぐためだよ…」

「ふうん」と言つて、これはどうこうことなのかを考えよつとした。ふいにミーカのべしゃりとむかむかする笑顔が蘇つた。

「監視カメラについて考えようよ。いつしょに」

「あとでね。まずはお金を稼ぐ。お金がなきや、なにもできないらしいから」

「お金はあるでしょ」

「ないよ」

「なくなつたから、働こうと思つたの？」

「いや、お金はずつとなかつた。働いてないんだから、当然といえば当然だよね。ははは」

力のない笑い声がじょじょに消えて、それつきりなんの反応もな

くなつた。

汚れた床にずっと手をついていたので、手のひらがざらざらして砂っぽい。床暖房のおかげで埃までほかほかだ。手を払つて目を落とすと、テレビがあつた。相変わらず瀕死の重傷だったが、目を閉じてはいなかつた。エレノアはため息をついて、『ごめんなさい』とつぶやいた。

なんとなくチャンネルを切り替えた。まだ動くようだ。  
やることがないのでテレビを見ることにした。

チャンネルを『K4』に切り替えた。『名探（犬）ワンだふる・ツイッピー』がはじまっていた。エレノアは壁掛け時計を見上げた。十一時三分。思わず顔をしかめた。欠かさず見ていたドラマなのに、オープニングを見逃してしまつた。

『名探（犬）ワンだふる・ツイッピー』は、タイトルどおり犬が主人公の三十分ドラマだつた。ツイッピーというひとりごとの多い犬と飼い主のストレー一家が毎週なんらかの事件に巻き込まれる、といった具合に話が進み、その度にツイッピーがカメラの前でひとりごとを語つ。「大変だ！　どうやらマコリンの彼氏はとんでもない大うそつきだぞ。なんとかしないと」とか、「ママさん（テボラ・ストレー夫人）が足を捻挫して動けなくなつちやつた。ようしほくが代わりに叔父さんの家へ誕生日プレゼントを届けるとしよう！」そしてツイッピーは警笛を呼びにいつたり荷車つきの自転車にまたがつたりして問題を解決するのだった。

ありがちなワンちゃんものだったが、開始当時には大きな話題を集めた。それは内容が優れていたというよりも、第三話で突然ツイッピーがべつの犬になつたためだつた。はじめは愛らしいダルメシアンだつたのに、まったくなんの前ふりもなく三毛のビーグル犬に差し替えられた。相変わらずひとりごとは語つし、ストレー一家も自分らのペットが犬種さえ変わつたというのに一向に気にしようがないので、しまいにはこの件についてさんざん批判していた視聴者も、「これでいいのだ」と納得することにした。「今のツイッピ

ーのほうがいい。いや、そもそも昔からこうだったのだ。まったくぜんぜん、なにも変わっていない」

ドラマ批評雑誌『ドラマまるかぶり』によれば、初代ツイッピーはどうしようもない駄犬で、できることといえばよだれを垂らすことだけ、名探犬でもなければワンダフルでもなかつた。そしてひとりごともまったくぶやけなかつたので、あとで人間の俳優がアテレコをしていたということだつた。

「どう? 決まってる?」

すっかりドรามに没頭していたエレノアは、びくっとして顔を上げた。ストレー一家が懸賞で海外旅行を当てたけど券が四枚しかないのでツイッピーを連れていけないじゃないか、どうしようと家族が悩む場面だつた。

リュックはびしつと折り畳のついたスラックスに背広を着て、黒いビジネスバッグを持ち、やつぱりネクタイはしていなかつた。まるめてつっこんだポケットから先っぽがはみ出でている。

「どう?」ともう一度聞いてきた。

頭がぼうっとしている。リュックがまるで別人のようになつていることも、ミーカのことも、監視カメラのことも。そろそろはじまる番組のお約束「ツイッピーの MERCHANTABILITY」を見ることしか頭になかつた。

「別人みたい」エレノアの声は画面に引き寄せられた。「かわいい」「一年前にきみと出会つて、ここに引っ越してきて、いつしょに暮らしてきた」リュックはあちこち動きまわりながら話しつづけた。

「お金がないまま、一年間。そのことについて考えたことはある?」

「ない」

「わざわざ、ぼくもヘンテコを実感してゐて言つたよね

エレノアはうなずいた。

「最近、おかしいんじゃないかつて思つよくなつた。つまりどうしてぼくらはなんにもしないのに暮らしていくんだろう、つてね」

そう言って、どれだけ上に『ゴミ』を乗せられるのかの限界に挑戦しているとしか思えないリビングテーブルにそろそろと近づいた。それだけで端っこにある空き缶とか一段重ねにしたポテチの袋とかが次々と床に落ちていく。リュックはパーティーゲームの『ぐらぐらタワー』の要領で、下敷きになつた財布を引き出そうとした。リュックには内緒だったが、エレノアはこのテーブルでどれだけ上に『ゴミ』を乗せられるのかの限界に挑戦していた。おもしろいからだ。

結局、空き缶十数個とお菓子袋四枚と電気と水道の請求書を落としてから、ようやく財布を救出した。

「しばらく空っぽだ。気にもしてなかつた」

「そんなところにあつたんだしね」

リュックはいつになく真剣な口調で言つた。「食事はどうしている？」

「どうして、冷蔵庫から」

「まじめに」

「知らない。あなたが買つてくれるんでしょ？」

「そうだつたかなあ」

リュックはかなり不安なことを口走つた。エレノアは思わず顔を上げる。

「あなたが買つてないなら、だれが冷蔵庫に入れてるの」

「それが、よく覚えてないんだ」

財布を開けて、キャッシュカードやらバスの回数券やらをひとつ取り出して、不思議そうに眺める。他人の財布をあらためているみたいだった。

「腹が減つて冷蔵庫をのぞいて、すつからかんだつたりするだろ。とうぜん、買い物出かけようとするよね。おかしなことのひとつがこれだ。ぼくは毎度毎度、お金を持たずに買い物出かけているんだ」

「買い物に出かけなきゃこいんぢやない？」

「いや、それはおかしいよ。出かけなきゃ、そもそも買い物ができないじゃないか」

「あなたの言つてることのほうがよっぽじおかしい」

「で、スーパーに入つて、ぼくは『買い物』をするんだ。カートを押して、必要なものをどんどん放り込む。必要ないけど手に取つたものもどんどん放り込む。今まで買ったことがないという理由だけで、ぜつた的に使わない香辛料とかも、何種類も放り込む。そのとき、ぼくはとり憑かれているんだ」

間を置いた。

「で、これ以上カートに入らない、って状況になつて、ひとまずわれにかかるみたいなんだ。お次はレジで会計するだろ。レジ係が三人がかりでバーコードを読み取つて、最後にひとりが『いつ買ひ』『クラームのお買い上げになります』」

「ねえ、急ぐならはやく行つたほうがいいよ。番組は進む。ビリヤーラツィッピーはペットホテルに預けられることになつたよ」だ。「わたしはだいじょうぶ。これ、見てるから」

「で、気づくと家に帰つていて、紙袋を抱えて冷蔵庫の前に立つているんだ」

「ふうん」ちらりと見やる。たしかにこれはヘンテコな話だ。「くンテコね」

「どうしてだらうね?」

「わからない。テレビの人にはしきられらる理由もわからなくなづらいだし」

「たしかに」

「けど、おかげで一日じゅうテレビを見ていられる」

リコックはわかつたのかわからないのかよくわからないような感じでうなずいた。「まあ、いいか」と言つて、テレビをのぞきこんだ。

「あのドラマか。犬のやつ」

「そう。『名探(犬)ワンだふる・ツイッピー』」

「ぼくもたまに見るよ。最近はぜんぜん探偵してないみたいだけど」「ドーマットそういうものなの」

「とにかく、面接は受けでみるよ。一、二時間で戻るけど、なにかあつたら電話して。じゃ」

リュックはバッグを抱えて出でていった。

と思つたら戻ってきた。

「そつちのヘンテコはだいじょづぶ？」

「なにが？」

「監視カメラのこと」

「ああ、エレノアは思い出してもばたきした。「忘れてた」

リュックは出でていった。ここにいるのは自分とテレビとツイッピードけ。監視カメラは抜いたし、ミーカもいなくなつた。しばらくのところは問題ないだろ？

テレビに手を戻すとちょいビツイツピーのビアップだった。エレノアは興奮した。その愛らしさはキスだけではとうてい表現できず、黒っぽい口とかヒゲとかそのあたりを舐めまわすだけでは足りず、突き出たおくちそのものをまるかぶりすることによつやく伝え切れるほどだった。

「ああ！ ぼくもみんなと旅行に行きたい。だけビチケットがないと飛行機にも乗れない。ぼくも家族の一員なのにな。ぼくらは五人家族なんだぞ！」 そうだ、そのことを主催者側に訴えるんだ。ラジオ局のロートニーに掛け合つてみよう！」

途中リュックと会話していたせいで、ロートニーがだれなのかわからない。なぜロートニーが解決策となるのかもわからなかつた。エレノアはイライラした。ひとくさりしゃべり終えたツイッピーは、ペットホテルから脱走し、大通りを駆けた。都合のいいことに車は一台も通つていない。

ラジオ局に到着したはいいが、自動ドアが開かない。身長が足りないので、困つた様子でその場でぐるぐる回転していると、パンツ

スーツ姿のすらりとしたやせしそうなおねえさんがとおりがかつた。

「まあ、かわいいワンちゃん」

ツイッピーはひと声吠えた。おねえさんはそれだけで理解したようで、抱きかかえて自動ドアをとおり抜けた。顔を肩にもたれさせて幸せそうな顔をしているのは、たぶんオスだからだ。

「ああ、幸せだよー」

ツイッピーは『一寧』にも頭上にハートマークを浮かべながらひとりごとをつぶやいた。

「捨て犬かな。でも毛並みもつやつやでよくお手入れされてるみたいだし、きっと迷子になつたのね。あたしのオフィスに来る？」

もちろん、と言わんばかりに吠えた。エントランスを横切りながら、おねえさんはきはきとした調子でしゃべりつづける。

「よかったです。そしたらなにか食べるものをあげるね。あたしのオフィスは食べ物でいっぱい。ビーフジャーキーに犬用ビスケット、小腹が空いたとき用のカップスープとか、鉛筆とか消しゴムとか、定期にカッター、文鎮にマウスに、もちろんコンピュータもね。あなた、表計算は得意？ 手伝つてほしい仕事があるの？」

「おねえさんはなんだかわけのわからないことを言い出した。エレノアは思わず巻き戻して聞き直そうとしたが、ビデオじゃないことに気づいた。

いきなりものすごい勢いで走り出した。エレベーター乗り場をつつきつて、隅っこの非常口の防火扉を開けて中に消えた。カメラも突然のことにはねを食つたようで、急いであとを追いかけた。

テレビがだしぬけに火花を散らした。エレノアは反射的に顔を背け、腕を上げてかばつた。しゅーっというガス漏れのような音がつづいている。チラ見してみると、スピーカーから白い煙が圧倒的な勢いで天井を突いていた。ブラウン管は青白い稻妻が光つてバチバチ音を立てているし、音声表示の緑色のメーターは気がふれたように上がったり下がつたりしているし、チャンネルは酔っ払いのように（もしくは酔っ払いにリモコンを渡してしまつたときのように）

ぐるぐる切り替わつたりしている。

テレビが壊れるとこうなるのか。

チャンネルのがちやがちやがどんどん加速する画面を見ているうちに、気持ちが悪くなってきた。これは神の御業だ 神の怒りに触れたのだ。エレノアはぽかんと口を開けてあとじたつた。神の怒りはあるで安っぽいSFドラマの特撮のようだ。

「やあ、こんにちはー！ またまた、ぼくだよー！」

聞き覚えのある声。

「やう、ミーカだ。お天氣キャスター。といひでお天氣といえば

」

煙のせいで画面どころか向ひ側すら見えないし、ミーカの声は噴き出す音にかき消される。「 お天氣といえば おい、もついいよ。いいんだって。煙はいいんだ おい、そこのおまえ！ いますぐ煙をとめろ！」

煙がとまつた。稻光もチャンネルのがちやがちやもやみ、静かになつた。

「ありがとー」ミーカは怒りを押し殺したような声で、ゆっくりとつづけた。「怒鳴つたりしてすまん。ここのこといろいろいろいろあってね。神経が参つてるんだ。きみらを信頼していいわけじゃない。煙自体はよかつたんだ。ただ、量がね。でもこれぞ、プロの仕事だと思うよ。なんてすばらしい！ とりあえず、ちょっと休憩しようか。 そう。じくろうさん

「まだ出でた

「ぼくも会えてうれしいよ、エレノア。さあ、こちに来て。チャンネルをもとに戻しておいた。ツイッピーのどアップが待つてるよ」エレノアは首を伸ばして画面をのぞきこんだ。たしかにツイッピーのどアップだった。ただしがくがく震えている。エレノアを見る瞳は涙目で、黒い波が揺らめいていた。そしてよそゆきじやない妙に太い地声でわざやいた。

「 助けて」

カメラがゆっくりと引いて、スーツのおねえさんの背中を映した。つづいて背景。さつき駆け込んだ非常階段だ。ファミリー向けにしてはライティングが暗すぎる。壁の非常灯が赤く、不気味に周囲を照らし出す。

おねえさんが振り向いて、笑みを浮かべた。

「彼女の設定をサイコパスに変えてみたんだ」ミーカがさらりと言つた。「犬が大好きなんだけど、ランチではあまり食べないらしいよ」

ライトで顔半分を赤く染めたおねえさんは、ありえない角度で首を捻じ曲げ、大きく口を開けてツイッピーの喉もとにせまつた。

エレノアはテレビにしがみついた。「逃げて！」

カメラがぐらりと傾き、あさつての方向を映し出す。影が暴れ、妙に太い地声でツイッピーが泣き叫び、なにかを残酷に食り食つているような効果音がかぶさつた。低予算を逆手に取つた演出だ。

効果音がやんで、代わりに不気味なチエロが鳴り出した。おねえさんはいまや顔半分どころか顔全体を赤く染めていた。そしてにっこり笑つてひとこと。

「おいしかつた！ お味も『ワンだふる』ね  
エレノアは卒倒しそうになつた。「ひどい　ツイッピーを殺して　どうして？」

突然、明るいお天気スタジオに切り替わつた。ミーカが右側からひょうきん顔をのぞかせる。

「バカだなあ、殺してなんかいな『よ。ぼくがそんな残酷なことをすると思う？ 落ち着いて、これはテレビなんだよ。ただの演技なんだ』

「ほんと？」目拭う。

「だけど、番組は終了だね。なんたつて主役が食われてしまつたんだから。これがほんとの『主役を食つ演技』。まあ、もともと第三シーズンで終了の予定だつたし」「あなた、何者なの？」

「言つたら、ぼくは神さまだ。テレビの神さま。そしてこれがぼくの聖書。きみも持つてゐるだろ?」

ミーカは手にした冊子を持ち上げ、笑顔で表紙を見せた。テレビガイドだ。おおげさにひとつうなずき、ガイドをめくる。

「今週号の聖書によると おつと、そういうえば今日は十七時から『31』が放送されるんだつた。シーズン最終話だから、きっと盛り上がるよ。ほら、特集記事に人物の相關図が載つてゐる

「あなたは、どう どうするつもりなの」

「どうもしないよ。ただ、カメラをもとどおりにセットし直してもらおうかと思つて。きみは一日じゅう家にこもつてゐから、それがないと監視できなんだよ」

「もし断つたら?」

と言つと、ミーカは口をすばめてすっとんきょうとしかいによつた。のない顔をした。

「いいね、そのセリフ。誘拐犯と交渉する主人公の母親みたい。わたしの息子を返して!』ってね。ほんとにテレビが好きなんだね。現実ではそんなセリフははけないよね。 待てよ、これは現実かいや、現実じゃないのかな。ぼくはテレビの神さまだし、きみはテレビに話しかけてるわけで また話が逸れた。なんの話だつたつけ?」

「もし断つたら?」

「そうそう。もし断つたら、きみは大切なものを失うことになる」「リュック?」

「またまた!』冗談を。『31』のエピソードのひとつだよ。それがまるまる見れなくなるんだ。そして次回以降、話の筋がつかめなくなる。『どうしてリンはこいつと仲良くなつたんだろう?』とか『そもそもこいつはだれなんだ?』といったはめになる」

「DVD買うからいいもん」

「それまでこの屈辱に耐えられるかな? みなは知つてゐるのに自分は知らない。それにDVDの発売はないと思うよ。視聴率がかん

ばしくないみたいだからね

エレノアはうなだれた。こんなにおもしろいのにロボットが出ないなんて。ミーカのけらけら笑う声が聞こえた。カメラを手にのろのろと寝床に這い戻る。プラグをマルチタップに差し込み、テレビ台に乗せた。

赤いランプが点灯した。レンズがこちらをじっと見ている。

「こくろうせん。よく映ってるよ」

「これでいいでしょ？だからお願ひ、『31』はちゃんと見せて」

「もちろんだ。神さまは約束は守る 基本的にはね。だけど

「だけど？」

「テレビが寿命みたい」

画面をのぞきこむと、ノイズのちらちらがひどくなっている。ミーカの色が反転し、横に引き裂かれた。ミーカは慌てた様子で右に左に顔を向け、スタッフから機動隊用の防弾ヘルメットを受け取った。ヘルメットをかぶると、エレノアに向かつてぞんざいに手を振つた。

「それじゃまた」

ぷつん、という音を立てて、テレビが田を閉じた。

すでにへたりこんでいたエレノアは、さらに深くへたりこんだ。なにか支えになるものがほしくて無意識に床に手を這わせる。するとおなじみの四角くてプラスチックできいていてゴムのボタンがやたらとついているものに触れた。

リモコンだ。ずっと探していた。こまわり出でてくるなんて。

テレビに向かつてスイッチを押す。なんの反応もない。田の端に監視カメラが映った。無言でひたすらこちらを見つづける。こちちは向こうが見れないのに、向こうはこちらを見つづけているのだ。

エレノアはぞくつとした。それから死んだテレビに田をやって、もう一度ぞくつとした。

「テレビを買わないと

「

気づくとツイッピーぱりにひとごとをつぶやいていた。壁の時

計を見て、ヒレノアは田をまわへました。ひとつひとつ飛びこなつた。

「あと六時間で『3-1』がはじまりやつ!」立ち上がりパジャマを脱ぎ出す。「もうじつだつていい! 監視されてもいい! だけど、だけど、『3-1』を見逃すなんてありえない!」

## 2話 リュックの就職面接

受付嬢は首をかしげ、ちょっとびり笑みを浮かべている。イスに腰かけ、顎を上げ、黒ぶちメガネの奥からリュックを見上げていた。

「まず、首にかけてね」

「かけた。」こまではできるんだ」

「太いほうを長めに。 そうそう。そして交差させて。細いほうを下にして」

「よし。次は?」

「太いほうをぐるっと巻きつける」

「細いのじゃダメなの?」

「ダメ。太くないとダメなの」

「太いほうを ぐるっと巻きつける」

とリュックは言つたが、口だけだった。ネクタイは嫌がるようにもつれるばかりで、どうしようもない。あきらめて手を離すと、ネクタイはほつとしたように垂れ下がり、もとのかたちに戻った。

「言い訳するつもりはないけど、これって遺伝だと思うんだよね。子供のころもなかなか靴ひもが結べなくてさ

受付嬢は机に突つ伏して頭を抱えていた。

デスクの電話が鳴つた。

「もつとお相手していただきたいんだけど、仕事しなきゃ。」用がなければこれで

「「」用はあるよ」

「あつそつ。今度はなにを結んでみせてくれるの?」

受付嬢は受話器に手を伸ばした。もう一方の手で金ぴかのペンをつまんで、リュックに「ダメダメ」と振つてみせる。「はい、フームですが。 ええ、そうです」

「面接に来たんだけど

メガネの奥の緑色の瞳がはつきりといつもを見据えた。リュック

は黙ることにした。

「はい？」 いえ、ちがいます

やることがないし、ネクタイを結べていないので立ち去るわけにもいかない。手を前に組んで、あらためて見まわしてみる。

会社のオフィスはビルの四階にあった。ふかふかのカーペットが通路一面に敷かれていて、暑いくらいに暖房が効いている。思わず喉もとに指をねじこんでネクタイをゆるめたくなるほどだ、と言いたいところだったが、いまのリュックにその資格はなかつた。受付のデスクのわきに仕事場へつうじるドアがあつて、ワイシャツ姿の従業員がそれなりの頻度で出たり入りたりしている。

ここへ来てはじめに受けた印象は、とにかく全体的にくねくねしているということだった。そしてまるまるしている。受付嬢がする机にしても、壁にかかっている社名が刻印されたアクリル板にしても、アメーバのようにくねくねまるまるしている。電話機もヘンテコだった。受話器は真ん中が細くて両端が空氣で膨らませたようになると、そして必要ないくらい長かった。まるで口バ用だ。

アクリル板の文字を見たが、まともに読めなかつた。たぶん「フレーム」と書いてあるんだろう。なぜならフレームという会社に面接に来たからだ。昨日、突然電話がかかってきた。女性の声があなたはリュックかとたずね、答えると就職の面接は明日になつたからまちがえないようにと言い、質問しようとすると乱暴に切られた。人ちがいじゃないかと思ったのだが、おもしろそうなので受けることにしたのだった。それに採用されればお金も入るし、そつすればまたもな『買い物』ができるようになる。

「 そうです。ほんとのところはそつなんです。 いいえ、そこだけはちがうんです。 はい。 はい。 まったくちがいます。 そうじやありません」

唐突に受話器を置いたので、リュックはあさつてを向いて壁の染みを気にしていたのだといふりをした。

「 で？」

受付嬢はふたたび手を組み、まっすぐリュックを見て言った。

「あなた、営業で来たわけじゃないよね？」

「ちがうよ。ぼくは」

「道に迷って、たまたまここをとおりがかつたとか？」

「ちがうつたら。就職の面接に来たんだ。十三時から。聞いてない？」

メガネのフレームから両方の眉毛が飛び出してきた。受付嬢はなにかを言おうと口を開いたが、思い直すように首を振ってパソコンのモニターに向かった。

「担当は？」

「エイミルって人」

「ああ、あつた。三分後に面接」

「あと三分か。三分でネクタイの結びかたとビジネスマナーを学べるかな？」

受付嬢は立ち上がり、机越しにさつと手を伸ばした。ネクタイをつかみ、ぐいっと引き寄せる。乱暴だかしなやかな手つきでネクタイを交差させ、細いほうの先をつまんで太いほうをぐるっと一周させ、そのまま喉もとの交差点の内側に手をつっこんで外側にとおり抜けさせ、結び目の中をとおした。結び目をつまんで揺すり、喉にぐいぐい押しつけてきた。

「はい、できあがり」

仕上げにぽんと胸を叩き、にっこり笑った。そして次の瞬間、にっこり笑つたことを後悔するかのように表情をなくし、どせつとイスに腰を下ろした。

「ありがとう」

「あとは、ビジネスマナーだけ？ そんなの簡単。こいつは百戦錬磨のビジネスマンだ、ただものじゃない、って相手に思わせたかつたら、こうするの。まずネクタイをきちんと締めて、相手の目を見てしゃべる。それから、おもしろいことを言われたらむつりしてつまらないことを言われたら大笑いするの。これでバツチリ。中

身カラッポでも通用する」

「そうか、さすがだね。助かつたよ」

「これがセキュリティ・カード。廊下のいちばん奥の左手の部屋で待つて」

リュックはゲスト用IDカードの入ったストラップを受け取り、首から下げた。

「いいね、これ。もうここの一員になつた気分」

「あなたと同じ職場で働くんだと思うと複雑な気持ちになるんだけど、この気持ちは長つづきしないでしょうね。たぶん受からないから。がんばって」

リュックはもう一度お礼を言つて先へ進んだ。受付嬢の言つとおり、廊下のつきあたりに来て左を見るとドアがあつた。ノブをまわしたが動かない。どうやって開けるのかを考えているうちに、自分で気づかないままその場で一回転していた。

本人だけが知らない事実として、リュックはよく一回転した。一回転をするのはだいたい考え方をしているときで、気づくのはいつも一回転し終えたあとだつた。目の前にドアがある。回転したあとも同じドアがある。だから回転したことによく覚えていない。ど、そんな具合だつた。考え方などが長引くとその場で何回転もするはめになり、またよく覚えていないものだから、何回転かしたあとにふと、どうして体が左側に傾こうとし、目の前に自分の尻があるのでろうと不思議に思うのだった。

リュックは追加でもう四回転した。そのおかげかどうか、カードを首から下げていることに気がついた。とりあえずストラップからカードを取り出し、眺めてみた。青くてくねくねした字で「グヌ人」と書いてあつた。例に漏れずおしゃれだが人に読ませる氣のない字体をむりやり読んだだけなので、まちがつているかもしれない。カードキーであることはわかつたが、ドアのどこを見ても差込口がない。

ドアに抱きつかんばかりに調べては回転を繰り返していると、青

いシャツの従業員らしい男がやつてきた。しばらく人間掘削機を眺めていたが、あきれたようにかぶりを振り、リュックの肩をつづいた。つづいた指をそのまま扉の横にあるのっぺりしたクリーム色のパネルに持つていった。

「こいつにカードをかざすんだ。そしたら開く」

やつぱりそうか、その方法はすでに選択肢に入っていたが決めかねていただけなんだ、リュックはうなずき、言われたとおりにした。

カチッという音がした。

「わからないことがあれば、そのへんの連中に聞いてくれてかまわないぜ。その場で回転しつづけるよりよっぽどいい」

回転とはなんのことかわからず、もしかして流行の悪口ではないかと勘繰りむつとしたが、受付嬢の言葉を思い出した。

「そりなんだ」なにがそりなんだなど考えながら、体をのけぞらせて大爆笑した。「最新のセキュリティ・ドアかと思つてさ！」

男はかぶりを振り、その場を立ち去った。

応接室はこじんまりとしていて、廊下と同じくらい暖かかった。茶色いてかてかしたソファに、ガラス面のテーブル、観葉植物に自動販売機、大型のワイドスクリーンテレビに、三脚にセットされたビデオカメラがあつた。壁かけの時計を見たのだがぐにゃぐにゃしているうえに針が六本もあつて何時だかわからない。

ホットコーヒーを買ってソファにどさりと落ち着いた。コーヒーを一気に半分飲んで、コーヒーくさい息を吐いた。体は落ち着いたが頭が落ち着かない。無理もない。就職面接ははじめてで、これからなにが飛び出してきて自分をビックリさせる気なんかまったくわからなかつたし、それにビデオカメラがさつきからまつすぐこっちを見ているような気がしてしょうがなかつたからだ。

レンズを見つめ返す。ゆっくりコーヒーをする。

カメラはなんの反応も見せなかつた。猫背でぼんやり立ち尽くしている。シャツをたくし込んでズボンを胸までずり上げているガリ

ガリのおじいさんみたいだ。ぼんやりしているが眼光だけは鋭い。

「飲み物はなにがいいかね？」

さつそくビックリさせられた。背後から突然話しかけられ、飛び上がってコーヒーをこぼしかけた。

「ああ、もう飲んでいるのか。それはけつこつ」

リュックはコーヒーの香り立つゆらゆらを見つめてつぶやいた。

「コーヒーを買つてる。お金を入れてないのに」

「オフィス用だからね。お金はいらない。ただボタンを押すだけ」

自分のコーヒーを持つて向かいのソファに腰を下ろした。「エイ

ミルだ。人事の責任者で、役員も務めている。よろしく」握手する。

エイミルは四十過ぎくらいに見えた。金色の髪の毛がふわっと頭の上に乗つかつていて、もうじき在庫が尽きて倉庫の床が見えそうだつた。ガサガサした肌は青白く、見るからに不健康な感じだつた。青い目がしょぼしょぼして、目尻はカラスの足跡だらけ。若干お疲れのようだつた。

「お代わりは自由だ。好きなだけ飲んでくれ」

「最高。エレノアが聞いたらここに住みたいって言つた」とつぶやく。

「エレノアとは？　きみの彼女かね」

リュックはなにげなしにビデオカメラを見た。おじいさんがぽん

やりと見つめ返す。

「いえ、近所のおばさんです」

「けつこつ。わたしも近所のおばさんにはいくつか言いたいことがあるんだ」エイミルはなごやかに冗談を言つた。が、まぶただけはいうことを聞かず、すでに嫌気をさして垂れ下がりはじめていた。

「今日はわざわざ来てくれてありがとう。名前はリュックでよかつたかな？」

「いえ、あの……」と言いかけて、なにが「いえ」なのか、なぜ名前を隠す必要があるのかと思い直した。どうやら緊張しているようだ。「そうです」

「経歴書を拝見」

バッグから職務経歴書を取り出した。エイミルはその紙ペラを受け取り、テーブルに置いて、顔を近づけた。

「無職」

「そうです」

「実家暮らしかね？」

「いっえ、ひとり暮らしで……」と軽にかけて、口元もつた。なにかがおかしい。どうしてさつきからコレノアのことを隠そうとするのだろう。「そう、ほんとうにひとり暮らしなんです。猫と住んでるんです。これってひとり暮らしっていうのかな、って思って」

「親からの仕送りは？」

「ありません」

「ということは、まったくの無一文で暮らしinしてることだね？　きみど、その猫とで」

「そういうことになります」

エイミルは疲れたまぶたを持ち上げ、じっとリュックを見据えた。

「それは大変だろうね」

「よくそう言われますけど、なんとかなるもんですよ。なんでなんとかなつているのかわからないんですけどね。仕事に就こうと思ったのは、なんでなんとかなつているのかわからない状況から抜け出して、あらためてなんでなんとかなつていたのかを知るためです」

「もつけつひづ」

エイミルは経歴書（というよりしみのついた紙ペラ）をわきにじけて、指を組んだ。

「すでに知っているとは思うが、いちおうひさの事業内容を説明するよ。われわれの事業は、簡単に言つと小売だ。インターネットやカタログでの通信販売を行つていて。販売しているのは、現在のところデザイナーもののおしゃれなテーブルやチェア、おしゃれな収納家具、おしゃれな服飾小物などだ。十一期目に入つており、売上の規模としてはまだまだだが、創業三年目からはずつと黒字を

計上している。自慢じゃないが優良企業だよ、うちは。そして現在は、取り扱い商材を増やし、安定期からのさらなる飛躍を目指す時期にある。だから、事業拡大に伴い、大幅な増員を行っているところなんだ。おもにきみのようなバカ者を採用している「

リュックはほとんど聞き流していたが、最後のセリフが耳にこびりついているのに気づいた。「はい？」

「以上が会社概要だ。ここまで質問は？」

「質問というか」まだビジネスマナーを学んで五分と経っていないので、勝手がつかめない。「いまの、爆笑するところのかな」「なぜわたしが先ほどから『おしゃれ』を連呼しているのか」というと、エイミルは人の話をまったく聞いていなかつた。「『おしゃれ』はうちの事業コンセプトだからだ。ロゴやオフィスのインフラまわりはもちろん、取り扱う商品も、ダイニング・シアから名刺入れまで、すべて『おしゃれ』かどうかで可否が決まる。それを手に入れたことで自分までおしゃれになつたと錯覚するような『おしゃれ』な商品だよ。『おしゃれ』とはなにか?」

リュックはコーヒーの最後の一滴を舐め取ろうとがんばっていたが、質問を受けていたことに気づいた。

「『おしゃれ』ですか?」空のカップを見る。「　　コーヒーを半分残すことかな」

「近い。『おしゃれ』とは、本質を突いていない、という意味だ。すわれないテーブルのようなものだよ」

「テーブルはすわるものじゃないでしょ?」

しかし、エイミルは徹底してリュックの話を聞いていなかつた。「すなわち、機能性は問題じゃない、ということだ。座面がいやに盛り上がっていてまるでケツ骨をぶつけ合つてているようなすわり心地のイスや、一度入れると破壊しないかぎりぜつたに取り出せない名刺入れなど　　それを人は『おしゃれ』という

「そんなもの売れますかね?」リュックは率直に聞いた。

エイミルは阿呆のようにぽかんと口を開け、リュックを見た。そ

してはじめて笑った。それも半端じゃない大爆笑だった。体のタガがはずれたようだ。

「潜在的なニーズだよ、リュック。なにが欲しいか正確に把握している顧客など、どこにもいやしないんだ」

だいぶ落ち着いたようだつた。首を押さえ、深呼吸を繰り返している。ビジネスも樂じやなさそうだ。

「じゃあ、『おしゃれ』であれば売れるんですか？」

「いい質問だ」と言ってから、はつとした様子でかぶりを振つた。「いや、悪い質問だ。もつとふざけて」身振りを交えてつづける。「舐めた質問とか、してみて」

「それってつまり

「もつと阿呆に。非常識に。テレビは見るかね？」

「いまでですか？」

「そう。大事な面接の真っ最中にだ」

と言つて、エイミルはソファに転がっていたリモコンをつかみ、大型ワイドスクリーンのテレビに向けた。

「きみは自宅でも、そつやつてかしらまつてテレビを見るのかね？ もつと楽にして。テレビを見るにはテレビを見る格好というものがある」

家電売り場でしか見たことがないような高解像度のリッヂチナ画面に映つたのは、いかにも安いセットの料理番組だつた。この番組は見たことがある。『ほんとうのところの料理』だ。

エイミルを見た。自宅でももつ少ししゃんとしているだろうというような格好で、ほとんどソファに寝転がり、尻がはみ出すくらい腰を突き出し、足を投げ出している。

『ほんとうのところの料理』はエレノアのお氣に入りで、でなればリュックが料理番組など見るはずがないし、覚えているはずもない。そしてさすがにエレノアのおめがねに適つただけあって、毎回かなりおもしろかった。最終的にまったく料理と関係なくなるところがいい。せっかくしらえた料理が、いろんなハプニングのせい

で仮設キッチンに飛び散るのがお約束で、視聴者もそれを期待していた。いまやまともにテーブルに着いて試食しようものなら、客席からブーイングが起ころうほどだった。

えげつなく、視聴率のためならなりふり構わない番組をたくさん抱えている『MUTV』らしい。

「さあ、今日はどんな『料理』が飛び出すのかな」

エイミルも期待していた。

主演のお料理おばさん、ヨンナは、あらゆる点で妥協知らずな人物として知られている。それが料理研究家としてなのか、芸能人としてなのかはわからない。おそらく両方なのだろう。料理番組ではふつう、調理済みのストールなんかが別個に用意されていたりするのだが、そんないんちきをヨンナが許すはずがなかつた。レシピを発表して材料を読み上げ、アシスタントといつしょに調理を開始し、すべての品目を完成させるまで、リアルタイムで実際に行う。

どうやら番組ははじまつたばかりだった。リュックはこつそり立ち上がり、自動販売機でオレンジジュースを買った。ソファに戻り、姿勢をくずしてジュースをする。

「ううとうなつて、カップに戻しかけた。オレンジリキュールだつた。

「いいね。わたしにもオレンジジュースをくれないか」

エイミルはコーヒーを飲み干すと、紙コップを握りつぶしてそのへんに放り投げた。

「というわけで、今日はニシンの燻製をつくります」美人アシスタントのイグノラが、となりに立つヨンナに話を振つた。「わたし、燻製づくりははじめてなんです。まず氣をつけることはなんでしょうか？」

ヨンナは顔半分をおおうおしゃれメガネを持ち上げ、不機嫌きわまりない顔でアシスタントをにらんだ。初孫も泣いて逃げ出す恐ろしさだ。肌は上薬を塗った紙粘土ながらで、しゃべるたびに口のまわりがぼろぼろぐずれてきそうだった。

「あなた、料理に向いてなさそうね」

「あら。じつ見えてもわたし、お料理は得意なんですよ。ショフの免許も持つてて、彼氏にはいつもヘルシーなレシピで」

「でも、じついう伝統料理は無理ね。若くてかわいいからってなんでもできると思つてるの？　いい、あなたは世の中舐めすぎ。まじめにやつてちようだい」

ヨンナ特製、論点のすり替えた。観客はざわついた。皿を輝かせ、ハブニングを待ち構えている。

言いたいことが百はありそうな顔で、イグノラがしぶしぶと準備をはじめた。ヨンナは指先ひとつ動かさず、不動の心で仮設キッチンの中央に立ち廻りしている。

「これが燻製マシーンね。はじめて見ました」

「でしょうね」ヨンナはぎるりとにらんで言った。

「これがチップ」カメラに向かつてかわいらしく持ち上げてみせる。「紅茶の葉を混ぜてもいいんですね」

「その手、甘やかされて育つた人の手ね」

なにをやっても気に食わないらしい。ニットのセーターを腕まくりし、エプロンを引っ掛けているイグノラは、美人なうえに庶民的、気立てもよさそうで、こんな女性を奥さんにできたらどれだけ幸せだろうと思わせた。

「そして、主役の二シン　が、なーい」テレビ用の身振りでおちやらける。

「ここにはなーいの。決まってるでしょ」

「どこにあるんです？」

「外よ」

「外？」

「燻製をつくるにはね、まず自然の中で乾燥させる必要があるのよ。こんな基本もわからないで、よくもそんなイヤリングを着けていらっしゃるものね」

「着けてません」

「でも、普段は着けてるんでしょう？」「まかないで」

理不尽な仕打ちにさすがのイグノラも口ごもり、しばしにらみ合った。スタジオの空気が凍りついた。密席のだれもが、イグノラの実存がさらけ出されるのを期待している。

「スタジオの外を呼んでみましょっ」

ヨンナが陰気に言うと、画面が屋外に切り替わった。三枚にわかれフックで吊るされたニシンのビアッフが映った。

「はいはい！ ヨンナ、スタジオのみなさん、ヘルマンです。ぼくは民家の軒下を模したセットの前にいます」

というヘルマンも、ニシンのとなりにフックで吊るされていった。

現場は海に面した崖だった。吹きすさぶ風、荒れ狂う海、鉛色の空。一見して自殺の名所を思わせた。ちびた草がまばらに生えた地面にセツトを組み、竿のようなものに吊るされたニシンの切り身が暴れている。もちろんヘルマンも暴れているが、これはわざとだつた。おもしろくない若手芸人はただの洗濯物だと言わんばかりに、奇声を上げてニシンを平手打ちしたり、冗談めかしたじぐさで蹴りを入れたりしてくる。

「いい具合に乾燥されてるみたいです！ あと三日もあれば、スタジオにお持ちできますよ！ ぼくも表面の水分が乾くまで、ここでいっしょにぶらぶらしていようと思います。社長、今度はちゃんとギヤラ払ってくださいよ！ ジャ！」

「三枚におろされていたら、ほかのニシンと見分けがつかなかつたでしょうね」

スタジオのヨンナが陰鬱な調子で言った。「ここで待ちましょっ」「三日もですか？」イグノラの腰から下はすでに帰り支度をはじめていた。つま先は自宅の玄関にすべりこんでいて、頭は食材を切る以外の使い道が包丁にあるのかどうかを考えていた。

「若い人はなんでも、楽をしたがるのね。いいものをつくるには時間と手間がかかるものなのよ」

「かかりすぎです。テレビなんですよ。もう我慢できない。今

田口や言いたいことを言わせてもいいます。あなたはだいたい

「飽きた」

エイミルはべろべろに酔いつぶれて田口に帰るなりソファに沈み込んだときでももう少し背骨の位置を気にするだらうといふような格好でつぶやいたが、実際酔っていた。

「わたしはどうすればいい

「チャンネルを変えるところのはどうですか?」

「いいね。じつに的を射た提案だ。いや、ちがう。じつにくだらん。若気の至りもはなはだしい」

エイミルはぶつぶつ言いながら、リモコンをテレビに向けた。モードが地上波からインターネットに切り替わった。ショッピングサイトだ。白と黄緑色を基調としていて、それからやたらとくねくねしていた。

「うちのショッピングサイト。『ホーム・オンライン・ストア』だ。どんなんか気になるだろうから、参考までにね」

リコックは驚いた。面接官がまともなことを言い出したからだ。

「いい色ですね、アイスクリームみたいで。どこを押せばいいのかわからないんですけど」

テーブルのカテゴリーから、あるテーブルを選び出した。何度も何度も「ほんとうに移動しますか?」という警告のポップアップが表示され、「はい」を押すたびにポップアップ自体が飛び跳ね、「移動しました」と表示文が切り替わった。ノミみたいに飛び跳ねる三十あまりのポップアップすべての「いいえ」ボタンを押すと、ようやく商品の紹介画面に遷移した。透明感あふれる写真がじんわり表示される。

リコックは思わずテレビの画面を下からぞきこんだ。そして指摘する。

「このテーブル、脚がない」

「そのとおり。よく気づいたね」

「意味がないですよ」

「そのとおり」

「脚がないなら、どうやって食べるんですか？」

「買った連中がなんとかするんだろう。みんなで持ち上げて支え合  
いながら食つてもいいし、みんなでイスにすわってめいめいの膝に  
乗せ合つて食つてもいい」

「ひとり暮らしだつたら？」

「それもちゃんとお見とおしだ。」『うこううものを買つ連中は、たい  
てい友達の数ばかりやたら多くて、みんなで共同作業というのが大  
好きだからね。膝に乗せて食いながら、『おい、おめー、ガタガタ  
させんなよ』『うるせー』『ファインボガチャーン、だいじょうぶー  
?』『ダメかも。あたし非力だから。腕がブルブルしてきた。あー  
もうダメ、助けてー!』『よっしゃ、おれが助けたる』『あー、あ  
んた彼女が好きなんだー』『バ、バカ言つなよ』などと言つてね』  
エイミルは熱のこもつた苦々しい口調で言つた。きっと口クな大  
学生生活を送つてこなかつたにちがいない。

次の商品を表示した。

「おしゃれキー ホルダーだ」

「まともですね」

「そうだろう。それに、万能鍵があまけで付いてくるんだ

「万能鍵?」

「手持ちの鍵をつける必要もない。万能鍵は大陸じゅうのどの家の  
どのタイプの鍵穴にも合つようつくられているから。おしゃれだろ  
う?」

「でもそれつて、人の家の鍵穴にも合つひとつじや?」

「まともだよ」

「犯罪につながりますよ」

「いや、そんなことはない。そのようなクレームは一度も報告を受  
けていない。だいたい、こういうものを買つ連中は度胸がないんだ。  
いいやつである自分が好きなんだ」

「泥棒なら、おしゃれに興味がなくても買つでしょう

「問題ないね。うちのサイトを見ただろう?」  
「これから探して購入するより、自分で合意鍵をつくったほうがよっぽどはやい」

さらにはべつの商品。枯木を模した白いコートハンガーだった。

「あー、これ

「どうしたね?」

「このコートハンガー、持つてますよ。どうやって買ったのかは覚えてないけど、でも、これはヘンじゃないですよね。すごく使いでがいいし、気に入ってるんです、ぼくもね。猫も。おしゃれですよ」

「そうか。ではあまりほめられた使い方をしていないわけだな」

「どうしたことですか?」

「コートを掛けたり」

「そうです」

「帽子を掛けたり」

「そうですよ。それ以外にどんな使い道があるんですか?」

「話しかけるんだ」

「え?」

「そして水をやるんだ」

「水?」

「そしてベランダに出す」

「さつきから、どれもこれも狂つてるとしか思えないんですけど」

リコックはお世辞を言った。

「成長するんだ。コートをひっかける枝がなくなつたときのためにね。それに、こういうのを買う連中はたいてい生き物が好きだ。好きじゃなくても好きなふりをしている。いずれにしても同じことだ」「でも、材料の段階で完全に死んでるでしょう」

「ハンガーのやつは気づいたらんよ」

テレビを消して、つづける。

「『おしゃれ』であれば売れるのか? そう、そのとおり。では『おしゃれ』の定義とはなにか。まず、役に立たないこと。かさばる

」と。すぐに壊れること。そして、親に買つたことが見つかると叱られるようなことだ。これらはそのまま社訓にもなっている

エイミルの手がポップコーンを探すかのようにテーブルの上をあちこち動き、卓上カレンダーにたどり着いた。くるりとまわし、リュックに向ける。

リュックは顔を近づけた。

「 読めないんですけど」指さす。「これ、何月のカレンダーなんですか？」

「『役に立つな、かさばれ』と書いているんだ」「役に立たない社員がいいんですか」

「そのとおりだ。役に立とうとするから役に立たない。そして同様に、売ろうとするから売れないのだ。黎明期の暗黒時代、かつての経営陣は、あらゆる手をつくしたあげくにそう結論づけた。こんなにがんばったのに業績は回復しない、ならば売らない努力をするべきだ、とね。発想の転換というやつだ。そして現在に至る。販売サイトのユーザビリティは壊滅的だし、『検索エンジン逆最適化』も独自にチームを組み、ぜつたに検索されないよう対策を講じている。しかも、なんとか買ったとしてもまるで役に立たない商品しか届かない。しかしそこから、業績が一気に好転したんだ」「おしゃれだから」「そういうこと」

「なんとなく理解できましたよ。なんてすばらしい」「

じろりと非難するようなまなざしを向けられる。マナー違反だ。リュックはあわてて「なんのことだかさっぱり」と言い直した。「おめー、意味わかんねーんだよ」とも言った。阿呆な表情も加えたほうがいいだろうかと考え、田玉をまわしたりあごを突き出したり腰をくねらせたりした。

「きみはまだ若いだから」エイミルは大人の寛容さを見せつつ言った。「わたしも不惑を過ぎたばかりなのだが、いまでも無能であるうと努力しているんだ。だらだらしたり、泥酔状態で出社

したり、休憩に行ってそれっきり戻らなかつたり。上に立つ者としては、模範を示さなければならない。そして人事の責任者としては、こいつだけはぜつたに採用したくない、クソの役にも立たない、と思える人材を積極的に採用する努力をしている。 その点、きみは若いわりにいい線いつている。まれにだが、そういう人材に巡り合うんだ。会つた瞬間ビビッと来る。あつ、「こいつはバカだ、と」「ほんとですか?」目を見開いて身を乗り出し、ひざを叩いて笑つた。だいぶマナーが飲み込めてきた。

「職務経歴書が物語つてゐるよ」紙ペラを持ち上げて表をリュックに向けた。「こんなに熱のこもつた職務経歴書ははじめてだ。プリンターのインクの節約をするために人生を送つてきたようなものだからね」

そして唐突に体をねじつて後ろを向き、なぜかビデオカメラに向かつて紙ペラを見せた。

「なにをしてるんですか?」

エイミルは正面に向き直つた。「べつに」

そのとき、バッグの中から盛大な着信音が鳴り響いた。あわてて胸に抱え、中を探る。

「電話だ。取つてもいいですか?」

「もちろん。バカで非常識な行動は大歓迎だ。ほかのスタッフに見習わせたいくらいだよ」

電話はエレノアからだつた。「もしもし?」

「助けて」

「どうしたの?」

「いまね、モールに来てるの」

「ほんと」

「テレビを買おうとして」

「テレビはあるだろ」

「壊れちゃつたの。家電売り場に来てる」「で?」

「買おうと思つて、レジでお会計してゐる」

「うん」

「お金を払えって」

「レジの人はそう言つよ。お金がないときはとくに「でね、がんばってるんだけど、ぜんぜん意識を失わないの。息を止めたりすればいいのかな。とにかく、どうやって買い物すればいいのか教えて」

ようやく理解できた。エレノアは今朝話した『買い物』をマネしているのだ。だれもができる技じゃない。自分でもよくわからないし。

「待つてて。とにかく、危険だからレジから離れて。面接が終わつたらすぐ行くよ」

電話バッグに戻す。エイミルが先ほどから変わらない姿勢で言った。

「だれからかね？」

「うちの猫からです」

言つやいなや、エイミルは勢いよく膝を叩いた。

「採用だ。その才能をわが社のために活用してほしい」

「ほんとですか？」

エイミルはうなずいて、リュックの経歴書を破り捨てた。

思わず「やつた」とこぶしを握りそうになつたが、ビジネスマナーを思い出し、祖母が死んだと聞かされたときのような顔をした。エレノアに知らせてやろう。これからは社会的にまともな生活が送れる。まともな『買い物』ができる。そう考えるとよけいに心浮き足ち、じつは親父に二十年来の愛人がいたと聞かされたときのよつな顔になつた。

「最後になるが、就業するにあたつて、なにか不安な点や質問などはあるかね？」

「あります。ずっとひつかかっていたんですけど つかりじゃ仕事にならないでしょ？」

正直、バカば

「バカばかりとはいかないさ。努力はしているがね」疲れたように言う。「有能な人材ばかりの会社などない。うちだけの問題ではなく、雇用に関してはどこも苦労しているんだ。新人には三ヶ月の研修プログラムを設けているんだが、効果はいまひとつだね。若い連中のなかには、一ヶ月と立たずに雲隠れする者も多い。自分は無能ではない、役に立つ存在なんだ、などと言つて」

「じゃあ、有能な人はどのくらいいるんですか？」ぼくの言つてゐる『有能』つていうのは、役に立たないかさばつたバカ者のことでなんかややこしいな。もうふつうに話していいですか？」

「バカは少ないよ。現状はね。やはり、わたしの責任もあるかな」「そんなことありませんよ」

「そうだろうか」

「だつて、バカをなかなか採用できないってことは、あなたが役立たずだからでしょ？　ということは、やつぱり会社はあなたを必要としてるんですよ」

「本気で言つているのかね？」

「もちろん。あなたはとてもなく無能なろくでなしなんです。大かさばりの大バカ者ですよ」リュックは歯の浮くよつなお世辞をまくし立てた。

あれだけ疲れた顔と態度だったのにもかかわらず、エイミルは突然ソファの上で飛び跳ね、スーツが裂けるのではないかと心配するほど体をよじり、背もたれを叩いて涙を流しながら爆笑した。

「さつそくわが社に馴染んできたようだね」目拭つて、笑いの余韻で声を震わせながら言つた。「では、面接を終わろう。期待しているよ」

エイミルは痙攣しながら立ち上がり、手を差し伸べてきた。リュックも立ち上がり、しつかりと握手を交わした。エイミルはまたも弾かれたように体を仰け反らせて大爆笑をはじめ、リュックもつられて笑つた。

次の瞬間、エイミルは真顔でリュックの頬をぶん殴つた。

「 詳細はのちほど連絡するよ。それでは失礼」

リュックはひとり取り残され、しんとなつた部屋でしばらく横たわっていた。びりびりする顔を押さえながら立ち上がる。

顔を上げると、ビデオカメラと目が合った。

ゆっくりと、バッグとコートを抱える。その間もカメラから目を離さなかつた。心なしか、面接の前より近づいているような気がする。正対したまま、これまたきわめてゆっくりと、カニ歩きで視界のそとに出でみた。どうしてかは知らないが、被写体を追つてカメラが動くのではないかと思ったのだ。実際はそんなバカなことは起こらず、カメラはあさつてを向いたままぼんやりしていた。

当然だ。リュックは肩の力を抜いて頭をかいだ。すっかりバカが板についたらしい。きっと面接のときは、その様子をビデオカメラで撮影することになつていいのだ。リュックは自分を納得させるよう何度もかうなずきを繰り返し、去り際にカメラに友好的な感じで手を振つた。

さつとカメラが振り向いた。リュックはたまげて、下ろそうとした足が地面を踏みそこねた。体が横に傾いた時点でふかふかのカーペットに倒れこむことにしたのだが、そうはならなかつた。ドアがリュックの耳をぶん殴りにやってきたからだ。

「カメラがこつちを見た 自分で」

リュックは横たわりながら、われ知らずひとつじとをつぶやいた。お互い目をそらさない。

エレノアと同じだ。自分も監視されているのだろうか。それも、エレノアの話によるとテレビの中のキャラクターから。

そんなことつてあるのだろうか。

「小さいころ『人をじろじろ見るもんじゃありません』って教わらなかつたのか?」

ビデオカメラは返事をしなかつた。それも当然だ、とリュックは思い直した。カメラは人をじろじろ見てなんぼだからだ。「なにト

チ狂つたこと言つてる?」つてなもんだ。子供のころ母親と街中を歩きながら「見なさい、すばらしい景色よ」とか「あつ、見て!殺人現場よ」とか「ダメよ、アングルがよくない。もっと女の子に接近して。」いやつて下からのぞきこむように そうそう。そういうやつて迫力を出すの」とか、とにかくそんなふうに育てられたにちがいない。

リュックは跳ね起きた。そして持ち物を投げ捨て、自動販売機に駆け寄つた。ボタンを押し、ドリンクを一十四種類ぜんぶ買った。テープルに紙コップを一列に並べ、端から順に飲んでいった。いくつかはやつぱリアルコール入りのドリンクが混じつていて、意表をつかれてむせたりゲップしたりしながらもぜんぶ飲み干した。

カメラは困つたような顔をしていた。

これでよし。だれがどこでこの映像をのぞいているのか知らないが、いきなり狂つた行動を見せられたらじばらく考え込まずにはいられないはずだ。

「見たか! これがほんとうのぼくだぞ」

最後に超特大のゲップをかました。その昔、親父がところがまわずゲップをするのがイヤでしづがなかつた。「おとうさん、人前でゲップをするのはよくないよ」とリュック少年は親父の袖をひっぱりひつぱり忠告したものだが、返事をくれることはなかつた。あつたとしてもゲロまみれだったので、その中から探し出すのは容易ではなかつた。

廊下に飛び出し、もつれる足で走つた。途中で受付嬢とすれちがつたので、ブレーキを踏んで振り返つた。

「さつきはありがとう。役に立つたよ、ネクタイも、ビジネスマナーも」

「それはなにより。で、どうだつたの?」

「最高。即日採用だつてさ。きみのおかげだ」

「よかつたね。外でコーヒーでも飲まない? 午前中だけで一回も休憩を取つただけど、上司がうるさいのよ

「もう飲み物はたくさん。それに、急いでるんだ。モールに行かなきゃ。彼女がお金を持つてないのにテレビを買おうとしてるから」

リュックはバッグを肩にかついで、ふたたび走り出そうとした。

「なんだ、彼女いたんだ」

「いるよ。いちおうね」と振り返って答える。

「正直言つと、あなたとはじめて会ったとき、個人的にはね、彼女がいてほしいなって思ったの。だらしなくて無能でスネかじりで家事もなんにもできない、かわいいだけがとんでもない彼女。で、あたしはその彼女とお知り合いになりたい。あなたより彼女と仲良くなりたい。そしてあなたがトイレへ行つた隙に、突然ひどい悪女に豹変して、彼女を泣かせてあなたに家から蹴りだされたい。これ、

いまの正直な気持ちよ」

「そう」さつそくビジネストークを披露した。「ぼくもきみが好きだよ。すごく常識的だし、性格も文句なしだ。エレノアを捨ててきみと付き合おうかな」

リュックはエレベーターに駆け込んだ。一階に降りると、大股でエントランスを横切りながらコートを羽織った。酔っ払っていることを差し引いても、なにか妙に大きな気分になり、いつちよまえの男になつた感じがした。バッグを抱えて颯爽と回転ドアを抜け、颯爽と通りに出た。勢いで路上に踏み出して颯爽と手を上げ、タクシーを止めた。後部座席に乗り込み、「モールまで」と告げた。タクシーは走り出し、リュックは満足げにシートにもたれた。

金がないのになぜそんなマネをするのか。次々と流れる建物を眺めながら、リュックはあらためて考えてみた。が、たとえば母親を納得させられるようなまともな理由は思いつかなかつた。ただ、これだけは言えた。「コートにネクタイをなびかせてビルからとおりに飛び出したときには、たいがいそうするものだと決まつている。だからやつた。かあちゃんがこれを聞いたら息子を心配して病院に連れていこうとするだろうが、結局のところ、かあちゃんというのには言われても息子を心配して病院に連れていきたがるものなの

だ。  
どうにかなるだね！。

### 3話 テレビの買い方

緊急事態でもないかぎり、エレノアはめったに外出しない。食べるものにしても、冷蔵庫を開ければたいてい「これだ」とピンとくるものが入っているし、ピンとこなしても食べた。ピンどころか賞味期限が切れて外箱がふやけている冷凍食品でも食べた。ボール紙の味しかしながらも気にしないし、食べればなんでもいい。テレビでペラペラのチーズみたいな宇宙食の紹介を見たことがあつたが、一生あれを食つていってもよかつた。

エレノアは家から徒歩十分のところにある超巨大ショッピング施設『フイヨルズルナカズル・モール』に来ていた。名前が大げさすぎるのに、たんに「モール」と呼ばれている。エレノアはベージュが白っぽくなつたファー・コートを巻きつけて、ウサギ皮の帽子をかぶり、口から毛があふれ返つたブーツをはいていた。毛玉を引き連れて歩いているようなものだ。今日は風が強いし雪混じりなので、モールに着くころにはすでに凍えてがたがた震えていた。家電品売り場は四階にあつた。

「ここでテレビを買って、さつまと家に帰る　お金はないが、さつまと帰る。リュックにできるのだから、自分もきっと『買い物』ができるはず。」

リュックに電話する。面接中なのか、応答がなかつた。

四階のテレビ売り場へ向かう。通路が目の前を一直線に伸びている。左右の棚にはテレビがずらつと並んでいて、競つて画面をちらかさせ、自分を買ってください、必ずお役に立ちますよとアピールしている。

その声を聞くたび、エレノアは眉間にしわを寄せた。どれもこれも同じに見える。ペットショップに入つたら黒毛のシープドッグがずらつと並んでいて、せいに顔を向けられたようなものだ。大きさはそれなりにばらけていて、たまに突然変異体のような大型スク

リーンがどつかと待ち構えていたりするが、形はいつしょ。四角くて、ワイドで、薄型。ほんの少し、同型で白や赤やピンクのものがあつた。たぶん親がヒッピーかなにかだつたんだろう。

テレビそのものについては、譲れないこだわりがあった。リュックもそうだし他の人も例外なく、テレビは画面が大きくて、画質がよくて、薄くて四角いほどよいと考えている。そうではないのだ。エレノアにとつてテレビはパートナーだった。黒服を着て紅茶のポットを持ちむつつりと立つてお役立ちの執事など、いらない。ふわふわしていて、じろじろしていて、おなかをさするとうれしそうに床を転がつて、たまに抱きしめたり、いつしょにソファの上で飛び跳ねたり　とにかく具体的に表現できないがそんなパートナーがほしい。今までふわふわこころのテレビにお目にかかるたることはなかつたが、もし売り場でふわふわこころが通路を飛び跳ねているのを見たら、なにはなくとも捕まえにいったことだらう。通路を一列ごとに進つては戻りし、歩くたびに気分が沈んでいつた。ブーツの中が蒸れて水っぽくなつてきたし、首をねじるのも飽きてきた。それでも薄暗い雰囲気の壁際に近づくにつれて、ふつうじやない感じのテレビがちらほら出てきはじめた。この列はさしずめ落ちこぼれの補習クラスだ。三年ほども居残つてゐるのか、うつすらほこりをかぶつてゐる。客もない。

落ちこぼれたちは画面が小さくて、ワイドじゃなくて、幅が分厚かつたりブラウン管だつたりしてゐる。どれも古くて、時代遅れ。口があればへの字を、眉毛があればハの字を書いてゐることだらう。かわいそうで、悲しい気持ちになる。

通路も終わりに差し掛かつたところで、棚の一角が妙に輝いていることに気づいた。エレノアは胸をざわざわさせながら足ばやに近づいた。あれかもしけない。

あれだつた。

大きさはほどよくて、液晶の画面は十五インチくらいだつた。つやつやした水色で、ふちはすりガラスか製氷皿の氷のようなプラス

チックであるつこく覆われている。指先で触つてみると、ざらざらと心地よく、少し柔らかかった。抱きかかえて持ち上げる。驚くほど軽い。ラベルには名前が書いてある。クレッパ（水色）。アラニスというデザイナーもので、昨年発売されたばかりだった。新しくて、ほこりもかぶつていない。マツチョでもなく、いじけてもいいな。一年もすればおすわりくらいはできるようになるだろう。これだ。クレッパ（水色）。これしかない。

「わたしに買つてほしい？」

胸まで持ち上げて、顔を近づけてそつとたずねる。テレビはうなずいた。ほんとはうなずいていないのだが、イヤだとも言わないのと同じことだ。しまいには頭を押さえてむりやりうなづかせた。

「よし。あなたを買うことにした。いつしょに帰ろっ」

そんなわけで、五分後エレノアはレジで店員の男と向き合つていた。背後の時計を見る。十三時二十分。『31』の放送には余裕で間に合いそうだ。

「どうも。わたしね、買い物しに来たの」

「だいたいみんなそうだよ」

店員のおじさんは不機嫌そうに返答した。買えるものなら買つてみると言わんばかりだが、たぶん気のせいだろう。身長は低くてエレノアの頭半分くらいで、髪が薄くて鼻が大きい。黄色いエプロンをつけていて、胸のポケットからはボールペンやらマーカーやらが何本も頭をつき出している。鼻の穴をぐいと持ち上げてエレノアを見た。

「支払いはカード？ それとも現金？」

「うつん

Hレノアはここにして答えた。

「なんだその『うつん』ってのは？」

「どっちでもないから」

「じゃあ、小切手か」

「なにそれ？」

「じゃあ、ポイント支払いか」

「そうじゃないの。そういうことじゃなくてね。

ちよつと待つ

て

Hレノアはリュックの話を思い出すとした。『買い物』の話だ。まず、どうするんだつけ？

「わかった。まず、金額をレジに打ち込んで。ピッて

「ふざけてるのか？」

「順序が大切な。とにかく打ち込んで。はい、どうぞ」店員のおじさんは鼻の穴を広げた状態でしばらく固まっていた。そしてうつむいてなにか考えていたが、おもむろにバーコードリーダーを持ち上げて、カウンターの乗つかつたダンボールに近づけた。ピッとき音がした。

「五百九十九クラーム。これでいいか？」

「ぱつちつ

「順序にまちがいがなきや、次はあんたが金を出す番だ」

来た。リュックによれば、このあと記憶がなくなつて、気づくと品物を抱えて家の中にいるということだった。やりかたはわからないが、とにかく記憶がなくなるんだろう。Hレノアはにこにこしたまま待つた。おじさんも待つた。

記憶がなくならない。

レジ係のおじさんの鼻の穴がみるみる膨らみ出した。と、しうつという感じでしぶんと、爪先立ちでHレノアのうしろをのぞきこんだ。申し訳なさそうにうなずき、となりのレジを指した。かぶりを振つてHレノアに向き直る。そして思い出したように鼻の穴が広がる。

Hレノアは精神を集中しようと目を閉じた。そうだ、じつと立っているのがいけないのかもしない。新しいアイデアをもとに、Hレノアは怒つてみたり、悲しんでみたり、祈つてみたり、死んだふりをしてみた。アイデアをさらに発展させ、おなかが痛いふりをしたり、まじめなふりをしたり、たいしておもしろくないくせに自分

のことを頭の回転がはやくてお笑いの才能があるやつだと思い込んでいる人のふりをしてみた。

後ろのほうがざわついてきた。振り向くと、それぞれの品物も抱えた二十人くらいの客と田が合つた。どれも同じ顔をして、敵意に満ちていて、同じ田的につき動かされていそうだった。ゾンビ映画みたいだ。ちょうど場所もモールだし。

なにが大したことないのか説明するまでもなく大したことないという表情を顔に貼りつけたまま、あせつてポケットを探しまくった。携帯電話を取り出して、電話をかけた。

リュックの声。「もしもし?」

「助けて」

「どうしたの」

お客様の様子が本格的にゾンビ化してきた。家電品を手にこじり寄り、直接的に怒鳴りつけてくる男も出てきた。

「待つてて。とにかく、危険だからレジから離れて。面接が終わつたらすぐ行くよ」

電話が切れた。

「んー」

追い込まれたエレノアは、いきむよつに喉を鳴らした。レジのおじさんが驚いた顔で見上げる。どんどん声のピッチが上がり、おじさんの身長も上がってきた。エレノア自身も上がつてしまいそうだつた。酸素が足りなくなつてきて、頭のてっぺんがぱちんと弾けそうになる。

エレノアは辛抱たまらず息をついた。おじさんの身長がみるみる下がつていく。

「ダメ。できない」と言ひて、悔しげに腕を振り下ろした。「これじゃ念力だ」

「いいかげんにしてくれ」

レジのおじさんは、勝手に身長を大きくなされたのが気に障つたのか、有無を言わさない調子で言い放つた。べつの店員を呼んで、力

ウンターのダンボールを片づけるよう身振りで指示した。エレノアは箱にかぶりついた。

「待つて！ わたしはどうしてもこのテレビが必要なの。買わなきゃならないの！」

「金を払えば買えるんだよ！」

箱の上によじ登りうとして、店員にひきずりおろされた。エレノアは周囲を見まわし、売り場のテレビが田んぼとまつた。さまざまチャンネルのさまざまな番組を映している。中でもぱっと田に飛び込んできたのは、『ほんとうのところの料理』だった。あれはアンスタントのイグノラだ。包丁を持ったまま、手の甲で目頭をねぐつている。お料理おばさんは休みだらうか。

いや、いた。スタジオの隅、セットから外れた場所で、特製の安樂イスにすわって紙の束をめくっている。手持ちのカメラがふざけるように映像を揺らしながら近づいていて、ヨンナの表情を大写しにした。それだけで嫁を出家させるといわれる恐ろしい顔が、さらには陥しくゆがんだ。ヨンナのまわりに無意味にカメラをうろつかせて機嫌を損ねるのは、もはやなくてはならないお約束だった。大きなおつかない顔の映像に、ナレーターのしゃべくりがかぶさる。

「魚が届くまで三日。ヨンナはもちろん、待つつもりだ。イグノラも着替えを用意し、準備は万全の様子。まあどうなる、今週の『ほんとうのところの料理』！ みんなはどうだい？ このまま残つて、『料理』が完成するのを見届けたいか？」

拍手と歓声が起つた。観客はいつになくテンションが高い。「じゃあここでお待ちかね、『シャワー＆クイズ』だ！ スタッフのみんな、簡易シャワー室を用意して…」

スタッフが電話ボックスのような代物を『じゅうじゅう』と運んできた。箱は天井がなく、シャワーヘッドがひとつつき出している。四面すりガラスにおおわれているのだが、高さは胸の上くらいままでしかない。

「三日待つわけだからね、妙齡の女性には、どうしたってシャワーが必要だ。でも待てよ、シャワーからお湯が出るなんてだれが言つた？」

観客は立ち上がり、狂ったように露骨に出した。どんな液体が出るにせよ、シャワーを浴びてクイズに答えるのはアソナでないことがけはたしかだつた。イグノラは周囲を見まわし、よつやく状況を把握したようだつた。「あ？ 聞いてなによー」とこつた身振りで両手を広げる。だいぶ泣きはらしたのか、田の下はぐずれたマスクで灰色っぽく変わつていた。

「いかがわしいだろ？ お昼に放送するなんて信じられない。まさに放送コードすれすれ。下半身を露出した着ぐるみのネズミがコードの上で綱渡りをするようなものだ。そしてそのコードをゆさゆとしてネズ公を地面に叩きつけるは、「プロ」らしく絶妙な間を置く。」「きみたちだ」

イグノラは包丁を持ったまま肘を抱え、顎に手を当て、譲々しげに観客を見渡した。客のひとりから野次が飛ぶ。それに向かってなにごとか叫び、包丁を振つた。音声がフェードアウトして、楽しげに飛び跳ねるようなテーマ音楽が流れ出した。

「ではここでいつたんこ」

Hレノアは店員ともみ合つてゐるのも忘れて眉をひそめた。以前はこないかがわしい番組じゃなかつたはずなのに。これもミーカの仕業だろうか。そんなことを考えていると、周囲の様子が変化した。視界全体が袖で「じじじ」じつたみたいに色あせ、なんだかよくわからないしみになつた。まわりの音声も、番組の音声に合わせるよにフェードアウトした。代わりに当たり障りのないラウンジミュージックが流れはじめた。

展示用テレビのひとつがCMをとめ、コソナの顔をアップで映し出した。

「あら。おひやしふりじやない。お元気？」

穏やかなおばあちゃん声だつた。顔つきもふだんどちがう。穏や

かな微笑みに穏やかなまなざし。穏やかだが、とても悲しそうだつた。じつはこんなおばあちゃんだったと見せつけられたら、嫁の弁護士も氣まずそうに目をそらして訴訟を取り下げるにちがいない。

「まだ テレビから話しかけられた」

「驚いているみたいね、エレノア」

「ええ、いろいろと」

「なにから説明してほしい?」

「うーん」エレノアはあらためて周囲を見まわした。「あなた、いつもとキャラがちがう」

「あれはテレビ向け」

「見て。わたしのまわりが固まっちゃった。ほんやりしてる」

「そうね」

「みんなしてテレビから話しかけてくるのはなぜ? ビーナスって? なんのために」

「来週になればわかる」と ヨンナはため息をつき、声を震わせながらつづけた。「『めんなさい』。あたしたちは都合が悪いときにはこんなふうにしか言えないの。『つづきはまた来週。次回をお楽しみに!』って」

「なにかが起じているのね? つまり、そっちとこっちで」

「恐ろしいことよ。あなたがたの世界でもあるでしょ? いきなり氷河期になつたり、津波に襲われたり、エイリアンに侵略されたり

「」

「そつちでも似たようなことが起じているの?」

「もつと恐ろしい。番組改編期がやつてきたの」

「『』の時期に?」

ヨンナはうなずいた。「ビーナスってかはわからない。だけど、『』数日だけでたてつづけに番組終了が決定しているのよ。『名探(犬)ワンだぶる・ツイッパー』も、『ビジネスっぽいアノ話』も『ビジネスっぽいアノ話』は、貿易赤字や株価の動向など経済に關係するニュースを読み上げたうえでそれらを徹底的に無視するとい

う内容の番組だった。インチキニュースを読み上げたり、皮肉ったり、キャラスターにセクハラ発言をしたりといったバラエティ番組とは一線を画しており、お笑い要素はいつさいない。はじめはなにがおもしろいのかと疑つてかかるのだが、見つづけるとたんに病みつきになる。ニュースを読み終えたあと、解説者がコメントもせず阿呆のように正面を向いていたり、職場風景を伝えるはずのレポーターがマイクを持ったまま社員を無視してオフィスを徘徊し、あまつさえ勝手に本部長の席に腰掛け、だからといってなにをするわけでもなくただぼんやりと前を見ていたりする。

「おもしろい番組ばかり」エレノアは自分の一部が削り取られしていくような気がした。そしてふと気づいて、背筋がひんやりした。「じゃあ、『3・1』も打ち切り?」

「『3・1』? ああ、リンちゃんの番組ね。さあ、あたしは聞いてないけど」「ほんと?」

ヨンナはうやむやにつなぎた。「来週になれば わかるかもしない」

エレノアはひとまずほっとした。ヨンナの挙げた番組はどれもお気に入りで、終わるのはたしかに残念だったが、『3・1』ほどではない。『3・1』は完璧だったし、もはや自分的一部だし、背骨を引っこ抜かれるようなものだ。リン・タウンゼンドに会えなくなるなんて、とうてい考えられない。

というわけで自分の心配がなくなつたので、ひきつづき他人の心配をすることにした。

「そういえば、あなたの番組もへんだった」

「内容の変更があつたのよ。さつきの展開を見たでしょ?」

「お色気路線に変わつてた。もとから狂つた感じだつたけど、大好きで毎週見てたのよ。でももう見たくない。イグノラがかわいそう」

「あたしが『シャワー＆クイズ』に参加するの」

「え?」

「プロデューサーが変わったのよ。新しいプロデューサーは急進的過激派のおばあちゃん子なの。お年寄りのセクシーネスを追求するんだって息巻いていた」

「なにそれ」

「あなたもやることがあるんじゃなかつた?」

「やつだつた。わたし、テレビを買わなきや。お金を払わずに買いつ方法、知らない?」

ヨンナは横を向いた。「CMが終わる」

「ねえ、知ってるなら教えて」

「時間がないの」ヨンナは言つた。「せんとうはあるナビ」

「お願い」

「今日のお料理は『ニシンの燻製』なの」

「それで?」

「『ニシン』よ。『論点のすり替え』。こまのあなたにまひとつも役に立つはず」

「テレビがふつと消えた。とたんに現実が再開した。

「金を払えば買えるんだよ!」

レジ係のおじさんがちょっと前のセリフを言つた。CM明けだから視聴者に配慮したのだろう。ふたたび揉み合いがはじまる。

ヨレノアはヨンナの言わんとしたことを考えていた。ニシンの燻製　そうだが、ヨンナはいつも理不尽な論理でアシスタンントをやつ込めていた。ニシンの燻製、すなわち論点のすり替え。これだ。ダンボールから離れ、抵抗する意思がないよう口に両手を上げた。そしておじさんに正対する。

「お金がないと、買えないわけね」

「あたりまえだ」

「お金がないのが悪い、と」

「そうだ」

「お金が」

こつまで経つても次の句が出てこないので、レジ係のおじさんの

頭がちょっとずつ傾き出した。「お金がないと」「傾きついで

カウンターに耳がつきそうになつた。

「ごめん、いまのナシ。最初からはじめでいい?」

おじさんはなにか言いたげな顔をしていたが、思えはずっとなにか言いたげな顔をしていた。

エレノアは咳払いした。もっと法廷もののドーナツを見ておけばよかつた。

「ねえ、よく考えてみて。本当に、お金がないと買えないの?」

「そのとおり」

「みんながそうしてるっていうだけで、他の方法がないわけじゃないでしょ?」

「いや、ないね」

「そんなはずない。よく考えるんだ!」

エレノアが急に怒鳴ったので、おじさんははつとして、言われたとおり金を払う以外に商品を買つ方法がないか考えはじめた。

「思いつかん」

「時間はそんなにないけど、まだいじょうぶ。わたしもこつしょに考えるから」

ふたりはカウンターをはさんでしばし考えていた。

エレノアが先に口を開いた。

「おじさんが払えばいいのよ!」手を叩く。

「そうか　だが、おれになんの得があるんだ?」

「ほしくないの?」

「テレビは持ってる」

「すごくかわいいのよ」

「おれはかわいいテレビなんていいらん。　うちの娘がほしがるようなもんだ」

「娘さんのために置つたら?」

「こんなもん、贅沢すぎだ」

「買ってあげたら喜ぶでしょううね」

「まあ、たしかに」

「わたしもね、はじめて自分用のテレビをおとつせんに買つてしまつたとき、すゞぐうれしかつたのを覚えてる。娘さんのこと、大事に思つてるんでしよう?」「もちろん。なにより大事に思つてる」

「お金よりも」

「あたりまえだ」

「決まり。買つてあげて」

「だけど、それじゃおかしいだろ。娘に買つたらあんたのものにはならない。あんたはどうする?」

「わたしのことは気にしないで。それについては買つてから考えましょう。とにかく買うのが先。はい、お金払つて」

レジ係のおじさんは自分の財布を尻のポケットから取り出した。中をのぞきこんで、手持ちで足りるだらうかと札を繰つて数をかぞえた。

「足りる?」

「ああ、たぶん」

田をしばたたいた。魔法の粉を払つように頭を振り、どうしておれが手持ちで足りるかと札を数えなきやならんのだと言いたげな顔になつた。

「どうしておれが

と実際に言つた。

エレノアはアニメのキャラクターのように、大げさな身振りで指を鳴らすしぐさをした。「うーん、惜しかつた!」

となりになにか大きなものが立ちはだかつているのに気づいた。そつちを向くと、目の前に男の腹があるような気がした。大きすぎるとシヤツをめくつてたしかめたわけではないので、たぶん腹だろうと思つた。腹があるなら顔もあるはずだと視線を上げていったのだが、延々と黒ネクタイの道がつづくだけでなかなか顔が出てこない。道中、わき道で盾形のバッジが腰を下ろし休憩していた。警備

員だった。

視線がようやく顔までたどり着いた。その顔はむつりと無表情であるような気がした。袖つきの工場用アームが動いて、エレノアの一の腕をつかんだ。必要なら腰だって片手でつかんで持ち上げられそうだった。

「わきへどいで。こっちへ来るんだ」

レジのおじさんがあらためてエレノアと向き合ひ、ふんと鼻を鳴らした。ずっとそうしたかったのがやつとこ機会がやつてきた、よつやく念願叶つたといった感じだった。

警備員にひっぱられて、売り場を離れ、階段を降りる。家電品の立てるざわめきが遠くから聞こえてくる。「退場願われたのだ。子供のころ仲間はずれにされたときも、ちょうどこんなふうに感じたものだつた。おまえはここにいちゃダメだよ、その資格はないんだよ」と。自分と警備員の靴音がやたらと響く。ひどい話だ。エレノアは頭の中でつぶやいた。お金がないだけで出て行かれるなんて。みじめな気分になつて、田の端がじんわりにじんできた。お金がないとテレビが買えないなんて。わッと泣き出しそうになつたが、すぐに思い直した。どうやらあたりまえであるような気がしたからだ。これぞ論点のすり替え。

「どこまでひっぱつていくの」

「敷地の外までだ」警備員は頂上付近にある口を開いて言つた。「おとなしくしていろよ」

「逮捕されるんだ」

警備員は喉を震わせ、笑い声を立てたような気がした。

「あんたみたいな迷惑な客は山ほどいる。金も持たずに買い物しようとすると密はとくにな」

薄暗い階段から、三階中央に出る。田の前が開け、巨大な円形のフロアがあらわれた。中央は吹き抜けになつていて、超長い垂れ幕が何本もぶらぶらしている。ドーナツ状のフロアを飲食店が取り囲

んでいる。

「待つて！」「ここで降ろして」

「降車ボタンを押すんだな」

「またまた ここで放して、って言いたかったのよ。連れと待ち合わせしてるから。ほら、あのベンチ。あそこにすわって、おとなしくしてる。ぜつたい迷惑はかけない」

「ほんとうか？」

思い切り背伸びして、バレエみたいに爪先立ちで歩きながら警備員の顔を見上げ、うんうんとうなずく。すると警備員の表情がわずかにゆるんだような気がした。

立ち止まって、巨大手袋が一の腕から離れたような気がした  
二の腕から離れた。

「ありがとう。恩に着ます」かかとをつけて、ねじれたコートをひっぱつて直す。

「一度とわれわれの想像を超えるようなへんな真似はするんじゃないぞ。不審な動きがあれば、すぐに駆けつけるからな。あれが見えるか？」

警備員は壁を指差した。なめらかにカーブする壁面と天井の境目に、控えめな感じで白い箱が突き出ていた。

「監視カメラ」エレノアは背中がぞくつとした。

「そのとおり。当然だが、モール内のある箇所に設置されている。管制室のスタッフが隨時見張っているから、なにをたくらもうとぜんぶ筒抜けってわけだ」

「おとなしくする」エレノアは請け負った。「トイレは行くかもしれないけど。」「迷惑かけました」

去り際につぶやく。「あなたの連れが元海兵隊員でなければいいんだがな」

「ははは。おもしろい」

のつそりと立ち去る警備員のつしろ姿を見送る。さて、どうじょうか。『買い物』は大失敗だった。だがそれほどがっかりはしていない。

なかつた。だれでも得意不得意があるものだ。その道のエキスパートを呼んでおいたし、時間もまだある。

監視カメラを見やる。うつむきがちで、なにを見ているというわけでもなく、ただぼんやりとぶら下がっているだけのようだ。

エレノアは黄色いベンチにすわってぼーっとした。ベンチが硬いので何度もお尻をもぞもぞさせたが、それ以外はほとんどなにもしなかった。猫背であるをつき出し、頬杖について、たまにため息をつくくらいだ。中央の吹き抜けに、垂れ幕が何本もぶら下がっている。その向こう側で、透明の筒の中をエレベーターが上がったり下がつたりしている。

館内放送が流れた。

「迷子のお知らせ。迷彩柄のパークーに迷彩柄のズボン、重たいバックパックを背負いフェイスペイントを施した二十一歳の男の子が迷子になっています。自称二十一歳ですが三歳くらいの男の子だと思われます。第四十一空挺師団に所属のおとうさん、おかあさんがいらっしゃいましたら、七階の特設コーナーまで空爆の要請をお願いいたします。オーバー。繰り返します。迷彩柄の」

おなかが鳴った。退屈をまぎらそうと気を利かせてくれたのだろうか。もう一度。たしかにおなかが空いている。しかも目に入るお店はレストランだけときた。

お金がないのは不便なことだ。エレノアは目を閉じた。頬杖をつきなおし、なんとはなしにほっぺたを指先でいじつた。冷たいベンチもあつたまつてきた。他にすることは? なんだっけ? なにかおもしろいことは?

エレノアはひとつうなつて、自分の電源を落とした。テレビがないと、おもしろくない。

どのくらい経つたのかわからない。突然リュックが目の前を通過した。「お待たせ」「ブレーキをかけたが間に合わず、つるつるの床に革靴の底をすべらせ、そのまま壁に激突した。

勢いよく振り向き、なんだか大げさな身振りで走つて戻つてくる。

「おま」「ふたたびとおりすぎる。

「なにやつてるの?」

エレノアは立ち上がり、三度目で戻つてきたところを捕まる。勢いでふたりは一回転半した。

「お待たせ

息を弾ませる。顔が真っ赤だ。前髪がだらんと垂れ下がつていて、汗っぽい額にくつついている。ついでに言うと格好もよれよれだつた。スーツはゴミ箱から拾つたみたいだつたし、ネクタイは結び目がほどけかかっているし、シャツも半分はみ出している。

「タイムスリップでもしてきたの?」

「面接をして 戻つてきた」

「知つてる。で、どうだつたの?」

「ばつちり。これでぼくも社会人の仲間入りだ」

「それから?」

「タクシーに乗つたんだ」

「お金もなく?」

「そうだね。すぐ着く予定だつたんだけど、途中で戦争があつてさ」

「戦争?」

「比喩じゃないよ。戦争みたいな夫婦喧嘩とか、この世の終わりみたいな賠償請求とか、そういうのじゃなくてね。解放軍と反乱軍が市街戦をしてた」

なんとはなしにうなづく。ふと、エレノアのテレビ脳がひらめいた。

「解放軍と反乱軍つて、どっちも反体制派なんじゃない?」

「そう思うよ。連中も首をかしげてたから。どっちもなんのために戦つてるのかわかつてなかつたみたい」

「ケガはないの」

「だいじょうぶ。らちが明かないから、交戦地帯をつつきつてきた。タクシーの運転手、あの人勇気には脱帽したよ。ほんものの英雄

だね

「タクシー代は払った?」

するとリュックは眼球の体操をはじめた。

「覚えてない。払ったんだと思うよ。ここに着いて、気づいたらここにできみと抱き合って回転してた」

「上々だったわけね」

「戦争の話はもういいや。タクシーも、監視カメラも。そっちはどう?」

「じつちはさんざんで……」今度はエレノアが眼球体操をするはめになつた。言葉を飲みこんでおなかの足しにする。「監視カメラ?」「いや、いいんだ。ほんとうに、なんでもない。ひとつてことないんだ。はい、そっちの話」

エレノアは事の顛末をかいづまんで説明した。身振り手振りを交え、わかりにくいところは注釈を入れ、説明的すぎる感じのところは行間から情景がにじみ出でてくるような描写を挿入した。筆がのりすぎて散漫になつたようなのでどこを削るべきか考えていらつちに三十分が経過した。

「そうだつたんだ。みんなに迷惑かけたんだね」

「ああもう、また時間がなくなつた!」吹き抜けを見下ろしたところに、噴水と緑におおわれた大時計があつた。もう少しで十六時になるところだつた。どこへ行つても時計があつて、まったくありがたいことだ。「あと一時間で『3-1』がはじまっちゃう」

「余裕だよ。家まで歩いて十分。テレビを買つのは五分で済む。そのためにはぼくを呼んだんだろ?」

「ほんと? ほんとに買える?」

「裏づけはないけど、一年の経験があるからね。踊りながら待つて。じゃ」

リュックは意味不明なセリフを残すと、靴底をつるつるすべらせながら駆け出した。角を曲がつて階段に消えかけたといひで、エレノアが叫んだ。

「水色だよ！」

「水色！ 了解！」

いろいろと不安になつたのだが、言われたとおりほんとうに踊つて待つわけにもいかず、だからといって他にやることもなかつたので、先ほどのベンチに腰掛けることにした。リュックはやけにテンションが高い。それもそつかも。働き口が決まつた帰りに戦火をくぐり抜けてきたら、ちょっとは興奮してもおかしくない。

リュックはほんとうに五分で戻つてきた。戦場から戻つた夫を迎える妻のように、エレノアは立ち上がつた。リュックはエレノアを見つけると、どびきりの笑顔を見せた。体を斜めに傾けて、片方の手に懐かしいダンボール箱を持ち、よたよたと近づいてくる。

エレノアは思わず駆け寄つた。膝を折り、ダンボールを丸抱えた。印刷された表示とイラストを確認する。

クレッパ（水色）。イラストもまちがいなし。

「やつたー！」

エレノアは立ち上がり、そのままリュックにしがみついた。

「ほんとうに買つてきた！」

「こんなに喜んでもらえるなら、あと二、三個買つてもいいな

」

通行人が振り返り、不審そうなまなざしを向ける。

「ダメ。そんな贅沢はいらないの。これだけでじゅうぶんだよ」エレノアは興奮で目をきらきらさせて、リュックの口もと一センチにせまつてべらべらまくし立てた。「あなたつてすばらしい！ 人生もすばらしい！ 生きてて楽しいって思ったのはじめて！」

「つばが飛ぶ」

ようやく落ち着いて、リュックにしがみつくのをやめた。通行人が急に増えたようで、右から左に歩きながら、振り返りまくつている。何人かはとおりすぎた後で引き返し、知らん顔でもう一度振り返つたりしている。

唇を軽く触れさせてから、ふたたびつばを飛ばしはじめた。

「ねえ、どうやって買つてきたの。コツを教えてよ」

「わからない。覚えてるのは きみのほしがつてたテレビを探して、在庫を確認して、店員にレジまで運んでもらつて そつそつ、レジ係が鼻の穴を自由自在に変化させるおじさんで

「わたしもいろんな意味で苦労させられた」

「んで、気づいたら目の前にきみの顔があつた」

「『買い物』は、いまだ謎のままで、もしかしたら、知らないほうがいいのかも」

なぜカリュックは腕時計を見るしぐさをした。なぜなぜかなのかというと、腕時計などしていながらだ。ともあれ、いよいよビジネスマンらしくなつてきた。エレノアは袖をひっぱり、吹き抜けから見下ろせる飾り時計を指差した。

「まだ時間はあるよね。食事しよう」

「お祝いね」

ふたりは手すりにもたれかかり、一階のフロアを見下ろした。床のタイルの並びがなにか意味のある記号に見えたので、ふたりで当てっこクイズをした。エレノアはガチョウだと言い、リュックは七十五ミリ高射砲だと言った。まだ戦争の記憶を引きずつっているらしい。正解は床のタイルだけが知っていて、じつのところ上から眺める人のことなどこれっぽっちも気にもしていなかつた。

「いつもなら一刻もはやく帰りたいところだけど。なんだか人生に余裕が出てきたみたい」

「よし、行こう。お祝いならファーストフードだ。子供の遊び場もあるしね」

ふたりでテレビを持ち、エレベーター乗り場に着く。リュックは下のボタンを押した。すでにランプがついているにもかかわらず一秒もしないうちにもう一度押し、せつかくだからともう三回押した。ようやくというほど待つとはいひないのだがようやく到着すると、ジヤンプして乗り込み、操作盤の前に貼り付いた。どこへ行きたいの

かわかつていないう人のようにめぐらめつぱう押しまくり、結局八階から地下一階までぜんぶのボタンのランプを点灯させた。

「子供のころからの夢だ。一度やってみたかった」

乗り合わせた人たちの顔を極力見ないようにして、エレノアは相方の赤い顔をのぞきこんだ。

「聞きそびれたんだけど、もしかして酔っ払ってる?」

「いや、これくらいじゃ酔っ払わないよ」と大学生のようなことを言う。「面接のこと、話したつけ? 受付の女の子にネクタイの結びかたを教えてもらつたんだけど

」

各駅停車のエレベーターがゆっくりと降りていく。「フロア」とに立ち止まり、「まあ見てつてよ、なにもないけどさ」とばかりに扉を開ける。そこにはほんとうになにもない。

冷たい視線を浴びながらエレベーターを降り、きらびやかなエンタランスから外に出ると、濃い灰色の現実世界が待ち構えていた。日没までもなく、風が冷たい。ふたりは足をとめ、互いになにか言おうとした。おそらく会話に困ったときによく言つ「もう日が暮れるね」とか「外は寒いね」とか、そんなたぐいのセリフだろう。代わりに白い息を吐き、コートをしつかり巻きつけ、かじかむ手でダンボールを持ち直した。通りと建物のあいだのだだっ広いスペースに立ち、リュックが左を指差す。エレノアが目で追う。某ファーストフード店の看板があつた。まるで希望の光のように明々と、赤地に黄色のMマークが回転していた。

某ファーストフード店とは、言つまでもなくマクドナルドだった。この世にマクドナルド以外のファーストフード店など存在しないからだ。モールに寄り添うように建ち、いつか宿主よりも大きくなつてやると意気込んでいる。マクドナルドはどこにでもあった。どこのにあるものといえばマクドナルドだ。マックは最高。バリュー セットに、おまけもついていて、そのうえおいしい。専門家連中は肥満の原因だとか食の安全がどうとかさかんに騒ぎ立てているが、それでもマックは最高なのだ。いまはそれしか言えない。

店内は客が大勢いた。列に並びながら、メニューのパネルの写真を眺めている。

いつしょになつて眺めながら、エレノアは気づいた。

「わたし、お金ない」

「ぼくもだよ」

「『買い物』するつもりね」

「コツを教えてつて言つただろ?」リュックはテレビの箱を置いて、両手をこすり合わせた。「さあ、うまくいくかな」

「ようやくその瞬間を叩撃できるのね。ようやく謎が解明されるのね?」

「テレビ番組っぽく言つと、そんな感じだ。悪いんだけど、席を取つとつてくれる? テレビも運んで。あ、あとメニューも。なにがいい?」

エレノアは笑みをこぼした。「なんでもいい。毛が生えてなければね」

「わかった。毛は抜いてもらいつよ」

エレノアは隅つこのふたりがけの席にすわり、テレビの箱をとなりに置いた。リュックはコートのポケットに手をつっこみ、落ち着かなげに足踏みを繰り返している。

エレノアは妙に胸が騒いで、ペーパーナップキンをいじり倒した。といつても、CM明けに未知の生命体の正体が明かされるのを待つときのようなわくわく感ではなかった。この手の番組の結末はたいへい、ガツカリさせられるか、なんだかよくわからない説明でお茶を濁されるかのどちらかなのだが、CM明けに実際に宇宙人の顔がドバーンと映し出され、隣人が侵略者かどうかを見分ける実践的方法なんかをやられたりしたら、おそらくわくわくどころではなくなるはずだ。

つまり、そういうことだった。知らないほうがいいのかもしねない。

十五分の子供向け科学番組『ここだつてりっぱな宇宙』は、教育ものでありながら常に「母親が一度と子供に見せたくない番組」の上位にランクされており、実際視聴率も最悪だった。内容はシンプルながらいたつてまともではなかつた。宇宙科学者であり友達がないと評判のストーリーテラー、ソルヴィッグが、毎回街なかに繰り出しては子供を捕まえ、宇宙人の特徴を想像力豊かな語り口で伝え、身近に宇宙人はいないかと切羽詰まつた調子でたずねる。子供は信じ切つて体をがたがた震わせ、そういう宇宙人は身近にいる、自分を支配しようとしているのだ、できることなら殺してほしいと訴えはじめる。連れていかれる宇宙人のアジトはたいていその子の家の台所にあつて、ソルヴィッグは脱出ポッドを発見したとか言って冷蔵庫を漁つたり宇宙燃料の組成をコンロで解説しようとし、しまいには母親に見つかって蹴りだされるというのがいつものパターンだつた。通りにうづくまつたソルヴィッグにカメラが近づく。顔を上げ、ひとこと決めのセリフをばく。「ここだつて宇宙なのです」

正直ワンパターンだし、内容もつまらないし、まったく科学的でもなかつた。友達がほしいだけなのだろうというのが大方の評論家の意見だつた。

この番組が今のエレノアの心境を代弁しているかというと、そういうわけでもなかつた。ただなんとなく思い出しただけだ。

そうこうして、うちにリュックの番になった。エレノアはまさに「明けの」とく身を乗り出し、ペーパーナップキンで鼻水をぬぐつた。どれほどの鼻水がついたかを確認したあと、たんんだりひつぱつたりこすりつけたりを繰り返す。

リュックはいまのところ、あたりまえの手順を踏んでいるようだ。カウンターのメニューをあれこれ指し、顔を上げる。ヘッドセットをつけたレジの女がなにごとかをたずね、リュックはうなずいた。と思つたら訂正するように何度もかぶりを振つた。女がレジを打つ。

ついに会計の瞬間が来た。エレノアはナップキンを細かくちぎりはじめた。

リュックはぼんやり立っている。あまりに深刻なぼんやり具合だったので、そのうち看護婦が入り口から駆け込んできて肩をつかみ、「こんなところでぼんやりしていたのね。さ、おうちに帰りましょう」などと言い出しそうだ。順番待ちの客がざわつき出した。

首がちぎれ飛びそうな勢いで右を向いたので、右に立っていた人はたいそう驚いた。もう一度右を向いた。それから右を向き、右を向き、考え方直してからやつぱり右を向いた。首から下が追いかけるようにその場をまわり、気づくと一回転していた。つづけて三回転ほどしてから、なにかを探すように足もとをのぞきこんだ。客のひとりが影になつていて、エレノアからは見えなかつた。よく見ようと立ち上がつたりとなりの席に移動したりした。するとリュックは客をかきわけエレノアのほうへやってきた。

テーブルに勢いよく手をついた。ちぎつた鼻水つきのナップキンが舞い上がつた。エレノアに顔を近づけ、息を切らしながら言つ。「お金持つてない?」

「いい何年もね」エレノアは慎重にうなずいた。「知つてるでしょ?」

「そうか。それでいい」

すつくと立ち、兵隊のようにまわれ右をすると、入り口近くにあ

るゴミ箱へ突撃していった。戸を開け、ポリバケツを取り出し、両手と頭をつつこんだ。店内はすっかり静まり返つており、ビニールのがさがさという音しか聞こえない。テレビの中のドナルドでさえ、番組を中断してリュックの様子を見守っている。

「見つけた！」

リュックがバケツの中で叫んだ。顔を上げ、両手を出した。パンに膨らんだ茶封筒を手に持つていて、中身を確認し、「よし」と言うと、客をかきわけレジに戻つた。封筒からなにかを出し、カウンターに叩きつける。

店員の女のぼんやり具合もまた深刻だった。ヘッドセッテのマイクを押さえて右を向き、もう一度右を向いた。さらに右を向くかと思われたその瞬間、なんと左を向いた。さすがファーストフード店の店員だけあって、左を向いたほうがはやく正面に戻れるとわかっているのだ。そんなこんなで正気を取り戻し、ふだんどおりレジを打つ。リュックにつり銭を渡し、バーガーやらドリンクやらが山盛りになつたトレイを渡した。

リュックはトレイを持ち、たくさんの視線を背中につけさせたままやつてきた。トレイをテーブルに置き、着席するかと思いきやまたしてもまわれ右をして、先ほどのゴミ箱に戻つた。封筒をポケットから取り出し、バケツにねじこんだ。バケツをボックスに戻し、戸を閉めて、ぱたぱたと駆け戻つてくる。

席に着き、息を整える。顔を上げてエレノアに笑顔を向けた。先ほどまでの狂った感じではなく、いつものよく知つた笑顔だった。

「買つてきたよ」

「すうい」エレノアはなんと言つていいかわからず、とりあえずそう口にした。「解説された。なんというか

ふと目を向けると、客が注文そっちのけでゴミ箱に殺到していた。ドナルドも番組を放り出して駆けつけそうな勢いだった。リュックも気づいてそちらを向く。

「連中、なにやつてるの？」

「あなたがお金を使したから」と言いかけて、かぶりを振った。  
どうしてか説明できないが、言つてはいけないような気がする。」

なんでもない。食べましょ!「う

あらためてトレイに皿をやる。ビッグマックに、カップのサラダに、ストロベリーサンデー。

「ヨーグルトはぼくのだよ。クオーターパウンダー（チーズ）も。あとポテトのし、コーラ」

それだけ言えば一週間は水だけで生活できそうだ。エレノアはプラスチックのフォークでサラダをつづいた。

「もう時間ないかも。時計はどこ?」

リュックはクオーターパウンダー（チーズ）にかぶりつきながら、店内を見まわした。

「時計がない。どうしてだらり」

「心配でそわそわしてきた。テレビの設定つて、時間がかかるんじやない? うだうだしてる間にもし『3-1』がはじまつたらと思うと

「ぼくの体内時計からあるここへ来てから一分も経つてない」「経つてます」

いや、蒸し返すのはやめよう。ショイクを飲むと、急に疲れが襲つてきた。今日はもういい。とにかくはやく食つて、ずらかるう。家に帰つて、テレビをつないで、寝床で布団をかぶつてぬぐぬぐだらだらしたい。それが自分だし、これからもそうするつもりだし、リュックがいれば楽しく暮らせる。眠くなってきた。テーブルにひじをつく。マックでリュックと。カップのサラダにショイクを飲んで。

「韻を踏んでるね

どうやら口に出していたらしい。ほんやつと返す。「ヨーグルトは踏んでない

「ラップしてるの?」

「そう。マックラップ」

そろそろビッグマックにかぶりつきながら、テレビに目をやる。ドナルドはいちおう陽気なピエロを演じていたが、新商品がどれだけおいしくて安全かの説明もやつつけ気味で、子供たちを困惑させていた。ことあるごとに、客の群がる「」箱を未練がましくチラ見している。

ドナルドがカメラ目線になり、言った。

「きみの彼氏はすごい力を持っているんだね、エレノア」「急に周囲全体が風呂場の磨りガラス状態になつて、動きがとまつた。

「またまたまた、ぼくの登場だ！」

唯一、店内のテレビだけが磨りガラスになつていなかつた。エレノアは目を向ける。あれはドナルド見えるが、声は完全にミーカだつた。あんな格好までして、なにを伝えようとしているのだろう。偽ドナルドはひょうきんだがおつむが足りないような声でつづけた。「ぼくがだれか、わっかかるつかな？」

「ミーカでしょ」

「ちがう、ドナルドだよ。MCドナルドだあ」群がる子供を乱暴に追つ払つて、セットにひとり立ちぬく。そして礼儀正しく気をつけをした。

「なにをするつもり？」

「ラップさ」

急にくねくねと体を揺すり、ドタ靴でリズムを取りはじめた。後ろ手に持つていたマイクをチャラい感じで口へ持つていき、持つていないほうの手を結局なにがしたいんだかわからないのだがとにかくカッコいいと思わせる振りつけでゆさゆさ揺らした。

「Y.O.」

「なに？」

ドナルドは強烈に冴えたリップをつむぎだした。

「退屈な日常も「ウンザリ」であ飛び出すぜH ave a N

エレノアは気分が悪くなってきた。

「 気になるアノ娘の健康診断／飛び出た××はけつ こうひ 敏感」  
見た目よりそういうハードらしく、マクドナルドはとたんに息を  
切らしてきた。ネタ切れなのか「ヨ、ヨ」しか言わなくなつて  
きたし、顔が汗ばんできて、マイクがじんわりにじんで浮き上がつ  
てきた。

バカ面マイクの奥から、よく知つた顔が出てきた。

「やつぱり。ミーカ？」

「『』名答だぜきみの推理／明日はきっと晴れの日さ」「

「韻を踏んでない」

「うるさい！」急に音楽が消え、ミーカはマイクを放り投げた。「ラップなんかどうでもいい。きみに用があるんだよ、エレノア」「わたし、急いでるんだけど」

「目的を果たすまでは行かせないよ。まずはこれを見る」

なにを見せるかと思えば、その場で着替えをはじめた。赤いもじやもじやカツラをはずして、マイクをペーパーナップキンでごじごしこすり落とし、ドタ靴を脱ぎ、衣装を脱いだ。ついにパンツ一枚になつた。スタッフが着替えを持ってくる。

「 なにやつてるの」

ミーカは上着を着て、ヘッドセットをつけて、帽子をかぶつた。マックの店員のコスプレらしい。が、下半身はパンツのままだつた。

「ズボンは？」

「 なに言つてる、これが正装だよ。レジの人下半身を見たことないだろ？」

スタッフのひとりがあわてた様子でズボンを持つてくる。ミーカはスタッフの去り際にケツへ蹴りを入れた。

田の前にあるリュックらしい染みが、顔のあたりを「じじじこすりじめた。風呂場のガラスのように顔の部分だけがきれいにあらわれた。ふうと息を吐き、エレノアを向いた。

「 やつと出でこれた。 ビうしたの？」

エレノアはなにも言わずにテレビを指した。リュックが振り向く。

「これがきみの言つてたヤツ?」

「そう。お天気キヤスター。これで信用してくれる?」

「イヤな予感がするな。こいつがただの変態ならいいんだけど」

「なんでもいいよ。『3-1』がはじまつちやつ。無視して帰るつ。体もごじごじして」

ふたりはうなずき合つて、席を立つた。エレノアはミーカをちらつと見やり、トレイを持ち上げようとした。が、つかみ損なつて素どおりした。あらためて目を落とす。トレイは「これはいつたいなんでしょうが?」的なクイズ番組の問題みたいに荒いモザイクがかつっていた。それどころか、エレノアがちらつと見やるところすべてモザイクがかかっている。というか、エレノアがちらつと見やるとモザイクがかかるようだつた。

リュックを見た。せつかぐごじーしした顔にモザイクがかかり出す。エレノアは思わずリュックの顔に手を伸ばしたが、触れることはできなかつた。

「無視なんかさせないぞ」ズボンをはき終えたミーカがずかずかとカメラに近づいて、アップでエレノアをのぞきこんだ。「だまつてするなんだ。でないと『3-1』の番組を中断して、当たらない天気予報を延々と垂れ流してやる」

エレノアは何度もうなずいて、座席らしこモザイクに腰を下ろした。

「なんの用?」

「近況を報告したくてね。きみのおかげで、計画は順調に進んでいる。ついに、最終的な手づきが完了したんだ!」

「イヤな予感がするな」たぶんリュックが言つた。モザイクのうえにボイスジョンジャーまでかかっていてかなり匿名性が増している。

「とてもイヤな予感が

」

「計画つてなんなの」

ミーカは悪者顔で一やりと笑つた。「計画があるんだ」

「それはさつときも言つた。計画の内容のことよ」

「は、は。その手には乗らないよ」ミーカはドアップのまま、ちつと指を振つた。テレビ画面の中を巨大な人差し指が行つたり来たりする。「聞かれてすんなり教えるほど、ぼくはバカじゃない。刑事ものの映画じやよくあるけどね。『冥土の土産に教えてやる』とか言つてさ。しゃべってないでさつと撃ち殺せばいいのに、バカだなあつて思われる。ぼくはそんなふうに思われたくない。そんのはイヤだ」

「だつたら言わなくていいよ」Hレノアはあつさつ言つた。「ただなんとなく聞いてみただけ」

「ほんとはものすごく言いたいんだけどね」

「じゃあ聞かない。興味ないもん」

Hレノアは意地悪く、ふいと顔をそむけた。そむけた先がモザイク化する。

ミーカはしばらく無言だつた。咳払いし、ヘッドセットのマイクをつまんで調節し、「じつは……」と言いかけてまた口ごもつた。「こっちを見てくれよ。じゃなきやお互に、話ができないだろ」「わたしあしたくないもん。勝手にすれば」

「話すうちになつとずつ口をすべらす」とはあるよ? 必死な様子でおうかがいを立ててくる。

「どうでもいい」

「そこまで言つなら教えてやるつ」前後の文脈など知るかといった調子で、強引に語りはじめた。「ずっときみを監視してきたのは、この計画を進めるためだつたのだ」

「あつそう」Hレノアはつきはなすよつに言つた。男のあしらいかたがわかつてきた。冷たくすればするほどいらしい。

「監視をつけ、きみの映像もだいぶ集まつてきた。きみの彼氏の映像もだ。それはなんのためか? きみらの映像を編集し、パイロット版をつくるためや。きみが主役の番組のね」

「わたしが主役?」と思わず聞いてしまつて「あつ」と取り繕つた。

あわててそっぽを向いて、氷の女を装い直す。「まったく興味がござんせん」

「ははは。もう遅いよ」ミーカは調子を取り戻した。「こっちを見てなくとも、意識が向いているのはわかる。嫌いな友情ドラマに好きな俳優がゲストで登場したときみたいな感じだろ?」

エレノアは観念してテレビを見上げた。「わたしが主役の番組つて?」

「そのまんまだよ。きみの新番組。内容とかコンセプトはまだ決まつていなければ、きっといい番組になる。いまのところドタバタコメディっぽいのを考えてるんだ。きみは意外とドタバタしてるみたいだからね。タイトルはいくつか案があつて、『エレノアの日記』とか『エレノアに首つたけ』とか『エレノアの好きなコト』とか、いろいろ思いつくんだけどどうもぜんぶパクリなんじゃなかつて気がするんだ。ともあれ来週中には局へ売り込むつもりだよ」

エレノアは話を聞きながら、どんどん渋い顔になつていた。ミーカが話し終えるころには、渋い顔すぎて眉毛が目にくっつきそうになつていて。どう受け止めればいいのかわからない。

「わたしの番組なんか、だれが見るの? おもしろくないよ」

「知らないだらうけどね、きみはこっちではものすごい人気者なんだよ。見たい人が大勢いる。きみがテレビを大好きなように、われわれもきみが大好きなんだ。だから選んだ」

「よっぽどおもしろい番組がないんだ」

カメラが引いて、スタジオ全体を映し出した。がらんとしたところへ、左側から巨大なセットがずるずる運ばれてきた。マクドナルドの店内だ。スタッフ数人がかりで据え付け、べつのスタッフがレジつきカウンターを押ってきて、ミーカの前に置いた。

ミーカは満足げに笑みを浮かべていた。スタッフを自在に操る様子はたしかに神さまのように見えたし、学芸会の準備で空気が読めずにはひとり盛り上がりつてリーダーぶつている鼻持ちならないクラス委員のようにも見える。

セットが完成した。レジが一個しかないコントみたいなマックの店内に、ミーカがスタンバイしている。カメラが寄ると、ミーカは神妙な顔でカメラを向いた。マイクを調整する。

「きみの言つとおりだよ、エレノア。テレビ界にはおもしろい番組がないんだ。われわれにとつての番組とは、きみたちの世界で起ころ出来事だ。ずっとテレビとか監視カメラをつづじてこつそり『番組』を見つづけてきた。朝の支度の最中とか、家族と夕飯を食いながらね。だけど、きみたちは正直おもしろくないんだ。まったくおもしろくない。きみたちのやることを見てても、どきどきもわくわくもしない。朝起きて顔を洗つて歯を磨いて、家族とどうでもいい会話を交わして仕事や学校に出る。職場や学校ではとくになにも起こらない。家に帰つてふたたびどうでもいい話をしながら夕飯を食つて、風呂に入つて寝るだけ。テレビにしがみついていても、なんにも起こりはしない。起こつたとしても、職場で上司にいびられてビルの屋上でたそがれながらサンドイッチを食べたり、朝起きるときには血のつながつていらない妹にぶん殴られたりするくらいだ。退屈だよ、きみらは」

「退屈つて わたしの生活は退屈でもいさばんだと思つけど」

「きみは愛情いっぱいにテレビに話しかけてくれる。布団にくるまつてじーっとテレビを見つめて、ときに笑つたり、泣いたり、ビッグクリ顔の超ドアップでのぞきこんだりするたびに、視聴者から問い合わせのお便りをもらつんだ。『あの女優さんのこと詳しく述べてください』とか『家族全員、彼女のファンです。他に出演していれる番組があれば教えてください』。エレノアちゃん、ファイト!..とか」

ミーカはカウンターの下から、折れ曲がつてしまくちゃの紙をこつそり取り出した。一枚を選んでこちらに向ける。カメラが切り替わつて、紙を映し出す。たしかに視聴者からのお便りのようで、似てなくもないが少し気分を害しそうなイラストに「エレノアちゃん、ファイト!..」と太字で書いてあつた。

「これだけ要望があるんだ。もちろんぼくも見たい。だからきみの新番組をつくることにした。で、今回は素材をそのまま使つんじゃなく、手を加える」とこした

「手を加える?」「

「演出だよ。ぼくらが見たいようにきみを変える。基本的な演技は任せのつもりだけど、きみの家族をだれにするかとか、恋人をだれにするかとか、仕事とか、わくわくするイベントとか

」

「現実の人間を演出するなんて、そんなことできるはずない」

「できるさ。なんたつて神さまだからね。それにいまは、選ばれし

伝説のマクドナルド店員もある。年収は六桁。メニューを見るかい?」

ミーカはカウンターを指でこいつこいつ叩いた。カメラが近づいていつて、カウンターに貼つてあるメニューをのぞきこんだ。

「言ひとくけど、バーガーは置いてないよ。ぼくらの楽しい番組一覧さ。ああ、いらっしゃい」

袖から若い男性がすたすたとやつてきた。ものすごい歓声と拍手。だぶだぶパークーにジーンズのスケボー野郎といった格好で、よくわからないが人気者らしい。観客に気づかないふりをしながら、中ごろで立ち止まり、わざとらしくまわりを見まわしている。目の前にあるマックをようやく見つけ、「あ、こんなところにマクドナルドが。ちょうどおなががペコペコだつたんだ」とでも言つたそな素振りで店内に入った。ドアのセットがないのでわざわざパントマイムで開けるふりをする。

ミーカは営業スマイルでたずねた。「なんにします?」

「あー」と、男性はポケットに手をつつこみながら体を左右に揺らした。「事件とか起つたやつ

「クライムものですね」

「そうそう。銃でバンバーンとか。車が」手で爆発を表現する。

「ブーン! とにかく興奮するやつ。すげえやつ

「すげえやつ。ありますよ。異星人の侵略はあります? なし?」

「こらなによ。異星人とか、くだらねえ。なんつーかさ、熱い男？」

哀愁系？　よくわかんね。とにかくそういうのが見たいの」

「警察ものがひとつ。かしこまりました」

ミークは客の背中越しにカメラをのぞき込み、張り倒したくなるよつの笑顔を向けた。

「新番組は、きみのだけじゃない。さまざまジャンルの番組を同時進行で製作中だ」

厨房にオーダーをとおす。といつてもだれもいないのだが、ジュー・ジュー・カンカンわざわざという効果音を鳴らして、つくづいているんですよと視聴者に伝えていた。

効果音が切り替わるたびに、エレノアのまわりも変化していく。モザイクが細かくなり、もとに戻りかけている。

エレノアはリコックの手を取った。もう触れることができぬ。

「われわれのノウハウはまだまだ足りないけど、そこはそれ。みんなで猛勉強中だよ。きみらの番組つまり、ぼくらの現実世界のことだけ、番組制作を学ぶためにスタッフがいろいろ実験してるんだ」

「だから番組がめちゃくちゃになってるんだ。あなたの実験のせいで」ミークをにらみつける。「勝手に終了させたり、いかがわしい内容に変更したり」

「結果的にはね」

「『ほんとうのとじいの料理』も、『レシピでつづけばな宇宙』も

」

「終了させたのはそつちの重役連中だよ。ぼくは番組の改変期をはやめて、こじりやすくしただけさ。ただいろいろいじくりすぎて取り返しがつかなくなつたことはあるけどね」

「『3-1』も」

ミークはおつかふせた。「それにきみらはいままで、われわれの『番組』でそういう楽しんだだろ？　今度はきみらが退屈な番組を見つづけるのも悪くない」

「お願い、『3.1』だけはほつといて」

「あんなつまらない番組のどこがいいんだ？」

まあ、いいや。

リンからも手を出すなって釘を刺されているからね。べつに奥さんが怖いわけじゃないよ？ ただ、あの番組から学ぶことはなにもないから、好きにさせてるだけさ。 おっと、オーダーができるが

つた

ミーカは厨房を振り向いて、トレイを受け取った。心からうれしそうな笑顔で、カウンターにどんと置いた。

トレイにはおもちゃのパトカーと警察の人形が乗っていた。

「さあ、新番組の警察ドラマがはじまるよ。きみの番組のための試運転みたいなものだけど。CMのあとすぐ！『もう』期待」トレイを受け取つてスケボー野郎はカメラを向いて派手に笑い、「やつたね」と親指を立ててみせた。

テレビがぱつっと消えた。クイズの正解を表示させるとさみたいに、周囲のモザイクが激しく流れていった。

もうすっかり忘れていたしかなりどうでもいい話ではあるのだが、「ミニ箱付近では相変わらずマック客による現金争奪戦が行われていた。といっても、ほとんどが戦線を離脱しているようだつた。どういう打撃を食らつたのか床にうつぶせたままピクリとも動かない久しぶり男に、おばさん連中がテーブルに着いて休みながら負け組どうし意気投合し、お金で幸せが買えるものか、お金なんかはちょっといいのだとかお互いを慰めあつてゐる。人間の汚い部分を見せつけられ、同じ人間として恥ずかしいと言いたげにかぶりを振る女性が、連れの男の子に「あんなふうになっちゃダメ、人間として最低の行為よ」と言い聞かせていた。じつのところ、床に伸びているビジネスマンを必殺パンチでノックアウトしたのはこの女性だった。

ネクタイが首のまわりを一回転していて目を真つ赤に腫らしてい る店員もいたが、悔しそうな表情を見ると、決してとめに入つたわけではなさそうだった。

そして現在、夢をあきらめないふたりが、床に転がり封筒を巡つてくんづぼれつやつていた。ひとりは華奢だが気の強そうな茶色髪の女で、もうひとりは体もおっぱいもなにからなにまで大柄な金髪の女だった。太ももが絡み合い、頭を押さえつけようとしてまちがつておっぱいを押さえつけ、伸び切つたセーターの首もとからラひもがのぞく。上になつたり下になつたり、お互いの股ぐらをくぐり合つたりするうちに、どんどん衣装がはだけてくる。そのうちだれかが気を利かせてビールのマットと大量のピーグルトを運んでくるかもしない。

「ハレノア」

聞き覚えのある声に正面から話しかけられた。

「どうして手を握ってるの？」

ふつとわれに返り、エレノアは振り向いた。相方の顔をまじまじと見る。後遺症のかたまに口もとにモザイクがかかってはいるが、それ以外は元のリュックだった。エレノアはほっと息をつき、握る手に力を込めた。

「どうやらたいへんなことが起きてるみたい」

「『三』箱の争奪戦？」

「ちがう。ミーカが言つてたこと」

どう説明すればいいのか。エレノアは茶色い天井扇に焦点を合わせて、あれこれと言葉をまとめようとした。「あのね」

すると説明はもうけつこうと言わんばかりに、どことなくラップノリのサイレンが聞こえてきた。急に背筋がしゃきっとし、まじめに生きてきてよかつた、あるいはまじめに生きていればよかつたと思わせる音だ。あつといつまに周囲はサイレンだらけになつた。背中の青いライトをぐるぐる回転させながら、白黒のパトカーがタイヤを鳴らして大げさに横滑りし、次々と通りにとまったく。エレノアは体をねじり、マック窓越しに外を見た。

「ほんとうに起つた」

「なにが？」

「たいへんなこと」

「たいへんだよね。事件だもの」リュックは映画でも見ているみたいに楽しそうだつた。「しばらく見物していかない？」

最後のひと鳴きをし、サイレンがやんだ。ライトのぐるぐるもとまつた。ドアがいつせいに開き、警官が頭を低くしながら姿を見せた。パトカーの陰に隠れるように集まり、身振りからするに打ち合わせをしていくようだつた。そのうち、引き寄せられたかのように一般市民が集まり出した。警官は散開し、仕事を開始した。ワゴン型の車両からバリケードを運び出すあいだに、べつの警官が手を広げて野次馬を追つ払おうとする。パトカーのドアを開いて盾代わりにし、犯人に向かつて銃を構える。無線で連絡している警官もいる。

現実で刑事ドラマがはじまるうとしている。それともほんとうの事件だらうか？ エレノアとしては正直、どっちでもよかつた。わけも知りたくないし、とにかく厄介”とに巻き込まれるのだけはごめんだつた。ミーカのうれしそうなニヤニヤ笑いが浮かぶ。もしかして、あの男の嫌がらせなんじやなかろうか。いざいざのせいで十七時前に帰れず、『31』を見逃し、泣きながらふて寝するエレノアを、ポップコーンでもつまみながら監視カメラで楽しむつもりなのかもしれない。

エレノアは立ち上がりてテレビの箱を抱えた。「はやく帰らない

と」

「まだ時間はあるよ」リュックはのんびりと店内を見まわす。が、やはり時計はどこにもない。「たぶんね」

「お願い、あなたもいつしょに来て。あなたが必要なの

「ほんと？」はじめてそんなこと言われたな

「ほんとよ。テレビのセッティングをお願い」

リュックはトレイを指差した。「これ、まだ食べ終わってないんだけど」

エレノアは待ちきれず、まるで病気の子供を病院に連れていく母親のようにテレビを抱え、出口に向かった。キャットファイト中の女性ふたりをまたぎ越え、ピクリとも動かないビジネスマンを危うく踏みそうになつた。

「いま何時？」

立ち止まつてそのへんの人たずねる。そのへんの人は腕時計を見た。「十六時三十分」

自動ドアが開いて一步踏み出したとたん、銃声が立てつけに三発鳴った。女性という女性が悲鳴を上げた。店内の客みんなが振り返り、ついでにがつちり相手の関節を決めていた金髪の女も振り返つた。その隙をついて小さくて気の強そうな女がアームロックをはずし、その勢いで反転してパンツ丸出しで馬乗りになり、金髪女に何度も往復ビンタをお見舞いした。金髪女がだらりと動きをとめる。

封筒を奪い、勝利の雄たけびをあげた。

言つまでもないがまつたくどうでもいいことで、反応する者もいなかつた。

エレノアはテレビを抱えて歩道のふちに立ち、焦りに焦つてあたりを見まわした。野次馬や偶然そこに居合わせたらしい人たちが、思い思いに叫んだり、泣いたり、楽しそうにカメラで撮影したりしている。中には恐怖にうずくまる者や、恋人と抱き合つ者、夫や妻と抱き合つ者、好みのタイプだったのでざくざく紛れに知らない女性と抱き合つ者もいた。

不幸にも抱き合つ相手が見つからなかつた人たちは、みな同じ一点に目を向けていた。防衛線の向こう側、通りをちょっと上つたところに「こじんまり」とした雑貨屋がある。入り口付近に男と女がいた。体を寄せ合つていたが抱き合つてているわけではなく、男は銃を持ち、女は泣いていた。へたりそうになるたびに男がぢやしつけ、ぐいと持ち上げる。男は銃を振りまわし、ついでに首も振りまわしていた。あれだけやればだれでも「クスリでキマつていいんだな」と思うだろう。

犯人のいる雑貨屋は家の方向にある。これでは帰れない。「やつぱり」

エレノアはダンボールを抱えて、前に出よつと野次馬をかきわけて進んだ。となればやることはひとつ。ふつうに帰り道を進み、犯人に「こんにちは」とかあいさつしながらとおりすぎるのだ。危険な目に合つことはないだろう。自分は出演者じゃないのだから。

さらに銃声が一発。エレノアは思わず飛び上がつた。テレビとぜんぜん迫力がちがう。やつぱりほんものの事件かもしけない。

バリケードのすきまをとおり抜けようとすると、帽子を田深にかぶつた黒人の警官がしなやかに駆け寄つてきて、手を広げて制止した。

「越えちゃダメだ。下がつて」

「ここをとおらないと家に帰れないの。お願ひ、とおして」

「で、犯人に『こんなにちは』とかあこせつしながらとおつすざれるつもりか？」

「そのつもつ」

「冗談はよせ。事件が解決したら、そのつも帰れる。それまで待て「あと五分くらいで解決しない?」

「いいから外側にいり」

「外側つて?」なおもつつかかる。

「現場の外側、つてことだ。そつちが外側、こつちが現場。わかるだろ?」

「つまり、そつちがテレビに映つてるほうで、こつちがテレビを見るほうつていうこと?」

「非常にわかりやすい例えだが、不謹慎だ。テレビの刑事ものとねちがうんだぞ」

「その可能性もある」

「もういい。これ以上面倒を起こすようなら、あんたを逮捕するぞ。下がれ」

エレノアはあきらめて、ふたたび野次馬をかきわけ引き返した。歩道の縁石にすわり込み、ダンボールをわきに下ろした。

「迂回すればいいよ」

いつのまにかとなりにリュックがすわっていた。そのままお持ち帰りしたらしく、マックのトレイを膝に乗せている。

「これつてテレビ番組なのよ。わかる? ほんとうじやないの。たぶん、刑事ものの冒頭の場面で」

「それはどうかわからないけど、とにかく連中は実際にここにいるんだ。さわれるし、においもある。テレビみたいに消すことはできないだろ? ちょっと遠まわりになるけど、走れば余裕で間に合つよ。たとえばあっちの通りを」

リュックは「たとえば」と言いながら、雑貨屋と逆方向を指差す。その先にはやはりバリケードと警官がいた。「たとえば」「わき道もふさがれてる。」たとえば

もう指を差すどころがなくなつたので、リュックは決まり悪そりに腕を下ろした。

「ちょうど帰れないよ！」になつてゐる

Hレノアはじつとしてこれられず、立ち上がり足踏みした。「どうしようつ

漏らしあうなの？

「はじまつちやう どうにかして もう」

「強行突破してみる？ もしほんとうの警官だつたら、逮捕されるか撃たれて死ぬか？」

「『3-1』を見逃すくらこなら死んだほつがまし」

パトカーのあいだから呼ぶ声がした。「おい、スコッティー！」見ると、口ひげに白髪頭のトレーンチコートを着た責任者っぽいおじさんが部下に呼びかけていた。

だれも反応しないので、もう一度叫んだ。「スコッティー！ おまえだ！」

やつぱりだれも応じない。責任者っぽいおじさんは勘弁してくれよと言いたげに天を仰いだ。「ワシントン！」

先ほどHレノアとすつたもんだした黒人警官が、ぱつと振り返つた。「は？ なんすか？」

「呼ばれたらすぐに返事をしろー おれは副本部長とこういふつているんだぞ！」

「すんません。ただ、おれはスコッティじゃないつすよ。おれの名前はショーティです。 たしか」

「じゃあスコッティはだれだ？」

「おれです、警部補」

べつの警官が手を上げた。車のバンパーに背中をもたれてすわりこんでいる。そのスコッティはシャツも顔も手もまつかつて、これ以上ないくらい死にかけているように見えた。

「警部補じやない、副本部長だ！」

「へえ。それってどつちがえらいんですかね？」

「軽口を叩くな、このお調子者め！ なぜ返事をしない？」

「この格好を見りやわかるでしょう？ おれは死にかけということになつてゐるんですよ。血まみれなのに呼ばれて『はいはーい』なんて返事しちゃ、おかしいでしょ？」

「なぜ死にかけてる？」

「さあ、なんででしょうね。犯人かだれかに撃たれたんじゃないですか？」

「副本部長、おれになんか用すか？」ショーティだかワシントンだかがのんびりした口調で言つた。「呼んだでしょ？」

「ああ、そうだ。マーティはどうだ？」

「ここです、副本部長」とくにこれといつて特徴はないがやたらと背の低い警官が、通りの反対側で手を上げた。「どうかしましたか？」

「おまえはルーディだろうが！」

「いえ、マーティです」マーティはうなずいた。「最初は『テショーティでしたけど」

「だつたら最初からマーティを呼べばいいじゃないすか」ショーティがツッコミを入れた。

「まったくふざけた連中だ！」副本部長は手のひらでパトカーのボンネットをぶつ叩いた。「名前がややこしいぞ！」

そんなやり取りをぼんやり眺めていたエレノアだったが、脳みその奥深くで極めて厄介なことが起こりはじめていた。というのもエレノアには妙な癖があつて、テレビドラマなんかを見はじめると、無意識のうちに登場人物の名前をチョイ役にいたるまでぜんぶを覚え、頭の中で相関図をつくってしまうのだ。やたらと出入りの激しい群像もののドラマでも、同様だつた。その癖がこんなところで動き出した。相関図の線が副本部長からスコッシティに向かうと見せかけてショーティにくつつき、「片思い？」と書かれたハートマークが付け加えられた。ショーティからマーティへ向かつた線がぐるっとひとまわりして犯人に向かい、と思つたらヒターンしてワシントン

ンの下に潜りこんだきつ一度と出てこなくなつた。

「気持ち悪い」

エレノアは膝に顔をうずめた。脳みそが冷たくなつてくる。リュックはすわつたまま尻をすらして寄り添い、エレノアの肩を抱いた。

「どうしたの？」

「名前が 頭の中をこねくりまわされてるみたい 「

「これもあいつの仕業かな？」

エレノアはうなずくことすらできなかつた。

拳銃を構えた警官が、犯人に向かつて叫んだ。「銃を捨てて、両手を頭の上に置け！」

「おまえら全員死んじまえ！」犯人が金切り声で言つた。人質の女性の髪の毛を乱暴にひっぱつて引き寄せ、体の前に持つてくれる。「へタなマネをすると、こいつも道連れにするぜ」

「おれは現場の責任者だ。副本部長の 」言葉を詰まらせたが、力強く言い直した。「副本部長だ！ 名前はまだない！」

「そうかい。だつたら本部長を呼んでくるんだな！ 名前をつけてもらえよ！」

「つまいこと言われたので、副本部長は悔しそうに歯噛みした。」「

要求はなんだ？」

「要求つてなんだ？」

そう返された副本部長はちよつと考え込んで、部下に振り向いた。

「だれか、辞書を持つてないか？」「

「完全にブツ飛んではます」無線を持った警官がささやいた。「ただ

のヤク中でしょう。要求なんかありませんよ」

「いや、必ずあるー たとえ要求の意味を知らなかつたとしてもだ

！」ふたたび犯人に呼びかける。「おまえ、名前は？」

「名前なんかねえ！」

「おれといつしょだな」

「死ぬのは怖くねえ。怖くねえぞ！」

リュックはこのやり取りとヒレノアの様子を交互に見ながら、思い切り眉間にしわを寄せていた。型どおりのセリフ。テレビの刑事もので百万回は聞いたことがある。ほんとうの事件でも、犯人はそんなんふうに言つものなんだろうか。

なにより気になるのは、連中の大根ぶりだった。セリフは噛みまくりだし話の筋は見えないし、副本部長は名前すらないらしい。それに、これがほんとうに刑事ドラマだったとしたら、監督はどうしているんだろう。スタッフは？ ロボロのメイキング映像でよくあるような、カメラや照明はどこにあるのだろう。なんだか俳優が指示もなく勝手に演技をしているような感じだった。

「ねえ、副本部長」血まみれで瀕死のスコッティがのんびりと言つた。「あいつ、ほんとに知らないんだと思ひますよ」

「どうしてだ？」

「もう立つていいですかね？ セッキから地べたにすわりっぱなしで。ケツが冷たくて」

「いいからはやく言え！」

「だって、はじまつたばかりじゃないですか。はじめにおれらの簡単な紹介が必要なんですよ。署でうだうだ無駄話をしても緊迫感がないってんで、とりあえずできとうにチンピラを用意したんだと思いますよ。本チャンの事件は、これからじょじょに明らかになるんです」

副本部長は信じられないといった顔で振り向いた。「サワリということが？」

「「」」答

「サワリの事件なものか！ サワリならなぜ副本部長のおれが現場に来ている？」

「おれに聞かれてもね。だけどそのへん、評論家連中からシッカリが入りそうだな。考証不足だ、つて」

「バカを言つたな！ どこまでふざけた野郎なんだ、きさくまつは。これはテレビドラマの警察ものじゃないんだぞ！」

リュックの眉間にパツと広がった。元栓を開いたように、思考が  
どばどばと脳みそに流れ込む。エレノアの背中をさすって、顔をのぞきこんだ。

「気分はどう?」

「吐きそう」「エレノアはなんとかつぶやく。「頭の中で激論している評論家たちが」

「なんとなくわかつてきた。きみの言つてたことは正しい。任せて、家へ帰れるかもしねえ。もちろん、『3-1』がはじまる前にね。これ持つてて」

バーガーやポテトが乗ったトレイを置いて、リュックは颯爽と立ち上がった。

「演技ぐらい楽勝さ。なんたつてぼくは社会人だからね」「演技?」

リュックは商談前のビジネスマンのように髪の乱れを直し、スーツのほこりを払い、ネクタイの結び目を整えた。さあはじめようというところでふと考え方直し、今度は逆に、髪を両手でぐしゃぐしゃにかきまわした。ネクタイを緩め、ワイシャツのボタンをはずし、ズボンからすそをだらしない感じで出した。スーツを脱いで襟元を持ち、博打で大枚すつた闘牛士のように歩道の縁石に何度もたきつけた。溝のじろじろにこすりつけ、ズボンも同様に汚しまくつた。どろどろをすくつてシャツに塗りたくつて、顔にも塗りたくつた。口の中に入った泥を吐き出し、靴下を片方脱いで思い切り投げ捨てた。革靴を履き直して、身なりはきちんととしているだろうかと確認した。

「それ、よこして」

リュックはエレノアからトレイを受け取り、お礼を言つた。「おもしろいことになるよ。見てて

そして現場と逆の方向に全速力で駆け出した。すれちがう人は時限爆弾でも抱えているのだろうかといった感じで振り返ったが、なんだただのマックかとたんに興味を失つた。

コレノアは頭を抱えて目を閉じた。これ以上わけのわからないことを脳に取り込みたくなかったからだ。

リュックは交差点に着くと、青いバリケードにタッチし、もと来た道を引き返した。事件現場に到着するころには、そりどり息が上がっていた。入れ物からはみ出たポテトをトレイの上で躍らせながら、よたよたと警官のひとりへ近づいた。

「おまわりさん

あえぎながら叫ぶ。すると現場にいるおまわりさん全員が振り向いた。

「えーと、ショーティ だっけ？」

のんびり振り向いたショーティは、リュックを見てぎょっとした。

「どうした？ ひどい格好じゃないか」

「じつはぼくたち ぼくは いまにも倒れそうで切羽詰まつたように見えればいいがと思いながらつづけた。「ある物を届けに非常に重要な 事件に関わることづてで

「そんな話は聞いてないぞ。だれからだ」

「本部長。えーと 思いつきで答える。「キネッティさん？」

「なに？ それをはやく言わんか！」目的をなくした老人のようにぼんやりしていた副本部長が、だしぬけに振り向いた。「この事件を解決する手がかりか？ それとも本チャンのほう？」

「本チャンです」リュックはほんとにそうなんだと自分に言い聞かせながらうなずいた。「副本部長に直接お渡ししたいんです」

「よし！ こっちへ来い。頭を低くしろよ！」

副本部長はとたんに活気づいてきた。ほおに赤みが差して、だらしなくゆるむのを必死で押さえつけている。リュックはバリケードをまたいで、言われたとおり頭を低くしながら副本部長のところに向かった。

このとんちんかんな現実をよつやく把握できた。まちがいない。警察も犯人も、テレビの中から出てきたのだ。そして現実世界で芝居をやっている。じうじかはわからないが、とにかく起こったこと

とを受け止め、うまく立ちまわることだ。

体をつんのめらせながら進み、パトカーに肩をぶつけてそのままへたりこんだ。ほんとうに膝ががくがくしていたが、トレイはしつかり両手にあって、ポテトもそれほど散らかっていなかつた。

「だいじょうぶか？ ケガは？」副本部長がかたわらに膝をついた。「なにを持つてきた」

「クオーターパウンダー（チーズ）です」リュックは大儀そうにまぶたを持ち上げ、副本部長を見上げた。「食べかけですけど」

「ポテトの」「サイズに、ヨーグルト……」いつは驚いた。これをどこで？」「

セリフにつまつた。「わかりません 事情を知らないんです。ただ、キネッティさんに、これは必要なものだからと言われて」ちらつとのぞきこむ。「必要でした？」

「必要も必要！ なぜこれが必要かと言うと……」困ったように考え込む。ほほ残飯状態のマックがなぜ重要なのか。腕の見せどころだ。「腹が減っていたんだ。朝にコーヒーをがぶ飲みしたきりだからな！」

「食べましょう。ふたりでわけっこして」

トレイをアスフルトに置いて、犯人そっちのけで副本部長といっしょに散らかったポテトをつまんだ。バーガーをはんぶんこしながら、これまでの経緯を説明する。経緯もなにもないのだが、とにかく経緯を説明した。

「ではきみは、本部からはるばるマクドナルドへ立ち寄り、ここまでやってきたというのか！」

副本部長はもぐもぐしながら鼻を鳴らした。鼻から吹き出た空気には、単純な驚きと、無鉄砲な若者を非難する響きと、ちょっとぴり賞賛の隠し味が含まれていた。

「『』苦労だったな。あとはわれわれに任せろ」

「ぼくにできることは？」

「一般市民の出る幕じやない」べたべたの手をパトカーのドアにこ

すりつけた。声に自信が蘇つてゐる。「さて、食い終わつたぞ。トレイを返却しなければな」

「ぼくがやります」「

「ダメだ」「

「やらせてください。これはぼくの仕事です」

副本部長は、あきれてものも言えないといふうにかぶりを振つたが、まなざしにはゆるぎない信頼の色みたいなものが浮かんでいた。どうやら友情が芽生えたらしい。リュックの肩をつかんで、荒っぽく揺さぶつた。

血まみれのスコッティに目をやると、ニヤリと笑みを向けて親指を立てた。

リュックはトレイを見た。空の容器に食いカスまみれで、クロス代わりの広告紙は油で黄色いしみだらけだ。広告文と写真と、だれも付き合わなそうなクイズ問題を眺める。

「なにか気になることでも？」と副本部長。

リュックは答えない。紙のはしきをつまみ、なにげなく裏返した。紙の裏側には赤いマジックで「電話して！ 555 1066」と殴り書きがしてあった。

副本部長は孫ができたと知らされでもしたように息をのんだ。「新しい展開だ！ 仕事に戻らねば。よくやつたぞ」

リュックの首筋を親しげに叩き、チラシを受け取つた。

「ワシントン、電話だ。はやくよこせ」

「本名で呼んでくださいよ」ワシントンはポツケから携帯電話を取り出して、副本部長に放つた。

副本部長は慣れない手つきで携帯に番号を打ち込み、耳に当つた。急に表情がこわばつた。そしてこれまた急に顔をにやけさせる。ものの数分で終わつたが、会話というよりエッチなテレホンサービスにかけているみたいだった。携帯をしまつときの息の荒さも、ちょうどそんな感じだった。

「集まれ！」

全員に呼びかける。「犯人などほつとけ！」

副本部長とリュックを取り囲むように警官が集まってきた。

「これで全員か？ よし。 大変なことが起こった。一度しか説明しないからよく聞け！ だが聞き逃したらあとで教えてやるぞ！」「電話、だれだつたんですか？」

「局の重役だ」

全員が同じように目をまるくし、息をのんだ。

「方針に変更があつたそだ」チームひとりひとりの顔を順に見ながらつづける。「問題は主役のはみ出し刑事だ。やつが降りた。予定ではここに駆けつけて、紹介がてら事件をちゃちやつと片づけるはずだつたらしいんだが」

「降板の理由は？」

ひとりが言った。副本部長はじつと見つめてここにこの名前を思い出せうとしたが、めんどくさくなつたのでやめた。

「ギヤラの交渉で揉めたらしい。ヤツはドラマも掛け持ちしてゐるからな。スター街道でスポーツカーに取り巻きを乗せて、ギアを四速にシフトチョンジしましたつてなもんだ」

「監督がいないとこゝなるんだ。現場の責任者がいなけりや、だれがあれたちを守つてくれるんだ」

「おまけに台本もなし」

「演出も。全編インプロでやれつてか？ そんなんでホスカーが取れるかつての」

「まあまあ」おまえがハカデミー賞にノミネートされるわけないだろうと思ひながら、副本部長は若い衆をなだめた。「とりあえず撮影班と監督は用意するという話だ」

「じゃあ、主役は？ だれが代役をするんでしょう？」かなり背の小さい警官が言った。

「いい質問だ。上の連中は決めかねている 予算の関係とか、なんやかやでな。もうスターは雇えん。そこでわれわれにお鉢がまわってきたというわけだ。この事件を解決し、なおかつ目を引く活躍

をした者を主役に抜擢するとのことだ」

高校のクラスに蜂の巣を持ち込んでつづいたような大騒ぎになつた。

「おい、マジかよ?」スコットがすつとんきょうな声を上げた。

「おれはケガしてるんだぜ? 不利じゃねえか」

「小銭を稼ぐこつたな」同僚は非情にせせら笑つた。「それでもギリギリ生活はできるぜ」

「クソつたれ。おれはあと三週間で除隊で」スコットは頭をかいた。「ちがうか。作品をまちがえた」

リュックは取り巻きから抜け出しつつ言つた。「もう行つていですか? 用事があつて」

「ああ、構わないぜ。これで採用の確率が上がるつてもんだ」

「お願ひがあるんですけど。あっちのバリケードを越えてもいいですか? 家に帰らなくちゃ」

「つべこべ言わずにとつとと消えな」とスコット。『頭をぶち抜かれたくなかったらな』

「おい、それじや悪役じやんか」

「ちやうちやう。あえて狙いをはずしてるんだって。アウトロー系のヒーローさ。よくあるだろ、たとえば」

「ということで、リュックは喜んでずらかることにした。これ以上付き合う義理はない。エレノアのもとに駆け寄り、声をかける。

「気分は落ち着いた?」

エレノアは急に顔を上げ、目をぱちくりさせた。

「急によくなつた。頭の中の相関図が消えてなくなつた。評論家も

「

背後からめりめりぐしゃぐしゃといつ音が聞こえてきた。白いワゴンがケツを振りながらぶつ飛ばして近づいてくる。駐車中の車を吹き飛ばし、とくに障害がなくてもわざわざ歩道に乗り上げ、消火栓があれば必ず轢いた。強烈な圧力によつて、とんでもない高さまで水柱が立つた。

警官が言った。「テレビ局の連中です」

「クソ、もう嗅ぎつけたか」副本部長はさつそく売り込みをはじめた。「クソつたのが！」

ワゴンは両手両足を踏ん張つてむらに加速した。飾り帽子のよくなアンテナを乗せた無表情な顔がどんどん大きくなる。急に車体がずつこけたように左に傾き、後輪が横滑りした。悲鳴を上げる後輪で道路に落書きしながら路肩に寄り、完璧だが無意味な縦列駐車を見せつけた。

全員があつけにとられていると、消火栓から噴き出した水が、雨になつて降り注いだ。エレノアは空を見上げ、顔に冷たい水をもらに受けた。

「テレビが！」

と思わず叫んで、テレビが濡れないよつおおいかぶさつた。リュックはずたぼろの背広を脱ぎ、ダンボールにかけた。

「ありがとう」

「警官はもうぼくらを気にかけない。やつぱりただの役者だつたよ。許可はもらつたから、とにかく家に帰ろ」

いつしょにテレビを抱えて走る。エレノアはリュックの横顔を見上げた。顔もシャツも泥だらけだし、息を切らしているし、おまけに水浸しだ。巨悪と戦い死線を乗り越えた男の顔をしていたが、ただたんに汚れているだけかもしれない。

同時にバリケードをひよいと飛び越えた。

「もう時間を過ぎてるかも」不安でおなががぞわぞわする。エレノアは事件現場をとおりざま、犯人と人質にあいさつした。「ここにちは。いま何時？」

人質の女性が腕時計を見た。「十六時五十分」

「ぎりぎりだ！」

「どしたの？ 家に帰つて『31』でも見るつもり？」

「そのつもり！」

「あたしも帰ろつかな」背中から声をかけてきた。「リンちゃんに

よろしく言つといてね！」

警官たちが突然、犯人に向かつてめいめいの武器で発砲しはじめた。副本部長などは一丁拳銃を構えていて、うれしそうに雄たけびを上げながら威勢よく鉛玉をぶつ放している。犯人も、人質を放り投げて応戦する。放り投げられた人質の女は、わけがわからないといふうに両手を広げると、立ち上がり携帯電話を耳に当てながらどこかへいなくなつた。

「見ていると遅れるよ」

「わからない。でもなぜか見ちゃうの

「なるほど。たぶん番組だからだね」

数人がえらい勢いで駆け寄つてくるのが見えた。レポーターと力メラマンだつた。先ほどのワゴンから排出されたのだ。

「お話を聞かせてください！」

リュックは無視して走れと言つた。エレノアも銃撃戦といふ見せ場をなんとか頭から締め出し、リモコンでチャンネルを切り替えるイメージを思い浮かべた。

レポーター・カメラ・ケーブル持ちはぴつたりと連携し、三位一体で追いかけてくる。「『ヴィッシュル』のジャッキー・ティラーです！ どうかひとことだけ」

ふたりは登り坂を走つた。流れ弾も気にせず道路を横切つて、赤レンガの釣具屋の角を曲がつて細い路地に入った。レポーターはだれかを走つて追いかけまわすのが仕事だ。距離がどんどん縮まっていく。

「これからどうされるんですか？」女性レポーターが質問した。

「テレビを見るの！」エレノアはなぜか答えてしまつた。

「どんなテレビを見られるんですか？」

「答えなくていいよ」リュックが言つた。

「『3-1』！」やつぱり答えてしまつ。

「そうなんですね。『3-1』のどんなところに惹かれましたか？」

「リン・タウンゼンド！ かわいいから！ わたしよりずっと

「またまた」冗談を！ でも、あんなふうになれたらなって思いますよね！ 実際にあんな家族が持てたら、最高だと思いませんか？」  
「だといいけど…」

「なるほど。ありがとうございました！ 無事番組を見られるといいですね！」 以上、ジャッキー・ティラーが現場からお伝えしました

わが家の玄関にたどり着いた。リュックがポケットを探っている。エレノアはノブを引き、ドアを開けた。「鍵をかけるの忘れてた」ばたんと玄関のドアを閉じる。と同時に振り返つて、ふたりで分担して大急ぎで三箇所とも鍵をまわした。

レポーターがどんどんドアを叩く。「もうひとことだけ

リュックは遊園地帰りの子供みたいな表情で息を吐いた。

「やつと帰ってきた」エレノアは薄暗いなか、ドアにもたれてへたりこんだ。「テレビを見たいだけなのに…」

「だいぶ狂つてたね。でもおもしろかった」

「おもしろくない。一ヶ月は外に出たくない気分」

リュックは手探りでスイッチを探し、電気をつけた。狂っているといえば、部屋の様子もだいぶ狂っていた。

Hレノアはテレビを抱え、玄関から大部屋に飛び出した。ひとりおり見まわす。リビングに、エレノア区画に、カウンターつきの台所。ゴミだけのテーブルに破壊されたテレビ。途中、どうにもひつかかるなにかが視界をとおりすぎたが、ぜつたに見ないようとした。見なければ対処する必要もない。

壁掛けの時計に目をやる。目をやつたのは時計のみであつて、すぐそばでぶらぶらしているなにかではなかつた。なにがどうぶらぶらしているのかなど気にもならないし、壁掛けの時計のすぐそばにはたいていああいつたものがぶらぶらしているものなのだ。通常どおり。いたつてふつう。Hレノアはそう自分に言い聞かせてから、満を持して驚くことにした。

「あと一分しかない！」

リコックはうなずいた。立ち上がり、停電のときみたいに手探りで一歩ずつ進んだ。おそれらしくHレノアと同じことを考えているんだろう。

「了解。なにはともあれ、テレビが先だ。これだけ苦労したんだから、なんとしても間に合わせるぞ。あれについては」「あたりを見まわしながらにも見まわさないという複雑な動作をやってのける。「気にしない」というか、変わったところなんかなにもない。どう思つ?」「？」

「なんにも!」Hレノアは急いで言つたせいで声がうわずつっていた。

「えつ、なんの話?」

「そうそう。気にしなければ、なーとのと同じだ。しばりくわの調子でこいつ」

Hレノアはガムテープをわざりて上蓋を空け、手をつゝこんでスチロールごと中身を引きずり出した。お一コーのテレビは半透明のビニールに包まれ、新鮮なにおいがした。スチロールの拘束具をは

すし、ビールをひつぺがし、何時間かぶりにクレッパ（水色）とご対面する。思わず液晶の画面に唇をつけた。嬉しさで胸があつたくなる。もうなにも気にならない 口先だけでなく、心の底から。天井からなにかがどさつと落ちてきたのも気にならないし、だれかが玄関を叩いて「お話を聞かせてください」と怒鳴っているのも気にならない。

空のダンボールを部屋の隅に蹴つ飛ばして、クレッパ（水色）をテレビ台にセットする。一本の尻尾の先を握つて、振り返りざま寝床へダイビングし、一方をアンテナソケットに、一方をマルチタップに差し込んだ。

「受け取つて！」

リュックがリモコンを投げてよこした。おなかキヤッチで受け取る。なにせリモコンまで超かわいいもんだから、毛むくじらで背の低い生物のようなものが相方の背後を横切つたのを見てもまったく気にならなかった。

毛むくじらの生物はよたよたと洗面所に消えた よりくな気がした。

エレノアはリモコンの赤いボタンを押した。カチッと音がして、徐々に画面が色づきはじめた。すばやくチャンネルを『ヴィッスル』に合わせる。おなじみのアイスクリームのCMだった。エレノアはようやく体の力を抜いた。このCMのあと、『31』のおなじみのテーマ曲『アイム・スタイル・ヤング』が流れます。

つまり、間に合つたのだ。

「やつたー！」エレノアはバンザイした。

「これぐらい苦労しないと、テレビを見るのもおもしろくないよね」リュックが満足げにうなずいて言った。

CMが終わると、一瞬の間を置いて『31』のオープニングがはじまった。おなじみのタイトルロゴに、おなじみのイントロが流れ出す。エレノアはあまりの喜びで声も出ず、だれもいないはずの洗

面所からトイレの水を流す音が聞こえ、天井から隕石めいたものが立てつづけに落ちたのも気づかなかつた。

「やつたね」

「あなたのおかげよ。ありがとうございました」「めつたないことだが、エレノアはオープニングの最中にも関わらず目を上げてリュックを見た。「お礼しなくちや。今夜は期待してて。たぶん、はじめてづくしから。あんなことやこんなことを……」

「ぼくはシャワー浴びてくる。顔がどろどろ」

リュックは洗面所に向かつた。入り口のところで毛むくじやらの生物とすれちがう。げつそりした顔でおなかを押さえているようだつたが、すべて氣のせいなのは言つまでもなかつた。

肩をねじつてコートを脱ぎながら、エレノアは集中力を高めるため、いつものようにオープニングの曲を口ずさんだ。理由はまったく見当もつかないのだが氣が散つてしまふがなかつたので、画面に釘を打ち付けて画面からぜつたいに離れないようにした。

監視カメラがテレビ台の中からこちらを向いている。

エレノアはお守りのようにリモコンを握り締め、あぐらをかき直した。オープニングは進み、曲に合わせて登場人物がテンポよく紹介される。

ちなみにテーマ曲は、結成四十年のベテラングループ『ミッチ＆ヤング・アルバトロス』の一十四枚目のアルバムに収録されている（ライブ盤は除く）。バンドはいまだ現役で、演奏は力強く、音楽的にも進化への挑戦をつづけているのだが、世間の声は否定的なもののが多かつた。バンド名を逆手にとって「ステージの袖にローディーが控えていると思つたら主治医の先生だつた」とか「新ボーカルを探すため孫の友人に当たつている」などと書かれたり、新聞には点滴を打ちながら演奏するメンバーの風刺漫画を掲載されたりと、さんざんネタにされていた。

バンドリーダーのミッチ・ホランドは「教授」の仇名のとおり、気難しい性格で有名だつた。昨年ニューアルバムの宣伝も兼ねて、

めったに出ないトークショーへ出演した。リーダートラックでシットコム『31』の主題歌である『アイム・スタイル・ヤング』について質問されると、われわれは年寄りだなんだと騒がれているが、昔ともにも変わっていないと思っている、この曲には他人を気にせず、いくつになつても自分の人生を貫けというメッセージを込めたのだと答えた。その髪の毛はカツラなのかと質問されると、ミッチは傲然と席を立ち、これ見よがしにふさふさしたホストの髪の毛を思い切りひっぱつた。

### アイム・スタイル・ヤング

みんながぼくを 年寄りだという  
もう若くないと  
ファッショントレザイナーも 電話の交換手も  
よつてたかって決めつける

恋人は去つていった

中二のころなんて なにも覚えていない  
なにも残されていない そう  
ここにあるのは年寄りのぼくだけ

年寄り 年寄り 年寄りなのぞ  
ほんとにそうなのかい?  
年寄り 年寄り 年金暮らし  
ひとつ聞くが きみたちはなにをやつてきたといつんだ?

ぼくはまだ若い  
老人ホームでロックンロール  
ぼくはまだ若い

追い越し車線をつつ走る

ところで

きみたちはなにをやつてきた？

屋根から飛び降りたことは？

星に手を伸ばした？

彼女に告白したのかい？

結局のところ

ぼくらは等しく　なにも持つていない

ぼくらは等しく　歳をとるだけ

リュックが洗面所でいつしょになつて「年寄り、年寄り」と歌つている。毛むくじゅうの生物も、楽しそうに体を揺らしながらハミングしていた。

エレノアは思わず動いた眉毛をもとに戻した。テレビにリモコンを向け、音量を上げる。

そしてついに『31』ファーストシーズンの最終回がはじまった。ギターがフェードアウトし、見慣れた部屋に画面が切り替わる。ティーンエイジャーのような少女趣味の壁紙に、鏡張りのクローゼット、机には本が申し訳程度に並んでいる。時刻は夜の十一時五十五分。ベッドではパジャマ姿のリン・タウンゼンドがうつ伏せになり、枕に顔をうずめている。明かりはついたままだった。

なぜリンが枕に顔をうずめているのか、エレノアは知っている。あと五分で三十二歳の誕生日を迎えるからだ。

リンはうめき声を上げながら、ナイトテーブルに手をさまよわせた。目覚まし時計を持ち上げてからすぐに下ろし、コップに手をひっかけて床に落とした。傾いたコップから液体がダイビングして、それからごつつという音がした。バナナをつかむと、体をくねらせて横向きになつた。ボサボサの前髪が顔に垂れ下がり、目の人下が湿

つている。バナナを耳に持ってきて、ふと皿を開けた。なんだこりやという顔でバナナを見て、ぽいと捨てる。さつそく聞き覚えのある笑い声が上がった。エレノアも笑った。まるでふてくされた女の子みたいな顔だ。

上体を起こしてあぐらをかき、リンは肩で大きく息をした。あらためて電話の受話器を持ち上げる。

「ジョーイ?」皿を拭って髪をかき上げた。「こんな遅くに」「めんなさい」

「構わんよ。起きてたから」「ぶつかりぼつな声。

「ほんと? いつもならもう寝てる時間じゃない」

「きっと今夜あたり、あんたから電話がかかってくるんじゃないかなと思って」

「どうしてわかったの?」

「さあ、どうしてだるうな」

観客の含み笑い。

「さつそくだけど、聞いてほしいことがあるの」リンは鼻をすすつた。「だけど、どう言つていいいのか 頭が混乱して。わたしの頭の中は複雑すぎるから、説明してもわからないでしょうね」「いや、わかるよ」ジョーイはあつさり言つた。「それどころか、あんたが知らないことまですべてお見とおしだ」

「長いことカウンセラーをやつてるから?」

「どうより、あんたの頭が単純すぎるんだ」

リンは氣を悪くしたように頭を持ち上げた。そのじぐれに笑いが起ころ。

「あと五分で誕生日だよな」

「そうなの」

「三十一になるのか

「たぶん」

「だからそつやつてべソかいてフテ寝してるわけだ」

「気味悪い。わたしの声色でわかるわけ?」

「去年も一昨年もそつたろうが。おれの患者になつてから、ずっとそつだ。あんたはまったく進歩しない」

「クライアントに言つセリフ?」

「カウンセリングなんかやつとらん。ただの無駄話。もし受けたきや、お友達価格で割引してやつてもいいぞ」

「あなたのところで働いてるのに」

「それとこれとはべつ」

ジョーイ・カウフマンは六十過ぎの老カウンセラーで、リンとは付き合いが長い。顔じゅうヒゲだらけで頭は禿げ上がりついて、ロツクと野球が好きなわからず屋だった。最初は大きな屋敷でひとり暮らしをしていたのだが、シーズンの半ばくらいで仕事をクビになつたリンをお手伝いさんとして雇い入れた。それからもふたりはすつたもんだといがみ合い、ときには友情を深めたりもした。

しばらぐするとジョーイが腰を悪くし、リンは事務作業まで任せられるよつになつた。そもそもリンはジョーイのクライアントだつた。設定では一年前、三十歳の誕生日を迎えたとき、リンは体の歯車と頭のねじがおかしくなつた。カウンセリングを受けるうちに、数字そのものに対しても強迫観念を抱いているといつことが判明した。そのリンが数字を扱う事務を任せられるといつ展開に、エレノアはパズルのピースがぴつたりハマつたよつな快感を覚えたし、シットコム通として唸らされもした。

「で、明日は恒例のアイスクリーミューパーラー巡礼の旅か」

「せうしようと思つてたの。カーティーンもやのつもりだらうし」

「あの子の提案だからな。『これから誕生日は、一日じゅう好きなことをするの。糖尿になるまでアイスを食いまくるつ』って。きみの娘は意外と深いことを言つたぞ。専門家から見ても、理にかなつてゐる。今年もぜひ、そうすべきだな」

「そんな気分じゃないの」

「どうして。アイスが嫌いにでもなつたか」

リンはかぶりを振つてから、ふと氣づいて声に出した。「ううと、

ちがう」

「べつにアイスじゃなくてもいい。好きなことをすればいいんだ。ピザでも寿司でも、食いもんじゃなくてもかまわん。テーマパークに行くとか、卓球するとか」

「そんなことをしても無駄じゃないかつて思ひの。逃げているだけじゃないかつて」

「心境に変化があらわれたな。いい兆候かもしれん」

「ほんと? 治つてきてるってこと?」

ジヨーイはしばらく黙つてから、質問した。「あんた、何歳になるんだっけ?」「

「あのー」リンはそう言つたきり言葉が出ず、魚みたいに口をぱくぱくさせた。「えーと

「まだ治つとらんようだ」

「ははは」お約束のやりとりで、Hレノアは声を上げて笑つた。反動で顔が持ち上がり、テレビに向ひを見てしまつた。

毛むくじらの生物がテレビの後ろに立ち、Hレノアの氣を引こうと組つこに手を振つていた。

怒つたように手を戻す。

「とにかくだ、家族や友達を引き連れてアイスを食いに行つていひ。明日は土曜だし、ちょうどいいだらう。去年なんか平日なのにみんなで一田じゅうけき合つたじやないか。みんなの好意を無駄にするんじゃない」

「わかりました」

「なんなら逆ナンパして男をひつかけてもいいぞ」

「先生、いつしょに行く?」

「悪いがおれは用があるんだ。野球のチケットが急に手に入つて

」

リンは静かに受話器を置いた。ぽんやりと見上げてつぶやく。

「男か」

「無理だよ、レイニーとくつくんだから」Hレノアは思わずテレ

ビにツッコミを入れた。それからやはり怒ったような顔で、中身の入っているポテチの袋はないかと手を床に這わせた。

毛むくじやは『うどん』、ひきつづき両手を振つたりジャンプしたりひねりを加えた宙返りをしたりしていたが、あきらめた様子で肩を落とし、横を向いた。そして一歩ごとに跳ねるような奇妙な歩きかたでエレノアのとなりにやって来て、袖をひっぱつた。

「パソコン使わせて」

エレノアは片方の腕をさうと上げ、パソコンデスクのあるほうを指差した。

「どうも」「どうも」

お礼を言つと、猫背でよたよたとデスクに向かい、イスに飛び乗つた。なにをするのかと思えば、ネットサーフィンを始めた。検索してはページを開き、頬杖をついてぼんやりとモニターを眺めている。枯れ枝のよつなちつこい手で器用にマウスを操作し、ときおり思い出したように勢い込んでキーボードを叩いた。それから。

エレノアは毛玉に気を取られている自分に気づいて、いかんいかんと頭を振つた。そして正面しか見えないよう掛け布団を頭からかぶつた。

ストーリーは進む。リンは言われたとおりアイスクリーム屋に行くことにした。冒頭に起き出し、パジャマにピンクのガウンを羽織つて家中をうろうろする。そしてアイスクリームパーラー巡礼の旅のお供探しをはじめた。

長女のカーティーンが、スリッパをひきずりながら逆方向からリビングにあらわれた。どうして笑い声が上がつたかというと、寝起き顔で髪の毛を爆発させていたからだつた。なぜか『粘着ゴロゴロ』の名で知られるカーペット掃除用製品を持つている。

ふたりは中央で向かい合い、しばらくお互いを眺めていた。

「こんなところに鏡が」カーティーンが半笑いで言つた。「ちがうか。くもりガラスだつた」

「あんた、今日はなんの日か覚えてる?」

「たま」

「の田」

「あの日つて  
」カーティーンは顔をひきつらせてまぶたを持ち

上げた。一あの日?

「ジの番組はたまに下品なネタが飛び出していく

かがうで」シンは叫ぼうとした。その

「誕生日が。」

三九

「おめでたくない」

「祝つてほしいの？」

「祝うというより、儀式ね。一年間は脳みそがばらばらに飛び出し

ませんようにつていう。アイスクリーム、食べにいこう

一  
あ  
タ  
メ

と云ひて？ いい、も行きてるじゃない。あの日には

この前にならぬ何年かおひでに来たがために、方達の

「あいつの、シンな黒田

「アーマークをつべつた。」ながら、じょうがないか。行ってみる

しゃい。わたしはいいの。ぜんぜん気にしないで

「またあとでね。来年の分、いま予約入れとく?」

リンは無視した。「あんた、なに持つてるの？」  
『粘着ゴロゴロ』

「そう、これでね。」と、カーティーンは『粘着ゴロゴロ』を持ち上げて、パジャマの腹のあたりをゴロゴロしようとしてやめた。今度は頭に持つてきたが、やはりやめた。どこかをゴロゴロじみつとチャレンジするのだが結局めんどくさうに放り投げた。

と言つて、長女はいなくなつた。ひとり取り残されたリンはしばらく立ち尽くしていたが、手のひらで田頭を押さえ、ふと息をは

いた。

お供探しはつづく。だがどうも去年とは勝手がちがうようだ。美容師で友人のターニャに電話する。

「あたしの仕事、知ってるでしょ？　土日は出でんのよ」

「知ってる。思えばあんたをアイスクリームに誘うなんて、わたしもどうかしてるかも」

「どうかしてると言えれば、最近カットしてないでしょ？　あんたは歳のわりにかわいいんだから、身だしなみに気をつけないと運が逃げるよ。いまだって、ボサボサ頭でパジャマ着たまじやないのさ」

「ねえ、どうしてみんな電話でわたしの格好がわかるの？」

観客の爆笑がしばらくとまらない。エレノアも布団の中に自分の笑い声を響かせた。

パソコンのほうから聞きたくない声がした。「　おねえさん。

フォトショップ、ある？」

エレノアはもつと大きな声で笑った。

「フォトショだよ。入ってないの？」

がばっと布団を下ろして、エレノアは一回かぶりを振る。そしてまたかぶり直した。

「そうか。じゃあアングラサイトからライセンスをダウンロードしてと」

毛むくじやらの生物はぶつぶつ言いながら、やかましくキーボードを叩きはじめた。

「　あの男を誘えば？　なんて言つたつけ？」

あの男とは、お隣さんのレイナーのことだ。ターニャに言われて、リンは複雑な表情をした。

「やめとく。出会つたときのこと思い出すから」

レイナーと出会つたのは、アイスクリームバーでだった。ちょうど去年の誕生日、一家三人ボックス席で三段重ねと格闘しているときに、満員だからと空いている四人目の席に割り込んできたのだった。

となりにすわった男を、リンはひと目で嫌いになった。そこで縁が切れるはずだったのだがドラマなのでそとはならず、翌日タウンゼンド家のとなりに引っ越し始めたのだつた。「またとなりになつたね」とレイノーは笑つた。

ふたりはいろいろあつた。キッチンのボヤをいつしょに消したり、息子のリュックのハイリアン騒動をいつしょに解決したり。毎週いろいろなことが起きる中、くつこにたり離れたりしてエレノアをやきもきさせたものだ。

リンがキッチンに行くと、その息子が冷蔵庫と巨大なドアの間に頭をつつこんでいた。

「なにやつてるの？」

リュックは答えない。ちなみにエレノアの相方と名前がいつしょなのは单なる偶然だつた。

「ご飯か。ごめんね。シリアルでいい？」

と言つと、ちびリュックは冷蔵庫を閉じて、音もなくテーブルに着いた。

「 そうだ。あんた、今日はママとアイス食べに行こう。いいよね？」

リュックは八歳とは思えないするどい田つきで母親を見上げた。そしてうなずく。

「よかつた。これでひとりゲットだ」リンは息子の頭をくしゃくしやかきます。ちびリュックはされるがままだつた。「レイノーを誘うくらいなら、ふたりで行つたほうがいい。そうよ」

シリアルを用意し、陶器のうつわをテーブルに置いた。「ひとりという音が静かなキッチンに吸い込まれていく。ちびリュックががさがさとシリアルを食べはじめる。

リンは気が抜けたように肩を落とした。

だれかがキッチンの裏口の戸をノックした。開けるとレイノーが立つていた。首まわりがよりよれの黄色っぽいTシャツを着て、すでに何色だかわからないスウェットにサンダルをひっかけている。

リンの顔を見ると、パッと表情を明るくした。

「やあ」

「どうも」

レイノーは後ろ手に隠し持っていたマスターードの容器を、リンの鼻面に振つてみせた。「ホットドッグをつくづいたら、マスターードを切らしちゃつて」

言い終える前に、リンはうんざりした様子でレイノーを招き入れた。レイノーが調味料を切らしてやつてくるのは第一話からつづいているお約束で、ほんとうは食事をたかりに来ているのだ。といつても、リンの得意料理は冷凍食品の解凍かピザ屋に出前の電話をすることくらいなので、真の理由は言わずもがなだつた。観客もよくわかっていて、おなじみの展開に笑い声を漏らしている。

レイノーは遠慮なく上がりんで、遠慮なくテーブルに着いた。

「よう。元気か?」腕を伸ばしてリュックの肩をたたく。

リュックはシリアルから顔を上げて、仏頂面で親指を立てた。ふたりはなぜかウマが合つ。

「ひとり暮らしがこたえてるんじゃない? やることもないだらうし」

カウンターでふたり分のシリアルを用意しながらリンが言った。  
「けつこう忙しいよ。新作を執筆中なんだ。運が向いてきてね。ここに来るのは息抜きみたいなもんだ」

「小説?」

「いま流行りの生きかた本だよ」

「あなたに生きかたを教わる人つて」「ふと、ちびリュックを見下ろした。「それって絵本?」

シリアルをテーブルに置いて、自分もテーブルに着く。と、リンは近視の人がよくするように目を細めて、レイノーを見つめた。エレノアはこの涼しげなまなざしが大好きだつた。

「なんでじろじろ見るの」

「あなた、もしかして」

「」

ひじをついて、スプーンをもてあそぶ。ふたりはなんだか微妙な空気のなか見つめ合っていたが、急に催眠術が切れたようにリンは背筋を伸ばし、テーブルにぽんと手を置いた。

「なんでもない」

レイノーはちょっと肩をすくめ、シリアルに手をつけた。

「で、本の話だけどね。タイトルは『フレンドリーなやつは口がくさい』っていうの」

「それってどういう本？」

「今度たしかめてみるといいよ。ほんとにそうだから。口がくさい連中つてのは、見境いなしになんでもかんでも取り込んでしまうんだな。つまり、この本ではこう言いたいんだ 友達いっぽいで口をくさくするか、孤独で無臭がいいか」

「あなたの人生、終わりに近づいてるんじゃない？」

「次の巻も考てるんだ。タイトルは『パンツを替えないやつは口がくさい』で、なぜかつていうと まあ、そのままだな」

電話が鳴った。エレノアは思わず振り返ったが、テレビの中の話だった。振り返りついでに、デスクでネットをつづける毛むくじやらの生物をもろに見てしまった。

「もしもし」ちびリュックが電話を取った。しばらく無言でうなずく。「いいよ。じゃ

「だれからだつたの？」

リンがたずねる。

「ティミー。遊びに来ないと死刑だつて」

「刑務所ごっこか。ぼくもよくやつたよ」

リンはスプーンを置いて、お得意のふてくされた女の子みたいな顔をした。リュックが静かに近づいて、慰めるように母親の肩をたたく。リンの顔がやわらいだ。

「いいよ。行つてらっしゃい

横を向いてリュックを抱き寄せた。

「「めんね、ママ」

観客全員がため息を漏らした。

「レイノーと行けば？」リュックはリンの肩にあごを乗せながら悪魔的な声で言った。「ふたりつきりでね」

リンは顔を上げた。レイノーは目をぎょろつかせた。「なんのこと？」そしてまたしても微妙な空気のなか、ふたりはお互を見つめ合った。

画面が切り替わった。CMタイムだ。ビキini色をしたアイスクリームがありえない格好でぐるぐるまわったりしている。

Hレノアは溜めに溜めた息を吐き出し、呼吸を再開した。次に息を止めるのは一分三十秒後だ。それまでどうしようか。お菓子を取つてきてもいいし、もちろんこのままCMを見つづけてもいい。

「ああ！ まったくもう。つまくいかない」

ゆつくりと横を向いた。茶色い毛玉が悪態をつきながら、マウスを操作している。

Hレノアは思った。そろそろあの生物の存在に気が付いてもいいころだ。

「なにやつてるの？」「おずおずとしたずねる。

毛むくじやらばどこが首だかわからないのだがとにかく首ひしきものをまわしてHレノアを見た。「ソリティア」

「そういう意味じゃなくて。あなただれ？ どこから来たの？ なんのために？」

「それ、おれの映画のあらすじのことか」

「あなたの映画？」

「また質問が増えたぞ。おれは主役じゃない。ただの導き手」「導き手って」「言つてゐればから質問を追加しかけて、あわてて口を閉じた。

「主役は？」

「主役？」

「おれは主役じゃない。ただのチヨイ役」神経質に何度もマウスをクリックする。「フイギュアはできる？ 子供はほしがるかな？」

タイアップは？　CMに出演される？　ハッピーセットのおまけは？

ふん！　いまのおれじゃ無理だ」

Hレノアは脳が漏れ出でないように、両手でこめかみを押された。

やつぱり氣づかなければよかつた。

「　CMが終わった。つづきがはじまるよ」

Hレノアは反射的にテレビに顔を向けた。頭の中がぐるぐるぐるぐるで集中できない。どうしてみんな、よつてたかって脳みそをひっかきまわすのだろう？　ただテレビが見たいだけなのに。

リンはひとりリビングのソファにすわっていた。ため息をつき、テレビを見ている。

「　忙しい、か」とひとりじとをつぶやいた。またため息。どうやらCMのあいだにレイナーに断られたらしい。「わたし、そんなに魅力ない？」

「そんなことないよ。レイナーは恥ずかしがってるだけ」

Hレノアもテレビに向かってひとりじとを言つたのだが、いつものぶつぶつとは意味合いがちがつていた。テレビではなく、リンに対して話しかけたのだ。ミーカも、ミンナおばさんも、テレビの中から話しかけてきた。向こうの言つこともわかつたし、ひとつがしゃべれば反応した。もしかしたらリンも、ひとつを向いて応答してくれるかもしない。

「あなたはぜんぜん年寄りじゃないし、かわいいし、魅力的なのに。みんなあなたが好きなのよ。もう一度レイナーを誘つて！」

リンは答えない。例によつてまぶしげに目を細め、頬杖をつき、テレビを見ているだけだった。口をどがらせながら自分の格好を見て、だるそうにため息をついた。よつこらじょつと立ち上がり、スリッパをひきずり階段へ歩いた。階段へ足をかけて立ち止まり、くるつと半回転して逆の方向へ向かう。

壁際のコードレス電話を取つた。難しい顔をして番号をプッシュする。

「やうよー　もしかして声が聞こえた？」

リンはあさつてのほうを向いて受話器を耳に当てる。カメラを見もしなければ話しかけもしてこなかつた。

電話が鳴つた。今度は現実の電話だ。やかましい電子音にエレノアは顔をしかめた。

「リュック、電話！」いつものよつこ、洗面所に向かつて叫んだ。

「まだシャワー中？」

「おれ、出ようか？」毛むくじゅらはイスから飛び降りた。「玩具メーカーからかも。おれを商品化したいって

「いい！」

リンは受話器を構えたまま、応答を待つてゐる。いろいろした様子で腕を組み、体重を片方の足にかけ直した。

いつ展開しセリフがはじまつてもいいよつこ、エレノアは顔をテレビに向けたままゆっくりと立ち上がつた。中腰で後ろ向きに進む。音を頼りに、このへんどううといつといふで止まり、背中のほうに腕を伸ばして受話器を探つた。

「もうちょい右」毛むくじゅらがアドバイスする。「ちがう。おれから見て右

氣も狂いそうになるなか、よつやく受話器に触れた。持ち上げて、手をもつれさせながら耳に当てた。「もしもし？」

「あ、ようやく出た」

聞き覚えのある声だつた。言つまでもないが、エレノアはテレビの画面から田を離さない。どんなことがあらうと、離さないとしたら離さないのでだ。

リンが画面奥で、横を向いて電話を構えているのが見える。

また当然ながら、エレノアはもう片方の手にリモコンを持つていた。テレビに向けて音量を上げる。するとリンがしゃべつた。

「聞こえてる？」

聞こえていないどころか、まったく同時にテレビのスピーカーからも「聞こえてる？」と聞こえてきた。

毛むくじゅらが見上げる。「だれ？」玩具メーカー？

Hレノアはやかましいと手を振った。

「あなた、リン？」

「そうよ」とステレオで答える。「じんにわは。はじめまして、Hレノア」

「リン・タウンゼンジ？」

「わたしはそのつもりだけぞ」

「あのリンゼイ・タウンゼンジ？」自分の声までテレビのスピーカーから聞こえてくる。「ほんとのほんとに？」

「そこまで言われると自信ないかな」

観客が笑う。するとリンは声をひそめて言った。

「あまり大げさに話しかやダメ。みんな聞いてるから。ふつうに話してね」

そしてくすりと笑つた。Hレノアは腰が砕けて、受話器を取り落としそうになつた。あのリンが、受話器の向こうで耳もとにささやきかけている。体はわなわなするし、呼吸は荒くなるし、アニメのキャラクターだつたら、いきなり顎をがくーんと落としてつま先をかすめてこるところだ。そこまででないにしても、だいたい同じような顔になつているのはたしかだ。

代わりにやつてあげようと思ったのか、毛むくじらが田の前に来て、得意げな顔で文字どおり顎を床までがくーんと落としてみせた。器用なことだ。

「ふつうになつた？」おかしげにリンがたずねる。

「だいじょ「ぶ　たぶん」Hレノアは胸にリモコンを両手で、深呼吸した。「どうもこんばんは」

笑い声があつかぶれる。そういうえば、向いにはまだ昼だった。  
「ひさしぶりじゃない。どうしてた？」

「テレビを見てたの。あなた」と言いかけて、口を閉じた。それだけは言つなど直感がわめきたてている。「天気予報を」エレノアはいきなり観客の心をつかんだようだ。それとも大物ゲストかなにかとかんちがいしているのだろうか。

リンはびっくりしたように眉を寄せ、それから持ち上げて何度もうなずいた。いつものリンだ。つまり、演技をはじめたのだ。

「いきなりで悪いんだけど、今日はヒマ?」

「どうして?」「

「付き合つてほしいの。宗教儀式」「

と「冗談めかす。どうじよつ。こちらも演技しなければいけないのだろうか。もちろん演技などしたこともないし、俳優になりたいと思つたことすらなかつた。

「宗教儀式?」とりあえずオウム返ししておいた。

「「めん、冗談よ」リンは力なく笑つた。「誕生日なんだけだれも相手してくれなくて。もしよかつたら、アイスクリーム食べに行かない?」

答えを必死に探しながら、これはいったいどういうことなのだろうと考えた。オーケーすれば、ほんとにリンとアイスを食えるのだろうか。それともたんにドラマの中の話で、オーケーと答えてもカットがかかってハイお疲れさん、ということになるのだろうか。さらには、番組の出演者として、次のシーンでテーブルに向かい合つてアイスを食つたりできるのだろうか。テレビの中で。

Hレノアはだいぶ混乱していたが、それを表に出す必要はなかつた。毛むくじやらが代わりに唸りながら頭をかきむしり、床をのたうちまわっていたからだ。

「おしゃれしたほうがいい?」

思わずきいたセリフが、観客のツボに入った。しばらく拍手が鳴りやまない。リンまでつられて笑つてしまい、顔をゆがめながらなんとか押さえようがんばつていた。

「そうそう。近所のアイスクリームパークは服装規定があつてね。カクテルドレスが必要になるかな。わたしは準備万端整えてる

「ドレスなんて持つてない」

「あれ、ネットで買つといったよ」と毛むくじやら。いつのまにかパソコンの前にすわつてマウスをカチカチさせていた。「お急ぎ便で。

本日配達だつてさ。おれ、気が利くやつだろ?」

「リンは冗談で言つたのよ!」Hレノアは毛むくじらを見て、テレビを見て、また毛むくじらを見た。気がつくとその場で一回転していく、体にコードが巻きついていた。

「なんだかよくわからないけど、よかつた。付き合つてくれてありがとう!」

「行く! 行くけど」

「じゃあ、三十分後に現地集合だ。場所はわかるよね? 大通りの角にある、あそこで」

正直、どの大通りのどの角だかまったく見当がつかない。その角のあそこは現実世界にあるのかとたずねそうになつたところで、急にリンが声をひそめて言つた。

「導きに従つて」

「なに?」

「導き手がいるでしょ?」

「おれだよ、おれ」「導き手とはだれのことだろ?と探すまでもなく、毛むくじらがイスの上に立つて手を上げた。なんとも血口顕示欲の強い毛玉だ。『おれの役目だよ。とても重要な』

さらに、湯気をまとわりつかせて洗面所からリコックが出てきた。パンツ一丁にタオルを首にかけて、さつぱりした顔だ。

毛むくじらを見て、さつぱりした顔がさつぱりわからないという顔になつた。「 Irene? 」

「リン?」Hレノアは受話器に向かつて言つた。

「なに?」

「頭がおかしくなりそつなんだけど」

「時間がないの。よく聞いて」リンはさりげに声を抑えて言つた。「わたしは味方よ。あなたの助けがぜひほしいの。ミーカがあなたたちの世界に干渉し、しつちやかめつちやかにしようとしてる」

「旦那さんでしょ?」

「もと旦那よ。別れたの」

「自分から言こと出てきたから、なにをしようとしたのかは知つてゐる。大変なの？」

「決まつてゐるでしょ。あなたたちの世界がテレビ番組になるの。もしそうなつたら」

レイノーがとつぜんキッキンからやつてきた。

「あのさ、じつはさつきのことだけだ。『氣になつちやつて』

受話器の口を手のひらで押さえながら、声をうねりせつて笑つた。

「ははー、ゼンゼンだいじょいづぶ！ 気にしないで」

「おお、いたのか！」

ジヨーライが息を切らして玄関からあらわれた。鍵がかかつていな

いのはシットゴムではよくあることだ。

「なにしに来たの？ 地区シリーズを見に行くんじゃないなかつた？」

「わからん」

「たぶん あんたが心配になつて」

「先生、そんなキャラじやないでしょ」つが

そのうしろからピザの配達人が顔をのぞかせた。「あのー、ピザの出前ですけど」

「頼んでない！」

「あ、あたしが頼んだの」 むらに一階からカーティーンが男を引き連れ階段を降りてきた。「この人ね、あたしの彼氏」

「ちつす」彼氏はチャラチャラと言つた。

「こんなときにー！」リンは聞いたこともないよつた悲鳴を上げた。

「どうして一気に」

「どうして？ みんな、きみを必要としてるんだよ」レイノーが神妙に言つた。「さつきは断つたけど、やっぱり行く」とこしたよ。みんなでね。この彼氏も

「ちつす」彼氏は礼儀正しくうなずいた。

リンはリビングの中央で、出演者全員に取り囲まれた。まるでHレノアとアイス屋へ行くのを阻止しようとしているかのよつだつた。

思いつきつ眉を下げる電話に口を近づける。「ハレノア？」

「なに？」

「わたしも頭がおかしくなりそつ」

「ねえ、どうすればいいの？　どうすれば会える？」

「導き手に従つて」

唐突に電話が切れた。テレビを見る。見たことのあるゲストが一斉に玄関からなだれ込んできた。市長や近所のおばさんや親友だったのに途中でなかつたことにされた男など総勢一十人くらいが、やはりリンを取り囲んで思い思いにしゃべりまくっている。まさにしつちやかめつちやかだ。

「おれ、導き手」

ハレノアとリュックは同時に振り返った。

「主人公ども、おれに従え。ストーリーを進めてやる」

預言者にでもなつたつもりなのか、手を上げて満足げに一同を見まわしている。

その背後で、天井から箱が降ってきた。どさつと床に落ちる。毛むくじゅらは手を上げたまま悦に入つてにやにやしており、取りにいくそぶりも見せない。リュックが頭をかばいながら箱に近づき、包装をやぶつて開けた。

「ドレスだ。ハレノア、こんなのは注文した？」

「おれがしたの」

毛もじやのニヤニヤはとまらない。まさに主役を食つてやると宣言わんばかりだった。

## 7話 カラーパターンの誘い

「手はじめに、おれのこと教えてやろう。知りたくてしょうがないんだろ?」

エレノアは毛むくじらからテレビに目を移した。『31』は残り時間も半分を過ぎていたのだが、相変わらずドタバタ騒ぎがつづいていた。収まるどころかさらに人数が増えていて、文字どおり玄関の外まであふれ返っていた。

思わずリモコンを向け、音量を絞る。なんだか頭がぼーっとする。憧れのリンに話しかけられ、アイスにまで誘われた。本来なら天井をブチ破る勢いで飛び上がって喜ぶところなのに、どうしてだかそんな気にはなれなかつた。

ちなみになぜそんな比喩を思いついたのかというと、実際に家の天井がブチ破られてポツカリ大穴を空けていたからだつた。

「無視するな」毛むくじらがドスを聞かせた声で言つたが、それすらも無視された。

「こりゃひどい」

リュックが穴の真下から見上げてつぶやいた。まさにそのとおりだつた。粉塵が部屋の照明に照らされて渦を巻き、漆喰がぼろぼろと落ちてくる。間一髪転落を免れましたというように、クラゲ型の照明が伸びたコードに捕まつて穴の端でぶらぶらしている。助けてくれと明かりが不規則に点滅している。

大穴から部屋の奥のほうへ向かつて亀裂が走つている。エレノアは亀裂を目でたどつていき、たどり着いた先に見慣れたコートハンガーがあつた。木を模したデザインで、枝の部分にコートや帽子がかけられるというおしゃれインテリアだつたが、巨大化して先端が天井につき刺さつているのを見るとそつとも言えなかつた。

「成長したんだ」リュックは勢いよく振り向いた。「ホームで買つたコートハンガーだ」

「ホームって？」

「おしゃれな通販サイト。ちょうど今日、面接に行つたところだよ。面接官からこの話を聞いたんだ」

リュックは頭をかばいながらエレノアのもとへ寄り、水をやると成長するおしゃれなハンガーの話を真顔で説明した。しゃがんで話し込んでいると、いつのまにか毛むくじやらも輪に入つてふんふんうなずいていた。ひとりではダメなタイプらしい。

コートハンガーの幹は体ふたつぶんの幅に成長していた。枝に実のようなものがいくつもぶら下がっているのにエレノアは気づいた。「あれは」「リュックも気づいたようで、よく見ようと顔をしかめていた。ふと気づいたようにまばたきし、顎を上げた。「監視力メラだ。監視カメラの実」

ちっちゃいのからおつきのまでたわわに実つた監視カメラは、おぞましいとしか言いようがなかつた。エレノアは思わず敷布団にへたりこんだ。現実はいつたいどうしてしまつたのだ。

「ようやく聞く気になつたか」

毛むくじやらは比較的穏やかなキーキー声で言い、エレノアの肩をぽんとたたいた。

「あなたは何者?」

「そこからはじめるのかー もつせんざん言つたぞ」

エレノアは目をぬぐつた。「「」めん。ぜんぜん聞いてなかつた」

「まったく!」毛むくじやらはカリカチュアライズされたマフィアのように両手を広げて一回転した。「すごい主人公どもだよ」

憮然とした表情で腕を組んだ。いまさらながらこの毛もじや、ウ二から手足が飛び出たような格好をしていた。顔の部分だけ円形脱毛症のようになくななく、その顔には牙を生やした口なんかもあつた。りしたのだがべつだん恐ろしいというわけでもなかつた。だからといつてかわいらしいわけでもなく、こんなフィギュアが商品化されたらおもちゃ屋は在庫の処分でさぞ頭を悩ませることだろう。

「いいよ。聞いてあげるから、はじめから話して」

「導き手とか言つてたな」パンツ一丁のリュックがエレノアのとなりにすわる。「それはつまり、ぼくらを導くってこと?」

「そのまえにひとつ、驚くほど有効なアドバイスをやるわ」

「なんなの?」

「テレビを消すの」

リュックが心配そうな顔を向けた。付き合いが長いので、よく理解しているのだ。エレノアは「テレビを消せ」と言われるのが大嫌いだったし、そんなふうに言う人間も大嫌いだった。「なにもしないで、テレビばかり見て」ということらしいのだが、なにもしないわけではなく、テレビを見ているのだ。消せといつ連中はたいがい、テレビは悪いものと考え、テレビを見ている姿にむかつ腹を立てているようだ。ほかのことなら、たとえば本を読むとか、卓球をやるとか、クレジットカードを偽造するとか、とにかくほかのことをしてくれるとともうれしいんだけど、とでも言いたげだつた。あなたたちも夕飯を食いながらお笑い番組を見るじゃないか、と指摘しても、それはちがうのだという。どこがどうちがうのかわからなかつたし、ちゃんと説明してくれる人もいなかつた。

エレノアはあらためてテレビに目を向け、『31』を見た。リビングはすし詰め状態で、リンの姿は見当たらなかつた。

ゆづくとリモコンを持ち上げ、思わず他局を選択しそうになるのをぐつと押さえて、電源ボタンを押した。

「これでいい?」

「よし。いいだろう。お次はおれのこと。おれの名前は完全にオリジナルな怪物

「は?」とエレノア。

「おれの名前は完全にオリジナルな怪物」

「なんて?」とリュック。

「もう! なんてばかどもだ!」毛むくじゃらは地団駄を踏んだ。それから急に平然とした顔で毛の中に手をつっこんだ。白くてまるいものを取り出し、ふたりに見せる。

「ほら！ ここに書いてあるだろ」

取り出したのは「ースターだった。レストランなんかで出てくる使い捨ての紙製だ。リュックはコースターを受け取り、上を探して左右にまわした。青い水性ペンで、寄せ書きのようにあっちこっちから書かれている。

「おれの産みの親が書いたんだ」

「産みの親って？」

「シナリオライター！」

「わかつたよ。で、そのシナリオライターが一杯ひっかけてるときに、この毛もじゅのキャラクターがひらめいたんだな。どれどれ

リュックはある方向を上にして読み上げる。エレノアもほっぺたをくつつけるように寄り添つてのぞきこんだ。

「ここには『完全にオリジナルな怪物』とあるね

「そう。それがおれの名前」

「『完全にオリジナルな怪物』が？」

「おかしいか」

「……こちには」リュックはコースターをさかさまにした。「こ  
うある。『がーがーおしゃべり』

「それが苗字さ」

「『着ぐるみか、CGか？ 予算は？』」

「おれはCGだ。『完全にオリジナルな怪物・がーがーおしゃべり』  
で、イニシャルCG。まちがつてないだろ？」

「それ、名前じゃなくてアイデアのメモなんじやない？」

Hレノアがつっこんだが、毛むくじゅらは聞いていなかつた。

「CGのCG、というわけだ。しゃれてるぜ。お次はこれを見て  
ひょこひょことパソコンデスクに向かつた。イスに飛び乗つて、  
モニターを向ける。

「これがおれの設計図」

モニターには、不正な方法で入手したフォトショップが表示され

ていた。画像が何枚も重なり合っている。よく見ると、ぜんぶ毛むくじやらのイメージ画像だった。パターンはいろいろあって、微妙に強そうだったり、微妙に愛らしかったりしているのだが、どれもヘタクソなのは変わらなかつた。

「おれはついに、こいつを入手したんだ。で、フォトショでデザインし直してるとこ。うまくいったら近所の大学生に頼んで3Dモルをつくつてもらうの」

「なんのために？」

「マルチメディア展開するため。これじゃ、ゲームになつてもだれも使つてくれないだろ」「ちうだらけ！」

「これをわたしたちに見せたのは？」

「見せたかっただけ。意味はないんだ」毛むくじやらはパソコンの電源を落として、本体からUSBメモリーを抜き出した。「でも、それが人生だろ。よし。そろそろ出発だ。行こう

イスから飛び降りて、コートハンガーの大木に向かつて歩いた。途中で止まって振り返る。

「出発だと言わされたら、立ち上がるのー。おまえ、リンに会いたいんだろ？」

「会いたい」

「だつたらついて來い。おれはリンに頼まれたんだよ。お礼にキャラクターデザイナーを紹介してもらうことになつてる。それからおまえ、そのドレス着て。普段着じや、追い出されるぞ」

毛むくじやらは大きくて平べつたい箱から衣装を取り出し、薄紙と防虫剤を放り投げた。ドレスは緑色で、やたらテカテカしていた。さらに箱から、真珠をあしらつた靴と細長い棒を取り出した。棒をまじまじと見て、右に左に振つてみせた。

ドレスその他を頭に乗せ、走つて戻つてくる。

「はやくしろ。時間がない」

手渡されたものを広げてみて、エレノアはピンときた。

「ティンカーベルだ」

ドレスは安っぽくて「こわい」わしていて、「ヒト寧に背中の羽まで完全再現されていた。

「人気出るだ。はやく着ろ」毛むくじゅりは背中を向けた。「おれ、見ないから

「ティングが好きなの？」

毛もじゅは答えなかつた。

「というわけで、着替えをはじめた。リンが正装しろというのだから、しかたがない。だが羽を生やして魔法のステッキを振りまわすのはドレスコードにひつからぬだろうか」「申し訳ありません、魔法のステッキはお預かりする決まりでして」と受付に言われるかもしれない。エレノアはジーンズを脱いで、ふと顔を上げた。毛むくじゅらは紳士的に背中を向けていて、紳士的じゃない自分の目玉と格闘していた。顔から飛び出し頭のてっぺんからまわりこもうとするたびに、ぴしゃぴしゃと手で払いのけていた。

「いいよ。着終わった」

衣装も靴もぴったりサイズだったが、だからといってうれしいといふわけはなかつた。

「死にたくなつてきた」

リュックが手を挙げた。「おれも着替えを

「おまえは裸でいい。それに、裸のほうが人気出るだ

「これで外に出たら肺炎にかかるよ」

「外には出ない。レポーターがいるからな。だから、ここから出る

毛むくじゅらはスカしたしぐさでぱちんと指を鳴らした。エレノアもリュックも、どうせなにも起きないだろうとてれてれしていたのだが、今回ばかりはまちがいだつた。油断させるような間を置いてから、コートハンガーの大木の幹の根元が爆発した。まさに大悪党が地下金庫の扉をダイナマイトで吹っ飛ばしたような感じだつた。白い煙が思わずぶりに正体を隠す。天井の亀裂が大きくなり、ごろごろした塊が追加で一、二個落ちてきて、ボール紙の箱をつぶした。白い煙がゆっくりと床に降りる。それと入れ替わるように、ピー

という一本調子の電子音が耳に飛び込んでくる。ハンガーの根元には、半円形の穴が開いていた。そこにあるのは無記名債権や金塊の山などではなかった。

そこにあるのはテレビの放送が終了したあのカラーパターンだつた。

エレノアは思わず手で目をおおつた。

「目がちかちかする」リュックも目をそらす。「遠近感がつかめない」

「「」の中に入るの？」

「そうだ」

「いつたいど「」くつづじてるんだ？」

毛むくじゃらはいきなりげらげら笑い出した。「けつさくだ！」

『いつたいど「」くつづじてるんだ?』だと! 台本の読み合わせじや、大爆笑確實だな! 教えてほしいか

「もちろんよ」育ちすぎのティンカーベルが言つた。「ワープ空間みたいだけど」

「SF用語は使うな」毛もじゅは笑いやめ、ぴしゃりと言つた。「ファンタジーなんだぞ。で、どこくつづじてるのかといふと、おまえらの進むべき道につづじてるんだ。どづ、意味深だろ?」「つまり、知らないのね」

「知ってるけど、言わない。おれは導き手だから、そういうことは言つちやダメなの」

毛むくじゃらはまた指を振つた。今度はなにも爆発しなかつたが、代わりに天井といわす壁といわす床といわす、四方八方で亀裂がばきばき言いながら徒競走をはじめた。家ぜんたいが、インフルエンザにでもかかつたように横に細かく揺れ出す。

「家がぶつ壊れる!」衣装のせいが、エレノアは思わず汚い言葉を叫んだ。「なにやつたの、このトンチキ!」

「そのまんま。だって、家があつたら冒険にならないだろ?」

「はやく行こう!..」

天井から漆喰の塊がぼろぼろ落ちてくる。そのうち、もつと大きくて当たると死んでしまうかもしないものまでが落ちてきた。リュックがエレノアの腰に手をまわす。

「待つて！ テレビが

「また買えばいい アパートもね。起きたことはしょうがないよ。

それに主人公だつていうんなら、主人公らしくしようじゃないか

「頭がおかしいんじゃない？」

「どうして？ いつもの現実よりよっぽどおもしろいよ。きみもテレビがよく似合ってる」

毛むくじらの後につづいて、エレノアとリュックは穴に近づく。高さが背丈の半分もなかつたので、四つんばいで進むしかない。エレノアは魔法のステッキを口にくわえ、リュックはバスタオルを首にくくりつけた。毛むくじらの尻を眺めながら這い進んだ。カラーパターンがどんどん広がっていき、ピーという音が鼓膜を震わせる。どれもが吐き気を催させた。

エレノアは振り返った。買つたばかりのテレビが背中を向けている。犬のように追いかけてこないだらうかとぐずぐずしていたが、リュックにせつつかれた。

出口が消え、上も下も一面カラー・パターンになつた。

毛むくじらがエコーたつぶりに話しかけた。「最後にひとつ、言いたいことがある」

「なに？」

「ひどい格好だな、おまえら」

## 8話 ジョン・レノン（偽者）

その部屋は、小ぢんまりとしてくつろいだ雰囲気にセッティングされていた。今回インタビュアーを務めることになったネイサン・ハントが、テーブルをはさんで向かい合ったソファの一方にすわっている。よいしょと勢いをつけて腕を伸ばし、テーブルの上にあるおしゃれな水差しを持ち上げ、自分のグラスに注いだ。前ががみでグラスに口をつけ、半分ほど飲み干した。ネイサンはロマンスグレイを絵に描いたような白髪交じりだったが、五十五歳にしては若々しかつたし、体臭もそれほどでもなかった。自宅にジムをこしらえたのは正解だった、とネイサンは言つ。おかげではらわたを床にひきずらずに歩けるんだ、と。

大儀そうに背もたれに寄りかかって、満足げに周囲を見ます。スタッフが近寄り、キャメルのスースにピンマイクをセットする。逆側にマイク係の女がまわりこみ、顔や髪の毛をあれこれといじくりまわす。

「ありがとう」

マイク係はこつこつと笑みを返した。名前はサリー。ネイサンは自分に氣があると思い込んでいたのだが、残念なことにサリーはだれにでもにつこりと笑う娘だった。

ネイサンは向かいの男に目を向け、やつにもジムとプールを買ってやつたほうがいいだろうかと考えた。四十前後で、オタクがそのまま歳をとつたような、なりふり構わない文化人だった。赤いポロシャツのすそからいまにも腹があいさつしてきそうだ。だが顔だけは青白いものの若々しく、眼光は鋭かった。

この男の才能だけは認めざるを得ない。ネイサンは思つた。あのバー「カード頭をスキヤンしたなら、きっととてもない金額がはじき出されることだろ?」

「それでは、インタビューをはじめます。よろしくお願ひします」

顔の前にカチンコをつきつけられる。ネイサンは眉を上げて耳の後ろをかいだ。スタッフがヤドカリのように下がつていった。

「ヘアスタイル変えたんだ。どう?」

「やりと笑う。本番前の余裕だ。だが余裕を見せながらも、カメラがどこにあって、自分がどう映るかは完璧に把握していた。だれも新しいヘアスタイルを褒めてくれないのは、きっと緊張しているせいなのだろう。

ネイサンは男のプロフィールなどが書かれた紙の束とペンをテーブルから持ち上げた。長い足を窮屈そうに折りたたみ、前かがみで膝にひじを当てる。インタビュー時のいつものスタイルだ。すそから黒いつやつやの靴下がのぞいているのだが、もちろん三足いくらで売っている安物ではない。

「今日はありがとう。まずは名前を教えてくれないか?」ツカミのジョークを言った。「いやいや、申し訳ない。だが、そう思っているのはぼくだけじゃないんだよ。きみの名前はちょっと発音が難しくてね」

男は、いや構わないよと頬を持ち上げて笑った。

「ジョンだ」背もたれによづかかつて腹をつき出す。「名前はジョン・レノン

「レモン?」

「レノン」

「レンコン?」

「ちがう。レノンだ」

「いや、失敬」上品に身をよじらせて笑う。「ジョンでいいかい?」

「いいよ。偽名だけどね」

「本名は?」

「ドクター」

「ドクター、なに?」

「ぼくはただのドクターだ」

そしてなにがおかしいのか急に腹を揺らして笑い出した。「ヒヒ

で『あなたは何代目?』って聞いてくれないと。だけど傑作だ

る? シリーズが変わつて、いきなりおれみたいな腹の出っ張つた  
ドクターがターディスから出てくるんだ! 『やあ』とか言って。  
そりゃあコンパニオンも家に帰るつて言い出すよ

ソファの肘かけをばんばんたたく。ジョンはときどき、意味不明  
のジョークを言う。天才はやはり、頭の構造がちがうのだろう。  
だがネイサンもプロだった。プロであるからして、たとえインタ  
ビューという役まわりだると自分以外に注目が集まるのはたい  
へん気に入らなかつた。

「きみは輝かしい才能の持ち主だ」

ようやく収まつたジョンがすわりなおして肘かけに持たれた。口  
に手をやり、うなづく。

「舞台俳優としてキャリアをスタートさせ、同時に脚本家としても  
デビューした。その処女作は いや、これはあとのお楽しみにし  
よつ、みんな知つてるとと思うけどね。性格俳優として映画にドラマ  
にひっぱりだこで、『マクダイト三百人の非正規雇用者たち』では  
声優にまでチャレンジした。この作品については?」  
「簡単だつた。セリフといえば『お先真つ暗ですね』くらいだつた  
し」

「だが、いい作品だ」

「そうだな。だが派遣会社の社員が全員黒タイツでお面みたいのを  
つけて『シャー』とか言つてたろ? あれはどうかと思つたんだが  
まあ、アニメだから」  
ジョンは顎をかいた。

「きみはバンド活動もやつているね」

「そうだ」

「俳優としての代表作は?」

脳を検索するように、ジョンは厳しい顔で目をさまよわせた。

「迷うだろ? 出演作はかなりの数になるからね」 ネイサンがフオ  
ローする。「傑作も多い」

ジョンは慎重に言葉を選んでいた。「『これがベストといつわけではないが、いま頭に浮かんだ映画を『横に』する男』かな」

「傑作中の傑作だ」そろそろ歯が浮きはじめてきたので、そのへんにしておけとネイサンは自分に言い聞かせた。「演技の『ついで考えたことは?』」

「横になろうと考えたよ」

「ほかにも『おじさん船長』や『いいわけ探し』など」

ジョンはうなずきながらコップを持ち上げてわずかに口に含み、すぐにテーブルに戻した。

「『穴掘り』にも出たね? 百八十分に渡つて穴を掘つづけるといつ問題作だ」

周囲を気にし出している。どうやら興味を失つていていた。ネイサンはこちばん上の紙をめぐつて後ろにまわした。

「昨年は詩集も出版している」

「まあね」

ここで勢い込んで声のトーンを上げる。「教えてくれ。ぼくは平凡な男で、アイロンがけすらともにできないんだが」自虐ギャグで相手を持ち上げる。「きみにできないうことがあれば、ぜひ知りたい。そんなものがこの世にあるのかい?」

「卓球だ」ジョンは言い切った。「あれは難しいよ。ほんものの才能が必要だ」

「いまのうちに自分の彫像をつくらせるべきじゃないかな? きみ

の偉業は後世まで残るだろうから」

「それはどうかな。後世もなにも、おれはずつといの世にこるつもりだしな。神さまに雇われた身だから」

「神に選ばれし才能、という意味だね?」

「いや、ほんとうに神さまからオファーがあつたんだ」

ネイサンは相手の顔をじっと見つめた。絶妙な間を演出したというよりも、やうしないとこれまで築き上げてきたキャリアを一瞬で

ふいにしかねないことを口走つてしまいそうだつたからだつた。また紙をめくつたが、さつと本題に入ろうと考え方直し、一気に最後までめくつた。

「そして現在、初の映画監督作品を撮影中だ。タイトルは？」

「『『インランドリー、宇宙へ行く』だ」

「内容を説明してくれるかい？」

「詳しくはできないな」

「資料にはこうある。『超巨大コインランドリーが宇宙を旅し、ほかの惑星を洗濯しまくる』」

「それ以上は言うなよ」

「どうして『インランドリー』？」

「とくに意味はない。ウケ狙いさ。あんまり詳しくは言いたくないけど、テーマは『魂の救済』で」

「奥が深そうだ」

「ぜんぜん。よく言つだろ、『命の洗濯』つて。ただの思いつきなんだ。ただのシャレなんだ。主人公たちは墮落した惑星の住人をかたっぱしから洗いまくる。魂を救い、着替えは渡さない」「試練を与えるわけだ」

「そういう解釈もできる。いや、そうとも限らないかもしねないな。かたっぱしから洗濯されるのは若い女だけだから」「ほかにこだわったことは？」

「あるね。これが最高に笑えるんだけど、船内じゃ、なにをするにも小銭がいるんだ。なんせ『インランドリーだからね。』『超空間航行に備えよ！』『艦長、小銭が足りません！』みたいな。光学迷彩スーツを着て敵に忍び寄つていると、時間が来て丸見えになつて人工知能に『小銭を追加してください』と言われたり。笑えるだろ？」

で、味方は札しか持つてなくて、悪い連中は小銭しか持つてないつて設定にした。札をポケットに入れたまま洗濯してシワシワにした経験、あるだろ？あれと同じさ

なにが同じなんだと思いながら、ネイサンは相槌を打つた。「興

味深い」

「あと傑作なのは、この船は超巨大ロボットに完全変形しないと両替できない構造になつてるつてここだね。『これより両替を行ひ。総員、直ちに配置につけ!』ってわ。バカだろ」「完成が楽しみだ。はじめての監督は大変だつた?」

「正直、役者には恵まれなかつた。実際、ほとんどが素人レベルだつたし」

ネイサンはちらつとスタッフを見てから、乾いた笑いを漏らした。「だいじょうぶ、いまのはカットするよ」

「かまわないよ。中でも××なんか、ひどいもんだった。アラン・リックマンみたいに優雅でいい声してるんだけど、脳みそは石器時代つてどこだね」

「アラン」ネイサンはかぶりを振つて、言いかけの質問を追い拝つた。「ところで、大物が参加するつて聞いたけど?」

「ああ。彼女ね」「だれだい?」

「若手の有望株だ。家に一台以上テレビがある人なら、みんな知つているはずだよ」「役どころは?」

「まだ決めていない。着ぐるみを着せる気はないよ。あのルックスと表情がウリだからね」

「アイドル系?」

「ひきこもり系かな　強いて言つなら」「教えてくれよ」

ジョンは額にしわを寄せてインタビュアーを見やつた。ネイサンは興味津々といった表情で微笑み、ペンを神経質にくるくるまわしている。「そういうことなら」とジョンは言い、ポケットからリモコンを取り出してネイサンに向けた。

動いているのはジョンだけになつた。

「おまえなんかに教えてやるもんか」

ジョンはリモコンを放り投げ、だるそうに立ち上がった。固まっているカメラの正面に寄り、JFO番組の司会者よろしく手を前に合わせて立つた。

「見てるかい、エレノア」

手を振り、黄色い歯を見せて笑つた。

「おれはジョンだ。きみの監督をすることになった。きみの人生を監督するんだ。演技を指導し、カメラへのきれいな映りかたも教えよう。きみはすばらしい素材だが、訓練ができるいない。おれの言うとおりにすれば、きみの人生は完璧で、それなりに波乱万丈だがぜつたい安全、だれもがうらやみ、女子高生は全員きみの真似をするようになる。そんな人生に憧れてるんだろう？ 現実の連中つてやつは」

ジョンは立ち去りかけたが、ふとあることを思いつめ、ぐるりと振り向いた。

「おべつか使いのうぬぼれ屋め」

口をぱっくり開けたまま固まっているネイサンに近寄る。しばらくそのままマヌケ面を眺めていたが、おもむろにテーブルから水差しを持ち上げると、ネイサンの股間に恥ずかしい染みを「演出」した。

「なにがジムだ。おれは自宅にプールをふたつ持ってるんだ」

一時停止を解除した。

エレノアは一面緑の丘に降り立つた。正確に言つて、丘の上に転げ落ちた。

うんざりするほど長い時間、カラーパターンの中を這い進んだ。深夜、放送終了後も消さずにテレビを眺めていたときがよくあるのだが、そのときの感覚に近い。これ以上テレビをつけっていてもなにもはじまりませんよ、はやく消して寝なさい、と言われているような、おなじみの感覚だ。

ティンカーベルのコスプレでハイハイをつづけていると、毛むくじゃらとリュックが立ち止まり、「じゃ、また明日」といった感じで言い合つし、それぞれ別の方向へ歩きはじめた。エレノアはリュックのあとについていくことにした。なぜ別れたのかたずねたかったのだが、魔法のステッキを口にくわえているのでしゃべることができなかつた。

またしばらく進むと、リュックが今度はエレノアにあこがれした。なにも言わず無造作に手のひらを向けると、左のほうへ猛然とハイハイした。これが赤ん坊であれば、そんなスピードでハイハイできるならいいかげん立て歩いたらどうだと言われそうなほどの勢いだ。どうして自分を置いていくのかと声をかけようとしたが、またしても魔法のステッキに邪魔された。

リュックはカラーパターンに吸い込まれるようにになくなつた。どうすればいいのかわからず、エレノアはその場で膝を抱えてすわりこんだ。ため息をつく。膝を胸に引き寄せて、顎で皿をついた。なにげなく手を下ろして、地面があるらしきあたりを探つてみたが、手ごたえがない。尻の下に手を入れてみた。なにもない。とすれば、いま自分はどこにすわっているのだろう。

なにかしなければと思い、完全な思いつきでぐるぐる返しをしてみた。すると急にカラーパターンが消えた。エレノアは地面に転げ

落ち、ひとりパイルドライバーの要領で頭をもろに打ちつけた。

マットから頭を引き抜いて、うねる緑のじゅうたんを見下ろした。小高い丘の上にいるようだ。草に触れる。水分をたっぷり含んだ丈の短い草で、妙なことに命を感じた。命の大切さや尊さなら、ネイチャーものの番組『大自然の勝ち』や、医療ドラマ『ICU』と言えなくて』で毎週叩き込まれていたのだが、思えば長いこと草に触れたことがなかつた。空気がおいしい。目にも神経にも優しい澄み渡つた青空が途方もない勢いで全方位に広がつている。

ここにリンがいるのだろうか。

リンを探そうか。だけどひとりでは、どうしたらいいのかわからぬ。リュックはどこに行つたのだろう。それにここはどこだ。バスで帰れる距離だろうか。アイス屋どころか入口の建造物もまったく見当たらない。

そのとき、久しぶりにピー以外の音を聞いた。口口口としたチャイムの音色が調子っぱずれなメロディを奏でていて、それほど遠くないところから漂つてきているようだつた。エレノアは立ち上がり、丘を駆け下りた。慣れないハイヒールでずっこけそうになつたので、思い切つて脱ぎ、正気を保つていてほの手で持つことにした（もう片方の手は魔法のステッキを持つていて、こちらはだいぶ正氣を失つていた）。だが裸足で草を踏む感覚は気持ちいいとしか言いようがなく、チャイムが奏でる音楽を聞いていると、駆け下りながらくるくるまわつて魔法のひとつでもかけたくなるのだった。喜びとともにになだらかな斜面を下りていぐ。口口口のチャイムが大きくなつていつた。ふざけて魔法のステッキを振ると、ふもとの縁に白い染みが出現した。ビックリしたのと立ち止まるつとしたのでかかとを踏ん張つたのだが見事にすべらして足が空中をかき、後頭部をしたたかに打つた。

そのままずるずるとふもとまですべり落ちる。

めぐれ上がつたドレスのすそを下ろして、よろよろと立ち上がつた。腕は草の染みだらけだし、足もとを見ると背中の羽が一個取れ

て落ちている。

十歩先に、車が停まっていた。スピーカーから例のメロディがキノコンカンと流れている。白とピンクのまるっこいバンで、やたらめつたらとステッカーが貼られていた。アイスクリーム屋さんだ。エレノアは急いで近づいた。青とピンクのロゴが、バンの正面に書いてある。『バスキン・ロビンス』と書いてあった。

リンを探そうとしたが、エレノアはすぐに暗い面持ちでかぶりを振った。ここにいるとは思えない。『31』のスポンサーは『ベン&ジェリー』だったからだ。

カウンター代わりの横側の窓のところに立って、中をのぞいた。奥にサーバーがあつて、手前の透明のケースにはミントチョコレートチップやベリーベリー、バニラにペカン、オレンジシャーベットなどのバケツのずらり並んでいる。見ているだけでほっぺたが縮こまり、歯の根っこがうずきうずしてくる。

「だれかいなの？」

分厚い手が後ろからエレノアの肩をつかんだ。もう出しの肩に生で触られ、窓枠に後頭部をぶつけた。

浅黒い肌のおじいさんがまっすぐエレノアを見ていた。白髪交じりの顎ひげはきちんと整えられていてなかなかハンサムだったが、アイス屋の帽子がまったく似合っていなかつた。目に宿る悲しげな光は帽子のせいなのかもしれない。腕まくりした白いシャツからたくましい腕がのぞき、これから上げようとしているのか下げようとしているのかわからない中途半端な格好で手のひらを向けている。おさわりの体勢に見えなくもないが、息子の嫁にちょっとかいを出すようなタイプには見えない。

「あんた、エレノアだな」

おじいさんがほどんど表情を変えずに口を開いた。

エレノアは急いでうなづく。「えーと

「話す必要はない」おじいさんはさらにエレノアの目をのぞきこむ。それから微妙に眉を上げ、微妙に表情を和らげた。ちょっとかいを出

しそうなポーズで固まっていた腕を下げる。「わたしはすべて知っている。業界関係者というやつだ。わたしには、あんたが歩んできた道が見える 来月のフレーバーのよつこ

「ほんとに？」

「あんたは『完全にオリジナルな怪物』に導かれ、ここへやつてきた」

「そうです」

「リンの指示どおり、正装してきたな」

「ティーンクでよければね」エレノアはうなずいた。「リンがここにいるの？」

「そしてあんたは」とおつかぶせる。「くさい連中とともに大いなる試練をぐぐり抜けってきたわけだ」「え？」

「ファンタジーだ。三人組のパーティ。みな勇敢で、正しい心を持ち、とても口がくさい。足もくさい。なんとなく全身がくさい」

エレノアはえきつた。「ここでだれかに会つたのはあなたがはじめてよ

「では、そのぼろぼろの格好は？」

「丘を転げ落ちたの」

思案げにうなり、顎ひげをさすつた。「なるほど」と斜め上をチラシと見上げたのでエレノアもつられて見上げたのだがとくになにもなかつた。

「せうか。場面をひとつカットしたな」

何度も名前を聞いたのだが、おじいさんは答えなかつた。愛称みたいなものはないのかと問いただすと、「愛称は『おじいさん』だ」と答えた。

「リンはどこ？ あとから来るの？」

「時間がない。まずはアイスクリームを食べなければ」

おじいさんは大股ですたすたとバンの向こう側にまわつた。がら

がらとドアを開ける音がし、鳴りっぱなしの音楽が消えた。

「いまのうちにフレーバーを選んでおけ」しゃがんでなにやら準備をしてくる。「だが、慎重にな。これは、あんたが思つていい以上に重要なことなのだ。結婚相手を決めるように選びなさい」

「チョコ://ント！」エレノアは速攻で選んだ。

「だから、結婚相手を選ぶようにと

「チョコ://ントが好きだもん」

「なるほど。あんたの旦那は幸せ者とこつわけだな」

「まだ結婚はしていないけど」

「しかし、こずれはするんだろう？」

車内に収まつたおじいさんが、ケースを開けながらなんとはなしにたずねる。エレノアは考え込んだ。言われてみれば今まで考えたことがなかつたし、リュックが言い出したりにおわせたりしたことも一度もなかつた。いまのままで満足だし、どうせずっとこいつしょにいるつもりなので結婚などしてもしなくても変わりない。

「 そうともかぎらないぞ」

頭の中を読んだのか、表情に出ていたのか、おじいさんが口を開いた。

「なぜ退屈な結婚式を、顔も見たくない親戚連中を集めてわざわざやるのか。イベントだな。人生にはイベントが必要なのだ。日記に書けるような出来事がな。『昨日と同じ。終わり』じゃ、日記も人生も長くはづかんだろう」

「わたしの親戚にも、子供のころに似たようなことを言われた」エレノアは思わず顔をしかめる。そして口をひん曲げ、かなり悪意のこもつた声真似をした。「『テレビばっかり見て、なにもしないで。やりたいことはないの？』って。だからわたしは、『テレビを見たい』って答えたの。ほんとにそうだったから。そしたら親戚のおばさんはおかあさんのところに行つて、心配そうにひそひそ話してた。わたしが万引きかなにかでもしたみたいに。だから、テレビを見るのは悪いことなんだって、そのときは思つたの」

鼻をすすつてつづける。

「やりたいことひなに? イベントって? わたしがやりたいことは」

「じひじひこんな身の上話をしてくれるのだろう? ステッキを持った手で頬をねぐら。

「心配されなきやいけないの? やりたいことをやつてるだけなのに。変わってるねとか、頭がおかしいんじゃないかとか、将来口クなことにならないとか」

「そんなふうに言われたのか」

「ううん。でも、話しているのが聞こえた。おかあさんは取り合つてない感じだつたけど、だんだん見る目が変わってきた。心配してゐる田つきなの。心配? 将来が心配なんだつて。将来つてなに? 頭がおかしいのはおばさんのほうじやない! その親戚のおばさん

」苦労して息を吸い込む。「卓球の元オリンピック選手なの」

おじいさんはなにも答えなかつた。ただ黙つてアイスを差し出す。「これはおまけだ」

と書いて、チョコミニントをもう一個差し出す。受け取らうとした手は魔法のステッキを握つていた。

「魔法のステッキはそのへんに置いておけ。たぶん、もう必要ないから。じこいつも用なしか。恥ずかしい思いをして買つたのに。孫のプレゼントだとがウソをついて」

おじいさんはぶつぶつ言いながら、引き出しから安っぽいコンパクトのようなものを出して、向こうに放り投げた。

「あんな」なにか思いついたのか、おじいさんは身を乗り出した。

「じの商売をはじめるまえ、わたしはサトウキビ畑を栽培していたんだ」

「そつの」

「なぜサトウキビを栽培していたと思つ?」

「わからない」

「わたしもだ。だからやめた」

「なんの話？」

「身の上話だ」『「ひとつもせず」』『「あんたを元気づけよう」と思つて』

あまり元気づかなかつたのだが、とりあえずお礼を言つた。

おじいさんは横を向き、だれかに親しげな様子で話しかける。『連れは注文したぞ。あんたはなにがいい？』

だれもいないはずなのに、答えが返つってきた。『　バナナスープ リット』

「つちにはない。『バスキン・ロビンス』だつて、何度も言つてる だろう』

『名前を騙つてるだけでしょ？』

声がおかしそうに言つ。そこでだれかがしゃべつて『う』といふよ りも、スピーカーをおして話しているよ『やめやめ』『う』といついた。無線とか、ラジオとか、テレビとか、そのたぐいだ。

『　リン？』

両手のアイスを車にぶつけないよ『こ』、慎重に頭をつっこんだ。おじいさんが表情を和らげながら、ストラップでぶら下がつた石鹼 みたいな箱を指差す。箱は携帯用のテレビで、小さな画面にリンの顔がいっぱいに映つっていた。映像は揺れていて落ち着かず、たまに背景がちらりと翻り込んでくる。どうやら自分撮りをしていくよ だ。

リンは待機中といつた感じでほんやりしていたが、エレノアがも う一度声をかけると、まばたきをして焦点を合わせた。目が合つた とたん、リンは笑顔をはじけさせた。

『あ、いいの持つてるね』おちゃらけた様子で言つ。『つちのコ ックも、チョコミントが好きなのよ』  
『よかつた』思わずエレノアは口走つていた。胸がじんわりする。  
『あ　会えてよかつたって意味』  
『わたしもよ。　ところで付き合つてくれてありがと』こんな ところまで来させちゃつて

「あなたに会えるならどこにだって行く。羽が生えた服だって着る」「で、においは取れた？ 連中といつしょにいると、シャワーの」「二回じやにおいは落ちないから、たいへんよ」

「その場面はカットされたようだ」

「そうなの？ どうして？」

「さあ。どうしてだらうねえ」テレビに向かつておどけたように肩をすくめる。どうやらふたりは付き合ひが長いらしく。「注文しないなら出てつてくれ」

「はいはい。じゃ、チヨコレートファッジをひとつね」

「まいど」

アイス屋のおじいさんがリンのぶんを用意しているあいだ、エレノアはカウンターにひじをついて、うつとりとリンを眺めていた。実際に会つたり握手したりはできなかつたが、まるで特別な友達のように笑いかけてくれた。それでもうじゅうぶんだつた。部屋にぶちまけて散らかしたまだつた親戚のおばさんや子供時代の思い出を、急いでたたんで新しい引き出しにしまいくむ。そういうえば、かなりひどい顔をしているにちがいない。エレノアはほてつた顔をなんとかしようとしたが、両手にアイスではどうしようもない。

「わたしも去年はそんな顔をしてアイスを食べてた」リンが言つた。「専門家じゃないし、わたしも人のことはまったく言えないんだけど、話をしてみる？ 聞いてあげるよ」

「いいの。雰囲気が暗くなるから」

「じゃ、聞かない」いつのまにかアイスを手に持つていた。「ただ食べるだけ」

手持ちのカメラをいつぱいに引き、乾杯するよつにアイスを掲げた。

「あなた、ビーハンくるの？」

「トイレ」

「連中から逃げてきたのね」

「それもあるけど。この家にはトイレがひとつしかないから。用を

足したくなればみんな帰るでしょ」

リンはひょいと眉を上げて、チヨコレートのアイスに口をつけた。

複雑な表情でうなる。

「うーん。便座にすわって食べるなんて。一生忘れないぞう」

「ははは」エレノアは声を上げて笑つた。自分の歯を立てる。

「申し訳ないんだが、時間がない。本題に入ろう」

「本題つて？」

おじいさんは携帯テレビを壁からはずし、向こう側から外に出た。リンが遠ざかりながらエレノアに笑いかけ、手を振る。陰でしばらくどたばたやつたあと、折りたたみのイスとテーブルをわきに抱えて小走りに駆けてきた。テーブルを広げ、イスを広げる。イスはキャンプで使うような安っぽい代物で、背もたれに銀色の星マークがプリントされている。

「さ、スターはこちらに」

たぶん自分のことだうと言われたとおりにすわった。小さすぎるとえに柔らかい地面にパイプの脚がめりこみ、お望みとあらばいつでもひっくり返れそうだった。エレノアはスカートを肘で押さえ、中身が見えないように脚を組んだ。

おじいさんは携帯テレビをテーブルに置き、よつこらせつとベッドのイスに腰かけた。

「申し訳ないんだが、時間がない。本題に入ろう」

「本題つて？」

「ふたりとも、レコードが壊れちゃったの？」

リンがツツ「ミを入れる。おじいさんは不機嫌そうにテレビを見下ろした。分厚い手を組んでテーブルに寄りかかり、「これから大事な話が」と言いかけたが安っぽいテーブルがぐらぐらしてすっ転びそうになつたのでやつぱり膝の上に手を戻した。

「見てのとおりわたしはただのアイス売りなのだが、リンに助けを求められたのだ。テレビ界と現実の均衡をもとに戻さねばならん」「どんなことになつてゐるか、あなたも知つてゐるでしょ？」

コンがいつになくシリアスな声で言った。テレビ界をもとに戻す、  
といふのは大賛成だ。エレノアは言つべきことを考えながら右側の  
チョコミントを攻め、かなりの損害を与えた。

「今日はさんざんだった。ミーカがテレビから話しかけてきて  
『きみを監視している』って言つし、テレビは壊しちやうし、演技  
の下手な警官とかへんな毛むくじやらが出てくるし。家を破壊され  
ちゃつた。でね、ミーカはわたしの番組をつくるんだつて。どうや  
るか知らないけど、このことをきかないとおもしろい番組をめちゃ  
くちゃにしてやる、つて。実際しつちやかめちゃか。テレビも現実  
も」

「あのハナクソ喰らいが」おじいさんは汚い言葉を使った。「いま  
でこそ神さまだなんだと威張りくわついているが、わたしはあいつが  
小僧のころから知っているんだ。とんでもない悪ガキでな、わたし  
は何度も言つてやつたんだよ、『ハナクソは喰うな』ってな。『耳  
クソならいいの?』と平気な顔で聞き返すもんだから、『喰えるも  
んなら喰つてみろ』と怒鳴りつけた。そしたらやつにさん、耳に指  
をつつこんで、ほんとうに耳クソを喰いやがつた。そしてなんと言  
つたと思つ?」

エレノアはかなり聞きたくなかったが、話の流れでしかたなくた  
ずねた。「なんて?」

「『思つたよりも苦いんだね』だと」

「もしもーし」

リンがこちらをのぞきこみ、手を振つている。

「耳クソを喰う話をしたこの子を呼んだわけじゃないでしょ?」

「そうだ。時間がないのだ」

リンは真顔でエレノアのほうを向いた。「あなたが狙われている  
のは、力があるからなの

「力?」

「番組と現実をじつちやにする力だ」とおじいさん。

「だからミークはあなたを利用してゐる。現実を番組をひっくり返

すためにな」

「でも、両方をもとに戻すのに、どうしてわたしが必要なの？」

「逆もまた真なり」

おじいさんは厳かな調子で言った。が、だれも反応しないので急に不安そうに付け加えた。「意味は合ってるかな？」

「このおじいさんが言いたいのは、現実と番組を『じつぢや』にできるなら、もとに戻すことも可能だってこと。あなたはこの事態を收拾できる唯一の鍵なのよ、エレノア」

「やうこひ」と、おじいさんはほっとして言った。「ぜひ、力を貸してくれ」

エレノアはふと思いついた。「『31』も終わっちゃうの？」  
「やうね。でも、もともと今日で最終回だつたから。しょうがないのよ」

「おもしろかったのに。わたしのこあばんのお気に入りだった」「ありがと」

「新番組の予定は？」

「つづくん。それにこの状況じゃね。ほかの番組は、どんどん退屈で、意味不明で、いががわしくなつてきている。おもしろい番組は打ち切りになつて、新番組がぞくぞくとスタートしているの。たとえばなんだつけ？」

「『数学その一』だ」おじいさんが引き継いだ。「視聴者参加型で、数学の問題を解かせる番組だ。あれはひどい」

「ほかにも『量子力学』とか

「まったく笑えないんだ」

「あと、『会社勤め』なんてのも。主人公は会社に行って、お昼を食べて、イスにすわって、時間が来たら帰るの。それだけ」「タイトルは傑作だけどな」

「『年中行事』」リンはローンをかじった。

「くだらん連作ドラマだ。 そりそり、『それぞれの結婚』つてやつ。あれもひどかつたぞ」

「だれも離婚しないの」

「『街角お笑いパフォーマンス』も」

「それ、おもしろそうじゃない」エレノアは口をはさんだ。  
「ぜんぜん。本人たちがおもしろがってるだけ。それから」

エレノアはチョコミントにかぶりつきながら、次々と退屈な番組を挙げるふたりの話を聞いていた。ひとつを平らげ、もうひとつに顔を向けながらべとべとの手をさまよわせた。ドレスで拭こうとして思いとどまり、おじいさんで拭こうとしてイヤな顔をされ、しかたないので地面に手を伸ばして草でぬぐつた。

ネタが尽きたのか、リンがため息をついた。「ひじこ世の中

「まるでテレビ現実だ」

「なに?」体を起こしてエレノアは聞き返した。

「『テレビ現実』だよ」おじいさんが繰り返す。

「わたしたちが見るテレビのこと」

「あんたらの現実を見るんだ」とおじいさん。「退屈な現実をな」「じつちは世の中楽しいことだけだから、たまにはテレビ現実を見て退屈な気分になるのよ」

「家族で夕飯を食いながらな」

エレノアは混乱し、しばらく固まっていた。アイスが垂れてきたので、急いでベロでローンのまわりを舐めた。「つまり、テレビ界ではテレビ番組が現実つてわけね?」

「そういう言い方たは無神経だと思つ」おじいさんはエレノアを見据え、低く抑えた声で言つた。「『テレビ番組』なんていうのはな」「めんなさい」エレノアは謝りながら、なにに対しても謝つているんだろうと思つた。「退屈なほうがいいの?」

「当然だ。テレビ現実だからな。退屈で平凡で、飽き飽きするようない内容ほどいいのだ」

エレノアは、だいぶこんがらがつてきた。

「だいぶこんがらがらつてきたんだけど」「エレノアの舌もこりゃらがらつてきた。

「ようは、まつたく正反対を目指せばいいってこと」

「まずはテレビ現実をもとに戻さねば。もとの退屈な状態に」

なんて間の抜けた話なんだとエレノアは思った。たしかにいきなり殺人事件が起こつたり、ヘンなファンタジーのキャラクターが家に出現してインターネットをはじめられるのはまつたく迷惑な話なのだが、わざわざがんばつて現実を退屈にしようとしている。がんばらなくても自然と退屈になるものなのに。

だがエレノアとしては、おもしろい番組がなくなつたら死んだも同然だつた。べつにエキサイティングな人生を望んでいるわけじゃない。ふだんどおり、おもしろいテレビを見ながらだらだらする生活を取り戻せるなら、なにが現実だかかなりあやしくなつてきてはいるのだが現実のことであればなんだつて協力するつもりだつた。それに、もとに戻ればリンの新番組を眺めるかもしれない。

「わたしはどうすればいいの？」

「協力してくれるのね。ありがと。ここにあなたがいれば、抱きしめたところなんだけど」

「今度お願ひ」「エレノアはうつとりと言つた。「ぜひ」

「やるべきことは簡単だ。敵さんはいま、現実世界をを使って番組制作を進めている。脚本を書き、俳優を雇つてな。しかしながらごともそうなのだが、経験が浅いうちはトラブルつづきだ。現場は混乱し、スターはわがままを言い、ギャラの支払いは不明確。そもそも自分たちがなんのためにやつているのか、まつたく見えていないのだ」エレノアはマクドナルド付近で発生した警察官と犯人のやり取りを思い出した。

「たしかに、番組になつてなかつた」

「だからミーカは、大物監督を雇つたつて話よ。ジョン、ナントカつて人。インタビュー番組、見た？」

「いいえ」

「現実はそのように、おもしろかつたり、感動したり、じきじきわくわくするもんじゃない。連中がしつかりした『番組』をつくれるようになつてはおしまいだ。そつなる前にだ」

おじいさんは立ち上がり、バンのほうへいそいそと走つていった。そのまま向こう側へ消える。

「どうかしたの？」ヒレノアは足を組み直し、リンにたずねた。

「計画の準備」

リンは手持ちのカメラを積み重なつた雑誌の上に置いて、トイレットペーパーを巻き取つて手をぬぐつた。

「あの人ね、ただのおじいさんに見えるでしょ？」便器のふたを上げて紙を落とし、水を流した。「でもほんとのところ、神さまなの。テレビの神さま」

おじいさんが戻つてきた。「正確にはちがうぞ。わたしは引退した身だ」

よつこいしょとイスに腰かけ、かなり厚い紙の束をテーブルに置いた。

「神さまを引退？」

「もう歳だからな。それはいいんだ。さつき、わたしはサトウキビを栽培していたと言つただろ？」

エレノアはうなづいた。

「やめてからは、自分の人生について考えた。そして心の声に従い、夢を追いかけることにしたのだ」

「神さまなのに？」

「神にもできないことはあるぞ。たとえば物語の創作」

「どうして？」

「わたしは物語を書かれるほうだからな」

「作家になりたかったの」

「いや。脚本家志望」

おじいさんは親指を舐め、紙の束を繰りはじめた。だいたい三等

分し、ひとつをエレノアに、ひとつを携帯テレビの前に置いた。

「これは『テレビ現実』用のシナリオだ。まずはこの中から、最高に退屈なシナリオを選ぶのだ」

「おじいさんが書いた脚本？」

「わたしが書いたものも混じっているが、ほとんどは一般公募で集めたものだ。選考を手伝つてほしい」

「わたしたちには、退屈つてよくわからないから」

リンが言った。エレノアは割り当てられた紙の束を見下ろし、それからふたりを交互に見た。退屈なら任せるとでも言えればふたりを安心させられるところだったが、言いたくなかったのでやめておいた。

そんなわけで、エレノアを中心に退屈なシナリオ選びをはじめた。

「これなんかどう? 『ぼくはパンがきらい』っての」「エレノアはさつそく選んだ。『あらすじは『男がパンを喉に詰まらせて死んだ』』

「だめだ、おもしろくない」

「おもしろくないよ」

「パンが人生の無常さを暗に示しているだろう」

「考えすぎだと思つけど」

「次」

「えーと」「リンはテレビの角度を調整してもらい、自分の割り当てを読んでいた。「ページ、めくつて」

エレノアはめくつてあげた。リンが発表する。

「題名は『鮫 鮫 ぱにつく』で」

「いらん。現実では鮫に襲われたりしない」「襲われる場合もある」エレノアは意見した。

「ちょっと買い物に出て襲われるというものでもないだろう

「ちよつと買い物に出て襲われるというものでもないだろう

「『ふたりは親友』」「エレノアは途中まで黙読した。「これ、そつとうつまらない。ただ話をしてるだけ。オチもないし、筋もない。キャラクターも魅力がない」

「『親友』というのがひとつかかるな。『ふたりはほとんど赤の他人』だつたら採用していたかもしけんが」「友達いないの?」

おじいさんは答えなかつた。

「あ! これ、おもしろくなさそう」リンが声を上げた。「タイトルは『ぼくは妹に恋をした』。 わーお」

「期待できそう」エレノアはさぶいばを立てた。「内容は?」

「血のつながっていない妹がいて、なぜか両親は事故で亡くなつていて、主人公が妹の行動をひたすら観察してゐる」

「却下。いかがわしすぎて先が気になる。それに、その手の話はテレビ界の闇マーケットじゃ大人気だ」

「ねえ、わたしが選ぶんでしょ?」エレノアはつっこんだ。

「 そうだつた。つい、指図する癖が」

エレノアは次の脚本を取り、題名を読み上げた。

「『家族』。ストレートだし、興味を惹かれない」

またおじいさんからツッコミが入るかと思ったが、注意されたのを気にしているのかなにも言わない。

「家族は、ふつうだよね。『朝。一家は朝食を食べる』。ここからセリフ。『おい、かあさんや。そのサラダを取ってくれんか』

「

「なにそれ。時代劇?」とリン。

「現代みたい。だけどみんな、セリフが妙に年寄りくさいの。子供まで」

「だれが書いたの?」

おじいさんはなにか言いたげに口をもじもじさせっていた。

「その わたしが書いたものだ」

「最高につまらない」エレノアは心から褒めた。「先を読むのが苦

痛だもん

「やるじゃない」

おじいさんは最高に複雑な表情を浮かべていた。

「ひとまず、これで行きましょうよ。時間もないことだし」

「出来レースだと思われるかもしれん」

「このあとは?」Hレノアが聞いた。

「ほかの脚本も見たほうが……」おじいさんはまだぐずぐずしていたが、リンにせつつかれて今後の展開を話しあじめた。簡単に言うと、おじいさんが（どうやるのかは知らないが）現実世界に残り、退屈な脚本を抱えて世直しの旅に出るということだった。

「とりあえずはこの脚本で足りるだろうが、退屈なシナリオがもつと必要になる。あんたには今後もけっこう選考を手伝つてもらう

「わかった」

「テレビ界を直すのは簡単だ。ミーカに説教を垂れてやればいい」

「うん」

「最後にあんたを

「リンがさえぎった。『それはあとで。それでなくても混乱してると

んだから』

「情報は小出し」、か。なるほど「おじいさんはうなずいて、Hレノアに向き直つた。「住所を教えてくれ。定期的に脚本を送るから」「

住所で思い出した。『そうだ。電話していい? 実家に』

Hレノアはポケットを探つたが、ポケットなどどこにもなかつたので手だけが素どおりした。ティンクだつたのを忘れていた。まったくいまいまいことだ。

「家が完全に破壊されたから」Hレノアはだれに言つづくでもなくつぶやいた。「住まわせてもらわないと」

「ご両親とは、あまりうまくいっていないよ」

Hレノアはうなずいたが、いかにリン相手でも、もう一度あの話をする気にはなれなかつた。

「電話はそこにある」おじいさんは携帯テレビを指差した。

「そう。わたし」リンが冗談めかして手を振る。

「リンが電話してくれるってこと?」

リンはなにか言いかけたが、おじいさんが無造作にテレビを持ち上げたので口を閉じた。おじいさんはテレビの背中側を見てながら探している。なだめるように「すまん、もつ少しで終わるから」とつぶやきながら、縦にしたり横にしたりとこねくりまわすうち、スイッチかなにかを探り当てたのかカチッとう音がした。

縦にして両側から押しつぶすと、厚さが半分になった。おもしろいようにどんどん折りたたまれていく。仕上げにアンテナを伸ばす。できあがりはどこからどう見ても携帯電話だった。

おじいさんから受け取った。液晶部分に数字が浮かび上がっている。リンの姿はない。

「リンはどこへ行ったの?」

「心配ない。テレビに戻せばまた話ができる。変形させるのはかなり複雑だが、これを読めばわかるだろう」「

説明書を受け取る。ペラペラの紙一枚で、細かい字でびっしりと注意書きが記されている。見出し部分に太字で大きく「注意! 話しかけないでください」とあった。

「そいつはデジタル家電製品ならなんにでも変形できる万能機械だ」「すごいね」

「そこ」が厄介なのだ。なんでもできるところのがな。なんでもできますよと言われたときにかぎって、なにをすればいいかわからなくなる。『どんな音楽を聞くの?』『なんでも聞きますよ』『たとえばどんな?』『えーと』といつも話がしようとひきりまつあるようにな

「わたしはテレビが見たい」

「であれば、テレビを買えばいい。なんでもできるから」相手にされず、そんな世の中に絶望している。昔は、自ら持ち主に提案していたようだよ。『音楽は聞きます? パンでも焼きましょうか?』

ラベルのプリントなんかどうです?』と。だがそのうちすっかり  
イヤになって、ひきこもりの真っ最中というわけだ。天才家電の宿  
命だな

エレノアは注意書きを読んだ。「『この子の名前はマーイエです。  
変形させるとときは謝つてください』だつて」

実家の番号をダイヤルする。すると急に暗くなつた。暗くなつた  
ときにはだれもがするように、エレノアは空を見上げた。くすんだ青  
空に雲に太陽、それらは頭上からまるごと消えていて、代わりに黒  
くて半透明な夜空がおおいにかぶさつていた。妙な感じだつた。夜空  
はこんなにつやつやしていないし、近すぎる気がしたし、「ゴゴゴ」と  
うなつて大地をゆらしたりもしないはずだ。つやつやの夜空に向こ  
うに、赤や黄色や青の染みがぼんやりと渦巻いている。美しいとい  
えなくもなく、星雲のようにも見えたが、洗濯物のようにも見えた。  
「敵の宇宙船だ! 遅かつたか」

おじいさんがわかりやすく叫んでくれたのと、空を端から端まで  
見たのとで、ようやくふつうの空でないことを理解した。大きすぎ  
て一望できないしこういかげん首が痛くなつてきたのだが、四角くて  
白っぽく、中心にまるい窓があるようだつた。宇宙船だというのは  
納得が行かない。どう見ても巨大なコインランドリーだ。

「はやく車に乗れ! 逃げるのだ!」

こつちへ来いという身振りをしながら、車に乗り込んだ。エレノ  
アは携帯電話を取り落とした。あわてて拾う。おじいさんが運転席  
からなにとか怒鳴つたが、振動が激しそぎてなんと言つたのかま  
つたく聞こえない。

エレノアはよろめきながら車に向かう。一步また一步と裸足で大  
地を踏みしめていたのだが、そのうちだんだんと大地を踏みしめて  
いなくなつていつた。足もとにどんどん空気が集まり出し、エレノ  
アを持ち上げた。宙を歩いていたのはほんのわずかで、その後は文  
字どおり空気におみこしを担がれ、そして放り上げられた。空中で  
じたばたし、さかさまになり、仰向けになる。われながらひどいあ

りさまだと思い、どうしたら空中でまともに恥ずかしくない格好ができるだろうかと考えた。

ちょうど仰向けになつたときに気づいたのは、湖ほどもある（よ）うな気がする）コインランドリーの投入口がパッククリと開きはじめ、にやけた口をこちらに向けているということだつた。投入口に吸い込まれようとしているのだとわかり、またじたばたした。そのせいで頭が下を向き、だいぶ遠ざかつた縁の大地が目に入った。落ちたら死ぬような気がしたので、逆らわずに吸い込まれようと思つた。ただ、どうすれば恥ずかしくない格好でいられるのかだけは教えてほしかつた。

携帯テレビ（いまは電話だ）がぶるぶる震えだした。ひとことでは言いあらわせない複雑な回転をしながら苦労して液晶画面を見る（と、実家からだつた。よりによつてこんなときに。エレノアは無視することにした。親はきっと娘を心配してかけてきたのだろうが、いまは自分のことで手いっぱい、とても親と話す気分にはなれないのだった。

ランドリーの投入口は半分も開いており、にやけた口にはもはや見えなかつた。完全に洗濯機に見えた。中には何千人分もの洗濯物が大渦巻きを演出していた。なにをされているのかといえば、洗濯されているんだろう。渦の中からこの世のものとは思えない人間の悲鳴がいくつも聞こえ、ああやつぱり電話に出ればよかつたと後悔した。

「心配するな！」おじいさんの声がかすかに聞こえた。「ただのテレビ番組だ！　てきとうにあしらえ！　だらだらするのだ！」ぶら

ぶらしろ

「

## 10話 テレビ化した日常

リュックはしばらくカラー・パターンの中を這い進んでいたのだが、なんの前触れもなく目の前にエイミルの疲れた顔があらわれた。そのせいではしばらくのあいだ、リュックの世界はエイミルの顔だけになつた。面接で会つたときもそうとうお疲れの様子だったが、いまは生きているかさえ疑わしい状態だつた。まぶたは垂れ下がり、とくに右側はほとんどくつきかけていた。口もとはだらしなく開かれていて、いまにもよだれが糸を引きそうだ。正気を保つているのは頬だけのようで、こんな顔にはいたくないとひくひく動いては逃げ出そうとしている。

他人の顔がいきなり目の前に出現したというのに、エイミルはなんの反応も示さない。それなので、逆にリュックのほうが自分の存在を疑いはじめた。

エイミルの口が、ついによだれを垂らした。  
リュックの脳みそが必死になつて動き出した。四つんばいになつている。ハイハイはしていないようだ。手とひざがひんやりする。下を見て納得した。リュックはいま、ガラステーブルの上でハイハイしていなかつたのだ。

小ちんまりとした部屋で、壁がまるつこくカーブしていた。テレビがあつて、アメーバみたいな形のホワイトボードがあつて、おしゃれだがなんだかよくわからないぐにゃぐにゃしたオブジェがあつた。壁掛け時計は針が十三本あつて、それぞれの数字を指したままピクリとも動かない。残りの一本だけが活発に動いていて、恐る恐るといった感じでほかの針に寄り添つてみたり、気が狂れたようになるとぐるぐるまわり出したり、縁の部分に触れないだろうかと背伸びをしたり、いたずらっぽくほかの針の後ろに隠れてみたりしている。疑いようもない。ホームのオフィスの一室だ。

あらためてエイミルの顔を見た。顔だけじゃなく全体を見た。ソ

ファにだらしなくすわり、ジャケットが肩からずり落ちている。シヤツは染みだらけだつたし、ネクタイの上からネクタイを巻いていた。すでに巻いているのに気づかず、うつかり巻いてしまったのだろづ。

「久しぶりじゃないか」一本ネクタイが口を開いた。顔が全体的にひきつっていたが、どんな表情を浮かべたがっているのかわからな。 「どこへ行つていたんだ、三ヶ月も無断で欠勤して」

「三ヶ月？」

「ドーラマじやないんだ、繰り返さなくてもいい。指折り数えていたから」 声が尻すぼみになる。「きみの勤務態度は すばらしいという報告が

「こゝ、もしかしてオフィスですか？」

「もしかして会議室だ」

エイミルはうわごとを言いながら腕をゆっくりと持ち上げ、テーブルの向かい側を指差した。

「そしてきみがいまケツを向けているのが、取引先の社長で」 急に言葉を止めた。目が裏返り、がくんと仰向いて頭を背もたれにぶつけた。「名前は」

「わたしはスノツリだ」

社長とやらが尻のほうから話しかけてきた。リュックは頭を下げ、股ぐらをのぞいた。白髪の老紳士がさかさまになつてゐる。

「よろしくな」

「まさらどうすることもできないので、リュックはとりあえずあいさつを返した。「はじめまして」

スノツリ社長は口ひげがおしゃれで、微笑みは温和そのものだ。寄り添う孫にヴエルタース・オリジナルあげて特別な気分にさせるようなタイプだつた。

「さあ、握手をしよう」

腰を浮かせ、リュックの股の下に手を差し入れる。リュックも手を伸ばして、あれこれ苦労しながらもなんとか四次元握手を成功さ

せた。

「こちらの 会社は 「エイミルは呼吸が浅くなつてきている。

「なんか 宅配業みたいな 」

「宅配業だ」スノツリ社長はうなずいた。リュックのふくらはぎをぽんと叩く。「きみ、名前は？」

「リュックです」

「なかなかパリッとした若者じやないか、エイミル」

「そうですね 」と言ったきり、エイミルは動かなくなつた。「シャキッとしているな」取引先の腕がソファからだらりと落ちても気にする様子もなく、スノツリ社長はえびす顔でつづけた。「目の前に突然あらわれる心意気というのかな。感心したよ。若いうちはそうやって体を動かし、仕事を覚えるものだ。フットワークが肝心だからね」

しばらくリュックのふくらはぎを撫でていた。リュックもどうしていいかわからず、撫でられるがままになつっていた。

「そうだ、名刺を 」と言いかけてから、スノツリは大げさに口を開けて驚いたような表情を浮かべた。「いいことを思いついたぞ。わたしもきみにケツを向けて渡すとしよう。若者は見習わないと」リュックは丁重にお断りして、テーブルからそろそろと足を下ろした。ふかふかのじゅうたんが足の裏をくすぐり、そういうばパンツ一丁で首からタオルをかけただけの格好だったと気づいた。だが、「にじ」とも気づくのに遅すぎるということはない。あわてるな、と自分に言い聞かせる。スノツリもエイミルもまったく氣にしていないようだつたし、社長などは「若者を見習つて」ズボンを脱ぎかけたほどだ。素っ裸に近い状態で会議の席に乱入するのは、ビジネスマナー上むしろ歓迎されることなのかもしれない。

ということで、リュックは久々に社会人として振る舞うことについた。

「繰り返しになるが、われわれの会社は宅配業をやっている。シェアは三番目だが、大陸一のスピードを自負している。ヤバいん

だ

「なにがですか？」

「スピードがだよ。鬼はやい。注文したら即お届け。十秒と待たせないんだ」

「そんなことが可能なのかな」リュックはつぶやいた。どこかでそんなことがあつたような気がする。

「顧客が望んでいることだからね。ニーズに応えるのが会社の使命だ。顧客のためなら法も犯すし物理の法則だつて捻じ曲げる。本来なら注文する前に届けるべきなんだろうが、そいつは少しばかりS F的すぎるかな。どう思う?」

リュックは自動販売機を指差した。「一杯やつてもいいですか?」「ああ、かまわんよ」

自動販売機の前に立つて、オレンジジュースのボタンを押した。ビジネストークは多少酔っ払ったほうがスムーズに運ぶし、それに少しでも裸でいる理由がほしかった。ふつうは飲んでから脱ぐものなのだが、どっちが先でも結果は同じことだ。

カップに注がれたのはオレンジリキューではなくカルーアミルクだった。会社というのはなかなか思いどおりにはいかない。

「さあ、社交辞令はもういい。すわって、すわって」

リュックはコップの中身をすりながら、すわる場所を探した。一人用のソファがふたつで、空きはない。

「こういう場合、どこにすわればいいんですか? ビジネスマナー的には」

「あつ」と、突然エイミルが蘇生した。震えながら大きく息を吸う。「わたしの

と言いかけてから、足を投げ出しソファの上で大の字になつた。

「わたしのおなかにすわるといい」

「テーブルの上でもいいぞ」とスノツリ社長。

「でなければ」「エイミルは禁断症状かなにかのようにぶんぶん首を振つた。「いや、それはダメだ。頭の上にはすわらせないぞ

」

リュックはかなり心配になつて、エイミルの顔をのぞきこんだ。  
「なぜそんなに疲れているんですか」

「会議疲れだよ」と答える。「ここ一ヶ月間、ずっと会議だつた。  
ぶつとおしで一ヶ月」

「どうしてそんなに会議を」

「実行に移したくないからだよ!」エイミルはパラノイア的に声を震わせた。「実行するのが怖いんだ」

「それに、会議はいいものだ。仕事をした気になる」スノツリ社長がにこやかに言った。「たとえなにもしていなくても、参加しているんだ、という満足感がある。夕方には心置きなく飲みに行けるといふわけだ」

アルコールもまわり、だいぶリラックスしてきた。リュックは床にすわり、壁にもたれた。「どうぞ、つづけてください。ぼくも参考しますよ。ぼんやり眺めてるだけだけど

ふたりは会議を開いた。なにを話し合っているのか少し気になつたのでしばらく様子を眺めていたが、すぐにやめた。することといつたら五分に一度「どうしましようかねえ」とつぶやき、あとの時間はうなりながら腕を組んでいるだけだったからだ。それに飽きたとテレビを見はじめた。奥さまのあいだで大人気の昼メロ『愛のホスピタル』を見ながら、ジャクリーンの行動は不自然なできつと浮氣をしているにちがいないと指摘し、アイーダの本命はだれなのかを熱い口調で話し合っている。

文字どおり腰を落ち着けて、リュックは今後のことを考えはじめた。アイーダはベネディクト院長に弱みを握られているから、たぶん関係を持つだろう。若手医師のエディは一度アイーダの家に遊びに行つていて、かなりいい雰囲気だつたからこちらもチョメチョメするのは時間の問題だ。エディは院長の逆鱗に触れ、おそらく仕事をクビになる。しかもジャクリーンはエディと親戚関係にあるので、原因となつたアイーダとの仲もおかしくなるはずだ。結局全員がお

かしくなるのだ。全員チョメチョメしてドロドロする。そんなバカなと言いたくなるが、ドラマだからしかたがないのだらう。

『愛ホス』の展開も読めたところで、リュックは今度こそ自分の今後について考えることにした。エレノアの行方も気にかかったし、得体の知れない生物に破壊された家の中もある。いままで人生どうにかなるだろとしか考えず、実際にどうにかなってきた。しかし今度のは、理解の範疇を軽く越えている。暗殺者に追いまわされるとかならまだ理解できなくもないのだが、テレビっ子がテレビの神さまに目をつけられたなんて話は、どんなドラマやドキュメンタリーでも聞いたことがない。昼メロみたいには展開は読めないしそうと厄介だつたし、ついでに言つてしまふと、どきどきもわくわくもしない。出演者は楽しくないものらしい。

やれることはいまのところなさそうだった。それとも、映画の主人公みたいにもつと悩んだり、エレノアの名前を叫びながら走りまわつたりしたほうがいいのだろうか。無意味とわかっていても。

「番組の途中ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします」

リュックは顔を上げ、テレビに目を向けた。昼メロから報道スタジオに切り替わり、独身ゆえに人気の美人キャスター、クリスタが原稿を読み上げる。

「三ヶ月前に突如飛来した謎の宇宙船について」

エイミルは素早くリモコンを向け、テレビを消した。

おもしろいユースでしか聞けないような単語が耳にこびりついている。リュックは膝を立てて立ち上がりかけた。

「宇宙船つて、なんの話ですか？」

「なんでもない」エイミルは早口で言つた。「たぶん、おもしろいユースだろう」

「昼メロの真つ最中に？」

「番組はわれわれが決める」とじゃない

スノッリ社長が割り込んできて、子供に言い聞かせるような口調で言つた。「宇宙船なんて実在しないんだよ。わかるね、リュック

「でも、ニコースで……」

「きみはタブロイド新聞の記事も鵜呑みにするのかね？　『世界初、魚がレー・シックで魚眼矯正』みたいな記事を？」

ノックの後、ドアが開いた。女性の社員がすかずかと入ってくる。憮然とした表情で、手にした赤いバスケットをテーブルの上に叩きつけた。中身が驚いて飛び上がる。フライドチキンとポテトだ。

女性社員は出ていかず、テーブルの前に立つたまま、エイミルをにらみつけている。憎々しげな表情が決意に満ちたものに変わり、それから顔を真っ赤にしてあごを震わせ、半分泣き出しかけた。

「この××野郎！」指を突きつけ、涙混じりに汚い言葉で怒鳴った。

「あなたはもう終わりよ！　覚悟しなさい、この腐り切った××の

××め！」

女性社員が話すたびに、ピーという音がどこからともなくかぶさる。「テレビ番組だ……」リュックは思わず口走った。エイミルを見る。しわしわのまぶたがゆっくりと開き、青い目が正気を取り戻しているのがわかった。女性をぎろりと見やる。

女性社員の手には黒光りする拳銃が握られていた。銃口をエイミルに向ける。エイミルは仰天した顔で肘かけをつかみ、体を起こそうともがいた。大声でなにごとかを叫ぶ。女性社員がぴたりと照準を合わせ、引き金に指をかける。開きっぱなしのドアから警備員が入ってきて、皿を見開く。最短距離で女の背後に駆け寄り、一方の手で拳銃を持つ手を、もう一方で体を狙い、押さえつけようとする。これら一連の動作は、まるでスローモーションのようにきわめてゆっくりと進んだ。しかしよく見てみると、実際スローモーションだった。

「やーめーるー」エイミルが野太い声で叫び、かばうよつて手を上げた。

不安をあおるクラシック調の音楽が聞こえてきた。リュックは部屋を見まわした。そして、自分だけはふつうに動けることに気づいた。女の指が少しづつ引き金をひいている。リュックは跳ね起き

て女に駆け寄り、拳銃をつまみ上げた。ずつしりと重い。

どこに置こうかと部屋を見まわしてその場で一回転したあと、くすかごを見つけた。中に拳銃を落とし、ほっと一息ついた。

壁に寄りかかり、あらためて連中を眺める。女の指はまだ気づかず、「の字に曲がったままだし、警備員は器用にも両足を宙に浮かせたままちょっとずつ前進している。また現実で番組が起こった。リュックはウンザリしてコップの中身を一気にあおった。テレビを買った帰りに出くわした警官たちを思い出す。連中は台本もなく、監督もいない状況で、ひどい演技をしていた。だが今度のはちがう。シチュエーションは意味不明だしスローモーションもありきたりだが、以前はこんな演出はなかつた。それに女性社員の演技はかなり迫力があつた。役者のほうも上達している。ほんとうに三ヶ月経っているのだとすれば、そのあいだにスタッフも役者も技術を磨いたにちがいない。

事態は悪いほうへ転がっている。そのうちもつと大がかりになつて、大陸じゅうで戦争がはじまつたり、そこらじゅう悪漢やヒーローやスペイだらけになつたりするのだろうか。日に一回はへんな生物と遭遇し、通りの角を曲がるたびに女性とぶつかつて運命的な出会いをしたりするのだ。

「だからなんだってんだ」

リュックは紙コップを握りつぶした。くずかごのほうへ無造作に放り投げる。けつこう距離があるのだが、どんぴしゃのど真ん中に入つた。

それを見て、急に不安な気持ちになった。いまのは妙にカッコつけたしぐさだつた。「だからなんだってんだ」だつて？ いつからそんな気取つたセリフをはくよくなつたのだろう。

リュックは急いで自分の格好を見れるだけ見た。しましまパンツにバスタオル。ヘソ毛がパンツから顔をのぞかせている。なんてマヌケな格好だろうと思い、酒の勢いも借りてげらげらと笑つた。そうして危ういところで自分を取り戻すことができた。

冷静になつたところで、ふいにやるべきことを理解した。テープルのバスケットからフライドチキンをひとつ取つて、銃の代わりに女に握らせた。

大型テレビがパツとついた。

「揚げもので殺そうとする女の『メディ』か。なるほど」

テレビには、頭をハゲ散らかした不機嫌そうな男が映つていた。

「ウイットのつもりか？ モンティ・バイソンみたいな。おまえは『メディ』アン志望なのか、ん？」

男はメガネをすり下げて額にしわを寄せ、のぞきこむよつこリックを見た。

モンティ・バイソンとはなんだらうと思ひながら、男に聞いた。「あんたは何者だ？」

男はふつと吹き出し、大きな顎を揺らして笑つた。

「いいな、それは。おまえは男前だがパツとしないから、連続ドラマ向けだ。『ヒーローズ』に出たことは？」

リュックはまたしても演技をさせられていたことに気づいた。警備員を慎重に避けて自販機に飛びつき、アルコールっぽいものを選んだ。コップをひつたくるように取り出す。今度はジントニックだつた。半分飲み、半分は頭からかけた。

「なかなかやるじゃないか。おれはジョン。監督だ。ゆくゆくはおまえら全員を監督するつもりだが、いまはエレノア専属でね。どういう意味かわかるだろ？」

リュックは派手にゲップをかました。なにからなにまで酒くさい。「エレノアって、だれのことだ？ このチ××頭、」

自分のセリフもマスキングされた。

「言葉には氣をつけたほうがいいぞ」ジョンが威嚇するように低い声で言つ。「テレビドラマではとくにな

「その手は通用しないよ。なにがドラマだ」もつと酒が必要だ。リュックはみたび自動販売機に駆け寄つた。途中で警備員のつるつる頭に紙コップをかぶせる。「だったらぼくは、ぼくは、問題を起

「して芸能界を干されてやる！ 公然わいせつに、未成年に酒を飲ませて そいつ、だれもぼくを使いたがらない。演技なんかしないぞ！」

ジョンは無言だった。鼻の頭をかいて、静かに言った。

「 わかつたよ。演技のことはもういい。ふつうに話そ」  
リュックはぶんぶんうなずいた。セブンスヘブンとドリゴンフライを半分ずつ飲み、標的を探して部屋じゅうをうろつりする。

「エレノアがどうしているか、おまえに伝えてやりたくてね。いま、宇宙船の中でスクリーンテストの真っ最中なんだ。雇い主の意向ですね。演技は不慣れだが、どうしてもあの才能が必要なんだぞ。おまえは心配していると思つたんだが

リュックはテープルに飛び乗った。当然、意味などどこにもありはしない。

「心配じゃなさそうだな」

「し 」だんだんろれつがまわらなくなってきた。「心配したら、身代金を要求されるだろ 」

「よくわかってるじゃないか。 まあ、いまのところはせいぜい抵抗するといい。いずれおまえも、俳優として参加してもらつ

「どんな陰謀だか 番組だか 知ったこっちゃないが リュックは何度目かわからないゲットをきました。「わざわざ自分が言いに来るなんて バカな悪役みたいだ。言わなきゃ、すんなり事が運ぶのに 」

「現実ではそうだろうがね。おれたちの住む世界ではちがう。知れば知るほど泥沼だ。なぜならば、知れば知るほど番組が盛り上がるから。そしていすれば、演技せざるを得なくなる」

「ぼくは ビジネスマントぶん。だから演技は得意だぞ。得意のセリフは 」

リュックはエイミルを飛び越えてテレビの前に着地し、鼻と口を押さえてありつたけのゲップを溜め込んだ。耳から噴き出しそうになるのをこらえ、スピーカーの穴に口をつけて残らず注入してやつ

た。

ジョンは心からイヤそうに顔をしかめた。「おまえ、酔つ払いすぎだぞ」「

すっぽり中身を畳袋に押し戻し、紙コップをふたつともHAIMILの頭の上に傾けた。しかしこのまにか空になつていった。やることがなくなつたリュックは、よろめきながら部屋を徘徊した。かなり酔つ払つたらしく、室内のものすべてがまともに見える。壁はシャキッとまつすぐだったし、卓上カレンダーが何月のものなのかわかつたし、壁掛け時計の時間も読めた。一本だけ忙しくしている針がプラスチックの透明板を内側からカチカチ叩いている。ちょうど昼休みのようだ。

「おまえはホームの社員なのか」

リュックは答えない。「この部屋、暑すぎない?」と、何度も上着を脱ぐとするが、どうしても脱げなかつた。

「そうか。そういうことか」ジョンは頬をかきながら、なにやら考えごとをしていた。「なるほど」「

「なにがなるほどだ

「家はどうする? めちゃくちゃに破壊されただらう?」

「どうして知ってるんだ

「なんでも知つてゐるわ。だが心配するな。住む場所ならなんとかなるから」

「おまえがなんとかする気なのか

「いやいや。運命のお導きといつやつだよ

「そういつまくいくかつての

「わからんよ。なに?」ともな「黄色い歯を見せて不気味に笑う。「現実でも奇跡は起つてゐる。なのにおまえらは、いつもそうだ。『起きるわけないよ、そんなバカな話あるもんか』ってな。バカはどうぢだよ。『そんなの常識だろ?』なんて賢いふりをして、退屈な人生を自ら選んでいるじやないか」

「あれが。『がんばつて奇跡を起こす』みたいな

」

「あんなアホ番組、よく見てるな」

「エレノアが好きなんだよ」

『がんばって奇跡を起こそう』は、はたらくぐるまが好きな若手芸人ヘルマンが、ある実話をヒントに地元局『RIV』に持ち込んだひとり遊び系の番組だった。その実話とは、こうだ。

ある老婦人と息子がドライブしていると、車が故障し動かなくなつた。息子は車を修理するため、ジャッキで車を持ち上げ、下にもぐりこんだ。すると急にジャッキがはずれ、息子は車の下敷きになつた。驚いた老婦人はどうしたかというと、できるかどうかなど疑いもせず、息子を助けたいという一心で、バンパーをつかんで車を持ち上げたのだ。息子は助かり、この美談は多くのニュースで取り上げられた。

そのニュースをにいたく感動したヘルマンは、それならおれもという単純な発想から、ある番組を企画した。「やつてみなくちゃわからない」と、体当たりで奇跡を起こすためにいろんな実験を試みたのだ。「素人でも火事は消せるのか」というネタでは、空き家に火をつけてから自前の消防車で消火活動を行つた（近所も何軒か追加で消化するはめになつた）。「雨乞い」は、開始から一十三日でなんとか成功させた。「スーパーモデルと付き合おう」では、狙いをつけたモデルの女を数ヶ月かけて尾行し、電話番号を入手し、自宅をつきとめ、女に交際を申し込み、こちらもみごと成功を収めた。主な勝因は持参したソードオフショットガンだつた。

番組自体は最後まで人気が出ることなく、ヘルマンがついに御用となつたことであつもなく終了した。この番組がゴールデンタイムで放送されたのがいちばんの奇跡だつた、と関係者は冗談めかしてコメントした。ヘルマンは壇の中でもなお奇跡の存在を感じていたが、くだんの老婦人が体重百三十キロで、重量挙げの元オリンピック銀メダリストであつたことはまったく知らなかつた。

「エレノアはテレビが好きだ。愛している」ジョンが抑揚のない声で言う。「退屈な人生なんだろうな。しおつちゅうテレビに話

しかけているくらいだから。おまえはどうだ？ 楽しませてあげようとか、感動させてあげようとか、そんなことを考えたことがあるのか？ テレビよりおもしろくなかったと思つたことはあるのか？」

リュックは答えなかつた。

「エレノアは哀れだな。彼氏は恋人が行方不明になつても、探そつとすらしないんだから」

「そのうち返してくれると言つたから」

「ああ、そうだな。目的を果たしたら、返してやる。ただし」

含み笑いをする。「そのあとのおまえらの関係までは保証できないがな。昼メロは好きか？」

「いや」

「おれもだ。ドロドロの情事だなんだとすつたもんだして、バカみたいだつて思うだろ？ ありえないって思うだろ？ だがそれは、機会がないからなんだ。機会があれば現実のおまえらだつて浮氣もするしドロドロもする」

「するもんか」

「いいよ。機会をつくつてやる。まあ、がんばれ。ふたりの愛情がほんものかどうか、見物させてもらひつよ」 ぞんざいに手を振る。「ではまた来週」

テレビが消えた。

と同時に、不安をあおるクラシック調の音楽もやんだ。女性社員その他もううるのスローモーションがいっせいに解け、めいめいがやるべきことを再開させた。エイミルは悲鳴のつづきを叫びながら顔をゆがませ、ソファでもんぢりうつた。暗殺者役の女はエイミルに向けて腕をつき出し、人差し指を引いた。リュックはフライドチキンだからとたかをくくつっていたのだが、バーンという音と同時にテレビに大穴が開いた。エイミルに当たらなかつたのは、引き金をひく瞬間に警備員が女におおいがぶさつたからだつた。そのまま抱きかかえるように床へ押し倒した。何者かのいたずらで警備員の頭に乗せられた紙コップが、遅れてぽとりと落ちた。

リコックは自分でも知らないうちに頭を抱えてうずくまっていた。女は揚げものを振りまわしてもがいていたが、警備員がひつぺがしがつちりと押さえこんだ。

観念したように動かなくなる。

エイミルがそろそろと立ち上がり、女を見下ろした。いまいましげに鼻を鳴らし、革靴の底を使ってフライドチキンを部屋の隅にすべらせた。チキンはごろごろ転がり、毛をいつぱいくつつけながら壁にぶつかってとまつた。

「連れていけ」エイミルは冷ややかに言った。「警察が到着するまで、例の部屋に閉じ込めておくんだ」

「例の部屋つてどこです?」と警備員。

「じゃあおまえの部屋でもいい」

「危機一髪だったな」スノッリ社長がひと口のよひで言った。

つるつぱねの警備員が女を立ち上がらせ、後ろから両手首をつかんで動かないように押さえつけた。肩に乗つかった無線機に口を近づけ、警察に連絡するよう指示する。女は振りまわせるところはすべて振りまわし、なおも抵抗する。呼吸を荒くし、ギリギリと敵をにらみつける。

ふと、リコックを見て表情を変えた。困ったように眉をひそめ、わずかに目をさまよわせた。

リコックも見返す。

だがそれもほんの一瞬のことだった。女の顔がみるみる哀願するような表情に変化した。

「あ　あなた、こいつらの仲間じゃないんでしょ?　助けて!　わたしはある人に雇われて　田的の遂行を　子供を殺されたの!」

はじめはつつかえながらセリフを口にしていたのだが、話すうちにどんどん感情がこもり、舌もなめらかになっていく。アドリブでつなげる気らしい。あまりの迫力に圧倒されかかったが、話の内容はトンチンカンだ。どうすべきかはわかっている。これは芝居なの

だ。連中に乗せられ、演技をしてはいけない。

リュックは膝を抱えて女を見上げた。「ぼくは観客だ。気にしないで」

女は、なに言つてんだこいつといふ顔をした。

「きみの芝居を見に来たんだよ」

「こ、これは芝居なんかじゃないのよ！陰謀なの！わかる？こいつらのせいだ、世界が終わるうとしているの！こいつらはワルよ！死ななきやならないの！この製品を買った人たちちはみんな」

エイミルは盛大なあぐびをかましながら、警備員に出て行けと手を振った。なぜか頭が湿っている警備員は、思い出したように女を廊下へひきずつていった。

ばたんとドアが閉じる。

「おかげで眠気が吹き飛んだ」エイミルは涙目で伸びをしながらユックのほうを向いた。「昼休みは取つた？」

「まだです」

「なら、行くといい。来週また合おう」

無造作に手を振つて、ソファに腰を下ろす。リュックは去りかけたが、いつたいどこに去ればいいのかと思い直し、振り向いた。やるべきことが（そんなものがあるとすればだが）はつきりするまでは、ここに残つて情報を集めたほうがいい。

「さつきの女性ですけど」

「ああ、まだいたのか」エイミルが顔を上げた。「気にする」とはない。よくあることなんだ」

「今度のはなかなかだつたな」スノツリ社長は夕飯の感想でも述べるような調子で言つた。赤いバスケットに手を伸ばし、ポテトをひとつつまんだ。

「あれはうちの社員なんだよ。眠気覚ました、たまに命を狙つてもらつてゐる」

と言つうエイミルの背後で、大穴開けてひび割れたテレビが煙を噴

いている。

「あなたもかなり驚いていたように見えましたけど」「演技だよ。ただ命を狙われるんじゃ、おもしろくない。社員もやる気をなくすしね」びちゃびちゃに濡れたガラステーブルに皿を落とす。なんとなく拭こうとして、やつぱりやめた。「ひとつ言つておくが、きみもこの一員なら、ああいつ場面ではちょっとは驚いたりスローで動いたりしたほうがいいな。今後のためだよ。わかつたね？」

「わかりました。あの、予備の服なんか、用意してありますか？ 部屋着でもなんでもいいんですけど」

「どうして？」

「裸なので」

「下着は何枚？」

エイミルはそう言つやになや、ぶつと吹き出した。スノッリ社長と大学生みたいなノリでハイタッチをした。内輪のジョークかなにかだろうか。

「そのへんの連中に聞けばいい」終わつたとたんに仮頂面でソファにもたれる。「ほかには？」

リュックは散らかり放題の部屋をなんとなく見まわした。

「じゃあ、ぼくは昼休みに行つきます」

会議室を出て、シャキッとまっすぐに伸びたフレームの廊下を進んだ。ひとけはない。みな昼休みに行つたのだろうか。

とにかく服を調達しなければ、外にすら出られない。順番にドアノブにひねつてまわつたのだが、すべてセキュリティで守られていた。いまのリュックはエドカードも持つていない。

ジョンとかいうやつに言わたることが、ひとつかかる。やつによればエレノアもいすれ返してくれるということだつたが、やけに含みを持たせた言いつぱりだった。演技派女優として戻つてくるのだろうか。そして昼メロがどうとか。なにを企んでいるにせよ、その手には乗るかとあらためて心に決めた。演技しないこと。これがいま

わかっている唯一の対抗手段だ。

「考え」とをしていたせいで、曲がり角に気をつけるのをすっかり忘れていた。気づくと田の前にビックリした女性の顔があつて、次の瞬間にはふたりとも見事にすっ転んでいた。

ファイルや書類がありつたけ散らばった。それはもう大げさなくらい、床が見えなくなるくらい大量に散らばった。追加で上から郵便物の封筒や小包が山ほど振ってきて、ふたりとも半ば埋もれた。リュックは思わず「クソ」と毒づいた。女のほうが先に起き上がり、しゃがみながら急いで書類をかき集める。

「クソ?」

女が手をとめてリュックをにらみつけた。「ぶつかっておいて、そんな言い方はないでしょ?」

「ちがうんだ。そういう意味じゃなくて」

リュックは女の顔をまじまじと見た。「きみ、面接のときの女のほうも気づいたらしく、メガネ越しに田を見開いた。「あなた、ネクタイの人ね」

「そうそう。ネクタイの人」

「リュック だっけ?」

「きみは受付嬢だ」

「彼女のいるリュック」

不吉な予言のようにぼそつとつぶやいた。それから怒ったように下を向き、ふたたびファイルや書類をかき集める。リュックも手伝つた。

「 そういうえば、名前を聞いてなかつた。なんていうの?」

「名前はヴァラよ、リュック」

「そつなんだ。よろしく」

「 で、どうこう意味で言つたの?」

「なにが?」

「『クソ』つて」

「ああ、ごめん。予想してたもんで」

「ぶつかるのを？」

「うん。よくある話だから。なんて言つたらいいかわからないけど、角を曲がるぶつかることの、よくあるだろ？ そういうのに巻き込まれると なんといつか」

「映画みたいな？」

リュックが顔を上げ、同時に受付嬢も顔を上げる。かなり問題のある距離だった。メガネの奥の緑の瞳がとろんとなつた。化粧品のにおいが鼻にまとわりつき、リップグロスが誘惑するようにつやつや輝いている。

ヴァラが先に下を向いた。「あなた、裸ね」

「 そうだ、服を借りたいんだけど」

「あたしは裸でも、ぜんぜん気にしない」

そう言つて顔を上げ、リュックをふたたび見つめた。これまたそういうとうとに問題のある距離で、これ以上近づくと国境警備隊に射殺されかねない。

「彼女がいてもいいの 」

ヴァラの吐息が口にかかる。だれかとおりからないだろ？ がと、リュックは必死であたりを見まわすが、人の気配すらない。すると背中でも刺されたみたいに、ヴァラは急に目を見開いた。憑きものを払うように頭を振る。「あなた、お昼休みは行つた？」

「これから行くところ」

「 そななんだ。あたしはさつき行つたところ。こいつしょに食べに行かない？」

「これを片づけないと」

「 片づけなくていい。散らかしつければいいのよ」

「必要なんだろ？ だれかに届けたり」

「わからない」じつと手を見る。「どうしてこんなものを抱えて、廊下を走つていたのか

「リュックはイヤな予感がした。はやくここから立ち去りたい。」

「悪いけど、ひとりで食べるよ。家に帰る用事もあるし」

「あたしとこしほに食べたくないんだ  
いやいや。そういうわけじゃないけど

「あなたの家つてどこにあるの？」

「..」

「ちょっと遠いかな。歩くとだいぶかかるし

「そりなんだ。ふうん。で、その格好で家に帰るつもり？」  
と言つて、ヴァーラはこいつり笑つた。

## 1-1話 なにも演じない

ヴァラが女子更衣室から着物を持って出てきた。リュックは聞いたことのないチーム名の入ったパークーを着て、スウェットをはいた。大きめだが、少なくとも警官を気にせずに歩ける。

「大学時代の彼氏のものなの」、ヴァラは言わなくていいことを言った。

三歩進んでは一歩横に動き、壁に肩をぶつけながらエレベーターに向かった。エレベーターは呼び出すまでもなく、ちょうどこの階でとまっていた。リュックはどうしても試したくて、中に入るなり操作パネルに張り付き、一階から八階までとほかに押せるボタンがあれば手当たり次第に押しまくった。

「なにやってるの？」ヴァラがたずねた。

「行きたくない階に行けるか試したいんだ」

結果は予想どおりだった。エレベーターはほかの階を無視して一階へ直行した。確実に捕らえられている。

エンタランスを抜け、外に出た。リュックは深呼吸をしながら、なんとか演技から抜け出す方法をひねり出そうとした。警官のときはどうしたか。あのときは自ら演技をして切り抜けた。今度もうまくいくのだろうか。つまり、「女をひどい目に合わせる男」の演技だ。

はつきりいって自信がない。とにかくシナリオどおりに進ませなさいことだ。

ヴァラがうれしそうに肩をくつづけてきた。「行こう

向かってくる人を避けながら、並んで歩く。

「食べたいものはある？」ヴァラがたずねる。

「いや、ない。食べたくないものなら山ほどある

「どうかしたの？ 心配してるわけじゃないけど

「きみが決めてくれる？ 行きたくないところしか行きたくないん

だ

「酔っ払ってるのね。昼間から飲んだくれるなんて最低」ヴァラは  
ぶつぶつと言った。「だけ最高」

というわけで、リュックとヴァラは同じブロックの通り沿いのせ  
まつくるしいカフェに入った。カウンターのみで、奥のほうにとな  
りあつてすわった。なにげなしに振り向く。通りに面した壁はぜん  
ぶガラス張りで、ショーケースの中で食事するようなものだつた。  
ヴァラはサンドイッチと、舌がこんがらがりそうな名前のラテを  
注文した。

リュックも振り向いて手を上げた。「ぼくはコーヒーでいいや。  
いちばん人気のないやつ」

主人の表情がみるみる険しくなつた。

リュックは貧乏ゆすりをしながら、口ゴ入りパークーの首まわり  
を何度も調節した。他人の服を着るのは、どうも気持ちが悪い。持  
ち主の思い出やら嗜好やら性癖やらもいっしょに着込んでいるよう  
な気になる。そんな気になつてふと、これでいいのだと思い直した。  
できればもつと着心地悪くなりたい。靴下をはいたら中にごみが入  
ついていてむずむずするんだけどもう外出してしまつたのでどうする  
こともできないといった気持ち悪さだ。

「ここ、居心地悪いね」大声で言つた。

「もう頼んじゃつたけど」

「イスは硬いし、カウンターはべたべただし」主人がぎろりと  
にらむのを無視してつづけた。「ガラス張りにしたってさ、どっち  
側にいたつて口クなもんが見えないのに、意味ないよ。そう思わな  
い?」

「リュック」ヴァラは眉間に小さなしわを寄せ、リュックの顔をの  
ぞきこんだ。「あなた、どうじちやつたの」

「どうじちやつも」

リュックはふと口をつぐんだ。ヴァラの言つてることがまともじ  
やない気がしたからだ。まるで長年の付き合いみたいな言いかただ。

おまけにいつのまにか手まで握られている。それがまたやたらと気持ちがこもっていて、こうして見つめ合っているとありもしない向こう二年のさまざま思い出が蘇りそうなほどだった。

「あなたと付き合ってから、こんなことは一度もなかつた

「ぼくら、付き合つてないよ」

「まあね」手の甲を指先でなぞる。「じゃあ、どうすればお付き合いでいることにできる?」

リコックは混乱した。「あの

「できれば幼馴染になりたい。ただの友達だったのが、じょじょに惹かれ合つていくるの」

「不可能だと思うんだけど」ヴァラに合わせて過去形で言い直す。

「思つたんだけど

「あたしがきらいだつたの?」

「彼女がいるつて言つたろ」

「だれがいたつて?」

「いや、いるの。昨日 三ヶ月前だけ? どうでもいいや。覚えてない? キミとはじめて会つたときと言つた」

「はじめて会つたのは三歳のときじゃないの」すっかり幼馴染になつてしまつた。「例の公園で、あなたがつぶつた落とし穴にあたしがズッポリはまつたときよ。覚えてない?」

「覚えてない」

「ひどい人。ほかに大事な人がいるみたいね」「いるつて言つてるだろ」

思わず強い口調で言い放つ。すると、とたんに、ヴァラは田をつむうるさせた。これでは分が悪すぎる。

「彼女がいるんだよ。もう何度田かわからないけど。で、ヒ 彼女とは、もうすでに付き合つはじめる。キミより以前にね」リコックはなんとか筋道をとおせそうだとほつとした。「もし仮に、先に知り合つたのがキミだとしても、ぼくは彼女と先に付き合つたんだよ。わかる?」

「なら、彼女と出会い前から付き合いはじめればいいのよ。」

ヴァラは名案がひらめいたといわんばかりに勢い込んで言つたが、どうして勢い込んで言えるのかまったくもって理解不能だった。リュックは気持ち悪くなつて、ぎゅっと目を閉じた。酒のせいで考えがあつちこつちに飛び散り、まとめることができない。酒のせいと、いうより、ヴァラのせいだ。どういうつもりか知らないが、いつしょになつて過去形で話をしているうちに、いろいろな記憶がどんどん過去に押し流され、ぼんやりとしか思い出せなくなつてきた。エレノアとの思い出も。リュックは必死で思い出そうとした。そういうえば、テレビを買ったじゃないか。あれはじつに なんというか昔のことなのでよく覚えていない。

ほかにあるはずだ。リュックはヴァラの手を振りほどいてカウンターにひじをつき、耳もふさいだ。エレノアとの思い出。たとえば、あれだ。いつものあそこで、例によつてそこにあつたあれを、こんなふうにああして、あとほしつちやかめつちやかだつた。そうだ。あのときはぐでんぐでんぐで、あんなふうにぶらぶらして、てれてれして、ふたりでゆらゆらした。生涯最高の思い出だ。

耳をふさぐのをやめ、代わりに顔をおおつた。生涯最高の思い出であるはずのあれも、しつちやかめつちやかになつたことしか思い出せない。ほんとうにあれをそんなふうにしたのだろうかと不安になつた。

ヴァラが唐突につぶやいた。「この店に強盗が押し入つてくれればいいのに」

「なに？」顔から手を離して聞き返す。

「覆面をかぶつて、ショットガンを持っているのよ。まずお店の主人が撃ち殺されてね、あたしたちは交渉のために人質になるの」リュックは自分の口を手でふさいだ。言つてはいけないことを言いつになつたからだ。

「別れ話で冷え切つた関係のあたしたちだけ、力を合わせて窮地を脱出するの。ギリギリの場面を乗り越えたことでふたりは愛

情を再確認し、めでたくもとのせやに 」

イヤな予感がムカデみたいに背中を這い上がってきた。リュックは感覚を全開にして振り向き、ガラス越しに通りを見やる。すると、どう控えめに言つても不審な人物が腰をかがめて店の中へ入つてこようとしていた。黒い目出し帽に銃身を切り詰めたショットガンを持つていて、ご丁寧にも尻のポケットからダイナマイトを飛び出させていた。

リュックは爪の先でガラスを叩いた。すると不審な男は振り向いた。リュックを見ると足をとめ、周囲をきょろきょろした。それからゆっくりと体を起こし、またきょろきょろし、目的を失つたよう立ち去った。

しつしつと手を振る。不審な人物は頭をかき、手であいさつするト、ショットガンを肩に抱えて通りの向こうへ消えた。

「惜しかつた」

ヴァラがメガネの奥で目をぱちぱちさせて言つた。それからむつりとうつむいて、サンドイッチの端をかじつた。

ひとつ息をついて、カウンターに向き直る。店の主人が乱暴にコーヒーを置いた。命を救つてやつたのに、愛想のないことだ。さつそくすすつてみると、しつかり期待に答える出来だった。ぬるいしぐさいし、おまけに洗剤の味がした。

マグを置いてなにげなく顔を上げると、監視カメラが目に入った。薄汚れた壁の隅で、ほこりをかぶつてぶら下がり、明らかにリュックのほうを向いていた。

「思ひどおりにはいかないぞ」

リュックはつぶやいた。どうしても演技に引き込みたいらしい。いつそ服を脱いでカウンターの上で踊つてやろうかと思ったが、そんな映画があつたような気がしたのでやめておいた。それに、だいぶ疲れていた。頭の中の記憶はひつかきまわされ、過去に押し流されようとしている。

まずいコーヒーをやつつけながら、だんだんと腹が立ってきた。

ヴァラはおもじろくなさそうに皿を見つめていたが、気づかれないようにちょっとずつ肩を寄せてきた。

「きみは」

と、リュックは口「も」った。どれだけ怪しいとはいえ、目の前にいる人間に向かつて「あなたは役者で、自分を演技にひきこもうとしているのですか?」なんて聞くのは、まともじゃない。それだけは言つてはいけない気がするのだ。

「いいかい、よく聞いて。 といつても、きみがきらうつてわけじゃないんだけど」

と言つと、よつしゃとばかりに体をくつづけてきた。

「さつきみたいな話はしたくないんだ」

「どんな?」

「愛とか恋とか、どうやって三年前から付き合つたことができるかとか」

「じゃあ、どんな話がしたいの? なんでもいいよ」

「無駄話がしたい。どうでもいい話。だれも興味を持たない、エキサイティングじゃない話。答えるたびに先の人生が大きく変わつてしまふんじゃないから心配しなくてもいいような話」

ぱつとエレノアの姿が頭に浮かんだ。

「そうだ、テレビを見よ。テレビはいいよね。大好きだ」「いつものように肩を寄せ合つて見るのね?」

「いや。だらだらと、目的もなく。他人行儀に」

店のテレビは、お昼のニュースを流していた。看板キャスターの

クリスタが、いつも落ち着いた雰囲気で原稿を読み上げる。

「さて、次のニュースはみなさんもよく話題にされていることでしょう。地球外生命体を乗せた巨大宇宙船が上空に飛来してから三ヶ月……」

キャスターの横にイメージ画像が割りこんでくる。見出しが「ようこそ地球へ」だったが、背景はこれでもかと武器をつき出した黒い宇宙船と、よだれを垂らして凶悪な鉤爪で一家に襲い掛かる異星

人のイラストだった。いつたいどつちなんだと言いたくなる。

「最近このニュースばかり」ヴァラは小さく鼻を鳴らした。「くだらない」

「これっておもしろいニュースかなにか?」リュックは確認しようとたずねてみた。

「ふつうのニュースよ」

「宇宙船が来てるの?」

「そうみたい」

どうやらほんとうらしい。の中にエレノアがいるのだろうか?クリスタが原稿をひとつおり読み上げると、カメラがやや引いて、となりのダグールを枠の中に入れた。がつちりした顎に男っぽさをむんむんさせて、興味津々といったふうにクリスタのほうへ身を乗り出す。

「主門からのレーザー攻撃を受けて三日だけど、その後の展開はどうなったの?」

「つい先ほど、異星人からのメッセージを受信したと政府の発表がありました」

「なんて?」

「『ごめんなさい。まちがえました』ということです」

ふたりの背景に、レーザー攻撃を受けて壊滅状態となつたオフィス街の様子が映し出された。瓦礫となり灰色の噴煙を上げるビル、頭から血を流して泣き叫ぶ女性、母親に抱かれ大きな青い目でなにかを見つめる少年、すすぐ顔を黒くし呆然とする消防隊員、ネタを切らして見物に来た売れぬ作家などの映像が次々と切り替わつた。カメラが上空を映す。白くて巨大な物体が、空全体に横たわっている。宇宙船というより、巨大なコインランドリーだ。投入口が下を向き、ぱっくりと開いている。

「死傷者の数は?」

「負傷者は少なくとも七千人にのぼるのですが、死者はひとりもでていない模様です」

「政府の見解は？」

「『だれも死ななくてよかつた。今後は気をつけて』とのことです」ダグールは相変わらず横を向いたまま、クリスタから田をそらさない。

「ほんとうによかつた！　　話は変わるけど、最近は宇宙船だけじゃないよね？」このところ、映画のような話ばかりだ。スポーツの実況アナウンサーは文句たらたらみたいだけど

「ええ、そうね」クリスタはダグールをちらりと見た。笑顔がわずかにしほみ、なにかを恐れるように眼球を震わせる。「いまや『信じられない、奇跡です』は、グラウンドやスクリーンの向こう側の話だけではなさそうです。実際にどのようなことが起きているのでしょうか。インタビューをまとめましたので『いらっしゃい』どこかの交差点に映像が切り替わる。クラクションがやかましい。

「もう、楽しくてしょうがないって感じでやー！」

落ち着きのない高校生くらいの若者がインタビューに答えている。頭の悪そうな笑顔で、照れ隠しかなにかでカメラに向かって危なつかしく親指を立てた。「毎日がパーティーだ。学校も最高！　人生最高！」

「どんなことが起こってるの？」とインタビュアー。

「えーと　　そうそう。女の子が全員かわいくなったんだ。　　中にはそうでもないのもいるけどさ。ていうかほら、ドラマなんかでよくあるじゃん？　　バスだって悩んでるけど、どう見たって美人だろおまえ！　　つての」

「その『よくあるじゃん？』が、よくあることになつたというわけだね」

「そういうこと。おれの友達、超能力を使えるんだぜ！　　あといきなり踊り出すやつとか、妊娠するやつとか、とにかく週に一度はなにかが起きてる。あ、いまね、妹が誘拐されてるの。未解決でさ」

落ち着きなく体を揺らすので、ショッちゅう画面からはみ出している。

「心配じゃないの？」

「ぜんぜん。よくあることだし。これまでの経験でわかつたんだけど、なにがあつてもぜつたといいほうに解決するんだよ。このまえ校舎が大火事になつたときも、すげえカッコいい消防士がチアリーダーの子を救出したんだぜ。間一髪！ それまではドキドキもんだけど、いまじやみんな楽しんでる。すげえよな。人生、こうでなきや」

次のインタビューは、老人だった。インタビュアーとベンチに並んで腰かけている。

「悪くない人生だよ。ここまで生きてこれたんだ」ふと声を詰まらせた。「じつは先日、妻と再会してね」

「奥さま？」

「亡くなつた妻だ。もうひと昔も前のことだが、いざ死ぬつてときになつて、おれはそばにいてやれなかつた。さよならのひとことを言えなかつたのが、ずっと心残りだつた」

ついに話すことができなくなり、子供のように下唇をつき出し、しわだらけの顔を震わせた。「こつこつした手で顔をぬぐつ。

「だが」と、夢見るような顔になつた。「どういうわけか妻に会えた。家に帰ると、台所で昼飯の支度をしていたんだ。わけを聞くと、七日間だけ生き返ることができたんだという。妻はおれの顔をじつと見て言つた。『それ以上は聞かないで、あなた。ネタをパクつたと思われたくないの』と

「まさに奇跡だ」

「たしかにありえん話だ。だが、そんなことはどうだつていいんだ。だれがどうやつたのかもわからんが、感謝したいね。すばらしいことだ」

次はスース姿の中年の男性だった。満面の笑みで、見るからに生きる活力に満ちていた。

「おれは卓球をはじめたんだ！」

「みんな幸せそうだったね、クリスタ」

スタジオに戻り、ダグールが感想を述べた。

「そうね」というクリスタは、あまり幸せそうではなかつた。笑顔に無理があつて口もとを持ち上げるのに苦労しているし、うつむかないようにするので精いっぱいという感じだ。

「どうかした？」

「いいえ、なんでもない。では次のニュース」

ダグールは眉尻を下げて、なおもクリスタを心配そうに見つめる。そして、番組の進行なぞ知つたことかといわんばかりに、イスにすわり直して身を乗り出し、クリスタの顔をのぞきこんだ。

「ほんとにだいじょうぶか？」

声を抑えて言つ。「だいじょうぶ。ニュースを読まないと」ダグールの仕事用に貼り付けていた笑顔が少しづつ剥がれていき、ひとりの男の顔になつた。真剣な表情で唇を引き結び、急に勢い込んで正面を向き、原稿の束を持ち上げた。とんとんと整え、それからわきにのけた。

「次のニュースは、ある男の話題です。男は悩んでいました。それは数ヶ月前からはじまり、いまもそのストーリーはつづいています。そのドラマが劇的かどうか、わくわくし、おもしろいかどうかそれはみんなの判断にお任せしたい。ですが個人的には、このストーリーはハッピーハンドで終わつてほしいと思つています」

クリスタは眉をひそめて相方を見、カメラのないほうに手をやつた。ダグールは明らかに進行を無視しているようだつた。「こっちを見て」とクリスタに言つ。

ダグールは上着のポケットから小さい箱を取り出した。フェルトの宝箱みたいに見えたが、遠目から見てもなんであるかは一目瞭然だつた。それはまさに宝箱だつた。クリスタに向けてぱかつと開く。中に指輪が鎮座し、小さく輝いていた。

「これを」

ダグールが言つるとクリスタが口を押さえるのはほぼ同時だつた。

「きみに。その 家庭の事情やらなにやらで、たいへんなときだ  
と思うけど。オーケー？」

「あ わたしたち、付き合つてもいないんだけど ああ」クリ  
スタは腰碎けで、イスにすわっていなければ床にへたり込んでいた  
だろう。それをむしろ喜んでいるようだつた。顔をぬぐつて天井を  
向き、笑顔で振り向く。「ええ、オーケー！」

周囲のスタッフはやんやの喝采だつた。拍手をバツクに、笑顔の  
ふたりが身を乗り出して軽くキスした。

「おもしろいニユース」ヴァラはうつとりと言つた。いつもの根暗  
声に戻つてつづける。「あんな指輪、あたしにはくれたことなかつ  
たよね、リュック」

カフエの主人が鼻を鳴らした。「パクリだぜ、これ」雑巾を投げ  
捨てる。

スタジオは拍手も止み、余興は終わつたのでまじめに仕事をしま  
しょうという雰囲気になつていて、ニユースを読み上げようとす  
るとスタッフが駆け込んできて、メモを置いていった。ダグールは  
目を見開いた。

「息子が誘拐された」

「婚約したばかりだろ。なんで子供がいるんだ」リュックはテレビ  
にツッコミを入れた。まるでエレノアだ。「展開がはやすぎだよ  
「連れ子じゃない？」

「いや。ダグールは初婚だしクリスタは子供がいなかつた」聞いた  
だすように見つめられ、言い訳がましく説明する「彼女が詳しいん  
だ。エレノアね。ぼくの彼女」

「どうしてそういう細かいことを気にするの？ おもしろいじゃな  
い。わくわくする」

リュックはむしょうに腹が立つてきた。なにに腹を立てているの  
かわからないくらい腹を立てた。

「どこが。興ざめだよ。あんなの、つくられた人生じゃないか」

「つくられた？ ダグールは自分で決心して、指輪を渡したのよ？」

「わざわざ」コースの本番中に？ おかしいと思わないか？ 今までそんなこと、あつたためしがない

「いや、何度かあつた」と主人が口をはさんだが、リュックは無視した。

「宇宙船からのレーザー攻撃を受けて死者が出ないだつて？」

「宇宙人は『まちがつた』って言つてた」

「そういう問題じやないだろ。宇宙船が飛来しているのになんとも思わないの？」

「だつて、実際にいるんだもの。否定するのは現実逃避よ」

「じゃあ、どうして死人が出ないかわかる？」

ヴァラは肩をすくめた。

「連中は、ハッピーエンドが好きなんだ」

「連中つて？ よくわからないけど、人生にはバッドエンドもある」

「いつ？」

「この前モールがゾンビの大群に襲われたんだけど、客も店員も全員死んじやつたの」

「ホラー系はそういうものだからだよ！」 リュックは思わず怒鳴つた。「望まれてるんだ」

「望まれてる、つて？」 ほんのわずか距離を置いて、ヴァラがたずねる。「あなたは人生ハッピーじゃないほうがいいっていうの？」

本格的に頭痛がしてきた。リュックは顔をしかめながら「コーヒーを飲み干し、こめかみをマッサージした。

「ハッピーエンドなのは、大半の観客がそういうつたストーリーを望んでるからなんだ。連中が望んでる」

「それは映画やテレビの話でしょ？」

「ちがう」

リュックはかぶりを振った。

「いまもそこから見ている」

店内の監視カメラを指差した。

「見てるか？ ぼくは演技なんかしないぞ！ 文句があるなら出でこい！」

マグカップでも投げつけようかと思ったが、連中の思うつぱだと考へ直し、なにをしたいんだかわからない状態であれこれ試したあと、カメラにピースサインをつけた。まったくもつてそんな気分ではなかつたからだ。

すわり直し、勢い込んでヴァラに顔を近づける。

「きみと付き合つことはできないけど、ほんとうのことを教えてあげるよ。連中はテレビ界から、現実をあやつりうとしている。連中はずつと監視してた。でもいまは、ただのノゾキなんかじゃない。ぼくらは場面を設定され、台本を渡され、演出指導を受ける」リュックは興奮しそぎて声を裏返らせた。「連中は、テレビを見たがってる。おもしろいテレビさ。そのせいでのみんなは、連中が望んでいようとおりの人生を送らされるんだ！」

主人は頭のおかしな人間を見るような目つきでリュックを見た。ヴァラも似たようなものだが、こちらはあきらめが悪いようだつた。彼氏を長年の依存癖からなんとか立ち直らせ、まともな社会生活を送れるよう懸命に努力してきたが辛抱も限界だと言わんばかりの表情だったからだ。

ふたたび手を取ろうとしたので、リュックは払いのけた。

「わかつただろう？ きみはぼくの恋人役に選ばれただけなんだよ」「なに言つてるの？」

「いや、ちがうな。恋人じゃなくて、ヒレノアを奪う悪女の役だ。演じさせられてるつて、どうして気づかないんだ？ どうしておかしいって気づかないんだ？」

「あたしは」 ヴァラは言葉を詰まらせ、胸を押さえた。「あなたが好きなだけで」

「二回しか会つてない。口クな会話もしてない」

ヴァラは静かにメガネをはずし、もう一度リュックの手を握った。リュックは顔を背けていたのでどんな表情をしているのかわからな

かつたが、必要なら何度も握つてやるという意思を感じられた。

「きっと、あなたは疲れているよ。酔つ払つてゐるし」握る手に力がこもる。「あたしの家、すぐそこなの。ひとり暮らしでだれもないし、少し休んでいいたら？」家は遠いんでしょう？

リュックは確信した。昼メロみたいに次の展開が読めた。このあと自分はヴァラの家へ行つて休む。会話をつづけるうちに妙な雰囲気になり、コーヒーをこぼしたりとかぶつかって転ぶんだりとか、とにかくちょっととしたイベントをはさんで辛抱たまらずベッドイン。家もないので居候しているとそこにエレノアがあらわれる、といった寸法だ。家でばったりか通りでばったりかはともかくとして、なにより腹立たしいのは、演技させられている現実の人間が、それに気づこうともせず、それどころかたいへん満足しているところだった。

「家に連れ込む。いいね。ぼくがどんな人間かもわかつてないだろ？」いつたいどこに惚れられたんだか

「直感みたいなものつてあるでしょ！」ヴァラはついに泣き出した。

「理由なんかない。あなたが好きなの！」

リュックは頭をかきむしって、スツールから飛び降りた。

「だつたら、はつきりさせるよ。言つとくけど泣いたつて無駄だ。役者が汗をかいた場面を演じるときに霧吹きをかけるだろ？ それといつしさ。演じているとわかつた以上、そんなものはぜつたいに信じない。いい？ ぼくはきみと付き合わないし、二股かける氣もない。エレノアと別れる氣もないし、ふたりのあいだで葛藤する男の役を演じるつもりもないんだ！ 観客なんて××だ！ 楽しませてなどやるもんか！ ×××でも吸つて呑つてなもんだ！ どうだ！ これでスッキリしたぞ！」

リュックはヴァラの顔を見ないようにした。ここは酒の勢いを借りたほうがいい。

「おまえらなんかあつち行け！ バカつたれ！」

思いつきり手を振りまわした。ねじれたパークーを直そうとバカ

みたいに何度もひつぱり、しまいには一回転して着地するとヴァラの目の前に立っていた。パークーは落ち着いたが、中身は依然バ力なままだった。

「最低な言いかた」

ヴァラはじつと見つめ、静かに口を開いた。目が震え、充血している。つばを飲み込み、ペーパータオルを取つて鼻を押さえた。財布を取り出し、札を一枚カウンターに置く。「ふたりぶんよ」リュックを一度も見ずに、背を向けて出でていった。リュックは背中を目で追いかけ、通りの向こうにいなくなるまで見つづけた。いくなくなると、肩の力が抜けた。

「あっちへ行くのはあんたのほうじゃないのか」

主人が腕を組んで見下ろしている。

「そうか。あんたは、人生に絶望してバーで酔いつぶれた主人公を店からつまみ出す役つてわけだ」

「主人公？」　本気で言つてるのか？　自分勝手なキ×××野郎め

「ほら！」リュックは主人の口を指差した。「いま『ピー』つていつただろ？　汚い言葉を使つたからだよ」

主人はのつそりとカウンターから出てきて、リュックの目の前に立つた。顔がくつつかんばかりににらみつける。

「出でいけ！」

リュックは「ピー」についてなんとかわからせようと何度もピーと言つたが、ついに抱き上げられ、外へ放り出された。

## 12話 スクリーンテストは洗濯機の中で

エレノアは真の安らぎと心地よさみたいなものを感じながら、ベッドで眠っていた。その快適さときたら、なぜベッドで眠っているのかを考えるのも眠たくなるほどだった。わが家のペラペラのマットレスやべつたんこの敷布団とはおおちがいだつた。まさに「包み込むような寝心地」。枕は上を向いても横を向いてもちょうどいい高さで、掛け布団はふんわり軽くてすべすべだつた。エレノアは横向きになつて枕に半分顔をうづめ、清潔なカバーのにおいを嗅ぎ、大満足のため息を漏らした。足の甲をこすり合わせて、もつと心地よくなるようにおヶツの位置をずらした。

「ああ、目を覚ませ」

そんなわけでベッドで気持ちよく眠つていたエレノアだつたが、だれかが耳もとでささやきつづけるのですつかり目が覚めてしまつた。他人に起こされるほど頭に来ることはない。もう何度もささやかれたか覚えていないほどだつたが、エレノアは今回も無視した。そしてもうと気持ちよく眠つてやろうと決心した。

「起きて、エレノア」

リンのささやき声が耳に飛び込んできたので、エレノアは全力全開で目を覚ました。枕に頭を乗せたままあたりを見まわしたが、リンはいなかつた。リンどころかだれもない。室内は白い壁に囲まれていて、ベッドと自分以外なにもなかつた。

「ははは。だまされた」

枕もとから声がした。思わずつなり声を上げ、両手で顔をおおつた。

「また会つたね。ぼくだよ、ミーカだ」

気が進まなかつたが声のするほうへ顔を向ける。大きめの石鹼みたいな箱が置いてあつた。万能デジタル家電のマーイエだ。肘をついて体を起こし、恥ずかしがりのテレビを持ち上げた。例のむかむ

かさせる笑顔があいさつしていくかと思い身構えたが、画面に映つて いるのはリンだつた。

「どうしたの、リン」

リンは眉毛をハの字にして、途切れ途切れになにかを叫んでいる。声が聞こえない。聞こえていないのがわかつたのか、今度はじめたばたしはじめた。手でメガホンをつくつて叫んでみたり、助けを求めるように両手を広げてジャンプしたりした。膝に手をついて呼吸を整えると、ジエスチャーゲームをはじめた。よく見て、というふうに指を立ててから、手で大きな四角を描き、アニメの水兵かなにかみたいに胸を張り肘をいからせて左右に歩いた。それから食事をするふりをしたり、おちゃらけたダンスをしたり、泣き真似をしたり、架空の人物に指をつけお説教をし、ビンタをするふりをした。画面に向き直つて、自分の鼻を指差してなにかを言つた。口をよく見ると、「わたし、わたし」と言つてゐるようだつた。両腕で大きなバッテンをつくり、エレノアを指差し、そして唇をぎゅっと結んで目を潤ませながら、胸に手を置いた。

「まつたくわからない！」エレノアは画面に食ひこつき、つばを飛ばした。「なにが言いたいの？」

エレノアの目も同じように湿っぽくなつてきた。鼻の頭がくつつきそうになるくらい画面を近づけたが、それでもわからなかつた。むかむかさせる声がテレビから聞こえてきた。

「そのまま待て。いま姿を見せてやる」

画面が縮みはじめた。だがリンはそのままの大きさで、上下左右がどんどん迫つてくる。リンも気づいて、パントマイムのように画面の端を押したり引いたりする。

画面の後ろから出てきたのは、ふたりの男の顔だつた。ひとりはミーク。この笑顔を見ていると、かかとで踏んづけてやりたくなる。もうひとりは知らない中年の男で、笑顔はなく難しい顔でもつつりしていたが、こちらも機会があれば踏んづけてやるつと思つた。

ミークはさわやかに言つた。「調子はどう？」

「ウンザリ」

「すこぶるいいようだね。さつそくはじめる前に、ぼくの友人を紹介しよう」

エレノアはぶんぶんかぶりを振った。

「ジョンだ」ハゲ散らかした髪を横になでつけた。「あんたがエレノアか。はじめて」

リンは画面の右下に追いやられ、膝を抱えて首を傾けていた。天井を押し上げようとするが、ぴくりとも動かない。顔を横にしたまましゃがみ歩きでカメラに近づき、エレノアに向けて指でバツ印をつくった。なにが言いたいのだろう。

「どうだ、いいベッドだろ？」「ミーカが言つた。

「ぜんぜん」

「嘘をつくんじゃない。さつきまで大満足の表情を浮かべていたくせに」

「浮かべてないもん」

エレノアはあらためて周囲を見まわしたが、みごとなまでにならない。真っ白い壁はコンセントすらなく、家具もない。電灯もない。あるのはエレノアと白いベッドだけ。と思つたら出口がひとつあつた。小さなまるい窓がついている。

羽毛布団をわきへ退け、足を床へそろそろと下ろす。入院患者になつた気分だ。エレノアは裸足で立ち上がり、床はひんやり足の裏に吸い付き、思わず爪先立ちで足踏みした。

脳の奥から、宇宙船に吸い込まれて意識を失うまでの記憶が蘇ってきた。その記憶といまの状況をなんとかつなげようとして、はじめて自分がティンカーベルでないことに気づいた。肌触りもなめらかなシルクのパジャマを着ていて、あれだけ草原を転げまわつたはずなのに体の汚れもすっかり落ちていた。自分が自分ではなくつたような気がする。わたしはエレノアであるという確固たるものが必要だ。心のうちを探ろうと目を閉じ、心に到達する途中で下着に到達した。心を探るように下着を探り、はつきりと理解した。完全

に、疑いようもなくお一コーだつた。

エレノアは恐ろしくなつて体を縮こませ、凍えるように肘を抱いて窓に歩み寄つた。

のぞいてみると、外は宇宙だつた。

「ぼくらを無視するな！ 無視をするな

テレビの音量がどんどん上がつていき、ミーカの怒鳴り声がスピーカーをびりびり震わせた。エレノアは酔っ払いのようによろめきながら振り向き、ベッドに飛びついた。ミーカは「無視するな」と繰り返し叫びつづける。枕もとのテレビをつかんで、タッチパネルを呼び出して音量を下げた。

「下げるさ。ちょっと上げて」  
ちよつと上げた。

「よし。一度と無視するな。親兄弟を口けにされるのはがまんできるが、無視されるのだけは耐えられない。耐えられないんだ

カメラが引いて、ミーカとジョンの全身を収めた。家庭的で小ぢんまりしたリビングで、ふたりがけのソファにふんぞり返つてすわつている。

「無視しないから、ここがどこか教えて

子画面のリンクがカメラに鼻をくつつけてまくしたて、かぶりを振つている。

「見ただろ？ 宇宙だ。きみは宇宙船に取り込まれたんだ。トイレの中に到着するわけないだろ？」

「わ わたしを着替えさせたでしょ？ お風呂に入れて  
「だつて汚れてたから」

子供みたいな答えが返つてきた。エレノアは口を開きかけたが、ジョンが先まわりして言った。

「ランドリーでちょっと洗濯しただけだ。それに洗濯機というだけあつて、下着の替えも山ほどあるしな。うまい具合にできるだろ？ だいじょうぶ、だれもきみの裸は求めてない。おれだつて成人映画には興味がないからな」

エレノアは口を開きっぱなしで聞いていたが、血づけじとが見つからなかつたので閉じた。

「ではさっそく、テスト映像を見てもらおう」ミーカは画面の外に向かつて聞いた。「用意できた？　じゃ、流して」

「おれにくだらない深夜番組なんか撮らせるな」

「まあまあ」と相方をなめたあと、エレノアに向かつて言った。  
「きみをベッドに寝かせたのにはわけがあるんだ。テレビの世界では、なにをするにも理由がある。呼吸をするのも、髪をかき上げるのも。意味のないものは存在しない」

そしてこれまででいちばんのジックスマイルを浮かべた。

「きみの初出演の番組だよ。題して、『激安テレショッピ現実版』」「センスないな、あんた」ジョンがぼそっとつっこんだ。

「いいだろ、企画用なんだから」

「プレゼンでもタイトルは重要だわ。そんなんでマイク・レビュー やジョン・パーキンに勝てると思つてゐるのか」

ふたりがぶつぶつ言つてゐるあいだに、映像が切り替わった。リンクは相変わらず子画面でじたばたしている。

「リン」「エレノアはさわやいた」「わたし、ジツすればいいの？」

?

閑散としたスタジオが映る。なんだか絵にならない男が、マイクを手に笑顔で立つていた。

「どうも」と手のひらを見せた。

若手芸人のヘルマンだ。空き家を燃やしてとつ捕まつたはずだが、出所してきたのだろうか。刑務所暮らし堪えたのか、以前よりもだいぶやつれた感じだし、髪にははやくも白いものが混じっている。どこか緊張した面持ちだったが、いきなりテンションを上げてわめき出した。

「さあ、今週もはじまりました！　『激安テレショッピ現実版』の時間だよ。今日もみなさまにすばらしい商品の数々をお届けします。司会はおなじみ、ヘルマーーンでーす！」

スタッフからしき人の、お義理の拍手が聞こえた。

「こいつしかいなかつたのか」

「急だつたんだ。しょうがないだろ」

ミーカとジョンの声が割り込んでくる。

「司会といつても、ぜんぶぼくがこなすんだけどね」

ヘルマンは自分のジョークで笑い、マイクを構えてさかんにスタジオ内を行ったり来たりしている。

「みなさん、毎日眠りますか？」

もちろん。じゃあ、快適な眠りはどう？ これにはいつも悩まされる。睡眠は大事だからね。

ぼくんか、悩みすぎて夜も眠れないくらいだ。ははー。」

だれも反応しないと、閑散としたスタジオではよけいに声が響き渡る。

「快適な睡眠に必要な条件とは、なにか。なんでしょうね？ そこあなた。どう思います？」 どこのあなたかわからないが客席のほうにマイクを向けた。しばらく間を置いて、なるほどとうなずく。「そう、寝具だ。いい枕に、いいマットレス。シーツは清潔がいい。でしょ？」

架空のだれかがなにかを指摘したようで、ヘルマンは一本取られたという感じで仰向いて笑った。

「まいった！ すばり言っちゃったね。そりやテレショッピだから、結局は寝具を紹介するんだけどさ」

マイクをわずかに下げ、間を置く。もしかすると密に話しかかれているのかもしねないが、映像を見るかぎりではわからない。

「まあいいや。 ぼくとしては、じつはこう思っているんだ。寝具は二の次だ、ってね。シーツは不潔でもちゃんと眠れる。ぼくは刑務所にいたんだけど

これがお笑いステージなら、思いがけない爆笑と拍手が起っこつてニヤニヤしながら観客を制するところだ。これで客の心をつかんだと手ごたえを感じるべきところだ。しばらく刑務所ネタで稼ぐことができると確信するべきところだ。

「快適な睡眠に必要なのは、適度な食事と適度な運動、そして毎日を充実させることだ。そう思わない？ その点、刑務所は完璧だつたね。食事はあっさり風味だし、デザートを巡って取つ組み合いもできる。 そうそう、それから懲罰の穴掘り十四週間。あれもい運動になつた。言つまでもないけど、人生を充実させるために趣味も見つけた。シャワー室で血を流した男を囮んでダンスを踊るんだ。これでご近所付き合いもばっちりというわけ」

だいぶあつたまつてきたのか、額から汗が噴き出している。ひとりぼっちだといふことも忘れそくなほどだ。

「それから、規則正しい生活。これも重要だ。ム所じゃ、夜は九時に消灯だろ？ 朝は六時起つかりに起床、そして点呼。 あれはいいね。みんなも明日から点呼をするべきだ。時間が来たら子供部屋のドアを警棒でガンガンぶつ叩いて、廊下に整列させるんだ。口答えしたら思い切りぶん殴つたり」含み笑いをして、間を置いた。「これで子供たちは規則正しい生活を覚え、ぐつすり眠れるようになると思うよ。もちろん親御さんもね。 たぶん刑務所にブチ込まれるだろうから！」

オチのあと、親切なスタッフが笑い声を響かせた。ヘルマンはうろつりをやめてひと呼吸置き、感謝するようになはずいた。

「とまあ、ぼくはそんなふうに信じていたわけだけど、ある日、それらはまちがいだと気づいたんだ。これから紹介する商品、こいつに出会つてからね。詳しい紹介はCMのあとで！」

ルアーを投げるみたいに腕をつき出し、客席に向かつて指を立てた。決めのポーズだ。

「なんつって。これはほんの冗談で」

「キャスティングを誤ったな」ジョンがつぶやいた。

「 本日最初に紹介する商品は、これ！ 『絶対的パツキン寝具』セットだ！」

ポーズもそこそこに、急いで奥に走つた。段差に飛び乗り、中央に鎮座する「商品」のわきに立つ。商品はもちろん寝具で、ゴージ

ヤスなダブルのベッドに、クリームのような純白の掛け布団がかかっている。

たしかに高そうだが、いたつてふつうのベッドだ。ビックりへんが「パツキン」なのがとエレノアは思つたが、寝ているモデルがパツキンだつた。手持ちのカメラがモデルに寄ると、ちょうどいいタイミングで気持ちよさそうに寝返りを打ち、顔を見せた。

パツキンのモデルはエレノアだつた。そんな気がしてたし、わけのわからないことがつづいたせいですぐにビックリ顔の在庫は使い果たしてしまつていた。ただ、テレビに映る自分を見るのはとても複雑な気分で、なんと例えていいのかわからない。

「すごく快適そうだね」

ヘルマンはカメラに向かつて畳をぎょろつかせ、声をひそめて言った。ベッドをまわりこんで枕側に立つ。

「この枕、じつはフェザーが五十パー　七十五？ 低反発性素材もどうとか　なんでもいいや。とにかくふわふわなんだ。見てよこれ」

寝ているのもお構いなしに枕をぐいぐい押す。そのたびにエレノアの頭ががくがく揺れたが、よっぽど気持ちいいのか畳を覚まさない。

「カバーは三枚お付けしますよー。つやつやでいて抜群の肌触り。使用した綿糸はなんと、従来の一十分の一の細さ！ ナノテクの結晶だね。うーん、思わず頬ずりしたくなる」

と言つて実際に頬ずりした。お互いの鼻の頭がくつつきそうな距離だ。吐息なら余裕でかかつているだろう。テレビを見ているほうのエレノアは顔をゆがませ、思わず振り向いて枕を見た。そしてひっくり返した。

「掛け布団はおしゃれなキルティング加工で、特殊な軽量素材を使つていてるんだ。指一本で持ち上げてみせるよ」

エレノアの首もとから、布団の中に勢いよく腕をつつこんだ。視聴者としてのエレノアが代わりに短い悲鳴を上げた。

「なんで『じや』『じや』してるの……」シシ ハリの声も思わず震える。あまりのおぞましさに、いま着ているパジャマも下着も剥ぎ取りたい気分になった。「なにを『じや』『じや』と」

ヘルマンは指だから腕だからわからないがとにかく片手で掛け布団を持ち上げ、画面に向こうへ放り投げた。横向きで眠るエレノアがモロ出しになつた。膝を折り曲げ、自分を抱きしめるように腕を体に巻きつけている。普段あんな格好で寝てているとは新しい発見だったが、うれしいかと言わればまったくそんなことはなかつた。髪はぼさぼさだし、顔はボンヤリしているし、思つていたよりも尻が大きいような気がする。

テレビのエレノアは居心地悪そうにもにゅもにゅ言ひて、足の甲をこすり合わせた。

「ベッドパッドはウール製。そしてこのマットが優れもの！ 低反発素材って、もう言つたつけ？ まあいいや。おたくのベッドマット、いまにもスプリングが飛び出してきそんなんじやない？ じいつは細かいコイルがそれぞれ独立しているから、体の曲線にぴったりフィットするんだ。背骨も安心だね」

なにを思ったか、ヘルマンはエレノアの尻をパチーンと叩いた。  
「もういい！」エレノアはテレビのスピーカーに怒鳴つた。「なんか腹が立ってきた！」

反応はなかつた。ヘルマンもいつのまにか画面から消えていて、ひとり取り残されたエレノアは周囲のことなどまったく気にせず寝こけている。芋虫のようにうごめいてうつぶせになり、わき腹をぼりぼり搔いた。オナラをしたりはしないだろうか。

袖からヘルマンがやつてきた。ヘルメットに透明のゴーグルをかけて、重そうなバックパックに携帯用の火炎放射器を抱えていた。興奮した様子でカメラにうなずき、ベッドの近くに転がっている掛け布団に近づいた。

「そしてなにがすごいって、耐火性能も抜群なんだ。それ行け」銃口を向け、いきなり火炎を噴射した。やりすぎのガスバーナー

みたいな轟音を立て、炎が掛け布団を舐めまわす。エレノアは体半分を炎で赤く照らされ、ケーキかなにかのように焼き色をつけられそうになっている。それでも気づく様子がない。悪い薬でも盛られたのではないかと頭をよぎったが、そうではなかつた。いつもと変わらない。エレノアは、ひとたび寝ると決めれば起きるまで寝るのだ。

「おもしろい」ミーカが感想を述べた。

たつぱり十秒もあぶり倒し、ヘルマンはようやくトリガーを離した。どんな素材が使われているのか、布団には焦げ目ひとつついていない。

「丈夫で快適。万一の火事のときも安心でしょ？ 中身は焼け死ぬかもしけないけどね。でもそれは保証の対象外だよ！」

布団を持ち上げて、無造作にベッドへ放つた。うまいことエレノアにおおいからぶさり、寝息を立てながら首もとに引き寄せる。

「はい！ お求めはこちらの番号から。ネットでの購入は、『フーム・オンライン・ストア』でどうぞ。アドレスはこのへん

画面が切り替わった。拍手とアイキャッチの音楽が流れ、家庭的で小ちんまりしたリビングが映し出される。ミーカとジョンが、コントみたいにわざとらしくソファに並んでわっていた。

キャッチが終わると、ミーカはジョンに笑顔で話しかけた。「これ、どう思う？」

「エレノアについては、いい寝つぱりだったと思うね。まさに天性の寝相だ」ジョンはテーブルに手を伸ばしてポップコーンをボウルごと抱え、がさがさと食い出した。「さすがだな。人気があるわけだ」

「番組については？」ミーカはジョンのボウルに手を伸ばしてポップコーンをひとつかみし、一気に口に入れた。「ぼくはそこそこけるんじゃないかと思うけど」

「低俗だな」ジョンは口の中がいっぱいになるまでポップコーンを詰め込んだ。「ていぞくだ

ミーカは両手でポップコーンをつかみ、なんとかゼンブ口に押し込んだ。「そうじゃない したしみやすさっていうか」

ジョンは冷ややかに相方を見つめ、ボウルに皿を戻すとペッヒリを吐いた。ミーカは驚いた様子で体を起こし、それから皿を細めてジョンににらみつけた。

険悪な雰囲気の中、ジョンは静かにポップコーンをひとつかみ口の中に追加した。

「ひとつ ちめいてきなもんだ 」ついにえづいた。口からポップコーンを何個か吹き出し、急いでグラスに手を伸ばす。「もんだけがあるだろ」「なんとか飲み下し、肩で息をついた。「ひとつ聞くが、おまえ、これを見てベッドがほしくなったか?」

ミーカはつま先を見つめ、しばらく考え込んでいた。観念したよう

にかぶりを振る。「 いんや」

そしてむせ返り、ポップコーンを吐き出した。

「次に期待しよう」無造作にミーカの肩を叩く。「テレショッピングなんでもう流行らないわ」

「そうだな、次に期待だ

エレノアは辛抱たまらずシッパを入れた。「あなたたち、ふつ

うに会話できないの?」

「どうせん。テレビの住人だからね」

「おまえらの『ふつうの会話』とはなんだ?」ジョンはすうんだ。「天気の話か? 今週のアニメの話か? それとも自分話を延々つづけることか?」

「そうそう。みんな主役になりたがってる」

「どうして中身のない話ばかりできるんだろ? だれも聞いていないのに、ひたすらしゃべりつづけている。自分はどれだけ賢いか、どれだけ多趣味か、どれだけ金持ちか、どれだけ友達が多いかと、必死になつて伝えようとしている。アホなくせに。カラッポな自分を知つてもうつてなんになる? 口を閉じたほうがよっぽど利口に見えるんじゃないのか?」

「ははは。それは言えてるね」

ふたりはハイタッチした。

リンを見ると、寝転がって足の裏で天井を押し上げようとしていた。話をしたい。声を聞きたい。なのに聞こえるのは中年コンビのボヤキ漫才だけだ。どんな話をしたいかと聞かれても答えようがないが、「へえ」とか「ふうん」とか、それだけでもかまわなかつた。一日じゅう天氣の話をするのだつて、リンとならきつと楽しいにちがいない。

床に置いた足が冷たくなつてきた。ベッドの上であぐらをかく。「台本どおりにしゃべるだけなら、だれだってできるじゃないの」エレノアはなにげなくつぶやいた。すると不気味な間が空いた。ミーカとジョンがこちらをじつと見ているのに気づいた。

「寝るのはもういい」ジョンが言つた。「次は、本格的な演技のテストに入ろう」

「もうけつこう」

「なにがけつこうなもんか。特別な存在にしてやると言つているんだ。おれの作品に出れば、スターになれる。みながうらやむ有名人だ」

「なりたくない」

「知ってる。だから選んだんだ」ミーカが口をはさんだ。「ほかはみんなカツコつけて、自意識過剰で、うんざりする。無意味な連中ほどスターになりたがるもんだ。いや、実際、あんな連中は見たくもない。連中を目にするとテレビを消したくなる。きみがいいんだ、エレノア」

「よし、はじめよう。スターがいいそつだから」ジョンは眉を上げて舌打ちした。「まずはオーディション番組か。おれも業界に飲み込まれかけるな、まったく」

「エレノア、上を見て」

指を立ててミーカが言つた。言われたとおり天井を見ると、監視カメラがぶら下がつていた。

「いまさら監視カメラくらいで」

部屋の四隅が小さく爆発し、白い煙を噴き出した。それを合図に、部屋の継ぎ目にいっせいに爆発が走った。板から百本くらい一気に釘を抜くような音がしたかと思うと、天井がスポーンと上空に飛び出していく。

天井に宇宙が広がった。

## 13話 サイモン・コーワルとスター誕生

宇宙は真空中で呼吸ができないらしいので、エレノアは息を止めた。顔を上げながらベッドを下り、テレビを取った。戦闘機かレーザーか異星人か、とにかくありがたくないなにかが飛び出してきそうだったので、テレビをわきにはさみ、防火加工済みの掛け布団を持ち上げ、すっぽりと頭からかぶつた。プレゼントの中身の気持ちがわかつた気がした。

布団のすきまから様子をうかがう。小爆発は天井から壁の継ぎ目を下りてきて、床で止まった。支えを失つた壁がお互いを離れていく、ゆっくりと倒れしていく。

轟音に耳をふさぐ。壁が床にぶつかる衝撃で地面が揺れた。床以外を宇宙に囲まれ、息もつづかなくなってきた。こんなバカな話があつてたまるかと、急激に腹が立つてきた。その勢いを借り、口を開けて思い切り吸い込んでみた。呼吸ができる。なんだふざけるなとよけいバカバカしくなつて、バカバカしさの頂を越えて逆に楽しくなってきた。まわりでなにが起こるうと、自分には関係ない。気にしなければ関係なくなるのだ。ただのテレビ番組なのだから。悟つた気分になり、まわりを見るのをやめた。布団をかぶつて天才家電マーイエをいじくり、バックライトをつけた。結局テレビを見るだけだが、家に帰つたらピザでも温めてもらおう。テレビの画面には海岸の夕日が映つており、「しばらくお待ちください」の文字が行つたり来たりしている。

子画面には相変わらずリンクが閉じ込められている。ドライバーを手に、画面の枠のネジかなにかをはずそうとしている。

エレノアはふとひらめいた。「ねえ、マーイエ。起きて」

反応がない。

「起きてつたら。寝てばかりいてもはじまらないでしょ」「辛抱強くつづける」「助けてほしいの」

やつぱり反応がない。

「子画面と親画面をひっくり返してほしいの。子画面機能があれば、そのスイッチもあるでしょ？わたし、まだ操作方法がわからないから

さすがに頑固だ。

「いい。自分でやる」

エレノアはタップパネルを呼び出した。ここまではできる。メニューから「画面」を呼び出した。画面の縦横比が変わっただけだつた。「音声」「予約」を飛ばして「機能」をタップする。自動選局や視聴制限などがずらりと並ぶ。どれも目障りなアイコンで、ひと目見ただけでは理解できないボタンも多い。あちこち押しては戻りを繰り返す。

フォークとナイフを模したボタンがあった。とりあえず押してみると、「食事をダウンロード中」という表示が出た。

終わつたとたん、テレビから甲高い声がした。

「ふう

「だれ？」

「ぼくはぼくだ」

「えーと、マーイエ？」

「ぼくの名前を呼ぶのはだれだ？ぼくの中の他人か。ぼくが人との関わりを切望しているということなのか？」やたらと早口でまくし立てるので、聞き取りづらい。「それとも宇宙が語りかけているのか。いやちがう。ぼくは宇宙だ。宇宙の一部であり、ぼく自身が宇宙全体なのだ。他人なんてどこにもいない」

「エレノアよ」なんとか言葉を割り込ませる。「助けてほしいの」「食事を与えてくれた人？」

「そう そうよ。よかつた。ひきこもりだつて聞いてたから

「ひきこもり？このぼくが？バカ言わないでくれ

「じゃあ、どうして返事がなかつたの」

「おなかが空いて気絶してたんだ。だれも食事を用意してくれなかつたから

しばらくのあいだ、宇宙はたつたひとつの中エネルギーからでているとか自己実現についてとか五分でできる集中力トレーニングについてとかをべちゃくちゃとしゃべりつづけていたが、話を合せたりなだめすかしたりしてなんとか話を聞いてもらうことができた。

「オーケー」

マーイエはあっさり了解した。画面の親子が切り替わった。急に画面が大きくなつたのでリンは空中に取り残され、次の瞬間床にしりもちをついた。

「リン？」エレノアは画面にかぶりついた。

リンは顔をこちらに向けた。「エレノア、聞こえる？」

「聞こえる！」

リンは髪をかき上げながら、よろよろ立ち上がつた。ノンストップで決勝まで勝ち上がってきたみたいに肩で息をついている。

「で？　いま、どうしてるの？」

「布団かぶつてテレビを見るの」

リンはヒステリックに笑つた。「そつ。いつもと変わらないってわけね」

「宇宙でだけどね」

「そこは宇宙なんかじゃない」

「そうみたい。呼吸もできるし」

「時間がないの。聞いて。あなたがいるところはミーカの用意した宇宙船の中だけど、同時にセットの中でもあるの」

「どうこうこと？」

「宇宙船の司令室みたいなものよ。いかにも宇宙船ですつて顔でいるけど、スタジオで起震機の上にセットを乗つけてるだけ。『敵のミサイル攻撃だー』って。ぐらぐらぐら」

リンはよろけて床に倒れる演技をした。

「それは知ってる。小学生でも知つてることよ」

「でも、これは知らないでしょ。あなたはとても微妙なところ場所にいるの。いい？　セットの司令室でも、信じれば宇宙船の中

になる。子供の夢と同じ、「母親が咲むよつて厳しく言った。「わかつた？」

エレノアはうなずいた。「わかつた」と思ひ

「おじいさんも言つてたでしょ、『ぶらぶらするのだ』って。信じてはダメ。信じれば、あなた自身もキャラクターと同化する。月曜日はおさげのベティ、金曜日は娼婦のイヴォンヌ そしてほんとうのあなたは、いずれ消えてなくなる。わたしのよつて

「リンのとおり、つて？ もしかして」

勝手にチャンネルが変わった。薄暗い、空っぽの劇場だった。クレーンカメラが下降しながらステージに近づき、ぼつんと立つているミーカを映した。グレーのスーツを着て、マイクを持つていて、結婚式の司会者みたいだつた。

リンの驚いた顔がまぶたの裏に焼きついている。

「おしゃべりは終わりだ、エレノア」ミーカがネクタイを調整しながら言った。

「もう、いいところで！」

「どうせん。なんたつてテレビ番組なんだから

「つるさい！」

ジヨンの声があつかなそうになつた。「これはこれは。気が立つているようだな

「オーディションの直前だから、緊張してるんだよ」

「だいじょうぶ。きみなら勝てるぞ」ジヨンが忍び笑いを漏らす。

「そろそろはじめよつ」ミーカは司会者っぽく声を張り上げ、エレノアを指差した。「さあ、この番組でスターになつてくれ。『チャンスがなかつた』なんて、もつ言わせないぞ。題して『開け！才能の扉』

「もつとマシなタイトルはつけられないのか」

ふたりで好き勝手しゃべつたあげく、テレビが消えた。

周囲がざわつき出した。エレノアは身構え、リンの忠告を思い出しながら羽毛布団をかぶり直した。「なにが起きても信じない」と

つぶやく。

はじめは数人が遠くで雑談しているだけのようだったが、右から左からたくさんさんの話し声と足音、ぐぐもつた笑い声が近づいてくる。ざわざわが音のない空間を埋め尽くし、正面がぜんぶざわざわの波になつた。波乗りするようにあちこちで大きな笑い声や叫び声が上がつた。

目の前はおそらく人間だらけだ。ときおり自分の名前を呼ばれている気がして、エレノアは耳を澄ませた。が、思い直してかぶりを振つた。気にしてはダメだ。

音楽が流れた。そのとたん、またに津波の「とく歓声が立ち上がり、布団を吹き飛ばす勢いで押し寄せてきた。ビシヤ降りの拍手が降り注ぐ。

「 みなさん、お集まりいただきありがとうございますー。 せつそくはじめるよー。」

Hマーのかかった声が、津波の中に入り混じる。「ビシヤ、ビシヤもー。」

「ビシヤもビシヤも」という生声が左手から近づいてきた。声の主はひとりに立つた。エレノアは布団の下から、その男の革靴をのぞきこんだ。

拍手が収まる頃合を見計らって、同余者は短く息を吸い、声を張り上げた。

「テレビは好きかー？」

観客が反応する。この声はミーカだ。聞きまちがえようがない。

「そう！ だけどぼくらはウンザリしている。もうたくさんだとう気持ちだ。現実の連中を楽しませるために演技をするのは、もう終わりにしようじゃないか。今度はぼくらがおもしろい番組を見る番だ！ そうだろ？」

ミーカはいつたん言葉を切り、タメをつくつた。

「今日、最高のスターが決まるよ。エンターテインメントにはスターが必要だ。ぼくらはその一挙手一投足を見たい。同じ星座、同じ

誕生日だと喜びたい。恋人の名前を知りたい。気になる存在。憧れの存在。夢中になれる存在　きみらはどんなスターが必要なんだ？」

観客を騒ぐに任せ、ひと息ついた。

「その前に審査員を紹介しよう」

革靴が前に進んだ。

「まずはこの生物から。自分で自分をデザインし、改名し、キャラクター商品の常識を根底からくつがえした。かわいいものならなんでもござれ。毛もじやのウードウブードウ」

拍手。キーキー声で「親はまだ考えてないんだ！」と云ふと、どつと笑いが起こった。どこかで聞いたことがある。

「次は都合により名前がない男。名バイプレイヤーまであと二、三歩。審査員その一」

拍手。かすかに「一度でいいから役名がほしいよ」というボヤキが聞こえてきた。こちらもどこかで聞いたことがある。

「そしてサイモン・コーワエル」

一段と大きい拍手。こんなところでなにをやっているんだ？「ではさっそく、はじめの挑戦者に登場してもらおう。といつても、すでにここにいるんだけどね。みんな、生で見るのははじめてだろ？　今世紀最後のテレビっ子、テレビが好きでなにが悪い、悪いのは世の中のほうだ！　才能あふれる若きエレノアです！」

がばっと布団をひつぺがされ、思わず縮こまつた。歓声が大きくなる。しゃがんだまま半身の体勢になり、おやるおやる目を開けてみた。想像よりもはあるかに巨大な劇空間が目の前に広がっていた。宇宙よりも広大で、しかもおそらく巨大ななかが薄闇の中でうごめいている。自分がちっぽけに思えた。パジャマ姿ではとくにそうだ。

無駄だと思いつつも、エレノアは衣服を胸にかき集め、なるべく自分を消そうと小さくなつた。ステージは強烈な明かりで埋め尽くされていて、客席の奥からはスポットライトが浴びせかけられる。

ライトの熱で息がつまり、くらくらしてきた。

左手に白い布がかけられた審査員席があつて、審査員が三名、めいめいの格好ですわつていた。

となりに立つ同会者を見る。やはりとこりうか、ミー力が笑顔で立つていた。

「どう、この舞台。すごいだろ？ 予選からやりたかったんだけど、いろいろあつていきなり決勝戦にしたんだ。どうせ出来レースだし、エレノアは感想を述べる代わりに顔をこわばらせ、バネ人形のように立ち上がり、たつぶりと一歩あとじをつた。

「同じところにいる テレビの人なのに」

「ここはぼくらのテリトリーだ。テレビ界にかぎりなく近い。今後のためにちょっとどじ登場願つたんだ」

「テレビに取り込まれるってこと？」

「そうじゃない。そしたらぼくらはきみを見れなくなる。そんなのはイヤだ。ぼくはテレビできみを見たいんだ。役どころが決まり、現実でお芝居をしてもらいたいんだよ。そのためのテストさ。わくわくときどきのテレビ番組だよ。楽しんでくれ」

エレノアはふんふん頭を振り、ちらに小さくなつてしゃがみこんだ。

ミーカは客席へ向き直つた。「それではパフォーマンスを披露してもらう前に」 しゃべくりながら、腕をつかんで立たせようとする。エレノアは腕を振りまわして手を払つた。「これまでの軌跡を映像で振り返つてみよう」

スポットライトが消え、背後からなじみのある色とりどりの光がじんわりとあふれた。振り返ると、スクリーン一面にエレノアの顔が映し出されていた。何台かある小型のスクリーンにも、同様の映像が流れている。

スライドは「これまでの軌跡」とこりうりも、これまでの隠し撮りの成果と言つたほうが正しい代物だった。その中でエレノアは、布団をかぶつて枕にあごをつき、「ミミや洗濯物に囲まれ正面を向い

ていた。テレビを見ているのだ。ピクリとも動かず、瞬きすらしていない。と、急に布団を跳ね除けて立ち上がり、枕の外に走つて消えた。画面が自宅のトイレに切り替わった。エレノアが駆け込んで、頭のてっぺんをカメラに向け、便座にしゃがんだ。

「なんの意味があるの？ こんなものを見せて。なにが才能？ なにが技よ。ただの変態じやないの」

ミーカは答えず、魅了されたような笑みを浮かべながらスクリーンを見上げている。

ふたたび寝床に潜り込むエレノア。同じ格好でテレビを見ている。ときおり笑い、話しかけ、手探りでお菓子を探し、リモコンを向けていた。

奥から声がした。リュックが「出かけてくるよ」とかなんとか話しかけている。エレノアは返事をしない。リュックが大きな声で繰り返す。「食事は冷蔵庫に」エレノアは正面を向いたまま、ようやく返事をする。

なんてひどい女だ、とエレノアは思った。あれが自分かと思うとよけい胸が悪くなる。例の大人気青春ドラマ『キーパーズ・ハウス（原題：A good keeper）』に出てくるデニーズ・ハウスくりだつた。髪の色はちがうが、イヤな女には変わりない。お金持ちでお人よしの彼氏ジョナサン・キーパーを顎で使い、感謝の言葉は一度もない。そのくせ、第三話でジョナサンが家出した親友の女性をアパートに居候させたときには、嫉妬で言動がおかしくなり、あげくにジョナサンの車のミラーを破壊したりした。デニーズがジョナサンに捨てられたとき、エレノアはうれしくて歓声を上げたほどだった。

泣かせようという意図がみえみえのバラード調の音楽が流れ、小さな女の子の写真が出てきた。なんの関係があるのでだろうと思ったが、よく見ると自分の小さいころの写真だった。両親にはさまれ、機嫌が悪そうな顔でカメラをにらんでいる。画質の悪いホームビデオが流れる。父親に背中を押されながら「ブラン」をじぐ映像に、と

んがり帽子をかぶつてケー・キにかぶりつく映像。大きな魚を振り上げ、隙だらけのグジョンおじさんの背後から襲い掛かる映像。あのじいがくわんがきらいだったのだ

「これではオーディションというより結婚式だ。

エレノアは見ているのがつらくなり、魚を頭にのっけてうつぶせに倒れているおじさんから目を離した。観客は映像が切り替わるたびにいちいち反応して、あーとかおーとか爆笑とかをしていく。こんなものを見て、なにが楽しいのだろうか。

巨大スクリーンに、現在のエレノアのアップがふたたび映し出される。テレビを見ながら大あくびしたところでスローモーションになり、感動的な音楽を残して暗転する。

映像が終了し、静かな拍手が波を打った。

「感動的だつたね」ミーカが前に進み出て、審査員席に向かってうなずく。「審査員に感想を聞いてみよう。モモジヤのウードウブードウから」

毛むくじゃらは毛の中から細つこい手を出し、マイクをつかんだ。もつたいぶつて咳払いする。「親の名前、教えて」「えっ?」エレノアは質問を聞き返した。

「親の名前!」

「なに?」

「もう! 耳が遠いのは相変わらずだな!」モモジヤはおなじみの癪癩を起こした。

「あなた、例の毛むくじゃらでしょ? わたしの家を壊した」「

「そう。念願叶って商品化されたの。フィギュアに、クッションに、ハッピーセットのおまけだ。ビデオゲームにもなったんだ。空を飛んで、ショットガンをブチかますぜ。バンバン! ゼンブそこにいる同会者のおかげ。費用も一部負担してもらつたの」

よく見ると、顔が微妙にちがっていた。モンスター的で地方のマスクコットみたいにパツとしなかつた顔が、いまはパツチリしたタテ目に黒くてまるい鼻に一コ二コ笑う口が耳もとまで裂けていた。どこかで見たことがある感じがしないでもない。

「裏切ったのね」

「夢を追い求めただけさ。親の名前は？」

「教えたくない」

ミーカが代わりに答えた。「ハルドウルとフローサ。ほかには？」

「兄弟は何人？」

「いない。ご両親がほしがらなかつたんだ。ほかには？」

「やめて」エレノアは胸が悪くなつた。「お願い」

ミーカは無視して繰り返す。「ほかには？」

「うーん」毛むくじゅらは体をかきながら考えていた。「おまえ、整形してる？」

「あなたに言われたくない！」

「ははは」ミーカは観客といつしょになつて笑つた。「もひいいかな。それでは名なしの審査員B。なにか質問は？」

審査員Bは定年退職後の趣味を見つけそこなつた老人のようにボンヤリしていたが、急に振られて驚いていた。どこかで見たことがあると思つたら、役がほしくて犯人と銃撃戦を繰り広げた例の副本部長だつた。

「それじゃ」副本部長時代の勢いはなく、落ち着かなそつに手を何度も揉みしだいていた。「好きな色とか」

「もうけつこう」ミーカがさえぎる。「それではサイモン」

サイモンは腕組みをして、じつとエレノアを見つめる。

「そう わたしが聞きたいのは、だ。つまりきみの初デートについてなんだが」「身を乗り出し、手にしたペンをもてあそぶ。」「何歳のときだつた？」

「デート？」

「キスはあり？ なし？」

エレノアはくつつきそつになるほど眉毛を寄せて、サイモンの顔をのぞきこんだ。どのツラさげてこんなアホな質問をしたのかと気になつたのだが、サイモンはいたつてまじめだつた。いまにも鼻で笑い出しそうな、それでいて厳しく値踏みするようないつもの表情。

エレノアは質問にどんな意味があるのか考えてみたが、唐突にもかもバカバカしくなった。初デートが何歳だったかなんて質問に、それ以上の意味などあるはずがないのだ。だましてやうとか、その歳までデートしたことになかったのかとバカにしようとか、自分と比べてどうとか、そんなことはまったく考えていない。スターの恋愛や、家族や、カップ数を知りたいだけ。なぜなら連中はテレビのキャラクターで、それがテレビというものだから。

リンの声が脳みその奥から浮かび上がってきて、エレノアに語りかけた。

「信じてはダメ。だらだらするのよ。ぶらぶらして」  
ピンチに陥った主人公には、うまいことヒントが与えられるものだ。この空間はテレビ界にかぎりなく近いからなのだろう。リンの言葉をいま一度噛み締め、どうすべきか悟った。

と思つたら一瞬で消えた。エレノアは自分の頭をはずしてガムの入れ物みたいに振りまわしたい衝動に駆られた。

「あなたが鍵なのよ」

鍵。鍵とはなんだろう。リンとおじいさんは言っていた。自分には現実と番組をごっちゃにできる力があり、元に戻す力も備わっている。だけどこれまで二十数年歩んできた人生は平凡もいいところで、仕事をしたこともないし、友達もないし、恋人はいるけどかなりないがしろにしてきた。自分はなんのとりえもない。

いや、とエレノアは考え直した。テレビだ。わたしは市内でいちばんのテレビっ子。テレビのことならなんでもござれ。ドラマのキャラクターの名前も、番組表もすべて暗記している。テレビを見るにかけてはだれにも負けない自信がある。

自分のせいで、現実と番組がごっちゃになった。それはなぜなのだろう？

だれよりもテレビを見つづけたからだ。

ようやく頭の中からガムが出てきてすつきりしたエレノアは、決然と顔を上げ、会場全体を見渡した。それからだしぬけにネットシ

ヨツピングをはじめた。

「質問に答えないのかね？」

と言つサイモンを無視し、Hレノアはステージのど真ん中に布団を敷き、寝床をこしらえた。うつぶせに寝そべり、一息ついてマイエに話しかける。

「ねえ、ショッピングしたいんだけど

「きみからそんな言葉が聞けるなんて。立派だよ。さつきのきみも。自己実現にまた一步近づいたね」マーイエはペチャくちやくまくしてた。「人生という名のステージでは、みんなそれぞれ主役を演じてるんだ。人気があるからといって、他人と同じ演目を選ぶ必要はない。きみは心の声に従つて、大観衆を前にネットショッピングをしようとしてるんだね？」

「そうよ」話の内容は気に入らなかつたが、この天才家電が好きになりはじめていた。人間はダメだが機械相手ならうまくいく。

「だけど、ほんとうの幸せは自分の中にあるんだよ。物質欲にとらわれてちや真の安らぎは得られないんだ。占いゲームしない？」

「いまはショッピングがしたい」

「オーケー。人生は山あり谷ありだ」

全体的にぐねぐねしたデザインのショッピングサイトが表示された。淡い緑色がおしゃれだったが、フォントが懲りすぎでなにが書いてあるのかさっぱりわからなかつた。写真を頼りに、次々とカートにつっこむ。

決済方法の選択で、はたと氣づいた。

「お金持つてない」

「お金なんかはちょっとでいいんだ」

「ちょっとじゃなくて、ぜんぜん持つてないの」

「人それそれだよ。気に病むことはないわ。じゃあ、これを選んだら？」『電子マネー決済』つてやつ

「どういう仕組み？」

「架空のお金。存在しないお金なんだ。だから払わなくていいの。

お医者さん「いいじでほんとに注射を突き刺したりはしないだろ？」

あれと同じぞ」

そういうとならと喜んで注文した。「散財だつこね」まずは服がほしい。着るものにこだわりはないので、てきとうなTシャツとパークーとジーンズを選んだ。サイズ表記がおしゃれすぎてわからなかつたので、それっぽいものをかたづぱしから注文する。電子マネーは便利だ。

注文完了から十秒後、ダンボールが頭の上に落ちてきた。頭をさすりながら梱包を解き、ジーンズを並べてサイズをたしかめる。上下がそろつたところで布団に潜つてせつせと着替えをはじめた。

外野がざわつき出した。布団からカタツムリ的に顔だけ出し、様子をうかがう。客席からはブーイングが起こり、サイモンは皮肉と毒舌を浴びせ、毛むくじゅらは効果音を出しながら高々ヒジャンプを繰り返す。

中でもいちばんひどいのはミーカだった。いつものにやけ顔が、ちょっと無視されただけで苦しそうにゆがみ、ぶるぶると震えている。

「なにをやつてるんだ」

「着替え」

「言つただろう ぼくらを無視するなど」

ヒレノアは体をねじつて顔を向けた。「だつて、おもしろくないんだもん」

「なんだつて？」ミーカは声を裏返して叫んだ。「はあ？」

「『はあ？』じゃないよ。あなたたち、退屈なの。だからシヨツピングしてるわけ」

「なんだつて？」ともう一度言つた。「ぼくの番組が つまらない

い 退屈

「テレビは好きだけど、つまらないのはね」ヒレノアはひどいことを言つた。「チャンネル替えていい？」

ミー カはよろめいた。頭痛でもしてきたのか、知能がウリのテロリストみたいにこめかみを押さえる。「チャンネルを

「どうしてそんなふうになつたんだ、エレノア？」サイモンがミー

力に加勢した。片眉を上げて言い放つ。「番組に文句をつけるなん

て。おまえの親はどういうしつけをしてきたんだ？ それとも親の愛情が足りなかつたのか？ それで性格がゆがんだのか？」

エレノアは目を閉じ、自分に言い聞かせた。テレビが勝手に話しかけているだけだ。答える必要はない。

「 うるさくなつてきた」

「いい方法があるよ」マーイエが言った。「買い物で男を黙らせてやるんだ。『またバッグを買つたのか？ この前買つたばかりなのに』って。『おれの身にもなつてみる。働いて稼いでるのはこっちなんだぞ』って。ウンザリさせるんだ」

よくわからなかつたが、ふたたび買い物をはじめる。片手でジーンズを腰に引き上げながら、もう片方で商品をタップする。

「どんな商品がいいの？」

「重いものがいいね。 シリアスつて意味じゃないよ。別れた女房とか」

「わかつてる」

エレノアは脚のないテーブルを買つた。それでいつたいどうなるのかと、混乱度合いを増した劇場を見まわす。十秒後、平べつたいダンボールがサイモンの頭上に落下した。かなり大きな音を立てたあと、審査員席の前にどすんと落ちた。

マーイエはうれしそうに言つた。「『また家具を買つたのか！』って言われるよ。どう？ ウンザリしてるだろ？」

ウンザリというより、頭を打つて失神していた。

「サイモン・コーウエルが！」毛もじやはジャンプをやめて叫んだ。

「なんてことをしたんだ！ 新しいスターが誕生しなくなるぞ！ これからはだれがスターを

と言つ毛むくじやらには、六缶パックのビールを一ダース注文し

てやつた。さすがにフットワークが軽く、テーブルへ飛び乗つて直撃を避けたが、モノを見るなり両手で目をふさいだ。

「アルコール、よくない」体じゅうの毛を逆立て、よたよたとあとじある。「マスコットは飲んじゃダメ。子供にあくえいきょうが

』

テーブルの端から落ちた。

まったく面識のない親戚の法事に呼ばれたみたいに所在なくすわつていた副本部長の審査員Bは、まわりを確認してから缶ビールを一本抜き取り、ひとり乾杯して幸せそうにあおつた。

「たしかに」エレノアは興奮のあまり舌を出した。「買い物って癖になりそう

「いろんなことに興味を持つのはいいことだよ。じょじょに内面を探つていけばいいんだ」

「次は本命」

エレノアは頭を押さえようとするミーカのほつを向いて、スライドつき一段式の本棚を注文した。十秒経つのが待ち遠しい。

ミーカは頭上を仰ぎ、間一髪で本棚を避けた。ダンボールの角が床と衝突し、ぴかぴかの床板をへこませた。ミーカはエレノアをぎらぎらとにらみつけ、ゆっくりと近づいてきた。演技だとしてもかなり迫力がある。思わず布団から出そうになつて、エレノアはふとひらめいた。

テレビの神さまなら、暴力は振るえないはずだ。

「テレビの暴力描写つて年々厳しくなつてるんでしょ?」と探りを入れてみる。

「おもしろくないだと」ミーカは聞いていなかつた。「退屈だと?」

「そうよ。まるで『テレビ現実』みたい」

エレノアがその言葉を口にしたとたん、ミーカが見た目にもわりやすく崩壊した。背中が割れてなにかが飛び出してくるとすればいま置いてほかにないのだが、そとはならなかつた。代わりに軽

やかなステップであつといふ間に近づいてきて、布団をまたいでエレノアの顔をのぞきこんだ。

「『テレビ現実』みたいだと？」

つばきが飛んできたので、エレノアは腕で顔をおおつた。劇場内はいつのまにか静まり返っている。連中にとつてはかなりインモラルな単語だったにちがいない。

ミーカはマイクを床にたたきつけた。布団を両手でつかみ、袖のほうへ放り投げる。

「チャンネルを替えると言つたな？」

しばらく怒り狂った表情を向けていたが、唐突に背中を向け、コメディアンのように大げさに手足をばたつかせて走つていった。袖に消えたきり戻つてこない。

やつつけたと考えていいのだろうか。エレノアは袖をのぞき、振り向いて観衆を見やり、飲みすぎたあげく自己嫌悪に浸つている審査員Bを見下ろした。テーブルに伏したまま動かないサイモンの後頭部に乗せられたビールの空き缶をじっと見るうち、エレノアは緊張と興奮がひいていくのを感じた。いかがわしくも充実していたのが、いまは心にポツカリ穴が開いたようだった。

「きみはもう合格だ！」

そして床にもポツカリ穴が開いた。

## 14話 退屈の永久サイクル

リュックは通りをあてもなくさまよっていた。ほんとうにあてがなかつたのだが、重要なのは、歩道ですれちがいざま振り返る人が例外なくそう思つてゐるということだった。少なくともリュックはそう思つてゐると思つていた。そして、そう思つてゐると思つているんじやないかという妄想に支配され、やぶれかぶれになり、どん役にハマり込んでいった。ただ昼間から酔つ払つてぶらぶらしているだけでは、あてがないことにはならない。昼間から酔つ払つたうえ、優しくしてくれる同僚の女の子に当たり散らし、バジやなくてカフェからつまみ出されてはじめて、あてもなくさまよつていると胸を張つて言えるのだ。

すっかり演技させられている。

酒瓶のキャップをはずし、ウイスキーをあおる。ほら見ろ、とゲップ交じりにつぶやいた。ウイスキーの瓶なんか持つていなかつたのに。負け犬野郎にはこの小道具が必要なのだ。

男性と肩をぶつけた。「気をつけろ、この負け犬野郎」

リュックは振り返つて叫んだ。「それ、ぼくがいま考えたセリフだぞ！」

振り返つた先にショーウィンドウがあつた。焦点を合わせようと目を細める。黄緑色の背景に、ニットをかぶつてジャケット着た女性のマネキンが並んでいる。どれもカジュアルな出で立ちで、どれも腰を悪くしそうなポーズを取り、立つてたりすわつてたりしている。ボサボサの金髪がエレノアみたいだと思った。いまどこにいるのだろう。いまどろスターにでもなつて、あのマネキンみたいにポーズを取つてゐるのだろうか。こちとら宿なしの浮浪者だ。こんなストーリーがあつたような気がする。

ふらふらと近づいていき、ガラスに映る自分の姿を見た。  
映つてるのは自分ではなく、連中に演出され、演技をしている

だけだということはわかっている。ほんとうの自分はどうにいるのか。リュックは考えたこともなかつたし、人生なんとかなるだろう、くらいにしか思つていなかつたし、実際になんとかなってきた。だがいまは、うまくいっていない。「うまくいかないようにながんばった結果だ。

リュックはウイスキーの瓶を投げつけそうになつたが、ぎりぎりのところで思ひとじまつた。演出どおりじゃないか。この転落劇はいつたいどこまでつづくのだろう。

酒瓶を懐に戻し、フードを田深にかぶつた。そして通りをずんずん進んだ。

田は高く、通りは「ざつぱり」としていた。道の中央に黄緑色のおしゃれな街路樹が並んでいるし、酔っ払つてさまよつには適していないように思える。とくに考えもなくわき道に入ると、急に夜になつた。

突然さびれた裏路地に変わつた。道といつよりも建物と建物のあいだにある掃き溜めみたいなところで、腐つたキャベツと卵と油のにおいがした。地面はじめじめして、遠くのネオンや車のライトを青白く反射させていく。そこらじゅう生ゴミがべとついていて、ダストボックスは青や黒のゴミ袋があふれかえつていた。毛の抜けた猫が見上げている。

「見る、夜になつたぞー！」リュックがわめくと、猫がゴミ箱のすきまに潜り込んで消えた。「宿なしの浮浪者の役をやつしているからか？」

声が建物を反響する。上のほうから住人のものらしき怒鳴り声が降つてきた。

「やかましい！」住人Aが叫んだ。  
「場所まで変わつた なんだこれ？ 映画のセットか？」

「黙れ！」つづいて住人Bが叫ぶ。

「そつちが黙れ！」リュックは怒鳴り返す。「ほかのセリフを言ってみる、チョイ役のくせに！」

「つるせえぞ！」住人Cがここぞとばかりにアドリブでつづけた。

「そ そのまま野垂れ死んじまえ！ この

「カミカミだな！ もっと演技の勉強をしたほうがいいんじゃない

の！」

リュックは上を向いて大笑いした。笑いながら壁伝いに歩き、よくわからないぬるぬるにつまずいた。泥だらけで縮こまつたポリ袋が靴の先にしがみついていた。思い切り足を振ると、ポリ袋が飛んで頭の上に落ちてきた。げらげら笑いを追加した。

建物の窓から住人が次々と顔を出し、あれやこれやと怒鳴り散らす。怒鳴るだけでは芸がないと気を利かせたおばさんの住人Eが、バケツを傾けてリュックの頭上に生ゴミを降らした。リュックは笑いで顔をひきつらせながら、余裕で避けた。ちなみに住人Dは得意顔で赤ん坊を降らせようとしていたのだが、まわりからきつくしながられてしぶしぶ引き下がった。

どうして笑っていたのかすら忘れてしまい、でもここまで笑いつづけてきたのだから突然やめてしまいは不自然だろうと思い、だつたらどんな顔をすればいいのか、少しずつ笑いやめるのはなかなか難しいことなのではないか、と脳みそと相談していると、少しばかり先のほうに数人が固まって立っているのが見えた。リュックはひとことでは言いあらわせない複雑な表情を浮かべながらそちらへと進み、もしコーラスグループだつたらひつぱたいてやろうと思つた。さらに近づくと、コーラスグループのほうがよっぽどマシだったと気づいた。

背格好からするどどれも若いにいちゃんのようで、ただ立つているだけでなく、なにをしているかというと暴行を加えていた。だれかを取り囲んで殴つたり蹴つたり写真を撮つたりしている。おかげで笑顔を追い払うことができた。近くのダストボックスに隠れながら様子をうかがう。ひっぱたいてもひっぱたき返されるのがオチだ。若者は四人組だった。ふたりがしゃがみこみ、残りは明らかに不審な様子で周囲を見まわしている。追いはぎだ。ダストボックスか

らふんわつと「」の悪臭が漂い、顔のまわりを取り囲む。咳き込みそうになつたので、鼻と口を押さえた。これで呼吸はできなくなつたが、見つかるよりはいいだらう。多少落ち着いたといひで、もしかしたら助けに行くべきなんぢやないかと考えた。

見張り役がしゃがんでいる仲間の肩をたたき、はやく済ませるといつふうにせついた。そいつが拳銃を構えているのを見て、リュックはやつぱりやめといつと思つた。もし連中が追いはぎのチンピラを演じてゐるだけだとしても、撃たれて死なない保証はない。死んでから「なんだ、演技じゃなかつたのかよ」と愚痴つても遅いのだ。

盗れるだけ盗ると、チンピラどもは向いの通りに走つて消えた。最後のひとりは立ち去りかけて振り向き、壁にもたれる被害者に銃をつきつけ、一発撃つた。

全員が消えてからも、リュックは口と鼻を押さえたまましばらく動かなかつた。忘れものを取りに戻つてくるかもしれないし、もうこれ以上の厄介ことはごめんだつた。

しばらく待つてみたが、なにも起こらない。リュックは呼吸とむせかえるのを同時に再開した。

中腰でそろそろと被害者に近づく。みすぼらしい格好をした老人だつた。黒ずんだシャツが血に染まり、どんどん広がつてゐる。浅黒い顔がぽかんと驚いたような表情で固まつてゐる。どう見ても浮浪者だつたが、なぜか青いバイザーをかぶつていて、これだけはぴかぴかだつた。

死んでしまつたのだろうか。リュックはおそるおそるのぞきこんだ。

老人はぱつと目を開けた。「いや、死んでない  
リュックは仰天してあどじやつた。「だ

「なんだ」

「だいじょうぶなんですか?」

「なぜ?」

「撃たれたじゃないですか。いま救急車を」

「待つんだ」老人はリュックの腕をつかんだ。「呼んではいかん。

救急車を呼ばれたら重症になってしまつ」

言い返そうとしたのだが、理屈の糸が口の中でこんがらがつて舌に絡みついてきたのでできなかつた。老人は胸を血でべつちより濡らしながら平然と見上げる。ふと、このこんがらがりは最近おなじみのあの感覚だと気づいた。

リュックは慎重にたずねた。「ケガはします？」

「いいや」

「その血は？」

老人は穏やかに笑つた。ポーチでひなたぼっこでもしているみたいに落ち着いている。

「こいつは血糊だよ。火薬で破裂して中身が飛び出すやつ

「演技ですか？」

ゆつくりと眉を上げ、言つた。「まあね」

リュックは仰向いて両手で顔をおおつた。安心するのとウンザリするのでしばらく口をきけなかつた。人が死にかけているのすら演技だとすれば、まともに相手できるものなんてどこにもないのでないか。酒瓶を取り出し、口に含んだ。

「なんだ、もうすっかり対処できていると思つていたんだが」「なににです？」

「番組化しつつある現実にだよ、リュック」

老人はそう言つて、リュックをじっと見つめた。知恵のこもつたまなざしだつた。リュックは次に言うべきセリフが思い浮かんだが、演技くさかつたので速攻で取り下げた。言いたいこともまともに言えない。この調子では狂つてしまふのではないか。

「こんなふうに聞いてもらいたいんですか？』『どうしてぼくの名前を？』とか、『あなたは何者なんですか？』とかなんとか

「その様子を見ると、完全に演技に取り込まれているようだな」

「あなただってそうだ。浮浪者で、しかも被害者の役をやらされて

いるように見えますけど

「そうは思わん」

「思わなくとも、実際にそう見えますよ」

またしても老人はじっと見つめる。やっぱり知恵のこもったまなざしで、そこへ悲しげな表情を追加した。それとも悲しげに見えるのは、まったく似合っていない青いバイザーのせいかもしれない。

「場所を変えよ」静かに言つた。「ダストボックスに入つて」「はい？」

「ゴミ箱だ。詳しい」とは中で話さう。ほら、蓋を開けて

「ゴミ箱の中で？」

「そうだ」老人はちらりとも目をそらさない。「そう演技されでは、まともに話ができる。舞台を変えれば目を覚ますだろ？」

「ゴミ箱が舞台？」

老人は辛抱強く伝えようとじらじらを押さえているようだったが、ゴミ箱に入る話で辛抱強くされること自体がリュックにとっては心外だった。

「集中するのだ。テレビの連中は口ごとに力を増している。その証拠に、いまではリアルなセットを用意できるまでになった。 テレビの連中は知っているな？」

リュックはうなずいた。

「いいかね。演技をしている者がセットから抜け出すには、せつかく苦労してこしらえたセットがぶち壊しになるような行動を取ればいいのだ。共演者睡然、スタッフ全員どっちもけ、エージェントに苦情の電話を入れて　　とにかく撤収したくなるような行動だ」「だからゴミ箱ですか」

「そうだ。それ以外に方法はない」

老人は振り向いて、ダストボックスの蓋を持ち上げた。つんとじてほっこりする異臭が漂つてくる。いっぱいまで開けると、縁をつかんで風呂にでも入るように足を持ち上げた。

「他にも方法がありますよ。たとえば　空を飛ぶとか。社会派の

「ドリマなのにいきなり空を飛ばれたら、どうちらけもいじります？」「どう思います？」

老人はゴミ箱に腰を下ろし、肩まで浸かった。表情は真剣そのもので、周囲の暗さもあってかなり不気味だった。リュックはかがんで田を呑わせ、言った。「理由を聞いていいですか？」

「なんの理由だ。生きる理由か。そんなものありはしない」「信用する理由ですよ」「わたしは神さまだと言つたら、信用するかね」「いいえ」

すると老人は、足もとのゴミ袋をがさがさかきまわしてボルトアクリション式のライフルを取り出した。

「こいつは神の使いだ」リュックに向けてぞんざいに構える。「説得がうまいんだ」

「撃てるはずがない」と、言い直す。「ちがうな。あなたといつしよですよ。撃たれても血糊が破裂するだけなんでしょう？」

「ビニに血糊が仕掛けたるんだね」

「というわけでリュックは説得された。酒のにおいでしまかそそうとウイスキーをあり、これ以上ないほどしぶしぶとゴミ箱に入った。「蓋を閉めるぞ」

「どうぞ」鼻をつまんで言つた。

「そうそう。ハレノアがあんたにようしくて言つていたぞ」「ほんとですか？」

老人はふと考へ込んで、言い直した。

「いや、言つてなかつたか」「蓋を閉めた。

蓋が閉まるごとに、リュックのあらゆる感覚が鼻に集中した。ビルのがさがさとう音を放つてくる。もう一生キャベツは食えないだろう。

がさがさやつてているのは老人のようだつた。なにかを探つているようだつたが、それをやめると今度はリュックをべたべたと触り出した。がさがさのあとのがたべたで、リュックはもう少しで吐きそうになつた。

「ちがうな」老人がつぶやいた。「こつちかな?」

朝一番にカー・テンを全開にしたみたいに、目の前が真っ白になつた。リュックは目を細めた。強烈な光を透かしてぼんやりとなにかが見える。

足場ががくんと傾き、疑問や感想を伝えるヒマもなく、足もとのゴミといっしょに光の中へ転げ落ちた。

「ここなら安全だ。テレビの連中は近づかない」

リュックは自分の上下もわからず、手足をばたばたさせた。耳に硬くて平べったいものが当たつていて。手で探つてみて、床だと気づいた。どうやら耳で立ち上がろうとしていたらしい。床に手をついて足を下ろし、目を開けた。

老人が視界に入った。ライフルを肩に抱え、武将のように床にあぐらをかいている。

「そのますわつている。部屋の様子が見えるか?」

言われたとおり、ひととおり見まわしてみた。

ただの部屋だつた。

これしか説明できないのにはわけがあつた。リュックの語彙が貧困なのではなく、観察眼がないわけでもなく、明らかに部屋のせいだつた。間取りから調度類、壁の色やポスターなど、なにからなにまでふつうとしか言ひようがないのだ。なにもないのであれば「なにもない部屋だ」と説明できるのだが、部屋らしさに必要なものはすべてそろつっているのでよけいに厄介だつた。部屋の様子を正確に描写するには、映画であれば三部作、ドラマなら一シーズンまるまる必要になるほどだつた。傑作アクション時代劇『荒野の二十七人』であれば一作で説明できるはずなのだが、それでも万全を期して二十八人目を用意しなければならないだろうと名監督を用心づかせる

ほどだった。

「ここなら安全だとリュックは直感した。そしていつのまにか頭痛が治まり、酔いも消えていたことに気づいた。それどころかこれ以上ないほど体が軽く、心は澄み切り、爪の伸び具合もちょうどよい。立ち上がりて、ただの窓から外を眺めた。特徴のない朝の景色が広がり、鳥が特徴なくピーピーチュンチュン鳴いている。そして振り返るころには、すでにどんな部屋だったかきれいにさっぱり忘れているのだった。

「ここは『朝起きるための部屋』だ」老人が重々しく告げた。「神圣で、純粹で、意味がない」

リュックは老人に向かい合って腰を下ろした。

「気分はどうだね」

「快調です」部屋の様子よりも先ほどまでの醜態のほうが生々しく、頭をかきながら老人にわびた。少なくとも相手がライフルを抱えているうちは謝つたほうがいい。

「ここは現実ではない。セットのひとつだが、連中が近寄れないのはその退屈さゆえだ」

老人は思わずぶりに言葉をとめたが、リュックがとくに反応しなかつたので先をつづけた。

「わたしがここをこしらえたんだ」

ふたたび言葉をとめて質問を待つた。が、リュックはまたしても反応しなかった。

老人はライフルを持つ手に力を込めた。

「なぜこのセットをこしらえたのか?」なんとか注目をせよつと声のトーンを上げる。「現実を救つためには、退屈を取り戻さねばならんのだ。それはなぜか?」ほとんど怒鳴りかける。「どうして無視するんだ!」

リュックは驚いて老人を見た。「無視していないですよ。ちゃんと聞いてます」と嘘を言った。

「あとで困るぞ。泣きついてきても知らんからな」

「なにもしたくない気分なんです、ここにいると」

「ここ。そう、ここは審査員特別退屈賞受賞作なのだ」

「ですか」

老人はかぶりを振つてため息をついた。「学校の先生に『話を聞くときは相手の顔をちゃんと見なさい』って言われなかつたか?」「いいえ、一度も」リュックはしつかり老人の顔を見ながら、とくに理由もなく学習机を撫でた。「ほら、ちゃんと見てますよ」

老人は疑わしげな目を向けたあと、なにかを思い出すように上を向いた。「詳細は省くが、わたしはシナリオコンテストを開催した。退屈な脚本を集め、現実を救うためにな。そして三ヶ月前、受賞作を手に現実世界にやつてきた。そして楽しそうに演技をつづける人々へ退屈な脚本を渡し、こっちを演じるようになると説教してまわった。脚本に適したセットもこしらえてやつた。だがだれもいうことをきかない。あの若い連中に襲われていたのも、チンピラの役に入り込んでいたところを助けようとしたからなのだ」

ここで言葉をとめ、ちゃんと聞いてるか確認するようにリュックを見た。リュックはふかふかのじゅうたんを触りながら、いまここで横になつて伸びをしたらどれだけ気持ちがいいだろうと考へていた。

老人の目が細くなつた。

「現実世界では、わたしはただの口やかましい年寄りだ。だれにも相手にされなかつた。いまが楽しければいいんだ、将来なんて関係ねえ、サラリーマンなんかやりたくねえ、おれはミュージシャンになるんだぜ、つてなぐあいでな。ほんとに聞いているのか?」

「?

「もちろんですよ。でもなんの話かさっぱり酔いどれのときのほうがよっぽどもだつた」老人はつぶやいた。「まあいい。あれを見ろ」

ベッドを指す。中学生くらいの少年が眠つていた。部屋と同じで、特徴をつかむにも視線が素どおりし、見たそばからなにを見たの

か思い出せなくなる。

「こちらは作者だ。名前は『だれも求めていない少年』という。年のころは十四、五といったところで」

「それが名前ですか？」

「自分で二ーチュと呼んでいるようだ。脚本にはそうあったのだが、なぜかはわからん。おっと、はじまるんだ」

目覚ましをとめた。もう一度寝返りをうつり、寝言をつぶやく。リックは聞き耳を立てた。「ベーコンキヤセロール」と言つてゐる。なにか意味があるのかと思い、老人を見た。老人はかぶりを振つた。  
「意味はない。おもしろくて気が利いていると自分で思い込んでいるだけだ」

「おもしろくありませんよ」

老人は静かにしろと自分の口に指を当てた。

たしかに少年は気が利いたことを言つたと思い込んでいるようだ、寝ながら笑いをこらえていた。ふつうのじらえかただつた。

ドアが勢いよく開き、やはり中学生くらいの年かさの女の子が入ってきた。長めのショートボブにわずかに赤みがかつた銀髪で、目の色は左右ちがつていた。頭にはレースのついたカチューシャやらリボンやらがいくつも巻きついていた。ほどけかかった包帯も巻きついていた。上はパジャマだが下はスカートで、首に鈴がついていて、右足には紺のハイソックス、左足には白いニーソックスをはいていた。靴も高さもあべこべなので、歩きづらそうだった。  
あらゆる動物の尻尾を引きずりながら部屋をよたよたと横切り、窓に向いて立つた。そして朝に開けるならこれしかないといつやりかたでカーテンを開けた。

「妹だ」老人が耳もとでささやく。「かわいらしさを極めている」

「怪しいですよ。気が狂つてるとしか思えない」

「心配はいらん。興味をひくことはなにも起きないから」

振り向くといつのもにかメガネをかけていた。老人とリックの

前を横切る。リュックは目を合わせないようにした。

妹とやらはベッドを前に立ち、起きておにいちゃんと言った。少年は寝言を繰り返した。妹は朝だよ今日から学校でしょと言った。少年は寝言を繰り返した。妹が起きなさいこの寝ぼすけーと怒鳴ると、少年は必死でニヤニヤをこらえた。

腰に手を当ててもうおにいちゃんたらとふんすか怒った。それから振り向いて老人からボルトアクション式のライフルを奪い取ると、銃床を少年のこめかみめがけて思い切り叩き落した。

少年は思わず「うっ」とうめいた。恍惚とした表情を浮かべているところを見ると明らかに目を覚ましているようだったが、それでも起きなかつた。しかもわざわざ寝返りをうつて妹のほうに顔を向けるので、妹はそれならばと遠慮なく顔面を殴りつけた。少年は感極まつたのか震え出した。もう少しでどこかへ行つてしまいそうだ。妹は銃を反転させ、慣れた動作で遊底を操作し、銃口を少年の口につつこんだ。このへんたーいと叫びながらためらうことなく引金をひいた。心臓と鼓膜によくない破裂音とともに薬莢が跳ね上がり、少年はもんどううつてベッドの向こうに転げ落ちた。妹は容赦なくハ発すべてをぶち込み、薬室をのぞきこんだあと、老人にライフルを投げて返した。

なに「ともなかつたよ」にのんると部屋を横切り、ドアを開けた。ふと立ち去りかけて振り向き、リュックを見て薄ら笑いを浮かべた。言いたいことでもあるのかと見返すと、なにを思ったかいきなりスカートをめぐり上げてパンツを見せた。そして自分で見せたくせにほおをぷっくり膨らませ、ふんすか怒りながらドアをばたんと閉めた。

リュックはとてもイヤな気分になつた。

「退屈の永久サイクルが開始したぞ」

「退屈の永久サイクル？」

「繰り返すな。

先ほども言つたが、テレビの連中は退屈が大の

苦手なのだ。退屈の永久サイクルが稼動しているうちは、近寄れな

い

そんなことははじめて聞いたような気がしたが、黙つておいた。  
「あなたはなんともないんですか？ テレビの神さんなんでしょう  
「もと、神さまだ」顔をゆがませる。額に汗が浮き出ていた。「な  
んともないわけはないだろう。とても気分が悪い  
「ぼくも気分を害しましたけど」

「時間がない。はやめに済ませよ！」

老人は顔をぬぐいながらつらそうにベッドへ這い進み、ナイトテ  
ーブルの引き出しを開けた。リュックはなにげなく背中を見やり、  
少年がいつのまにかベッドに戻つてはじめの姿勢で眠つているのに  
気づいた。

「いつのまに

「このシーンは永久に繰り返される。とめようとしたくないかぎりな  
老人はよれよれの紙の束を手に戻つてきた。「また目覚ましが鳴  
るぞ」

目覚まし時計が鳴つた。少年は寝言を言いながら寝返りをうづり、  
目覚ましをとめた。

「気にしなくていい。家電品のモーター音みたいなものだ。わたし  
の言つことにだけ集中しろ」

「その紙は？」

「脚本だ。栄えある最優秀退屈賞受賞作。わたしが書き、エレノア  
が選んだ。それをきみに渡そう」

よくわからないまま、リュックは紙の束を受け取った。

「こいつをよく読め。そして書かれているとおりに演じるのだ。脚  
本があなたを救い、エレノアを救い、ひいては世界を救うことにな  
る」

リュックは読もつとしてページをめぐりかけた。老人が浅黒い手  
でさえぎる。

「いまは読むな。家へ戻つてから、じっくり読め。手を洗い、鍵を  
かけ、電話のベルは小さくしろ。出前も取るな」

「ちらつとなら」

「ダメだ。書いた本人の前で見てはいけない。なぜならば、そうすることで効力が薄れて世界の破滅が」

「恥ずかしいんですか？」

老人は無視した。

「家に帰って、か」リュックは思い出し、短くため息をついた。「家はなくなりましたよ。へんな生物が来て、こっぱみじんだ。ぼくはほんとうの宿なしなんです」

「たしかにそんな感じだったな。宿なしの酔いどれの負け犬だった」「実際、そうですよ。もう酔つてはいなけれど、ここから出たらまた同じことを繰り返すんです。はじめはなんとか抵抗してたけど、自分の意志ではどうしようもできない」

ドアが開き、妹が一度目の登場を果たした。スカートはより短くなり、メガネの上から眼帯をつけ、そのうえパニエまでいていた。ライフルを手にベッドへ寄り、少年の頭を殴りはじめた。老人はその様子をじっと見ている。

急に振り向き、勢い込んで言った。

「あんたは負け犬じゃないだろう。家はなくなつたが、負け犬じゃない。転落もしていない」

「そう思いますよ。でもまわりはみんな、負け犬としてぼくを見ている。現にそうだった。『ミミみたいに見られて、野次を浴びせられて』

「それはエキストラが、あんたと同じく役を演じているだけだ。あんたが負け犬を演じるかぎり、演技はつづくのだ。行く手にはいつもさびれた裏路地があらわれ、必ず酒瓶を手にしている」

「じゃあ、どうすればいいんですか」

「酒は飲まず、まじめに生きること」

と言つて、妹が投げてよこしたライフルをキャッチした。

「そして、すべきと信じたことをする。あとは、人の話をまともに聞くことかな。負け犬じゃないという声が聞こえたなら、それ

を信じればいい。どんな衣装でどんなセットを用意されようが、自分の信じる役のみを演じる。そうすれば必ず、まわりもあんたが演じる役に合わせてくれる

「老人は唐突に話題を変えた。

「エレノアを助けないのか？ 心配するようなセリフがひとつもなかつたが」

「テレビ界の ジョーンとかいつやつにも、同じことを言われましたよ」

「だれだつて言つだらう。恋人なんだから」

妹が夢遊病のようにうなづくしほじめたので、リュックは顔を伏せた。

「恋人を救う男の役、つてことでしょう。それにヒーロー、役の中の役だ。ヒーローを演じりうることでしょう。この脚本にも、そう書いてるんじゃないですか？」

「なるほど」

妹が立ち止まり、じらじらと見下ろしている。

「ヒーローもいろいろある。中には超地味なのだつているだらう？ 人気のないのだつている。『ラットマン』とか、『赤ちゃんコップ』のロドニーとか。なにも全身タイツにヘルメットでポーズを取りなきゃならんという決まりはない

「あんた、視聴率を気にしそぎつ！」

妹がいきなり話しかけてきたので、リュックはぎょっとした。びしつと指を突きつけたまま固まっている。

「視聴率がなによ？ 一桁だつて立派なもんでしょー。」

「そのとおり」

「なにが言いたいのかな」

「まあ、自分を信じりうることだらうな

「そようつ！」

「そして助けたいと心から願え。そうすれば叶う。願えば家だつて見つかるぞ」

「まさか」

「そうならないのは、手に入らないと信じているからだ」

「だったらだれも苦労しないな。そういうのはテレビ界の話でしょ？ 現実はちがうんですよ。そんなにうまくは」

「しかし、現実はどんどんテレビ化しているぞ」

「そうだろう？ というふうに眉を上げ、額にしわを寄せた。リュックは反対に眉を下げる、老人が言わんとしていることをまじめに考えてみた。そして気づいた。つまりいまの状況ならば、現実でも安っぽいドラマみたいな都合のいい展開もありうることことだ。まじめも悪くない」

「つまりそういうことよっ！」妹が叫んだ。「このバカっ！」

「もうすぐ戻る時間だ」腕時計を見て老人が言った。「とにかく、ここを出たらシナリオを読め。そして演技を恐れず、冒頭だけでも演じてみろ。きっとうまくいくから」

妹が目の前でがくんと膝をつき、恐ろしい力で首もとにしがみついてきた。「おにいちゃん、大好きっ！」リュックは窒息しそうになり、必死で引き剥がしにかかりた。異変に気づいたのか、少年が上体を起こしてこちらを向いた。とたんに氣の毒なくらい哀れっぽくあえぎ、鼻水を垂らし、ばつたりと氣を失った。

田覚まし時計が鳴った。

## 15話 あみに合ひ脚本は？

エレノアは目を覚ました。とたんに体が勝手に大きく息を吸い込んだ。ざらざらした冷たいものに頬が触れていて、息を吸った拍子に砂が口の中に入った。ペッペと吐き出す。

「カット！」怒り狂った声が、拡声器をおして響き渡った。「ぜんぜんダメだ！ 撤収！」

どこも折れたり曲がったりしていないようなので、エレノアは手をついて立ち上がった。寝転がっていたのはところどころひび割れた歩道で、チョークで落書きがしてあった。立ち上がって白い線をたどる。落書きははじめ大きな輪ゴムのよう見えたが、警察ドキュメンタリーの殺人現場でよく見る被害者的人型だとわかつた。黒い血だまりが伸びすぎのパンケーキみたいに広がっていた。

「着替えます？」

若い男の顔が横滑りしてきた。

「はい？」

「着替えですよ」

「どうして？」

あたりを見まわす。男はフットワーク軽く視界に飛び込んでくる。

「その格好じや、帰りのタクシーも拾えませんよ」

妖精めいた顔で笑う。タオルをエレノアに差し出した。

「タクシー？」よくわからないまま、受け取ろうと手を差し出す。

白いブラウスがひじまで真っ赤に濡れていた。もう片方の腕も、胸も、腹も、とにかく見えるところはすべて血まみれだった。キャリーも真っ青だ。

タオルで顔をぬぐう。お返しにべつとりと血がついてきた。

「どうして血だらけなの？」

「どうしてって、死体だからじゃないですか？」笑顔を張りつかせたまま答える。

「「」」は？」

「あのー、カットがかかったから、もつ演技しなくてだいじょうぶですよ。 それとも役に入り込むと、パツと切り替えられないものなのかな。ぼくは役者をやったことがないんで、そのへんよくわからんんですけど」

いきなりわけのわからない場面に出現するのは、いつまでたっても慣れそうになかった。えらそつた拡声器の声が言つたとおり、撮影スタッフが機材を抱えて撤収作業を行つてゐる。さほど広くない通りで、古風な雰囲気だつた。非常識な感じはしない。雑貨屋やレストラン、レンガ造りのアパートなどが「」にひしめいていた。「ダメですよ、死体が目を開けちゃ。監督が怒つてましたよ」とひそひそ声で言つ。「まあ、イライラするのもわかりますけどね。あなたがこんなチョイ役を引き受けるなんて、だれも思つていなかつたから。冗談がお好きなんですね」

ショーウィンドウに顔を映しながら、タオルで「」しする。ガラスの向こうを見た。黄緑色の背景に、ニットをかぶつてジャケット着た女性のマネキンがいて、どれも腰を悪くしそうなポーズで立つたりすわつたりしてゐる。

ついに俳優デビューしてしまつた。あのときは「」力をやつつけたと思ったが、どうやらそうではないらしい。無視してもダメ、言葉責めも効かない。あとは実際に殺害するしか方法がなさそうだつたが、そんなことをしなくとも、とにかくあきらめてくれさえすればいいのだ。どうすれば興味を失つてもらえるのだろう。俳優が行き過ぎのファンをつとおじがる気持ちがわかつた。こんな日が来るとば。

ふと「マイエ工を持つていないことに気づき、とたんに不安になつた。あのテレビがなければ、完全にひとりぼっちになつてしまつ。

「じゃ、ぼくは行きますんで」

「待つて」ハレノアはいちかばちかの賭けに出た。「わたしの家、どこにあるか知つてる?」

「家？」

「ああ、あなたのトレー「ラーなら、あそこにありますよ」

「ほんとの家よ。なんでかつていうと、話せば長いんだけど」

「すいません、行かないトドヤされるんで。じゃ」

自分の家の場所がわからなくなる理由をあれこれ考えていのうち  
に、男はいなくなつた。

血まみれのまま重い足を引きずり、教えてもらつたとおりにトレーラーを探す。車道をふさぐようにずらつと並んでいて、見るからにえらそうな感じだつた。どれもまったく同じ形で、同じ銀色。自分の名前が刻印されたプレートを見つけ、ステップを上がつて扉を開けた。

生徒たちが一斉に振り向いた。初老の教師は黒板に書くのをやめ、エレノアをメガネの奥からじろりとにらんだ。入る教室をまちがえましたと振り返り廊下に出て教室の番号を確認してから、教室へ入つたこと自体がまちがいなのではと思い直した。

「また遅刻ですか、エレノア」

エレノアは思わずうなつて仰向いた。これはいいかげんにしてくれという感情表現だつたのだが、先生にとつては遅刻常習で反抗的なクラスの厄介者にしか映らなかつたようだ。しかも血まみれときている。

と思つたら、血はきれいに落ちていた。服装もちがう。サンダルにだぶだぶのジーンズをはいていて、ヘソがモロ見えだつた。BだからCだか、ファッショնに関心がないので何系なのかはわからなかつたが、少なくとも二十四歳の女がするような格好でないのはたしかだつた。

「そこに立たれると迷惑だ。扉を閉めて、席に着きなさい」黒板に目を戻す。「出でいつても構わないがね」

しようがないので席に着くことにした。クラスメイトの遠慮のない視線を浴びながら、自分の席を探す。背負つたバッグを他人の机やら他人の頭やらにぶつけながら、いちばん後ろの開いた席にすわつた。おしゃれだが使える面積が少ない机にバッグを置いて、中身

を確認する。制汗剤のスプレーに携帯電話にお菓子に錠剤の入ったケースに田舎、化粧品各種に帽子。教科書やノートはひとつも入っていない。筆記用具すら入っていない。だから不良なんだろう。

携帯電話に見覚えがあった。急いで取り出す。なめらかな手触りに心底ほっとし、授業中にもかかわらず声を出してため息をついた。さっそく起動する。

「また会えてうれしいよ、エレノア！」マイマイの声が教室じゅうに響き渡った。「なんとか潜り込めたんだ！」

顔を上げると、先生を含め全員がエレノアを見ていた。

「着信音なんです」と口をかす。

先生は皮肉を言った。「授業中にメールをするとときはマナーモードに切り替えるように」

ここにいるのはテレビ界の人間なのだとわかつても、教室で携帯電話と話をする気にはなれなかつた。なので、エレノアは生まではじめて携帯電話自身へメールを打つことにした。

「助けて」

「助けることができるの自分自身のみ」口調どちがつてメールの文章は硬かつた。「ぼくらは手助けをするだけ」

「どうすれば抜け出せる？」

「きみは演技をしている。授業中にメールをするのは不良だ。まさに役柄どおり」

「無視したり、関係のないことをするばいいんでしょう？」

「一時しのぎにすぎない。逃れるためには、かみの」

後半が意味不明だつた。返信しようとすると追加のメールが飛んできた。

「打ちまちがえました。すみません」改行。「きみが心からやりたいと思えることは？」

もちろん、と書いてから、手がとまつた。少し前なら考へるまでもなく即答していた。

「わたしがしたいことは

「ここまで書きかけたところで、マーイエから別のメールが届いた。『テレビが見たいのか。ほんとうに？』ほかに一生づづけたいと思うことは、ないのか」

そんなものはない。考えたこともない。

前のほうからなにかが飛んできて顔に当たり、床に落ちた。まるめた紙を拾い、広げて読む。汚い字でこう殴り書きしてあった。

「きみの一生はぼくがつくる。逃れることはできない」

終了のベルが鳴る。クラスメイトは一斉に席を立ち、思い思にしゃべりながら廊下に出ていった。

廊下はすでに学生で埋め尽くされていた。教室を移動しようと前から後ろからひっきりなしにやってきて体をぶつけしていく。その場に立っているのもやっとだった。

「これもダメだ！」校内放送用のスピーカーから、ミーカの怒鳴り声が響いた。「高校生をやるには歳を取りすぎている。どうすればいいんだ？ どんな役ならぴったりハマる？ どんな脚本なら魅力を活かせる？ わからない。わからないぞ！」

「どうしてわたしにこだわるの！」聞こえているかもわからなかつたが、手近なスピーカーに向かつて叫んだ。「わたしより魅力のある人は大勢いるでしょ？ わたしに合つ脚本なんてないよ！ わたしにだつてわからないんだから！ もうほつといて！ 好きにさせてよ！」

「カット！ 撤収！」

学生の流れがとまり、全員が逆向きに動き出した。エレノアは足を踏まれて声を上げた。サンダルが脱げる。大柄な男が体当たりするようにぶつかってきて、別の学生にもたれかかった。邪険に払いのけられ、足が床を踏み外して膝をついた。

両腕をつかまれ、ひっぱり上げられる。「『』が宇宙怪物ABC

の巣だ」と片方が渋い声で言つた。

「すべりやすくなつていて。足もとに氣をつけろ」ともう片方が言った。鼻が詰まつたような声だった。

「銃は使えるな？ これを使え」

葉巻をくわえた渋い声のおつちやんに銃を渡される。とんでもなく重く、取り落としそうになつた。

「これってどうこう」

「この銃か。十ミリ弾百発装填の標準仕様のライフルだ」と渋い声。「そうじゃなくて」

「ポンプアクション式のグレネードランチャーも装備」と鼻声。

「全方位モーションセンサー付で」

「反重力電子分散型シールドも！」

「いまのは嘘だ！」渋い声が渋く怒鳴つた。「口がすべったのだ！」

周囲は暗く、暑く、温泉みたいにじめじめしていた。光源はふたりの胸に埋め込んであるライトのみで、岩肌が青白く浮かんでいる。たぶん洞窟だろ？ ふたりはどう見ても兵士だつた。どちらもヘルメットをかぶり、迷彩服を着て、そのうえから鉄製のチョッキみたいなものを着けている。

「センサーに動きあり！」おつちやんが銃を構える。「B型宇宙怪物が三体！ お出ましだぞ！」

「B型肝炎みたいだな」鼻声が言つた。「もつとマシな名前は付けられなかつたんですね？」

「無駄口を叩くな、スコッティー！」ヒレノアに向き直つて言つ。「あんたも死にたくないけれど銃を構える！」

言われるがままに銃を構えてみたが、重すぎてしまつすぐ向けられない。腰を入れて持ち上げると、今度は行き過ぎて銃口が背中にまわりこんだ、

よたよたよろけると、力強い腕に支えられた。

「来たぞ！」

凶暴なおサルのような叫び声が何重にも響き渡り、ついでにエローで跳ね返ってきた。心臓が冷え切つて腕がこわばる。銃を取り落とした。暗い中、なにかがさつさつと動くのが見えた。そちらへ向け、兵士ふたりは雄たけびをあげて同時に銃を発射し、突進した。

あたりがほぼ真っ暗になる。

支えがなくなり、エレノアはへたりこんだ。

「ふりふり」という太い発射音と、花火みたいな青白い光が点滅する。

「死ね！ このクソつたれ！ かかってきやがれ！ どうした、まとめてぶつ殺してやるぞ！ あつ！」

尖ったもので体を貫かれたときの効果音が聞こえた。男とは思えない悲鳴。おサルの声。「スコッティ！」とおつちゃんが呼びかける。「うわああああ！」

顔を上げる。よだれを垂らす巨大な口がぱっくりと開いていた。エレノアはもう少しで目が裏返りそうになつた。怪物の吐息が顔を撫でる。顔をかばおうにも腕が動かない。

エレノアは目を閉じた。それならばと宇宙怪物Bはひと声叫び、いただきますとばかりにふわりとおおいかぶさってきた。

「カット！ 撤収だ！」

かぶさってきたのは羽毛の掛け布団だった。完全に捕らえられた。逃げることはできない。

リュックは国道のど真ん中に立っていた。なぜどうしてと考えるよりも先に、車がわきをかすめるように走り抜けていった。今度は反対側から。リュックは背筋をぞくぞくさせながら、体をなるべく中央のラインの中に押し込もうとした。車は前から後ろから、ひつきりなしにとおり抜けていく。へたに頭を動かすとそれちがいざまに引っこ抜かれてトラックの助手席に転がり込みかねないので、両目だけで左右を確認した。

車の流れが途絶えた。リュックは体を縮めながらストローの着ぐるみみたいな格好で歩道めがけて走った。歩道で一息つき、ストローから腕を出した。

少し歩くと、バス停があつた。

冷たいベンチに腰掛け、車が行つたり来たりするのをぼんやり眺める。知らずに懐へ手を入れていた。硬いガラス瓶の感触を探るが、酒はなかつた。その代わり、クリップで留めたよれよれの紙束が入つていた。最優秀退屈賞受賞作の脚本だ。

いまいる場所は、これ以上ないほど平凡なところだつた。どこを見まわしても見慣れた光景に見慣れた建物があり、永久に終わらない道路の補修工事がいつもの場所でけたましい音を立てている。なじみの近所だ。家まで歩いて二十分とかからない。

「近所ね」リュックは笑おうとしたが、むなしくなつたのでやつぱりやめた。

紙の束を整え、目を落とす。タイトルは『家族物語』とある。受賞作だけあって、たしかに退屈そうだ。ページをめくる。登場人物と簡単な説明が並んでいる。エレノア　主人公。ここで思つたのは、自分が主人公ではないのかということだった。

リュック　エレノアの恋人。脇役か、とつぶやいた。悲しくもなんともなかつたが、堂々とおまえは脇役だと言われるのは妙な気

分だった。いつたいだれが決めたんだと文句を言いたくなる。

おじいさん アイスクリーム屋さん。あの老人のことか。名前  
くらいいつければいいのに。

リン・タウンゼンド エレノアの親友。テレビのキャラクター  
だ。どうやって出演をせる気だろ？ エレノアは大喜びかもしけな  
いが。

人物紹介は以上だつた。かなりこじんまりとしたドラマらしい。  
ページをめぐり、最初の一節を読んだ。「リュック、新しいわが家  
へ帰る」

いきなり難問があらわれた。ほかの人はどうか知らないが、家へ  
帰るのは並大抵ではない。

「願えば見つかるつて？」リュックは気の抜けた笑い声を上げた。  
「どこに方法が書いてあるんだよ」

ためしに自分のセリフをひとつ読み上げてみた。

「おい、かあさんや。そこのサラダを取ってくれんか」

そこにあるのは退屈の極致だった。エレノアの目に狂いはない。  
ふたりは結婚した家族という設定で、「おはよう」とか「調子どう  
とか」「学校に遅れるよ」とか、どうでもいい話を延々とつづけてい  
るだけだった。シットコムのキャラクターが毎週必ず見舞われるよ  
うなトラブルもなく、ケンカもしないしげストも出ない。三十枚程  
度の薄っぺらなシナリオなのだが、数ページで読むのをやめた。た  
しかにこれならテレビの連中は近寄らないだろうが、たぶんそのう  
ちだれひとり近寄らなくなる。こんな生活はまっぴらだった。

となりにだれかがすわったので、脚本を懐に戻し、なんとはなし  
に目を向けた。巨大な黄色いニワトリだった。黄色いタイツをはい  
た足を投げ出し、盛り上がった尻をもぞもぞさせながら新聞を広げ  
た。

といつても本物ではなく、ただの着ぐるみだった。リュックの視  
線に気づいたのか、ふたつの顔を同時に向けた。リュックはなぜか  
ほつとした気分になつた。ひさしぶりにまともなものを見た気がす

る。笑顔でこいつした。

「どうも」

一コトの首からのぞいているほうの顔がうなずいた。鼻の下にヒゲをびっしり生やしていて、顔色は悪く、小鼻のわきにイボがあった。表情は険しい。

「チラシ配りかなにか？」

ぎりとリュックをにらむ。「いや。バスを待ってる

「じこへ向かおうとしているんです？」

ぎりとリュックをにらみ、新聞をふたつにたたんだ。ちなみにいまぎりとにらんだのは二コトのほうだった。

「わが家を」

しづがれ声で言い、真剣な表情でうなずく。なんと深遠な答えだろいと思い、リュックは男の目を見つめ返した。

一コトはぶつと吹き出した。

「冗談だよ。これから仕事を。田雇いの現場に行かなきゃなんねえ」「その格好で？」

「親方にも同じことを言われたよ。『おれに一コト用のヘルメットを用意させる気か？』ってな」

バスがすべり込んできた。しゅうしゅういしながら乗降口を開け、一コト男を招き入れた。

ここにいてもしかたない。思い切って乗つてしまおうか、と迷っているうちにドアが閉まり、走り去った。リュックは立ち上がりてバス停のルート表示を見た。

路線は途中で何本かにわかっていた。停留所の名前を順に田で違う。終点はどれも「わが家」だった。

危険を感じ、リュックはその場で一回転した。さらに振り向いた先の建物には「空き家あります」の看板があった。次に田を向けた街路樹には、掛けがぶら下がっていた。黄緑色のプラスチックで、くねくねしていくおしゃれといえなくもないデザインだった。駆け寄つて読んでみると、かわいらしいリストの絵が指を差しており、吹き

出しには「Hレノアとリュックへ。家はあっちだよ」と書かれていた。あちこちに似たような掛けがぶら下がりまくっている。

あの老人が用意してくれたのだろうか。それにしてもいかがわしさがふんふんにおつてくる。

リュックは掛けをもぎ取り、バス停に戻った。ベンチにすわつてもあそぶ。なにげなく裏返すと、目玉の飛び出たゾンビが大口を開けていて、吹き出しには「行かないと死ぬ」と書いてあった。リュックは思わず目を見開いた。ゾンビの顔があつかなかつたわけではなく、見覚えのあるロゴがプレート全体につつすらと描かれていたからだ。まるっこくて、ぱっと見ではなんと読んでいいのかわからない字体。読めないが、理解できた。

ホームはどうちの味方なのだろう。

ヴァラを思い出し、胸のロゴを見た。パークーとスウェットを返さないといけない。気が重かった。せっかく着るもの貸してくれたというのに、ひどいことをしてしまった。「おまえは演技をしているんだ」なんて、最低な物言いだ。リュックは超へこんで、あとで謝ろうと思った。そして顔を覆つてうずくまり、しばらくここにいようと思った。動こうにも活気を失っていた。

バス停というだけあって、次々と人がやってきてはとなりにすわった。しかしまともな人間は数えるほどで、だいたい動物の格好をしていて、ジエットパックを背負つて空からやつてきたり、頭に斧が刺さつていたりしていた。

格好はさまざまだが、どれも暗く落ち込んでいた。老人の言つたとおりだ。どんどんテレビ化が進んでいる。

「ここからわが家に帰れるって聞いたんだ」猫背の冴えないガーゴイルが言った。「おれは用なしだからさ

「きみは役者?」リュックはなんとなくたずねた。

「さつきまではね。いまはちがうっぽい」

「つまり、さつきまでは現実で芝居をしていたってことだろ?

どうして帰るんだ? もしかしてみんな帰るのか? 連中が飽き

たかなにかして　」

「おれに才能がなかつただけさ」鼻をすすつた。「田舎に帰つて、これから的人生をじつくり考へるよ。スーパーの守衛でもやるかな力なく言つと、ヘルハウンドを抱いたご婦人のあとにつづいてバスに乗り込んだ。

「これ、ヘンなじいさんにもらつたんだけどさ」「ゾンビが腐臭を漂わせながら言つた。手にはクリップで留めた紙の束があつた。「『これを演じてみる』だつてさ。でも、やっぱ無理だと思うんだ。『自分を信じる』って言われてもね。ネズミが主人公じゃ、おれの個性は出ないとと思うし」

力なく言つと、関節が悪い超合金ロボットに肩を貸してやりながらバスに乗り込んだ。才能のない役者が次々と退場させられている。いつのまにかバス停はいろんな役者でごつたがえしていた。バスがやつてきても一度では乗り切らず、順番を巡つてあちこちで口論が起こつていて。せつかくひとりで途方に暮れようと思つていたのに、こんなにやかましくては落ち込むこともできない。リュックは場所を替えようかと、人だからの外に出ようとした。

「この星のリーダーに会わせろ」トカゲ人間に襟元をつかまれ、すこまれた。

人だからから小さな影がぽんと飛び出すのが見えた。黒い髪の女の子だつた。首を吊られたおかげでよく見ることができたが、その代わり脳に血が行かなくなりぼんやりしてきた。女の子は短パンに大きなスニーカーをはいていて、細長い手足がよけいに細く見えた。上着はよれよれ、髪はもつれてあちこち跳ね上がっている。よろめきながら一、三歩進んだ。

目の前が本格的に真っ暗になつてきたので、そろそろ下ろしてもらうようお願いしたほうがいいかもしねなかつた。トカゲは炎の目で見つめ、あくまでリーダーに会うつもりだった。リュックは両手で鉤爪をつかみ、えいやと広げてみた。万力を素手でこじ開けるようなものだつた。

女の子は右に左に体を傾かせながら歩いた。縁石の段差で足を踏み外し、腰から上ががくんと折れた。なんとか持ちこたえてなおも歩きつづけるのだが、歩くたびに吸い寄せられるように少しづつ車道に寄つている。目が見えていないんじゃなかろうか。

「あ　あの人ガリーダーだ」リュックは群集をてきとうに指差した。もう少しで目が裏返るところで、鉤爪が開いた。リュックは喉を鳴らしながら必死で呼吸した。

「リーダー　このおれが　」

と言つたのは、全身赤タイツでヘンなヘルメットをかぶつた男だつた。顔は見えないが、代わりにじぶしを握つて見つめることで感情があらわした。

「そうだ　おれには大切な仲間と守るべき人が　」

リュックは背伸びをして女の子を探した。未成年の女の子に執着するのはよくないと思つたのだが、どうしても気になる。

うしろ姿を見つけた。車道の真ん中で立ち尽くしていた。

「おい！　その子」はじめて聞く自分の必死な声に驚きつつ、リュックはつづけて呼びかける。「車に轢かれるぞ！」

反応はなかつた。ひとり悦に入つている赤ヘルの肩をつかんだ。

「守るべき人が　助けを求めて　」

「だつたらあの子を助けてくれ」

現実世界に引き戻され、ビックリした様子で安っぽいマスクを向けた。「えつ？」

「あの子だよ。見えるだろ？　あれじゃ車に轢かれてしまう。

あんた、ヒーローなんだろ？」

「他のメンバーは？」

「知るか

「ひとりだと負けてしまつかも　」

「子供を助けるだけだ。巨悪と戦うわけじゃない」

「なんだ子供か。　ならだいじょうぶ。子供は死なないから」

赤タイツはケロリとした顔で言つた。素顔は見えなかつたのだが、

中身はきつとケロリとしているにちがいなかつた。

バスが交差点を曲がり、こちらに顔を向けた。女の子はやはり気づいていない。リュックは今度こそ役者をかきわけ、人だかりからぽんと飛び出した。四角くてでっかい鉄の塊が、低くうなりながら近づいてくる。クラクションを鳴らした。女の子は動かない。あの世がわが家ということであれば、バスも喜んで送り届けてくれるだろう。リュックは走つて車道に飛び出した。女の子の前に片膝をつき、腰をつかんで抱え上げる。抱える瞬間、女の子は大きな目をリュックに向けた。怒りと激しい拒絕の色がにじんでいた。

バスの四角い顔が視界全体に広がる。女の子が腕の中で暴れ出した。リュックは自分の足を置き去りにしながら歩道へ走り、街路樹の根元に背中から転げ落ちた。

靴底をかすめるようにバスがとおりすぎた。ゆっくりと路肩に寄り、悪びれる素振りも見せずバス停にとまつた。またしても順番争いの小競り合いがはじまつた。

「子供が死ぬとこだつたぞ、バカリーダー！」

リュックは寝転がりながらありつたけの声で怒鳴つた。赤タイツは人ごみの中でもちらつと振り返り、それから逃げるようバスへ駆け込んだ。「この三流役者！」リュックはなおも怒鳴りまくる。「ヘボ劇団あがり！」赤いヒーローは窓側の席に着き、ヘッドホンをかけて知らん顔で音楽を聞きはじめた。

またしても乗りそなつた役者たちは、バスの尻を田で追いならめいめい罵声を浴びせかけた。

「離してよ、バーク！」

怒りと興奮のあとで、リュックはしばらく魂が抜けていた。体から離れて近くの街路樹の枝のあいだを気持ちよくさまよっていたのだが、耳もとで怒鳴られたので、魂はしぶしぶ体に戻つた。

女の子が緑色の目をぎらつかせていた。鼻息を吹きかけながらわき腹の上でもがいて、リュックの手の甲を何度も叩いた。そういうえば、この子の命を救つてやつたんだつた。リュックは思い出した。

なのにどうして怒ってるんだろう？

「きみ、だいじょうぶ？」

「離せ！」

自分の腕が女の子の腰をがっちりつかんでいるのに気づいた。リュックは無罪を主張するように両手をぱつと上げ、女の子がわき腹にパンチを入れつつ離れるのを見届けた。「『めん』遅れてリュックも立ち上がった。女の子は華奢な肩をいからせ、もつれた髪から湯気が立つほど怒り狂っていた。すぐに逃げ出すかと思ったが、リュックの目の前を行ったり来たりし、バス停をにらみついているだけで、そばから離れようとしたなかつた。

リュックは理不尽な思いでいっぱいだつた。「助けてあげたのに

」

「は？」立ち止まって振り向いた。こめかみがひくついている。「バスに危うく轢かれるところで……」

「だからなに？ 質問はそれだけ？」

「は？」今度はリュックが言つ番だつた。「言つてる意味がよくわからないんだけど……」

「あたしは騙されないよーだ！」

女の子は獲物を追い詰めるようにリュックのぐるりを大またでまわり出した。

「なんのことだかさつぱり……」

「ほかに聞きたいこと、あんでしょ？ 大人なんだから。『お嬢ちゃん、お名前は？』」「大人の口調を真似ているつもりのようだつたが、かなり悪意に満ちていた。「『歳はいくつ？ 体重は？ スリーサイズは？ 股下は何センチ？』大人はみんな知りたがるんだ！ 『げげげ』と舌を出した。

「そんなこと、考えてもいなかつたよ……」

「そうそう、はじめはみんなそう言つんだよね……」

「まあ、名前くらいは……」

「ほら！ やっぱり！」うれしそうに叫んだ。立ち止まってリュック

クを指差す。「あんたもほかの大人といつしょだよ。プレゼントなんかいらない！」

プレゼントってなんだろうと思いつながらトーンを上げる。「当然だろ？」名前くらい

「なんですよ？」

「会話をするときに不便じゃないか」

「会話なんかしなくていい

「現にしてるじゃないか」

子供と言い合いをしている。リュックは自分が大人であることを思い出し、大人として接しようとした。

「わかった。言わなくていいよ。ただ、ぼくは名乗らせてもらいつよ。名前は

「いらない！ いらない！ いらない！」金切り声でリュックの名前をかき消した。「次は犬の名前を教えて、そこで家に連れて帰ろうとするんだ！」

ふたたびぐるぐるまわり出す。尋常ではない混沌ぶりに、リュックはすっかり怒りの感情を吸い取られてしまった。若い力をすべて怒りに向けているようで、どういうわけか知らないが大人は全員変態みたいな物言いをする。どんな環境で育ってきたんだろう。

好きにすればいい、と腹の中で思つたが、放つてはおけなかつた。それに、接しているとなぜか気分が落ち着く。変態扱いされたにもかかわらず驚くほど冷静で、生まれてはじめて寛容な大人になつたような気がした。

「ぼくはリュック。よろしく」名乗つただけでしかめ面をされるのもはじめてだ。「心配しないで。犬はないから」

「いなくても家に連れてくんでしょう？」

「いや。じつは家もないんだ」

女の子はなにか言いかけたが、予想外の答えだったのかリュックの前で立ち止まり、ぽかんと口を開けて見上げた。そして口が大きく裂けたかと思うと、タガが外れたように笑い出した。冗談だと思

つているらしい。

「家がなかつたら、どうやつてあたしを連れてくのさー。」

リュックもつられて笑おうとしたが、大笑いする姿でさえ他人を寄せつけない雰囲気があつたので、つられることはできなかつた。いきなり笑いやめ、もとの仮面でリュックをにらんだ。

「名前はスネジャナ。これで満足？」

まばたきひとつせずに見つめる。あまりにまともな表情だつたので、リュックは驚いた。眉間のしわもなく、口もそれほどへの字でもなく、ほつぺたもひくひくしていない。

リュックはちょっとした感動を覚えた。家がないのもそう悪いことではないかもしねりない。

「う　うれしいよ。ぼくを信用してくれたみたいで　　」

「しーんよーう？」

「次はハイタッチ？　それとも、握手でもしようか」

「うれしーい。じゃ、靴を脱ぐの手伝ってくれる？」

またしてもげらげらと笑い出す。まったくかわいくないことだ。笑い転げながらも、スネジャナはそばから離れない。リュックは少し冷静になつて、どうしたものかと考えた。もちろん家に連れて帰るつもりはない。家があつたとしてもだ。信頼が深まつたはずなのでいくつか話しかけてみたのだが、なにを話しかけても癪癪を起こした。「おなか空いてない？」と聞くと誘拐する気かと言われ、「友達いるの？」と聞けば山小屋に監禁して身代金を要求するつもりだろうと言われた。

バス停はさらに人数が増えていて、ちょっとした群集になつていた。というよりパーティ会場になつっていた。小競り合いをつづけていた役者たちは、いつしか負け組どうしで意気投合し、名刺や情報の交換をしたり、シャンパン片手に大げさに笑いながら互いの腹を探り合つたりしていた。腐つても役者だ。

ケータリングが運ばれてきて、長テーブルにパンチや簡単なバイキング料理が並んだ。向こうからやけに老けた高校生の集団がやつ

てきて、パーティを見るやハイタッチして仲間に加わった。

まちがいない。テレビ界の連中はどんどん計画を進めている。テレビ化と同時に花も才能もない「役者」は追い出され、バスに詰め込まれ、たぶん「大根役者島」みたいなところへ送られるのだ。老人の脚本はやはり役に立たなかつた。

「きみも役者なの？」

スネジヤナになにげなく質問し、とたんに後悔した。

「役者！」と吐き捨てる。「あたしは役者じゃない！　あたしはあたしだよ！」

「ごめん。ただ、あの連中といつしょにいたから、てっきり

「だれともいつしょじやないよ！」

「おかあさんは？」　もむかさんおとせんもだけど、いつしょに

「

「おかあさんなんていない！」

スネジヤナは金切り声を上げた。すると会場が静まり返り、出席者全員が振り向いた。ケータリング業者でさえ驚いた様子で振り返つた。だれもなにも言わなかつたが、ひとり残らず「この変態野郎」という目でリュックを見ていた。

リュックは連中に怒鳴つた。「ぼくのギャラを知つたら腰を抜かすぞ！」一斉にブーイングが起ころ。「やつさとわが家に帰れよ！」

「おまえもな！」大根役者のひとりが言つた。たちまち嘲笑が起る。「この宿なしのが！」

怒りで首が震え、言葉も出なかつた。リュックはこぶしを握つて連中に背中を向けた。

「どうか行くの？」

スネジヤナがケロリとした顔で見上げる。

「ここにいてもしようがないよ。あのバスにも乗っちゃいけないし、ホームの掛札どおりに進んでもいけないんだ」

「掛けつて？」

「いのちの話。とにかくぼくは行くよ。どこに行くかはわからない

けど、家を探さなきや。それとエレノアも。きみはどうする？

またぎやんぎやんわめかれると思つたが、なにも言わなかつた。

それどころか電池が切れたみたいにしょんぼりし、動かなくなつた。「家はあるんだろ？ このへんか？」聞いているんだかいないんだかわからない。「近所なら、送つてあげるよ もちひん、きみがよかつたらだけどね。遠くなら どうしようかな。ぼくは行くところもないから、場所によつては送つてあげてもいい。いやならひとりで帰つてもいい。ここでお別れつてこと。どう？」

スネジヤナはぱぱと見上げた。そして泣き出した。はじめはダムからちよろちよろと水が漏れ出す程度だつたが、すぐにコンクリートが破裂して大決壊した。

「どうしてそんな 」しゃくりあげる。「たにんぎょうぎなの！」変態が今度は子供を泣かせたところで、バス停のパーティでは眉をひそめる人数がどんどん増えてきた。主催者らしき者が声を上げ、リュックに向かつてあんたはだれの招待なのだと、パーティから出でていってくれとかと言い放つた。ほかの者はそうだそぐと賛同し、眉毛を吊り上げながらパンチの入つた紙コップを持ち上げた。スネジヤナを保護しようと駆け寄つてくる者がひとりもいないのは、たいへん残念なことだった。

リュックはしゃがんでスネジヤナに言つた。「いいよ、家に送つていいく。ぜんぜん構わないんだ。家はどこ？」

「うちに帰りたい！」

「だから、送つていいくって言つただろ？ 住所さえわかれば」

「ちがう、帰るの！」心臓がとまりそうな絶叫を上げた。「ふたりとも帰るんだよ！ あんたも帰るの！ あたしも」

「わかったわかった！ ぼくも帰るよ！ 家に帰るー！」リュックは立ち上がりてわめいた。「ふたりで帰るー、いますぐ！」

とたんに泣きやんだ。涙と鼻水だらけで真っ赤になつた顔がぴたりと動きをとめ、それからチャンネルを切り替えたよつこつこつこつした。

リュックの手をつかみ、走り出す。

「家はそっち?」

「「」」

「よし、帰る!」呪をもつれさせる。「だれと住んでるの?」

「みんなと!」

そんなわけで、リュックはスネジアナにひっぱられながら走った。スネジアナはかなり足が速かった。しかも手首をつかまれているので走りづらく、ついていくのがやつとだつた。なにかの拍子に手を振り払つてしまわないよう気をつけた。

細い路地をでたらめに走り、急にとまつた。でたらめだと感じたのは、曲がり角に差し掛かるたびにスネジアナが迷う素振りを見せ、何度も反転して引き返し、何度も行き止まりにぶち当たつたからだった。

「近づいてきた!」

ふたりは歩きながら話した。スネジアナは相手のことなど構いもせず、話したいことを話したいときにしてやべる。その最中も犬のようにぐるりをまわるので、足を踏んづけないかと冷や冷やしながら歩いた。

「あたしは世界を変える力があるの」

「だろうね」リュックは調子を合わせたが、半分は本氣だった。

「『どうやって変えるの?』って聞いて!」

「どうやって変えるの?」

「どんどん変わっていくの 自分がね。全体を覚えるんだ。頭なんかも、体も、ぜんぶ。気に入らなきゃ次のあたしになればいい。死んだりして」

まったく理解できない。

「さっきは死のうとしてたのか?」

「そう」

「いまの自分が気に入らないから?」

「そんなときもある」

「ここまで来てはじめて、農かもしれない」という考えが浮かんだ。テレビ界の連中は、駄々っ子を使って都合のいいところへ連れていか、またなにかをやらかすつもりなのかもしれない。リュックのエピソードを好き勝手にこねくりまわし、新しくて楽しい、スリル満点のわくわくどきどきを見せるつもりなのかもしれない。

わくわくどきどきならいいじゃないか、と思った。なにがいけない？ 現実に暮らす人間を楽しませるために、わざわざ手間をかけて企画を立ち上げ、脚本を書き、セットを組む。だったらこっちも、指示されるとおり楽しめばいいじゃないか。

リュックはかぶりを振った。やはり、どうしていいかわからない。ただ、この子が連中の差し金だったとしたらがっかりするだろ？ とは思った。

スネジヤナが立ち止まった。

「『』が家。みんなの家ね

売れっ子女優として多忙を極めていたエレノアだったが、ファンタジー的な塔でファンタジー的な囚われの姫を演じていたとき、突然大男が数人押し入ってきた。なにかがおかしいと思った。押し入られるために監禁されているのでそれは構はないのだが、男どもは全員アイマスクをつけ、マントをひるがえし、そしてなぜか上着を着ていた。テレビ映画『男の宝箱』に出演する男性は例外なく上半身裸で、いつでも飛び込めるような分厚い胸板と赤銅色に焼けた肌に、皮のパンツ一枚で大剣を振りまわすものと決まっていたはずだ。テレビの向こうの奥さまがたも、これでは妄想のしようがない。疑問を差しはさむひまもなく、掛け声とともに抱え上げられた。そして窓から放り出された。

ファンタジー的な世界が眼前に広がる。いつものようにエレノアは悲鳴を上げていたのだが、いいかげん声がつづかなくなつてから、普段と比べてだいぶ長いこと落下していることに気づいた。どこに着地させるか迷っているんじゃないかと思えるほどだつた。それからちよっぴり、今度こそ地面に激突して死ぬんじゃないかと思つた。エレノアは腹這いの状態で着地した。ちょうどビソファのうえだったので死にはしなかつたが、肘かけが顔面を直撃した。反動で頭が反り返り、首の骨が折れそうになつた。

ぶざまにバウンドし、うまいことお尻から着地した。

拍手と歓声が沸き起こつた。ボサボサの髪の毛をかき上げ、正面を見る。三百人分くらいと一緒に目が合つた。女性に男性にチビッ子にじ老人と、顔はさまざまだがみなうれしそうに笑い、階段状の席でじつちゃに固まつている。

エレノアは脚を組み、客席を右から左まで眺め、それから大きくため息をついた。今度はなにをやらせるつもりだろう。インタビューかトークショーか、それともクイズ番組でもおっぱじめるのだろう

うか。

「おかえり！」男性が立ち上がり声をかけた。

なにがおかえりなのかと、すねをさすりながら見まわしてみる。家っぽい。壁の片側がバツサリ切り取られてまる見え状態なのをのぞけば、なにからなにまでリビングだった。もちろんわが家ではなく、セットなのだろう。だから「おかえり」とはおかしな話なのが、言われてみるとどこか懐かしかったし、見覚えがあつた。玄関に、階段に、テーブルも。反対側の扉は開きっぱなしで、奥にキッキンが見える。

カメラを肩にかついた男がキッキンからのぞいていた。さつと陰に隠れる。

テーブルにリモコンが乗っていた。テレビがあるべき場所には観客がいて、エレノアを見ている。これではあべこべだ。

玄関のチャイムが鳴った。ピンポンという音にも聞き覚えがあつたが、どこのうちでもピンポンと鳴るだろうと思い直した。だれかは知らないが、開けなくても勝手に入ってくるだろう。これがホームドラマなら、玄関に鍵はかかるっていいない。

またチャイムが鳴った。それでも無視しつづける。客はしつこく鳴らしまくる。思わず応対したくなるようなウキウキしたりズムを取り、しまいには怒りのこもった連打をおっぱじめた。あまりのやかましさにエレノアは立ち上がり、大またで玄関に歩み寄った。ミー！ カだつたらひっぱたいてやろうと思った。新しいゲストだったとしても、やはりひっぱたく。もし若手芸人のヘルマンだったら、ケツに火をつけてやろうと思つた。

玄関を開けて、客人を見た。エレノアはひっぱたくこともケツに火をつけることもできなかつた。

「はやく出でよ、バカ！」

女の子がエレノアを見上げて怒鳴つた。黒い髪はもつれにもつれ、顔も身なりも清潔とはいえたかった。大きなスニーカーをはいている。怒りに顔をゆがめながら、ふたたび玄関のチャイムに何度も指

をたたきつけた。

観客がほほえましげに笑っている。

「『めんなさい』」子供が出てくるとは予想外で、エレノアはうろたえた。「てっきりほかの人かと

「ほかってだれよ?」噛みつぶよつこ言ひ。「あたし以外に帰つてくる人なんていでしょ!」

「ここ、あなたの家なの?」

女の子は答える代わりに、鼻息を荒くしてチャイムを連打した。

「あなた、名前は?」

「なーまーえー?」

「わたしはエレノア。それで」「どうしてこんなに怒り狂つているのだら?」「いい、あなたの家なんでしょ? 中に入つたら陰からもうひとりあらわれた。女の子の肩をそつとたたき、チャイムのボタンを手でおおつた。エレノアは顔を上げてリュックを見、その場にへたりこんだ。

「どうも」リュックはうなずいた。

観客の拍手を聞きながら、どうにか答える。「どうも」女の子がネズミのようにすばやくわきを駆け抜け、ソファにすべり込んだ。テーブルに置いてあつたリモコンを客席に向け、それからじつとにらみつける。

リュックがエレノアに手を差し出す。手を握り、エレノアは立ち上がつた。

「家つて聞いたんだけどさ」頭を差し入れて、客席を見やつた。「ドラマのセットみたい」

「あ あなたも、ついにミーカに捕まつたのよ。でなければ、ここにいるはずがないもの」

「どうなんだら?」ひとりとのよつこ言ひ。「ぼくはあの子に連れて来られたんだ。名前はスネジヤナで」

同時に見やる。スネジヤナはさつきと変わらずテレビを見ゆつりながら姿勢で、熱心に観客をにらみつけている。

ふたりは同時に向き合って、同時に手を組めた。

「あなた、ほんもの？」

「ぼくも同じことを考えた」

「どう思う？」

「中に入らう。話をすればわかるよ。実話もののドラマでも、ほんものそつくりとはいかないだろ？ それと同じでさ」

そんなわけでふたりは、ガンを飛ばしつづけるスネジヤナをあいだにはさんでソファにすわり、これまでのことを話した。リュックも話した。どちらもまともな話はひとつもなかつた。

観客が静かに見守っている。

「 どうでもいいけど、『』じや暮らせないよね。デパートのベッドで寝泊りするみたいなもんだ」

スネジヤナが勢いよく振り向いた。「『』で暮らすんだよー。みんなでー！」

「ここはどこなの？」エレノアはたずねた。

「我が家！」

「あなたの？」

「みんなのだよ！」

エレノアは眉をひそめて、スネジヤナの頭越しにリュックを見た。この子は何者？ 信用していいの？

リュックは答える代わりに小さくかぶりを振った。

「 ぼくが代わりに教えてやる！」

背後から声がした。振り返らなくてもミーカだとわかつたが、お義理で振り向いた。階段の踊り場で、手すりにもたれて笑顔で見下ろしていた。

「またあいつだ」リュックがささやいた。「バカだよね。悪巧みもなんでも、ぜんぶ自分から話すんだから」

「聞こえているぞ、リュック」

「おまえ、どうしてテレビの中にはいないんだ？」

「それはここが 」あっさりバラしそうになつて口を閉じた。

教えてやるもんか

「じゃあ聞かない」とエレノア。

「いいだろう、教えてやる」

エレノアとリコックは同時に田玉をまわした。ミーカはニヤニヤ

顔にくさい演技で全身をくしゃくしながら、たっぷり時間をかけて階段を一步降りた。長いこと話すつもりらしい。

「さて、ぼくらはエレノアのことならなんでも知っている。年齢から身長、体重、スリーサイズまで

スネジヤナがいきなり飛び跳ねて半回転した。ソファの背もたれをつかんで、噛みつきそうな顔でミーカを見上げる。

「いや、知ってるつもりだった。これまでいろんな番組を試したんだけど、どれもしつくり来ない。アクションもダメ、学園ものもダメ、SFもダメ。だからみんなで復習したんだ。エレノアのすべてを頭に叩き込み、いちばん活かせる番組はなにかを考えた。で、結論は

「ようやく次の一步を踏み出した。

「シットコムだ。考えてみれば当然だな。どうしてもひとつはやく気づかなかつたんだろうね？」こには見覚えがあるだろう、エレノア。ここはリンの家だ

懐かしさを感じたのはそのせいだったのか。間取りや電話の場所、テーブルクロスの模様に暖炉の上の家族写真と、ある意味我が家よりもよく把握していた。いまにもリンやカー・ティーン、リコック（ちびのほう）がキッチンから姿を見せそうだ。もしかして、リンに会えるのかも。

「ちがうー、みんなの家だよ！」スネジヤナが怒鳴った。

「そうそう。その子を入れて三人で、ドタバタ家族を演じてくれ。そしてぼくを楽しませてくれ。言っておくが、きみたちとちがつて、ぼくらはいい視聴者だ。つまらないからといってテレビを消したり、チャンネルを変えたりはしない。決して飽きることなく、きみを裏切ったりもしない」

また一步降りる。

「やる？」リュックが聞いてきた。

「やるわけないでしょ」Hレノアは即答した。

「いいじゅん。やるうよー」スネジヤナが突然、お医者さん！」ついにでも誘つているかのように勢い込んで言つた。「みんなで住むんだよ、ここで！」

「でも

「いいんじゅない？ ほかに住むところもないしさ。テレビの連中が住まわしてくれるっていうんなら、三人で

リュックはそう言って、残りは目で訴えかけてきた。よくわからなかつたが、スネジヤナに関係することだということは理解できた。

「わかつた

「この人、あんたの彼女？」スネジヤナはリュックに体を預け、たずねた。

「そうだよ

「ふうん

スネジヤナはリュックにもたれながらエレノアを見て、にんまり笑つた。十一歳の女の子がとたんに悪女めいて見えた。

「あたしの保護者になつてみる？」

「 」 といつわけで了承も得たことだし、そろそろ撮影をはじめようか。出てきていいよ

ミーカの号令を合図に、いろんな連中がぞろぞろと姿をあらわした。車輪のついたスタジオカメラが両わきからすぐるように登場し、キッチンでカメラをかついでこそそしていた男も、扉の隙間から堂々とレンズをのぞかせている。お揃いのジャンパーを着たスタッフが忙しそうに駆けまわる。ひとりがオレンジジュースを運んできて、テーブルに置いた。

スネジヤナはグラスを持ち上げ、むつりした顔でにおいを嗅いだりグラスの底をのぞいたりしている。

客席と出口のあいだにある薄暗い空間に円卓が設置され、十人くらいが腰掛けた。少し離れたところに赤いシャツを着た男がイスにすわっていて、ハゲ散らかした頭を向けて台本をチェックしている。リュックが指差した。「あいつ、知ってるよ。ジョンとかいうやつだ」

「みんなお知り合いよ」

「イヤなやつだ」

「みんなそうよ」

「全員、注目！」舞台で鍛えたように聞こえる張りのある声でミーラが呼ばわった。「はじめる前に再確認だ。お客様もね」

静まるのを待ち、咳払いしてつづける。

「それではこれから、シットコム『みんなの家族』の公開生放送をはじめる。ちなみにタイトルはぼくが考えたんだけど、ほかにいいのがあれば、だれでもいいから教えてくれ。　認めるよ、ぼくにはネーミングのセンスがない！」

やけに等しい絶妙のタイミングで観客が笑った。

「さて、この番組はシットコムであり、同時にリアリティ・ショーでもある。リアリティ・ショートて、知ってるね？　出演者はほんとうにここで一日じゅう生活してもらい、その様子を観客のみんなやテレビの前の視聴者がリアルタイムで見るわけだ。放送は二十四時間。しかも生だ。チャンネルをまるまる独占。前代未聞だろ？　ていうか、そんなことが可能なのかな？　いいや可能だ。なんたつてぼくは」

マイクを客席に向ける。観客は申し合わせたように一斉に言った。

「『テレビの神さま』だから！」

ミーカは余裕をかましていたが、満面の笑みは恍惚としていた。「でも、待てよ？　家族の生活を垂れ流しにしてなにがおもしろいんだ？」　そんなことはない。おもしろくなればテレビじゃないからね。円卓に注目！」「ひとり残らず注目した。

「そこにはいるチームが、次の展開をリアルタイムで考える。監督のジョンに脚本家三名が、波乱万丈の生活を演出するよ。　スポンサー代表もいるな。劇中で出演者が何回アイスを食べるかチェックしに来たんだ。口「」がちゃんとカメラを向いているか、とかね」「おつと口が過ぎたと大げさに驚いた顔をし、おどけて口チャックをする。

「観客のみんな、座席にモニターがあるだろ？　じつはきみたちも、演出に加わることができるんだ。そこのタッチパネルを操作すると、現在のシチュエーションがおもしろいかどうかという感想から、具体的に次の展開のアイデアを書いて、そこにはいる脚本家に送ることができる。要望が多いアイデア、うならされるようなアイデアは即採用され、のちの脚本に反映される。どう？　おもしろいだろ？」

「あなたの話がいちばん退屈よ」スネジヤナがぼそっと言った。エレノアは思わず吹き出した。

「ぼくの話はもういいよな。じゃあはじめよう。『みんなの家族』、スタート！」

スタートと一緒に静まり返った。あれをしろこれをしろという指示はどこからも出てこない。スタッフも観客も関係者っぽい人物も、ただただ黙つてセットの中央に注目している。

三人はしばらくぼけつとソファにすわっていた。

エレノアは横から強烈な視線を感じた。案の定スネジヤナが強烈ににらみつけていた。

「なにもしないの？」

「なにかしたほうがいいのかな」リュックも言い、ひざをさすった。「とんでもなく落ち着かない」

とにかくやれ、と客席から罵声が飛んだ。

「家族にはいつも言われてた」エレノアはなんとなくつぶやいた。「テレビばかり見るな、とにかくやれ。そんなことじゅ将来たい

へんだぞ、つて

「ふうん。はじめて聞いたよ」

「家族はいつなるのを予測してたのかな?」

「まさか。ほくも言わせてたんだけど、親がしようとおもいつたのは、実際ひどい目に合ったときに『それ見たことか』って言つたからなんだと思つよ」

「おなかすいた!」スネジヤナが足をばたつかせた。

「食事でもしようか?」リュックがのんびり言つ。

「こんなところで?」

「しばらく暮らすんだから、いざれ食べることになるだろ」

「暮らす、つて」

スネジヤナは急にわけのわからない叫び声を上げ、弾かれたように立ち上がった。テーブルを飛び越えてずんずんキッチンへ向かい、扉を蹴飛ばした。向こうにいたカメラマンが仰天してあとじさつた。「アイスしか入つてない!」冷蔵庫の収納を力任せに閉める音がした。「ピザが食べたい!」

「出前でも取る?」リュックは立ち上がりかけて、固まつた。「考えただけど、連中はぼくらを路頭に迷わせるようなことはしないはずだよね?」

エレノアは客席に目をさまよわせた。「おもしろこならなんでもありなんじゃない?」

「つくりたがつてるのは家族もののロメディだ。きみが若奥さんで、いろんなエジをやりながら最後はちょっと感動、つてやつを望んでるんだよ。生活苦の家族じゃ、ドキコメンタリーになつてしまつ」

「なにが言いたいの?」

するとリュックは円卓のまわりに向かつて声を上げた。「ピザの代金はあんたらが払うんだろ?」

数人が振り向き、ちょっと待てと手で合図してきた。それから全員で顔をくつづけるようにして話し合つをはじめた。ひとりだけ強

行に反対している人物がいて、残りが身振り手振りを交えて説得にかかる。反対派のスース男は静かにイスを引いて立ち上がり、携帯電話を取り出した。「待て待て」とひとりが大声を上げた。スース男はきわめて冷静にすわり直した。しばらく協議がつづいたあと、離れてすわっているジョンにおうががいを立てた。ジョンはわずかに顔を上げ、ぞんざいに手をひらひらさせた。

協議が終わり、それぞれ自分の仕事に戻った。  
スタッフがエレノアたちにカンペを向けた。マジックで「アイスを食べ」と書いてあつた。

「ピザを注文してもいいだろ?」

スタッフは画用紙一枚めぐり、せわしない様子でマジックを走らせた。ふたたびカンペを向ける。「ピザを食つたあと、アイスを食べ」と書いてあつた。

カンペを確認し、リュックは満足げにつなずいた。片方の眉が高々と上がっている。

「なにかたくさんでいるんでしょ」

エレノアに笑顔を向けたあと、キッチンをのぞきこんだ。「ピザ、頼んでいいよ!」

「あたしが選ぶ!」スネジヤナはスニーカーをじิじつ鳴らして駆け込んできた。「あたしが電話していい?」

「いいよ。スタッフと観客にもいちそうしなきや。三百人分くらいお願ひできる?」

カンペのスタッフがかぶりを振りながら腕でバツテンをつくり、首を切るしぐさを何度も繰り返した。

スネジヤナはコードレスの受話器をむしりとつて番号を押し、耳に押し当てる。エレノアとリュックは、ナゲットを六百個とうれしそうに叫ぶそのままをぼんやりと見やつた。

リュックは立ち上がりてリビングをぐるりと見まわした。景気づけのように手を叩く。

「とりあえずさ、ほかの部屋を紹介してくれる?」

眉をひそめながら、エレノアも腰を上げた。冗談を言つてゐるのかと思つた。

「観客がいるところでするの？」

「いやいや。言葉どおりの意味」

「わたしの家じゃないよ」

「でも、よく知つてるだろ？ ピザが届くまでやることがないから、二階に上がって、リンの寝室でも見ようよ。いつも言つてたじゃないか、『あのベッドで寝てみたい。あの家に住みたい』って」

観客は静かだつた。見入つてゐるのか、たんに退屈しているだけなのか。離ればなれになつてどのくらい日が経つたのかわからなかつたが、リュックはちょっとまじめになつたような気がする。なんであれ、ひとりではないのはありがたいことだった。

「ペパロニのLを百枚！」

スネジヤナは心から楽しそうに手を輝かせ、受話器を怒鳴りつけていた。

「あ？ トッピング？ なにがあんの？」

エレノアはリュックにつづいて階段を登つた。キャットウォークを過ぎると両側が壁にはさまれ、観客が見えなくなつた。ほつとする。左手の扉を開ける。トイレだつた。芳香剤に、カレンダーに、山積みの雑誌。『31』の最終回で、リンがゲストの山から非難し、テレビ越しにアイスクリームを食べた場所だ。よく見ると、足拭きマットに茶色いしみがついていた。なんのしみかは確認するまでもない。もし確認する必要があつたとしてもだ。

「リンのトイレ」エレノアはつぶやいた。「ここでリンが」

次の部屋は、ベッドがふたつあつた。カーテイーンとちびリュックの部屋だ。いっぽうは色紙をぶちまけたような柄のカバーで、アニメの異星人がべたべたと描かれていた。ホテル顔負けのベッドメイクで、眠つた痕跡も見当たらぬほどだつた。もういっぽうはセレブな薄いピンク色で、眠つた痕跡だらけだつた。掛け布団は起き抜けの状態で固まつていて、脱ぎ散らかしたパジャマや下着がひつ

かかっている。ふたりはここで、しおつかう口ゲンカしていた。

カーティーンは自分の領土を主張し、ちびリュックは「子供だね」と言いたげに肩をすくめる。エレノアは思わず笑みを浮かべた。

「めちゃめちゃさびしさを感じるな」

「終わったんだもの。みんな出ていったのよ。番組に人気がなかつたから」

外に出て、ドアを閉めた。カメラマンとケーブル持ちが、薄暗い廊下に亡靈みたいにつつ立っていた。リュックは肩をすくめ、エレノアはにらみつけた。

次のドアを開けた。なんの部屋かは入る前からわかつていて、エレノアとしてはどれほど圧倒されるか、または感激のあまり泣きくずれるか、予想がつかなかつた。ノブに手をかけてゆっくり開け、中をのぞきこむ。

リンの部屋も、エレノアが知っているものはすべてそろつっていた。ドラマ時間で三週間前に張り替えたばかりの壁紙に、ダブルサイズのベッドが幅を利かせていた。申し訳程度に本が並んだ机。小型のテレビに、衣装ダンスに、ナイトテーブルの上には目覚まし時計と電話、寝る前に水を飲むときに使うガラスのコップが置いてあつた。

「ここで寝るといいよ」リュックが腕に触れた。「だいじょうぶ?」

「ぼうっとしていたらしい」「だいじょうぶ。あなたは?」

「ぼくは屋根裏で寝るよ」

「いつしょに寝ないの?」

「連中にネタを提供するようなもんだからね。そのことなんだけど

」

リュックは突然カメラマンに向かい、スウェットを勢いよく脱ぎ下ろした。

「出でいいてくれ。出でいかないともう一枚脱ぐぞ」パンツのゴムに手をかけ、脅しをかける。「この下にはなにがあると思う?」

カメラマンとケーブル持ちは顔を見合させ、廊下へすくすくとあ

とじやつた。リコックはペンギンみたいに歩きながらドアを閉め、鍵をかける。

「そのことって？」Hレノアがたずねる。

「スネージャナのこと」

「あなたは気に入られてるみたいね。わたしはまともに話もできない

「はじめほぼくももうだつたよ。とにかく、ほんりはあの子の親になつてあげるべきだと思つんだ」

「実際の？ ドラマ上の？」

「Hレノアがぎりは、両方」ドアを見る。「Hレノアから出たら、そのことを思つておられるかぎりは、Hレノアを見ようと思つたとは思えないんだ。『おまえほぼくらをしつちやかめつちやかにしよう』とテレビから出てきたキャラクターなんだ！」なんて、言える？」

「それはやうだけど」「Hレノアはうつむき、相方のスネ毛まる笑うことはできなかつた。「ミーカが差し向けたんぢやないの？」

「あの子にこゝへ連れてこられたのはたしかなんだけど、だまされたとは思えないんだ。『おまえほぼくらをしつちやかめつちやかにしよう』とテレビから出てきたキャラクターなんだ！」なんて、言える？」

「父親に田覚めたつてわけね。突然」「だつて、お互い甥っ子も姪っ子もないし。それ以外で子供に接する機会、ある？ 犯罪行為はべつとしてぞ」「ずっとこゝに暮らすと思つてた。ふたりで」「ほくもやうだった。でも連中に引っかきまわされて、氣づいたら子供ができちゃつた。たぶん実際も、そんな感じなんだろうね」

Hレノアは一回二回とうなづいた。「わかつた

「親になるとは思わなかつたね」

「わたしも」

「ちよつと屋根裏を見てくるよ。いつしょに来る？」

「ここにいる」

リュックはスウェットをはき直し、ドアの鍵を開けた。カメラマンが戸口のまん前に立つていた。リュックはそこをどけと身振りで示し、カメラマンは言つとおりにした。リュックは廊下を行きかけたところで戻ってきて、パンツを脱ぐしぐさを繰り返し、中に入つたらこうだぞと脅しつけた。カメラマンはしょんぼりとレンズをうつむかせ、いなくなつた。

エレノアは鍵を閉めたあと、ベッドにおそるおそるすわつた。清潔だが使い古されている感じ。リンがうつぶせになつてしまつちゅう泣きまくつっていたベッドだ。こうやつていると、リンの代わりになつたような気がしてきた。ずっと前から表情なんかはすっかりりんの真似つこになつっていたし、人生の五年間を犠牲にしてでもあんなふうになりたいと思つたことも何度となくあつた。

ベッドの上にリモコンがあつた。いつのまにか小型のテレビに向け、電源を入れていた。映像が出る前に消した。頭の形にへこんだ枕を見た。胸に抱いて、鼻を押し当てる。リンは母親として、どんなことをしてたつけ？ ほんやり思い出しながら、もう一度テレビをつけた。母親らしいことはあまりしていかつたような気がする。

ジョンは田舎から離れたところにすわり、ベーコン＆チーズにかぶりつきながらチームの仕事ぶりを観察していた。

「勝手なことしゃがつて」脚本担当Aがいまいましげにピザの箱を開け、ソーセージとブラックペッパーとオニオンのピザにガーリックオイルをかけまくった。ちりちり頭の百貫テブで、こいつは心臓病で早死にするだろうとジョンは思った。

「代金はどうします?」脚本担当Bが振り返って、ジョンに聞いた。「ピザは庶民の食べ物」というセリフを十四回も繰り返したわりには、もう四切れ目のツナに取り掛かっている。ケツのでかさは庶民的とはいかないうだ。

「ミーカに請求しろ」ジョンは答えた。「おまえは予算のことなんか気にしなくていい」

「ミーカはどこです?」とたずねたのはお笑い芸人ヘルマンだった。「おれはおまえがきらいだ」むつりと返す。「ミーカが勝手におまえを選んだんだ」

「任せてくださいよ。お笑い担当、ユーモア担当ってことでしょう?」

「一度でもネタをすべらせてみる。教育テレビに出演させてやる」ヘルマンはまったく悪びれずに、へラへラ笑いを浮かべながらペロニのピザを食い出した。挙るような奇妙な格好で、しかも尻のほうから食つていやがる。ジョンはますますこのいつがきらいになつた。

三十分間でかなりのピザが消費された。大量の空き箱がテーブルや床に積み重なつている。テーブル周辺はどこを嗅いでも油とチーズとトマトソースとニンニクとあつためたダンボールのにおいがした。

ジョンはメガネをはずして顎を上げ、セットを見やつた。エレノアたちはキッチン側でテーブルに着き、比較的おとなしくピザを食

つていて。おとなしくないのがあのスネジヤナとかいう子供で、ピザの耳をちぎっては「こっち見るな！」と怒鳴り、客席に投げつけている。イラついているのはジョンも同様だった。ミーカがいないのも原因のひとつだ。記念すべき第一回は自宅のテレビで見たいといふことで、はじまると同時にいそいそと帰宅したのだった。バカ社長そのものだ。

「このままだまつて食わせつづけるつもりか？」ジョンは脚本家チームに発破をかけた。「口だけじゃなく頭も動かせ」

「できません」と女脚本家。「つまり、今日のところは。アイスを食べさせないと。それまでイベントは起こすなど注意を受けていて」

「あのアイス屋か？　いまどこにいる？」

「本社から呼び出しがあつたみたいです」脚本担当Aが指差した。

「向こうで電話しますよ」

ジョンは通路口を見やつた。どんな話をしているかはだいたい想像がつく。

「なら、明日の展開を考える」向き直つて言つた。「観客からアーティアは届いているか？」

「アイスを売らせれば？」

ヘルマンが提案したが、全員に無視された。

「口クなのがないな」

脚本担当Aはピザにかぶりつきながら片手でノートパソコンをいじつていたが、しばらくするとあきらめて巨体を背もたれにもたせかけた。窮屈そうに首をひねつてジョンを見る。「使えるネタなんて、来るわけがない」

「そりやそうだ。役に立たないのははじめからわかっていたぞ。ミー力の思いつきだ」

「お客様が満足していないのは、たしかね」とケツのでかい脚本担当B。「三十代、女性。『家族の絆みたいなテーマが見たいです』だつて」

「二十代、男性。『笑えるやつ』」

「四十代の独身男性から。『スネジアナちゃんの』『あ、これは読めない』

「『いつも楽しく拝見させていただいてます。とにかくで、はじめのシーンは三人がソファですわっているというものでしたが、素人のぼくが言つのもなんなんですが、おもしろみに欠けるものでした。もつと興味を引くような状況からはじめないと、見る側は興味を失ってしまいます。それから』『なんだこれ？　おまえなんぞに言われたくないね』

脚本家チームは口を動かすのをやめ、しばし押し黙つた。

「状況を確認しよう」脚本担当Aが切り出した。「母子はすでにギクシャクしてる。そこをうまく利用するんだ。スネジアナがエレノアをきらう理由は？」

「きらつてない。暴力的で引っ込み思案なのはあの子の『フォルトなの』『リュックにはベッタリだよ？』

「わたしが途中からそう設定したの」脚本担当Bは得意げに眉を動かした。「関係が複雑になつて、おもしろいでしょう？」

「スネジアナを動かし、エレノアの反応を引き出す

「たとえば？」

「子供を病氣にでもするか」

「急すぎてわざとらしい」脚本担当Bはスタッフから濡れタオルを受け取つた。「スネジアナは学校にかよつてないの？」

「もちろん、かよつてるだる。というか、かよわせるつもりだよ」

「明日の午後、担任に電話をせるのさう？　『おたくのお子さんが起こした問題について』『つて』

「どんな問題？」

「あの性格だもの、なんでもありますよ」

「じめに合づのもいいな」

「どう見てもいじめっ子タイプじゃない？」

「いや、暴れてるだけだよ。なんでかつていうと愛してほしいけど方法がわからない、だからむりやくつけやつてるんだ。そして急に落ち込んでは殻に閉じこもる。ああ、やっぱりだれも理解してくれない、自分はいらぬい子なんだ、とね」

「暗くなりすぎないようにしなきゃね」

脚本女はノートパソコンに向かい、ちやちやっとキーボードを叩いた。仕上げにエンターを押して、セットを見やつた。スネジヤナは急にピザを投げるのをやめ、電池が切れたようにうつむいて動かなくなつた。リュックとエレノアが身を乗り出し、心配そうに話しかけている。

「抑鬱状態もセットした。これであの子にも深みが出るかな」

「よし、とりあえずは学校ネタでいい。ガラスを割つたりして、クラスメイトや担任に煙たがれる。だけどともやさしい子なんだ。愛情を人一倍欲してる。エレノアがそこを引き出したように見せないとね。つまりけば感動ものだよ」

「セットアップと解決は？ 思いつきでもいいんだけど」

「ランチかな」身を乗り出して、言葉をひっぱり出すように指を何度も鳴らした。「お弁当テーがあるんだ 週一回。なんとかといつと 学校側はよくやるだら、こういつくだらないことをさ。親子の交流がどうたらつて。 で、エレノアは料理ができないから、娘はクラスで恥をかく

「どう解決させる？」

「エレノアが料理を覚える」

「ぐだらん」ジョンが口をはさんだ。「そんな」とくらいで解決するか。『あたしのために料理を覚えてくれたのね、ありがとうおかあさん』ってか？ 道徳の教科書だな

「クラスメイトをいじめる。エレノアは叱るが、じつは向こうが悪かつた」と脚本担当A。

「大陸史のテストで落第。カウンセリングの先生との友情」と脚本

担当B。

「掃除をサボつたらウンコが振つてくる」とヘルマン。

ジョンは数ある冷たい視線の中でもどびきりのをヘルマンに向けた。「おまえがウンコを用意するのか?」

「いいですよ。一度やつたことがあるんです、ぼくの消防車で煮詰まつたというように、脚本担当Aは伸びをした。「難しく考える必要はないんだよな。いい小道具があれば」「イスをきしませて振り向く。「なんかいい小道具、ありませんか?」

たずねた先にはチームの社員がいた。かなりお疲れのようで、イスの背もたれを下げるだけ下げるだけ頭を乗せ、阿呆のように口を開けてしている。

半開きの田を脚本家連中に向けた。

「トランポリン」

「はい?」

「うちの新製品だ」まぶたを震わせる。「トランポリン自体が跳ねまわるんだ 人間をほつたらかしにして」

おもしろアンテナにひつかかったのか、ヘルマンがうれしそうに身を乗り出した。「それって

脚本女はまわりを無視してパソコンに向かつていた。ひとり「」とをつぶやく。「ディスパートナーで手を怪我するとか

「あ、あ、あ。血はダメ。暴力描写もダメ」

と、ここにきて法律担当の女が割り込んできた。電柱に頭をぶつけはじめで魅力が出るようなタイプで、キャラリスター・フロックハートに似てなくもない。ジョンはほんやりとそんなことを考えていたが、口に出すのはやめておいた。いまは連中を混乱させたくない。

脚本家のふたりは、おまえが口を出す問題じゃないと言いたげな表情を露骨に浮かべた。法律女はそれを敏感に察知し、先まわりした。

「血のよつに赤いアイスクリームが食べたくなる? だって、あとあと面倒なのよ。それにあたし、書類のチェックだけするつもりはないから

「とにかくキャラクターを動かそう。そっちが先決、解決はあとまわし」脚本担当Aは気持ちを切り替えるようにイスにすわり直した。「どのみち即興なんだからさ。スネジヤナは明日から学校へ行く。セットはいいとして 生徒も、向こうからすぐに持つてこれるよね？」

脚本担当Aはエージェントにたずねた。エージェントはテーブルに背を向けてイスをゆらゆらせ、舞台を見ていた。びっくりしたように振り向く。

「明日までに？ エーと 一クラス分ならすぐに用意できるよ。条件も問題ない。先生は？」

「おばさん。太っててメガネをかけてて、ヒステリックな感じのエージェントは電話を手に席を立ち、小走りに出ていった。

法律女がメンバーを見まわして言った。「ねえ、今日じゅうに全員の契約書をチェックしろってこと？」

「テンプレートおりだる。できるさ」

「今夜は徹夜ね」女が言った。お気に入りのセリフのようで、一日三回は言つ。

「夫のリュックについては？」

「そつちは簡単よ」脚本担当Bが言った。

「なにかいいアイデアがあるのか？」

おもむろにエイミルが携帯電話を取り出し、耳に当てた。「

ああ、明日は出社するはずだから。うまくやつてくれ。  
あんまり急ぐな。じゃ」電話を切つて、大あくびをかました。「リュックに電話が来るよ

「なにをしたんです？」文句がありそつな顔で脚本担当Bがたずねる。

「考えていることはきみと同じだ」不気味な笑みを浮かべた。「うちの女性社員と契約してくれ。見た目もいいし、かなりリュックに惚れてる。役に立つよ」

「なるほど」脚本担当Aはおでこをかいた。「まさにリアリティ・

ショーダ

「書類ができたらオフィスへ送ってくれ」

「やーれやれ」法律女はぐるりと田舎をまわした。これもお気に入りのしぐさなのだが、ショッキングなまわしていくのでまっすぐ歩けないようだつた。「あたしも電話してくる」と言つて、あちこちつまづきぶつかりながら通路口に向ひへ消えた。

ジョンは通路口をなにげなく見やり、アイス屋の社員が消えていたのに気づいた。なにがあつたかしらないが、いなくなるのは大歓迎だ。

「ほくのアイデア、聞きたくありません?」

ヘルマンが仲間を見まわしながら言つた。他のメンバーはひと段落ついたところで、空き箱の片づけに入つている。

「家族でクイズ番組に出演せんんですよ。シックコムじゅ、よくあるじやないですか」

「で? おまえがその回を担当するのか

「できれば

ジョンはしばりへ口を押さえたりつむいたあと、言つた。「すばらしい」

「ほんとですか?」

「いや、嘘だ」顔を上げる。「おまえはウンコ担当なんだろ? ほのかのことは気にするな。ウンコにだけ集中していればいいんだ」

## 19話 「あたしの保護者になつてみる?」

田覚まし時計ががたがた揺れ、神経に障る電子音を鳴らしあじめ  
る。エレノアは耳をふさぎ、頭から布団をかぶつた。どこのどいつ  
が田覚まし時計などセツトしたのだろうと腹が立つたが、違和感の  
あるシーツやマットレスの感触に、ここがリンの寝室だったことを  
思い出した。たぶん、セツトされっぱなしだったのだろう。主人が  
出でいったことも知らず、毎朝同じ時刻に鳴りつづけている。

昨晩は寝つきが悪かった。リンのベッドにそろそろとすべり込ん  
だときは、一種の変態になつたような気がした。リンのことを考え  
ながら安らかに眠ろうと思つたのだが、目を閉じると胃がむかむか  
してきた。大量のピザとアイスクリームを食べたせいだろうと思つ  
た。寝入つたと思うとすぐに目が覚め、トイレへ行き、げっそりし  
て戻つてくる。おなかがカラッポになると、今度は胸がざわついた。  
理由はわからない。深夜番組を見る気力もなく、おなかといつしょ  
に変態気分もすっかりしほんでしまつた。

なにかがベッドに乗つかり、マットレスがかしいだ。布団越しの  
手が遠慮なくエレノアの脚のあたりをまさぐり、ぴしゃぴしゃと叩  
いている。手はだんだん頭のほうに上がりつくる。エレノアはベッ  
ドの端っこに逃げた。

ベッドがトランポリンのように波打つた。「起きろ!」

布団から顔をのぞかせる。パジャマ姿のスネジヤナガベッドに膝  
立ちし、わーわー叫びながら飛び跳ねていた。

「いま何時?」

「もう七時だよ!」

「もう何時?」

「ひどい顔。お化けみたい」

壁の向こうからかすかに笑い声が聞こえてきた。エレノアは苦労  
して田覚ましをとめた。起き抜けで体は思うように動かないし、目

の前に火花が散っている。

スネジヤナのうしろにカメラマンが立っていた。無表情にレンズを向けている。

「あたし、今日から学校

「それで？」

「出かける準備だよ！」顔を近づけて怒鳴った。「母親らしいことして！」

「母親つて、わたしは」と、昨日リュックに言われたことを思い出した。「そうか。いいよ。どうすればいい？」

「『顔を洗って着替えなさい』って言って！」

エレノアはおそるおそる言った。「顔を洗って 着替えなさい？」

「やだー」「うれしそうに叫ぶ。

「そう。なら、洗わなくても」

「ちがうー！ やだって言われたら、『いいからはやくしなさい』、学校に遅刻するじゃないの！』って怒鳴るの！」

エレノアはかぶりを振った。「怒鳴るなんてできない」

「それから、『朝ごはん、ちゃんと食べていきなさい。卵はどうする？』って

「朝ごはん？ だれがつくってくれたの？」

「おかあさんがつくるの！」ベッドから飛び降りる。「ひどい！ なんにも知らないんだ！ このバカ！」

「母親になつたことないもん」エレノアはむつとして言い返した。

「それこれからだつて」

スネジヤナは金切り声でさえぎった。エレノアの手をつかんで乱暴にひっぱり、洗面所へ連れていった。ただでさえ朝が弱いエレノアは、ふらふらになりながらスネジヤナの指示に従つた。顔を洗いたくない自分に怒れと言い、しぶしぶ怒ると満足げににっこりして顔を洗つた。ほかにも歯を磨けと怒鳴れとか、フロスを自分に向けて投げつけると言われ、嫌がつて逃げるから追いかけて捕まえて髪

の毛を解かせと命令されたりした。子供部屋に行くとクローゼットから洋服をすべてひっぱり出し、娘にいちばん着てほしくない服を選べと言われ、選ぶとこれを着ると駄々をこねはじめ、駄々をこねるなど怒鳴れと駄々をこねた。

わけがわからなかつた。

キッチンでは母親の心得を教えてもらつた。コシはとにかく子供を急がせること、いつもイライラしていること、食器を投げること、そしてPTAの役員になることだという。午後は基本的に憂鬱な気分を保ち、夫へはたまに離婚をちらつかせるべきだと付け加えた。隙を突いて高い買い物をしたり、生き甲斐がほしいとわがままを言つたり、ヘルパーを雇つたりするのも悪くないと言い添えた。朝食を食べたくないのではやくつくれと言われたのだが、こちらに関しては本気で料理ができなかつたので明日以降に持ち越しとなつた。

「学校なんて行きたくない」

カウンターで頬杖をつき、急に力なくつぶやいた。

「それはつまり、行きたいってことね」

「ほんとに行きたくないの」

口をとがらせ、足をぶらぶらさせる。エレノアを上目づかいで見やり、どう反応するかを待ち構えていた。

これで正しいのだろうかと思いながらエレノアは口を開いた。「ええと、学校には行かなきゃダメよ。落ちこぼれたら将来

「ちがうっ!」ぱっと顔を上げ、じぶしでカウンターを叩いた。「あたしをぶつのー!」

「どうして」

「いうこときかないからだよ!」

「学校に行きたくないってだけで?」

「PTAの役員だからだよ!」

エレノアはだんだん我慢が効かなくなつてきた。ほんとうに怒つてしまいそうだ。「やさしいおかあさんだつて、いるじゃない。母親はみんな口うるさい鬼ババだつていうの?」

「はあ？ あんたがやさしい母親？ あんたはビッチでもない！ やる気がないだけじゃん！」

「そんな口の利きかたしないで」

「あたしなんかどうでもいいんだ！」

口に出かかつたセリフを必死で飲み込んだ。表情で伝わるのが怖かったので、スネジヤナから顔を背けた。観客は緊迫した場面に見入っている。スネジヤナを置いて小走りにリビングへ向かった。リュックが玄関口で鏡に向かつて身なりをチェックしていた。

「これから仕事に行つてくるよ」

スースイ姿にネクタイもびしつと決まつている。こんなにまともな格好を見るのは、あの日以来だった。

「仕事？」

「そう。一家を養うためにね」ボストンバッグを持ち上げてみせる。

「服も返さなきゃ」

「話したいことがあるんだけど」

リュックはエレノアの頬に顔を触れさせ、耳打ちした。「しばらく

くのあいだだよ。妻と母親をつづけて」

行つてきますのキスとかんちがいしたのか、観客からうらうらと冷やかしの声が上がつた。

ふたりを見送つたあと、エレノアはそろそろとソファに近寄り、端っこに腰掛けた。リュックまで演技をはじめた。なにを考えているんだろう。テレビの上には、テレビなしのリモコンとテレビガイドが広げてあった。ほかにはなにもない。

「わたし、なにをすればいいんだろう」エレノアはしょんぼりと言つた。「母親つて、どうすればいいの？」

観客が同情するようにため息をついた。

しぶしぶながら新しい生活がはじまった。といつても、しぶしぶしているのはエレノアだけだった。リュックは毎日仕事に出かけ、夜遅くに帰つてくる。だんだんと顔に疲れが溜まつていきましたが

垂れ下がりはじめたが、それ以上に充実していくようだつた。社会になるとみんなこいつの顔になるのだとリュックは説明した。夕飯の席では楽しそうに同僚のネタを話した。たとえばカラスというあだ名の男はいつも全身黒づくめに白塗りメイクといつ出で立ちで、隙をうかがつては他人の文房具を勝手に盗み、家に持ち帰るのだと。ほかにも、プレゼンでは老けているほつが説得力があるからと前髪を抜きはじめる男や、劇やせと劇太りを週単位で繰り返す経理係の女の話をした。

「いまの世の中、個性的でないと生きていけないんだってさ」宅配の海老チリをつまみながら言つた。「みんな必死で努力しているよ。レギュラー番組の一本も持つてないと、この先厳しいしね」

エレノアはぼけつとすわつて聞いていた。

スネジヤナも毎日学校へかよつた。だがかなり行きたくない様子で、朝のスネジヤナ全体で学校へ行きたがっているのはバッグだけだつた。バスのクラクションが聞こえるとエレノアをのぞきこみながら大きなため息をつき、バッグにひっぱられながらイヤがる足をひきずつて出かけた。そして夕方になるとイヤがるバッグをひきずつて帰つてきた。学校に限らず、外へ出るのが好きではないようだつた。逆に家の中では相変わらず元気いっぽいで、観客にものを投げつけてはかかつてこいと挑発し、門限を午後三時にしろとか、テストで落第したから自分を一週間の謹慎にしろなどとエレノアに詰め寄つた。

エレノアはぽかんと立ち尽くしていた。

こうして毎朝ふたりを送り出し（ぼんやりと眺め）、その後は夕方までひとりになる。そのあいだ、エレノアはリンの寝室でテレビを見た。二日目からはランチもベッドに運んで食べた。はじめのうちはなにかしなければいけないような気がしていただが、一週間も経つとなにも気にならなくなつてきた。カメラも観客も、テレビを見るあいだは気にならない。

毎間もイベントは起きているらしかつた。電話はしづちゅうか

かつてきたし、来客も頻繁にあつたのだが、どれも無視した。どうせ円卓にいる脚本家だかが、シーンをでっち上げようとしているだけなのだ。『ご苦労さんと思いながら、テレビを見た。テレビを見ていれば、ほとんど気にならない。

気になるといえば、田増しにテレビがおもしろくなくなつてきていた。ミーカにとつ捕まつてからここに来るまで、テレビを見ることはなかつた。ひさかたぶりのテレビにわくわくしながらかじりつき、ひさかたぶりなのではじめは大いに楽しんでいた。だが田が経つにつれ、テレビ画面から田をそらす機会が増えた。観客やカメラの存在がテレビに集中できないほど氣になるときもあつた。メロドラマはメロメロせず、クイズ番組は答えを聞いてもぜんぜん腑に落ちない。お笑いステージもひどかつた。ヘルマンのほうがまだマシだつた。「次はだれそれのモノマネ」と言つてモノマネをするのだが、そのだれそれを知らないといったようなことがしょっちゅう起きた。エレノアにとつて芸人や俳優を「知らない」など、あつてはいけないことだつた。

それでも我慢して見つづけた。

テレビ番組ほどではなかつたが、もうひとつ氣になることがあつた。いつからかははつきりしないのだが、スネジヤナの様子に変化が起きた。狂つたような活発さが弱まり、朝もエレノアを起こしに来なくなつた。母親失格だとなじられることもなくなつた。しまいには会話がいつさいなくなつた。なんとなく気にはなつたが、テレビを見ているあいだは忘ることができた。それに、もともと得体の知れない子なのだ。ドラマを操りやすくするために連中が送り込んだキャラクターにちがいない。考えてみれば、いうことをきく必要はまったくないのだ。ただのキャラクターなのだから。

ある日の午後、電話が鳴つた。もちろんエレノアは出ないつもりだつた。

テレビの前で膝を抱えていると、カメラマンが音もなくそばに寄つてきた。アップの映像を撮るために、たまにあることなので、い

つものよつに無視した。

カメラマンはテレビとエレノアのあいだにしゃがみ、レンズを向ける代わりにメモを差し出した。エレノアはメモを見、カメラマンに向けてこれはなんだと眉を上げた。

相手も無言で、しかも無表情だつた。受け取れと何度も差し出す。しょうがなく受け取つた。読んだとたん、頭に血がのぼつた。

「電話に出る。このクズ女」

太いマジックで殴り書きしてあり、「クズ女」に下線が引かれている。呼吸がつかえ、顎が震え出した。どうして他人にこんなことを言わなければいけないのだろう。

エレノアはリビングに下りた。久々の登場に観客が沸いた。同時に、今まで聞いたことのないブーイングが混じつていることに気づいた。もうたくさんだ。もう番組はおしまい。リュックが帰ってきたら、このことを話す、なにはなくとも出て行こう。あとのこととは知らない。路頭に迷つてもここで暮らすよりはよっぽどマシだ。リビングに立ち尽くす。カンペが向けられた。「電話に出て」観客のひとりが叫んだ。「電話が鳴つたら出るもんだぞ!」「そんなの勝手でしょ!」怒鳴り返す。

「ドラマがはじまらないだろうが!」

「なにがドラマよ! こんなドラマなんか」

一斉にブーイングが起ころ。円卓からマイクを持った男が客席に入ろうと駆け出し、警備員に取り押さえられた。ヘルマンだ。ジョンが立ち上がり、ニヤニヤするヘルマンを叱りつけてくる。「勝手な真似はするな。ジェリー・スプリンガーにでもなるつもりか?」そしてエレノアを見上げて、大声で言つた。

「おまえはクズだ。自分がなにをしたのか、わかっているのか?」「そんなんふうに言わないで! 関係ないでしょ」

「自分さえよければいいんだな。だからクズだと言われるんだ」エレノアは黙つていられなくなり、ソファのまわりをずかずか歩きまわつた。四週したところで、望みどおり出てやろうと思つた。

そして引っかきまわしてやる。こままだされたのと同じことをやり返してやるのだ。「一オーデレスの受話器をひつたくり、通話ボタンを押した。

「おかあさんですか？」

年配の女性の声だつた。

「はじめまして。スネジヤナちゃんの担任をしているオルニーといいます。ようやく出られましたね」いら立ちを隠そうとしている。「おたくのお子さんについて」

エレノアはええぎつた。「知りません。かけまちがえよ」

女性は不意をつかれたように黙つたが、落ち着いた様子でつづけ

た。「そんなんはずはないでしょう

「どうしてわかるの。わたし、子供なんていないもん」

「あなたはそのつもりでも、子供はだれよりも親を頼りにしているのよ」

「そういう意味じゃなくて」

「とにかく、あなたには責任があるの。お子さんのやらかしたことについて」

「やらかした？」

「おつと失礼」なぜかくすぐす笑い出した。「お子さんの問題について、お話ししたいことがあります。大至急来ていただけますか？」

校長室へ踏み入れると、耳慣れた拍手が聞こえてきた。自室と同じく片側の壁がすっぱり切り取られていて、観客が階段状にすわっている。姿を見せただけで笑われるのも、同じだった。壁はおしゃれな黄緑色で違和感があつたが、観葉植物に肖像画に地球儀、役人っぽいどっしりとしたこげ茶色の机など、らしさを感じさせるものはひとつおりそろつっていた。かなり暖房が効いている。

電話のあと学校へ行こうと外に出た。住所どころか学校の名前すら知らなかつたのだが、どうせ玄関を出たとたん校長室のセットにたどり着くんだろうと余裕をかましていた。玄関から外に出ると住

宅街の景色が当たり前のように広がっていた。引き返してノブをがちゃがちゃしたが、鍵がかけられていた。しかたなく通りに出て、あっちこっちさまよつた。すれちがう人に漠然と場所をたずね、漠然としているのでやはりだれもわからず、しまいには追っかけてきた例のカメラマンといつしょに地図を広げて近隣の学校を洗い出し、ようやくスネジヤナがかよつているらしい学校を探し当てた。

エレノアはコートを脱ぎ、腕にかけた。クズ呼ばわりされたときの怒りはだいぶ収まっていた。とにかくさつさと終わらせて、おさらばしたい。あの家からも、テレビの連中からも、スネジヤナからもだ。

「あのう」「机にする男性がおずおずと話しかけてきた。「おねえさんですか?」

イスが一脚、校長の机と向き合いつように置いてあった。黒い髪の女の子が小さくなつて、背もたれから華奢な肩をのぞかせている。

「いいえ。その」

エレノアが言いかけると、スネジヤナはぱつと振り向いて、すぐに向き直つた。表情が見えたのは一瞬だつたが、どきりとさせられた。スネジヤナは泣いていた。

「あの……嘘だとバレたらどうしようかと思ひながら、調子を合わせた。「母親です」

「ほんとに?」なぜか校長先生も泣きそうな顔をしていたが、よく見ると地の顔だつた。「申し訳ない。だいぶお若く見えたので、つい

い

「あなた、歳はいくつなの?」

机のそばに立つおばさんがずけずけと聞いてきた。パンパンに膨れた手を前に組み、趣味の悪い指輪が太い指を締め上げている。まちがいなく、こっちがオルーとかいう担任だ。大嫌いだった親戚のおばさんにそつくりだつた。

「一十四です　たぶん」

「この子、養子なの?」ぞんざいに指を差す。

「ちがいます」

「おかしいんじゃない？」疑わしげに目を向け、ペンで一回なぞつただけみたいな眉を上げたり下げる。「計算が合わないでしょ。ねえ、校長先生」

話を振られた校長は、びくりとしてイスを引いた。いつたいどつちがえらいんだかわからない。

「おかしいかな。いや、わからないな」と言つ校長先生は吹けば飛ぶような体格で、ずいぶんスースの生地を節約していた。「家庭の事情はいろいろあるし、われわれが口を出すことじや」

「そういうば、似たようなドラマがありましたつけ」芝居がかつたしぐさで顎に手をやり、ふんふんと鼻息を吹き出しながら考える。

「校長先生は知つてます？ なんでしたっけねえ」

「ドラマ？ さあ、どうだらう。わたしはあまりテレビを見ないんだ」

「あつたんですよ。頭の悪そうな三十女が主人公で、夫に死なれたシングルマザーって設定なんです。十六歳で産んだ子供がいて」

おばさんが顔を上げ、メガネの奥からエレノアをにらんだ。

「あなたもシングルマザー？」

「いいえ」

「ドラマに出てるの？」

「いいえ」

おばさんが言つドラマがなにか、エレノアにはすぐにわかつた。この人も『3-1』が好きなのかと思うと、とつもなくイヤな気分になつた。

「本題に入つてもらえますか？」エレノアはつながした。

校長が相変わらず申し訳なさそうな顔で身を乗り出し、手を組んだ。「今回お呼びしたのは、あなたのお子さんの問題行動についてで、あの、なにをしたかと言いますと

「疲れまわったのよ」おばさんは忌まわしそうにスネジヤナを見下ろした。「まるでキ×××みたいに」

校長が細い手を向けて制した。「わたしが説明するから」

おばさん先生はむつとした顔を向けた。そのまま校長にかぶりつくんじやないかと思ったが、おとなしく引き下がった。

猛獸が落ち着いた頃合を見て、校長が言った。

「あなたのお子さんが、クラスメイトのランチをぶんざつたのです」「なんのために?」

「まる」と食べるためです

「理由は?」

「それは、その」

言ひにくそうに咳払いする。助けを求めるようにおばさんを見上げるが、おばさんはあっちを向いてシカトした。

「その　あなたがランチのお金渡してくれないから、と」

眉毛がひとりでに動いた。「ランチ?」

「はい。お金がないとランチは買えませんので」

「そりなの?」

「ちょっと考えればわかる」とじゃない」おばさんが口をはさんだ。

「あなたも学校かよつたことあるんでしょ?」

「あの、それは

Hレノアは弁解しよつとした。つまりこれはお芝居で、ただのテレビ番組で、無理やり知らない子供の母親役をやらされているだけだと。実際説明しようとして、これでは弁解にならないと思つた。芝居だろうが番組だろうがなんだろうが、生きていればおなかが減るのだ。自分もそう、リュックもそう、そしてスネジヤナもそうだ。少しのあいだ、怒りが湧いてきた。どうして今まで黙つていたのか、言ってくれればお金でもなんでも渡したのに、と問いただしそうになつた。だがどれだけ子供を責めても、状況がよくなるわけではない。なにかが変わるわけでもなかつた。悪いのは自分だつた。

「ええと、それにすつと、朝食も食べていなかつたよつて。お子さんによると、おなかが空いたのでしかたなくやつた、と」

スネジヤナが振り向いたので、Hレノアは目を伏せ、髪の毛で顔

を隠した。客席からは失望のつぶやきが聞こえる。相手の顔を見るのが怖かつた。ほかにどうしていいかもわからない。頭を抱えることもできず、舌をぺろりと出して「ママ、うつかりしてたの。ごめんちやー」とも言えず、自分を責めて泣きくずれることも、抱きしめて許しを請うこともできなかつた。

血の気が引いた。犯罪者になつたような気がした。

「あなた、いつたいどうこうう母親なの？ 子供を虐待中なの？」おばさんが攻勢に出る。

「そうじやなくて、ただ」

「子供をほつたらかしにして、テレビばっかり見てるんでしょ」「見てません」そう言つてから、自分自身にかぶりを振つた。  
「じゃあ、なにをしてるの？」まつたく、あなたみたいな親に会つたのははじめてよ

もちろん言つてやるつもりで口を開いたが、言つべき」とが見つからずに唇を噛んだ。涙がにじんでくる。校長とおばさんがグツジヨブと言わんばかりにこぶしを合わせたような気がしたが、かすみ田のせいによく見えない。いつたいだれに怒りをぶつけねばいいのだろう？ こんなシナリオを書いた脚本家か、それとも母親失格の自分が。

肩を落として校長室を出た。スネジヤナがとなりでとぼとぼと歩いている。バカとかカスとか怒鳴つてくれればいいのにと思ったが、エレノアを見ることもせず、口も開かなかつた。肩に触れようと、おずおずと手を伸ばした。スネジヤナはいやがるように手を振り払い、距離を置いた。

玄関口から外へ出ると、おなじみのカメラマンとケーブル持ちが駆けてきた。上空にはヘリコプターが旋回し、スタッフが身を乗り出してカメラを構えていた。

ふたりは家へ帰つた。帰り道は長く感じられた。また道に迷つたからだ。

## 20話 失われた人生

リュックは自分のデスクにすわり、仕事するふりをしながらオフィス内を見まわした。各々の机は仕切り板で区切られているので頭の先しか見えないのだが、とにかく忙しいということだけははつきりとわかった。みんな山盛りの仕事を抱えたふりをし、休む暇もないよう忙しがっていた。

チームで学んだことのひとつに、「いかに他人に忙しいと思われるか」というのがあった。数ある中でもとくに重要なビジネススキルで、年四回の給与査定でも評価のかなりの割合を占めている。たとえばキーボードを叩くときは、オフィスの隅まで聞こえるように大きな音を立てるべきで、なにを叩いているかは問題とされない。

リュックは『ビジネスマンのお助けグッズ』シリーズからキーボードの音を購入し、スピーカーをつないでループ再生した。金槌でキーを叩き壊すような耳障りな音だったが、おかげで早々に上司の信頼を勝ち取ることができた。たまにリュックのデスクにやってきては肩を揉み、「期待しているよ」と声をかける。ちなみに上司の仕事は部下の肩を揉んで「期待しているよ」と声をかけ、机に栄養ドリンクの空き瓶を並べることだった。

マニュアル本にはほかにもいろいろ書いてあって、さすがに一度では覚えきれない。「トラブルを愛する」など、生きかた全般についてじる教えもあつた。同僚からこんな逸話を聞かされた。ショップサイトのシステムがダウンした際、技術担当はその教えに従い、三日三晩かけてひたすらトラブルを愛した。するとトラブルも技術担当に愛のお返しをし、サーバー全台を物理的に吹き飛ばした。発見されたときには技術担当は素っ裸でサーバーを抱きしめながら横たわり、パックリ開いた箱の穴からマザーボードに一物をこすりつけていたという。たしかな技術と仕事への愛情によって、その男は担当部長に昇格した。

そんなこんなでまじめに会社勤めをこなすリュックだが、じつはべつの目的があった。周囲にだれもいないことを確認すると、バッグからよれよれの紙束を取り出した。自分たちの脚本だ。退屈大賞の受賞作。キーボードの音量を上げてから、めくつてシーン一を見る。「リュック、ホームに出社する」とあり、やあとかおはようとか、無駄なセリフが延々つづいている。始業前にいちおう脚本どおり実践してみたのだが、あいさつは社員の士気にかかるのでやめるようにと注意を受けてしまった。なのでいまはひとつもしゃべっていない。

退屈で中身のないセリフがつづいたのち、手書きで修正が加えられている箇所に差し掛かった。「リュック、倉庫で怪しいものを見つける」とあり、「怪しいもの」に下線が引かれていた。わきに電話番号が書いてあった。

怪しいものを見つけ、連絡してこいということだろうか。リュックは不謹慎だと思いつつもわくわくした。スパイ映画『视力の悪い鷹』のフランシス・リードのようだ。リュックはある日つきを真似しながら、いま一度オフィスを見まわした。いや、連絡したのはアル・「一ビンだつた気がする。フランキーは潜入したけどとつ捕まつたんだった。それともアーネスト・ヴァン・ダー・ラッセルだったか。よく覚えていない。

ヴァラが目の前を横切つたので、リュックは目つきをもとに戻した。パークーのお礼を言つたきり、ひとことも口を利いていない。ヴァラは書類を手にリュックを無視してとおりすぎ、同僚を捕まえて資料を見せながら忙しそうに昼飯の話をしている。

そろそろランチタイムだ。リュックは焦つた。ランチを取らないわけにはいかない。昼食抜きは重大な就業規則違反だつた。「ランチミーティング」なんて専門用語もあるくらいだ。ランチタイムがはじまる前に、ことを済ませる必要がある。終わつてからでは日付が変わつてしまつ。

リュックは携帯電話と脚本を持ち、キーボードを鳴らしたまま席

を立つた。となりにすわる同僚が声をかけてきた。「もうすぐランチだぞ。どこへ行く気だ?」

マニコアルを思い出し、応用を利かせて返答した。「ランチ前にランチに行こうかと思つて」「

「あんまりまじめぶるなよ」同僚は売上報告用の資料を作成していたが、上司が後ろをとおりがかつたのであわててインターネット占いをするふりをした。小声でつけ加える。「それなりにやつとけ。よく思わないやつだつているんだから。『あいつは上司の飼い犬だ』つてな」

上司が席にすわり、腕時計を見ながらそわそわし出した。もうあまり時間がない。

「冗談だよ。一度もランチに行って点数を稼ごうなんて、思つてないさ」こいつが会社の鼻つまみだということを忘れていた。「倉庫を見たいんだ」

「どうして?」

「あー」リコックは考へ、社内で口にするにはふさわしくないセリフを言った。「すべてはお客様さまの満足のため」

「言つね」同僚はニヤリとした。「いまのセリフ、社長に聞かせてやりたいな

「場所はわかる?」

「このビルの地下だ。非常階段からしか入れない。入り口はそこしかないから」

「じゃあどうやって商品を搬入するんだ?」

「はんにゅう? なんのために?」

リコックは会話を終わらせようと礼を言い、とおりざま同僚の肩をたたいた。同僚が振り向いて声をかけてきた。「一生懸命やれ。必死でやれ

「なんだつて?」

「ガツツを出せよ。全力でぶつかつていけ

オフィスのセキュリティドアを開け、廊下に出た。そして社員証

を首からぶらぶらさせ、自分もぶらぶらした。ほかの社員を出し抜くのは簡単だつた。気をつけなければいいのだ。ぶらぶらするのは仕事としては申しぶんないので、そもそも出し抜く必要がないのだった。

廊下をつきあたりまで歩き、防火扉を開けて非常階段に出た。一気に薄暗くなり、不気味さが増す。暖房も及ばないので肌寒い。革靴の底を鳴らして小走りに階段を駆け下りた。

踊り場に地下一階の表示が見えた。最後は三段飛ばしで着地し、白い防火扉を眺めた。扉 자체はなんの変哲もあつて、ドアノブがなかつた。

ノックをした。

小さい窓があつたので、中をのぞきこんだ。

倉庫はビルの幅いっぱいに広がつてゐるよつだつた。駐車場のような打ちつけなしのコンクリートで、太い柱が等間隔に並び、あいだに無骨な鉄製の保管棚ができとうな間隔で設置されていた。「B十一」と印刷された看板がかかつてゐる。棚には家具やら小物が並んでゐる。

従業員が、バカでかいショッピングカートを押して棚から棚へ駆けまわつてゐる。

ヘルメットをかぶつた口ひげの顔が、小窓にぬつとあらわれた。リュックは舌を喉に落としけ、ヒイと叫んだ。叫んでから、われながらへんな声だと思つた。

「だれだ」

リュックは小窓に社員証を押しつけた。「開けてもらえます?」

「なにをしに来た?」

「ええと あなたを冷やかしに」

口ひげはめんどくわかつに言つた。「もうすぐワンチだ。明日にしてくれ」

同僚と同じ、ふまじめタイプか。職場ではいつも、なにを言つべきか一瞬考え込んでしまつ。面倒なことだ。「お客さまの満足を

」

言い終える前に、金属音を立ててロックが外れた。フランシスのようにもスマートとはいかなかつたが、潜入は成功だ。防火扉が開き、中に招き入れられる。それからふたりして棚を見上げながら歩いた。主任っぽい口ひげの男は棚を指差しながら、ふまじめにも真剣に商品管理の仕組みをリュックに説明した。「うちの管理はロケーションフリーなんだ。フリー、つまりてきとうってことさ。最先端のシステムなんだ。すげえだろ。おれから教わったなんて言うなよ」

リュックは目を細めて倉庫を見まわした。いや、潜入したのは相棒のアントン・デリンジャーだったような気がする。フランキーは潜入しようとしたところを柱の陰から飛び出してきた敵に襲われて気絶したんだつたつけ。せめてメガネをかけねばいいのに。

「ランチまであとどのくらい？」

男は腕時計をのぞいた。「十五分ってとこかな」

あまり時間がない。リュックは口ひげの主任に礼を言つて別れ、本格的にスパイ活動を開始した。目を細め、スパイらしく腰をかがめてにじつた。実際は途中で何度も見つかったのだが、あまり精を出すな、気楽にやれと声をかけられただけだつた。棚のあいだの薄暗いところをにじつていると、従業員が背中を向けてぼんやり立つているのが見えた。リュックはなぜかデジヤヴを覚え、めまいがした。気づくと従業員ににじり寄り、羽交い絞めにしていた。

従業員は落ち着き払つて、リュックに目を向けた。「なにも話さんぞ」

リュックは失敗したと顔をしかめたが、もう後には引けない。テレビ化が進んでいるので向こうもその気だ。無意味だと知りつつもスパイを演じてつじつまを合わせることにした。

それほど太くない腕を首に巻きつけ、耳もとで鋭くしゃやいた。

「おまえの知ってるテレビ番組のことを話せ」

「話すもんか　うつー」従業員は首を絞められたように苦しげにうめいた。「わかった、話すよ」

「あんたは役者か」

「そうだ」かすれ声で言つ。『倉庫で働く低賃金労働者の役でああつ！』

「絞めてないのに苦しむな

「ここには怪しいものなんてなにもないぞ。以外は』

氣絶した。

不本意な尋問でなにもなくないことをつきとめたリュックは、ふたたび腰をかがめてうろちょろした。商品の異常さは面接のとき工イミルに聞かされていたので、手に取つて見るまでもなかつた。怪しいものを探せといつが、ホームの倉庫は怪しいものだらけだつた。ふとひらめいた。怪しいものの中にあつて怪しいものとは、怪しくないものなのだ。今日は頭が冴えている。リュックは棚を順に眺めていき、怪しくないものを探しにかかつた。

倉庫はかなり広い。それに、ランチまで時間がない。従業員たちのそわそわだけで大地震が起きそうなほどだつた。切羽詰まつてきたのでかがみ歩きも鋭い目つきもやめ、ふつうに走りまわることにした。

いくつか棚を巡つたあと、リュックは立ち止まつた。あの老人が見つけたいものなのだから、テレビの連中にとつては見つけてほしくないものにちがいない。であれば、いちばん目につくところに隠してあるはずだ。

リュックは棚のあいだから出で、倉庫中央の広大なスペースを見やつた。フォークリフトや木製のパレット、梱包用のビニールがスペースのまさにど真ん中に、ダンボールが山になつていた。札がかかるつていて、遠目でもはつきり読み取れる明快な文字で「社外秘」と書いてあつた。

リュックは「社外秘」に走つて近づき、ダンボールの山を見上げながらぐるりを一周した。どれもよれよれで、梱包もおざなりだつた。仕入れたばかりの商品ではなさそうだ。ダンボールのひとつひとつに、マジックでなにかが書かれていた。「マルF。フインボガ。

七百十四年七月十三日。ケルナー・ゲル通り二百十二番地。パートーン一  
リュックは箱を下ろし、開けてみた。ごくふつうの黒いビデオテー  
プがぎっしり詰まっていた。ラベルにも、ダンボールと同じ内容が  
書かれている。

ラベルの内容は人の名前とおそらく生年月日、それから住所だろ  
う。中身は売り物でないことはたしかだ。

人の名前が並んだダンボールを、端から順に眺めた。なにが記録  
されているんだろう。と考えた瞬間、リュックはこの騒動が起こそ  
てからずつとカメラで監視されていたことを思い出した。ふたつの  
考えが重なり合つ。カメラで撮れば、当然録画もするだろう。

「ビデオで録画するかな」

リュックはひとりごとを言つた。ともかく、脚本どおり「怪しい  
もの」をつきとめたようだ。携帯電話を取り出し、脚本に書かれた  
番号を押した。耳に当てながら、あらためて山のようなダンボール  
群を見渡した。

「もしもし」老人が出た。電波が悪いのか、声がざらついている。  
「だれだ」

「リュックです。『怪しいもの』の件で」

「あつたか？ シナリオどおりか？」

「そのつもりですけど。 ただ、しゃべるのを忘れたセリフがい  
くつかあって」

「なにを見つけた？」老人は興奮している。

「ビデオです。人の名前のラベルつきで」

「いいぞ。再生してみたか？」

倉庫全体にブザーが響き渡り、従業員がいつせいに鬨の声を上げ  
た。ついに来た。ランチタイムだ。  
つづきは夕方で。ランチに行かないと「

「飯を食つてる場合か」

「重要なことなんですよ、この会社では」

「運び出せそうか？」

「一度にぜんぶは無理です。従業員用の入り口しかないし」「では、どうやって商品を搬入して」

突然、鬨の声がやんだ。リュックは周囲を見まわした。人っ子ひ

とりいない。倉庫は恐ろしいほどに静まり返っている。「消えた」「なんだって？」

「忽然とランチに行つたんです 従業員全員が」リュックはその場で回転した。「テレビ化すると、ワープもできるようになるのかな」

「そうか、わかつたぞ」老人は勢い込んで言った。「ただし、わかつていなかもしれない」

「どっちなんですか？」

「どこへ消えたかは、知らないほうがいい。世界がいかに創造されたかに関わってくる」

「いかに創造されたんですか？」

「それは……」言いかけたが踏みとどまつた。「知らないほうが身のためだ」

リュックはかぶりを振った。「こちへ来て手伝ってくださいよ」「いや、ダメだ。やることがある。きみもやるべきことをやれ」

「なにをやればいいんです」

「よく聞け。そのビデオには、ラベルに書かれた人物の人生が記録されている。もちろん、ミーカと手下が撮影したものだ」

「それで？」

「連中は撮影した部分を当人の人生からそつくり抜き取り、代わりにおもしろおかしいテレビ番組を人生そのものにダビングしたのだ。いままで現実世界で再生されているのが、それなのだ」

「それで？」

「当人の前で再生しろ。そうすればテレビ化を食い止め、との現実世界に戻すことができる。そいつは失われた人生のビデオテープなのだ」

「それで……」リュックはイラついて言い直した。「どうしてそれ

を先に言わないんです」

「わたしもテレビの人間だからな」

「テープを再生するには？」

「ビデオデッキを探せ」

それだけ言つと、ふつりと電話が切れた。

倉庫ならば、ビデオデッキくらいはあるはずだ。リュックはフィンボガという女性のテープを取り、海苔巻きのように脚本を巻きつけた。事務所を見つけ、中に入る。中は「ミミ」だらけ、廃品だらけ、裸のCDだらけだった。

すすけた銀色のビデオデッキがラックに積んであった。息を吹きかけるとほこりが舞い散らり、リュックは何度もくしゃみをするはめになった。くしゃみをするとまたほこりが舞い散らかり、くしゃみのうえにくしゃみを重ねてわけのわからない状態になった。鼻と口を押さえ、なんとか落ち着かせる。

呼吸をとめたまま、すきまに頭を差し入れて裏側をのぞく。線をたどつていくと、ラックのうえのテレビとしつかりつながっていた。後頭部をラックにこすらせながら頭を引き抜き、ビデオの電源を入れた。テープを挿入しようとし、ふと手をとめた。デッキの入り口とテープの幅が合わない。テープをまじまじと見て、あつと声を上げた。

人生のビデオテープはベータマックスだった。

リュックは急に怖気が立つた。急いで脚本を開いた。例の手書きの箇所からさらに進むと、「リュック、みんなの失われた人生を取り戻す」と、漠然とした状況説明が書かれていた。手抜きだ。それとも、執筆者（老人）も方法がわからないのだろうか。

失われた人生。リュックは苦い確信を得た。ベータマックスのビデオデッキを見つけてテープを再生することで、テレビ化する以前の失われた人生を取り戻すことができるのだ。しかし、どうやってデッキを探せばいいのだろう？ ベータマックスはこの世に存在し

ないのだ。ここどころが確信の主な苦い部分だった。

リュックは事務所を飛び出し、ダンボールの山に戻った。それから「E」のダンボール群のマジック書きをかたづぱしからチェックし、ついにエレノアのビデオテープが入った箱を見つけた。かなりの数で、とても持ち帰れそうにない。

つづけて「L」の塊から自分の箱を見つける。エレノアほどではないが、それでもかなりの箱数だつた。

鍵は見つかったが、鍵穴がない。脚本も手抜きだ。リュックは自分のダンボールに腰掛け、携帯を取り出した。老人に電話をしようと番号を押していると、目の前にだれかが立つた。

リュックは顔を上げた。

「すみません。注文の品を届けに来たんですけど」  
白い帽子に白いうわっぱりの男で、学校食堂の調理師に見えなくもない。

「注文？ ぼくが？」

「ええ。寿司を一百人前」となりに山積みになっている紙箱に目をやつた。伝票を確認する。「お客様の名前はリュック」

「ぼくです。 だけど、注文してませんよ」

「おかしいな。たしかに電話してきたのは小さい女の子だったけど

」

リュックは納得がいった。スネジャナが注文したのだろう。寿司とは渋いチョイスだ。

「それより、どこから入ってきたんです？」

「どこからって、あっち側から」

配達人は答えた。あっちと言いながらどこも指差さない。リュックは防火扉を指した。

「入り口はノブがないんですよ。入れないはずじゃ」

「ああ、そういうことか。 入り口と言つても、トランポリンのほうですよ」

「はい？」

「注文しておきながら、どうして家にいないんですか?」配達人は  
ちょっと怒っていた。「届けようがないでしょ、そんなんじゃ。イ  
タズラなんですか?」

「ふつう、家に届けるべきなんぢゃないかな」

「ふつうは注文者に届けるべきなんです」と言い切った。

このまま言い合いをしていてもしかたないので、リュックはよ  
くわからないまま謝った。そして住所を教えるから、そつちに配達  
し直してくれないとお願ひした。

「そのためには、まずあなたが帰らないと。いまから帰りますか?  
「ぼぐがいなくとも届けられるだろ」

リュックは声を荒げそうになるのを押さえた。仕事のストレスで  
気が立っているのだと詫び、疑問についてたずねた。

「トランポリンから来たって言つてたけど

「ええ。こっちです」

配達人についていく。壁際の一角に、おしゃれな黄緑色のトラン  
ポリンがいくつも並んで置いてあった。家庭用で、幅は人の身長く  
らいだった。

「ええと　こいつだつたかな?」

トランポリンを選び、飛び跳ね面を手のひらでバンバン叩いた。  
すると急に飛び跳ね面が消え、代わりに赤や青や黄色の目くるめく  
カラーパターンがあらわれた。テレビ放送終了後のピーという音も  
聞こえてきた。

血井にあつたコートハンガーと同じ、ワープ空間だ。

「　どこから來たのか、聞いてもかまいませんか?」リュックは  
丁寧にうかがつた。

「あつち側です」

「具体的に言つと?」

「テレビ界です」

「それはつまり?」

「これは、テレビ界と現実をつなぐ空間なんです」

「具体的には？」

「あなたはわたしに具体的になつてほしいのですか」配達人は体のパートの欠点を指摘されたみたいにむつとした。「わたしは寿司屋の配達人です。それ以上でも以下でもない。どうしても名前やルックスの特徴が必要だとおっしゃるなら、わたしじゃなく脚本家に文句を言うべきでしょう」

「ぼくも脇役なんですよ。だから、あなたの気持ちはよくわかります」リュックは半分本氣で言った。「どうやってテレビ界へ行けるのかな。その方法を教えてもらえないですか？」

丁寧な物言いに、配達人は眉間にしわを解いた。「キャラクターの設定を思い浮かべるんです。名前、容姿、生年月日、結婚の有無、性格的特徴など。それからトランポリンに飛び込むんですよ」

「テレビのキャラクター？」

「もちろん。お知り合いはいますか？」

質問をつづけるうちに、なにをすべきかがじょじょに明確になつていった。もちろん、テレビ界にお知り合いはいる。正確に言うと、エレノアにはテレビ界のお知り合いがたくさんいる。そしてテレビ界なら、ベータマックスのビデオテッキが見つかるはずだ。自分がワープしたときにホームへたどり着いたのはなぜだらう。リュックは考えたが、腹も減ってきたのであとにすることにした。でも、ランチを取っている暇はない。家へ帰らなければ。

「すぐに帰るので、寿司を持つていったん戻つてもらえますか？」

「そういうのは迷惑なんですよね」

「一時間したら、ぼくのところに来てください。必ず家にいますから」

名なしの配達人はまだ一言二言文句を言ったそだつたが、しぶしぶ寿司を持ってトランポリンの中に消えた。消えると同時に、ありきたりなトランポリンに戻る。

リュックはあらためて脚本を見直した。すると「リュック、失わ

れた人生を取り戻す」の説明に、いつのまにか手書きで修正が加えられていた。「リュック、エレノアとともにテレビ界へ向かい、失われた人生を取り戻す」

おそるおそる飛び跳ね面を叩いた。期待を裏切ることなくカラーパターントピー音があらわれた。酔つ払つていれば勢いで飛び込むところだが、しらふではとてもそんな気になれない。それにいまは、昔の自分とはちがっていた。まずしらふだし、仕事をしているし、子供もできだし、副業でスパイもやっている。つまり社会的に責任のある大人になつたのだ。大人は理由なくトランポリンで飛び跳ねたりしない。それに、使命めいたものまで抱えている。まさに現実世界全体の命運を握つていいのだ。これで脇役はどういうことだ。棚に並んでいるマグカップを取つた。自分の代わりにこいつを放り込んでやろうと思いついた。ミーカの脳天を直撃するさまを思い浮かべながら、投げ入れた。マグカップは跳ね返ることもなく、カラーパターントの中消えた。次はジョン。それから円卓の脚本家ども。

夢中でマグを投げ入れていたので、エレノアのことが頭に浮かんだときにはもう遅かつた。「ごめん！」聞こえるかどうかわからないうが、とにかく穴に向かつて謝つた。

細い手がぬつとあらわれ、リュックの襟首をつかんだ。女性の手だ。ものすごい力でカラーパターント中にひっぱられる。トランポリンのへりをつかんで抵抗したが、じりじりと押し切られる。リュックはトランポリンの足をカニばさみし、急いで携帯電話を取り出した。老人へリダイヤルし、留守番電話のメッセージを聞いた。そしてついに引きずり込まれた。

家に帰つたらとにかく話し合おうとエレノアは心に決めていた。どうすればいいかは、ちゃんとわかつている。母親の経験はないが、『31』なら一話につき最低二十回は見ているのだ。リンも子供たちといろんなことですれちがい、毎週のようにギクシャクしていたが、残り五分くらいのところでもうまいこと解決させていた。いまが残り五分の場面だ。エレノアはやるべきことを頭の中で何度も確認した。まずはスネジヤナとふたりきりになつて、素直に謝り、今後は一度とランチのお金を忘れないと誓う。いい母親になると約束し、そのためにたまに協力してくれとお願いする。罵声を浴びせられ、非難されても、大きな心で受け止めよう。そして仲直りしたら、思い切り抱きしめてあげるのだ。そのあとは考えていない。アドリブでなんとかなるだろう。

結論から言つと、なんとかならなかつた。ちつともなんとかならなかつた。計画どおり進んだのは、家についてコートにハンガーをかけたことと、「あのね」と言つたことだけだつた。まず「あのね」から入ろうと決めていたのだ。

中に入るなりスネジヤナはぐるりと振り返り、エレノアの腕をパンチした。エレノアは「痛い」と言つた。そんなセリフは計画にはい。スネジヤナは食いしばつた歯のすきまから荒い息を漏らしながら、もう何発か殴つたり蹴つたりした。そのあと金切り声でエレノアを責めはじめた。

なにを叫んでいるのか聞き取れない。バカとか死ねとか大嫌いとか、わかつたのはかるうじてその程度だつた。噛みつかんばかりの勢いだつたが、やらかしたことを考えるとほんとうに噛みつかれるかもしれない。エレノアはあとじさつた。スネジヤナは肩をいからせながら詰め寄つた。せめて謝ろうと思つたのだが、それすらもできなかつた。

キッキンへつづくドアに追い詰められた。背中にドアをぶつけ、そのままキッキンに後退する。

「なにもしなかった！　なにもしなかったじゃん！　ずっと…」

スネジヤナは手近のシリアルの箱を投げつけた。「あんたなんかいらない！　家から出てけ！」これはみんなの家なんだよ！　あんたはいやいけないんだ！」

「ごめんなさい」

「うるさい！」

エレノアの背後で窓ガラスが割れる音がした。驚いて振り返ると、ガラスの破片に混じって飲みづらそうな形のマグカップが床に転がっていた。そんな演出などしなくてもいいのに。

「話を聞いて、ね」急いでつづける。「これからは、わたし

「いらない！　あんた終わってるもん。これからは自分で面倒見る！」

長い髪を振り乱しながら、ほかに投げるものを探す。だがキッキンにはほとんどなにもなかつた。洗剤すら置いていない。スネジヤナは喉の奥でうなつた。

エレノアはマグカップを拾つた。奪われたら厄介な目に合いそうだつたからだ。それを見るやスネジヤナはさらに大きな声で叫んだ。「もうおかあさんなんていらない！　リュックとふたりで暮らしていくんだ！　片親なんて珍しくないもん！」

「ここにきて、エレノアはいよいよ制御が利かなくなつてきた。自分がみつつかよつとに分裂して、ひとつしかない体をひっぱり合つた。『自分勝手なエレノア』が架空の袖をひっぱつて耳打ちする。「わたしたち、この子の親でもなんでもないじゃない。スネジヤナなんてほっぽり出して、もとの生活を取り戻そうよ」と反対側から『慈悲深いエレノア』が言った。「子供を見捨てるなんて、最低の人間よ』ふたつの人格を静かに押しのけ、『軽重バランスの取れたエレノア』が進み出て言った。

「まあまあ、落ち着いて」

もつといい意見を持つた人格があらわれないかと待つてみたが、ろくな人格がなかつたのであきらめた。怒りのエレノアはうなるだけだつたし、悲しみのエレノアは涙を流すだけだつた。犬の性格が狂つたようにわんわんと吠えたので、エレノアは気味が悪くなつてこれ以上内面を探るのをやめ、背中を向けて逃げ出した。キッチンの階段を駆け上がつて、足をもつれさせながらリンの部屋に飛び込んだ。飛び込んだはいいがなにをすべきかわからず、腕を抱きながらじゅうたんの上を歩きまわつた。歩きまわるにも疲れ、いつものようにベッドへ倒れこもうと思つたが、なぜかそんな気になれなかつた。

申し訳程度の本が置いてある机が目に留まつた。エレノアは歩きまわるのをやめ、こめかみを押さえた。ぎやあぎやあ怒鳴るスネジヤナの声がここまで聞こえてくる。エレノアは耳をふさぎたくなつた。

イスをひいてそつと腰掛けた。ここへ来てから一度も使つたことがない。番組を見るかぎり、リンもほとんど同じだつた。机の表面にうつすらとほこりが浮いている。

ほこりを払つて、本に顔を近づけた。育児関係の本、地図、販売関係の資格取得の本などの背表紙が並んでいる。育児本のタイトルは『なるべくがんばらない子育て』だつた。リンはたしかに、がんばつていなかつた。だけど子供はふたりともいい子で、少なくとも喉がちぎれそうな叫び声を上げたりしない。

本を取ろうと手を伸ばしたが、やめた。あれはテレビで、現実とはちがうのだ。つまくいつているのは、そういうキャラクターの設定だからだ。

スネジヤナもドラマ用に演出されているのかもしれない。エレノアを困らせ、ミーカをおもしろがらせるために。だがいまは、キャラクターがどうの演出がどうのと考えたくはなかつた。食事を『えなかつたのは自分自身の「演出」だつたからだ。

ドアが静かに開いた。目の端に、例のカメラマンがこつそり入つ

てくるのが見えた。リコックは近づかれるたびにパンツの中身をちらつかせていたが、いまのエレノアには追い出す気力もなかつた。エレノアは振り向いた。カメラマンは近づき、レンズをまん前につきつける。カメラマンと同じ表情のない顔がうつすらと反射して見えた。好きに撮ればいい。そしてみんなでそれを見て、あれやこれや言いながら楽しめばいい。

カメラマンはしばらくアップ映像を撮っていたが、ふとカメラを下ろした。ズボンのポケットを探り、なにかを差し出した。ポケツトティッシュだつた。

エレノアは手の甲で顔をぬぐい、泣いていることに気づいた。カメラマンを見上げる。カメラマンは固い表情のまま、受け取るようにつながした。エレノアは受け取つた。そして鼻をかんだ。

話しかけようとしたが、思いとどまつた。いつしょに学校を探しまわつた仲とはいえ、ミーカの手下に打ち明け話をする気にはなれなかつた。ただうなずいて、ありがとうを伝えた。

すると今度は、まるめた雑誌を差し出してきた。

今週号のテレビガイドだ。エレノアはぱぱぱらとめくらしながら、なんのために渡したのかと不思議に思った。それからふいに笑いが込み上げた。やることがないならテレビでも見るといふことなのだろつ。

「どうもありがとう」

エレノアはハッキリとした口調でお礼を言い、あらためてガイドに目をとおした。表紙にはふつうのおじさんがなんともいえない表情を浮かべて映つていた。目次を見たが、エレノアでさえ見たいと思える番組がなかつた。「それなりに注目！ 春のドラマ紹介」に目をとおし、巻頭特集「徹底解剖！」『会社勤め』をそれなりに読んだ。一週間の番組表を見る。『R I V』は『数学』とか『大陸史』などの番組名が高校の時間割みたいに並んでいた。ケーブルテレビ『家族チャンネル』の欄は、番組表というより祝電一覧だった。ぜんぶがぜんぶ、その調子だつた。テレビ界もここまできたか。

『鬱トV』よりはマシだと思い、『家族チャンネル』を見ようとテレビをつけた。ちょうど『アンダーウッド家』がはじまるところだ。ベッドにすわり、枕を抱いてテレビをのぞきこむ。知らずにため息が漏れ出た。スネジヤナの声が聞こえてくる。テレビの音量を上げた。

テレビに集中する。『アンダーウッド家』は予想どおりの内容で、ただひたすら家族の生活を流しつづけた。番組表によると、三時間もつづくらしい。若い夫婦と小さい娘の三人家族で、わが家と同じだ、とエレノアは思った。冗談ぽい。奥さんはどこかで見たような気がしたが、思い出せなかつた。

奥さんは朝いちばんに起き、朝食の準備をした。娘や夫におはようと声をかけ、ベーグルと卵料理をテーブルに運び、コップに牛乳を注いだ。三人とも会話らしい会話もなく、十分もしないうちに夫、娘と席を立ち、奥さんひとりになつた。後片づけをし、食器を洗う。それが終わると今度は洗濯。セリフもなく、テレビ用の気の利いたずつこけもなく、てきぱきと働いている。腕まくりをして白い腕をのぞかせ、小走りに駆けるたびに後ろにまとめた髪がぽんぽんと跳ねる。すっぴんだつたが肌がきれいで、女優といつてもいいくらいかわいらしかつた。テレビだから、すっぴんではないのかもしれない。

他人の家庭をのぞき見しているような気がした。おもしろいかといえは決してそうでもなく、ただ思つたほど退屈しなかつたし、奥さんがだれかも気になつた。残りの一時間四十分はそれを楽しみにしようと決めた。

昼になると、奥さんはようやく休憩した。コーヒーを入れ、キッチンで読書をした。エレノアは奥さんの顔を三十分も眺めつづけ、ようやく思い出した。イグノラだ。料理バラエティ『ほんとうのところの料理』で、お料理おばさんのヨンナにいびられ毎週のように泣いていたアシスタントだつた。ただ、エレノアの知るかぎり結婚はしていなかつたはずだし、娘もだいぶ大きかつたので、ほんとう

の家族ではないんじやないかと思つた。番組のためにつぶられた家族だろうか。わが家のようになつた。やはり冗談ぽい。

イグノラは掃除に取り掛かつた。それが終わるとすぐさま出かけ、娘といつしょに買い物袋を抱えて戻ってきた。娘の話を聞きながら、休むことなく夕飯の準備。なにをつくっているのかは、さっぱりわからない。

いつのまにかエレノアは、働き者のイグノラに自分を重ねて没頭していた。

「テレビは役に立つだろ」

急に話しかけられ、どきりとして振り返つた。カメラマンだ。すっかりいるのを忘れていた。

「主婦は、こういうことをしてるんだ」

エレノアは答えるべきか迷つた。慎重にたずねた。「頼まれたんでしょ、あの監督がだれかに」「いや

「今度はなにをたくさんでるの」

カメラマンがしゃべらうとするとき、後ろにいたケーブル持ちが腰をかがめたまま顔をのぞかせ、ものすごい速さでしゃべりはじめた。ビデオテープを巻き戻しているような声で、なにを言つているのかまったくわからなかつた。

「こいつは早送り気味なんだ。だから社会になじめない」

「そう

「あなたは、やる気がないんじやない。やりかたを知らないだけだ」ケーブル持ちの肩に手を置き、つづけた。「だから、覚えればいい。テレビで

「助けよつとしているの?」

ケーブル持ちがぬつと顔を出し、きゅるっとしゃべつた。

「 そうだよな。そのとおり」カメラマンがうなずいた。「でも、いい親になれるよ。才能なんていらない。練習すればいいだけ

け

エレノアはそれを聞き、体の力が抜けた。たまっていた息を吐き出す。気分が少し楽になった。こんなまともなアドバイスは親にももらつたことがない。

「まあ、洗濯機のスイッチくらいは押せそつだけど」「景気づけに無理やり笑いかけた。「あと、掃除機をひきずつて歩いたりとか。奥さんはみんなやるんでしょ?」

カメラマンはわざかに肩をすくめた。

テレビに目を戻す。娘の友達が遊びに来ていた。土曜日は泊まりに行つていいかとせがんでいる。イグノラは夕飯の準備をつづけながら、どんなパーティなのか、だれが来るのか、などを淡々と質問している。怒るわけもなく、てきとうに流すわけでもなく、テレビ向けに娘を抱きしめたりもしない。

なんの料理をつくっているんだろう。エレノアはふと思い、テレビガイドをめくってみた。料理チャンネルがあつたので、さっそく切り替えた。

キッチンを模したスタジオが映る。だれもいない。抑揚のないナレーションがかぶさる。

「今日は、料理など今まで一度もしたことのないぐうたら奥さんでも簡単にできるレシピを紹介します」

「それ、わたしよ」うれしくなつてテレビに話しかける。「ぐうたらなの」

「最高の料理は、冷凍食品をレンジでチンすること。トースターも満足に使えない。そんなあなたはきっと、家族や友人からやる気ゼロのダメ主婦の生活無能力者と思われていることでしょう。しかし、それはちがいます。あなたは時代を先取りしそぎてしまつただけなのです」

「そうよー。そうなの」

「時代に合わせましょう。いくつかの簡単な料理を覚えるだけで、あなたは夫に愛され、子供に信頼され、銀行はより多くのお金を貸してくれるようになるでしょう」

「それこそが必要なの！」

「では、準備はいいですか。エレノア」

「わたし？」

「はい、そうです。あなたはエレノア。そしてこれはあなたのための特別番組です。少ない予算を工面してこじらえました」

「ほんと」

「ほんとうですよ、エレノア」

さつきのカメラマンといい、味方されるのは心に沁みるものだ。

「ありがとう」

「お礼を言つるのはわれわれのほうです。こんな状況においても、あなたはテレビを見つづけてくれる」

「どんな状況？」

ナレーターは口<sup>ノ</sup>もつた。「われわれは、テレビ界の生き残りです。テレビ界はどんどん『テレビ現実』化し、取り返しのつかないほど広がっています」

「退屈なのね？」

「そうです。退屈は伝染病のように広がる。おとなりが退屈ならこつちも退屈になるのです」

「ひとつもたいへんなの。申し訳ないんだけど、お料理を教えてくれる？」

「テレビは最高。テレビはおもしろい。テレビは役に立つ」スローガンのように言った。「あなたにお願いがあります。料理や家事を教える代わりに、今後もテレビを見つづけてください。われわれのために」

「わかった。見る」エレノアは請け負った。「どんなにつまらないスポーツ中継でも

「ありがとうございます。それでは最初の料理。間食大好きなあなたにビックタリ、五分ができるボテチサラダから」

そんなわけで、エレノアは奥さん修行を開始した。翌朝の料理は

大失敗で、サラダは葉っぱがドレッシングの海を泳いでいるようなしろものだった。妻の美貌ぶりについては、リュックはとくにも言わなかつたし、スネジヤナはフォークで葉っぱを泳がせて遊んでいるだけだつたが、少なくとも笑いは取れた。リンも料理が下手で、とんでもない失敗をするたびにエレノアもげらげら笑つたものだ。いまは笑われる側にいる。リンと同じ。だから、気分はよかつた。練習すればいい。

スネジヤナにランチのお金を渡すのも忘れなかつた。スネジヤナはひとことも言わず、むしりとするように受け取つた。これも練習すればいい。

料理はべつとして、主婦の仕事はやつてみればどれも意外と簡単だつた。洗濯も簡単。汚れ物をいっぱいになるまでつっこんで、指示どおり洗剤を入れてスイッチを押すだけ。洗濯の恐ろしさは昨夜の番組『全自动ドラム式における無難な洗濯』でさんざん叩き込まれたのだが、これでは拍子抜けだ。

掃除も同じだつた。楽チンで安全で、掃除機のホースが首に巻きついて窒息するなんて、めつたにないのではと思えるほどだつた。一度だけ危うい場面があつたが、すんでのどじりで逃れた。コツをつかめばどうつてことない。

暇ができるとテレビを見た。テレビ界の生き残りと約束したとおり、どんなに退屈な番組でも消さずに見た。生き残りはなんとか楽しませようとしたがんばつてはいたのだが、悲しいほどつまらなかつた。週末を迎えるこのには、単調な家事にウンザリできるまでになつていた。

「「」のサンドイッチは？」

金曜日の朝、リュックはテーブルに並ぶ料理を見てたずねた。

「ハムキュウ」エレノアはカウンターに立ち、エプロン姿でポテチの袋をゴリゴリつぶしながら答えた。

「ハムキュウ？」

「ハムとキュウリ」一息ついて顔を上げる。「おいしい？」

「とても」一切れ平らげ、トマトジュースを飲んだ。「信じられないな。料理研究家の才能があるのかも」

「どうなんだろう。テレビで教わったとおりにやつただけ」

「その髪型もいこよ。ぽんぽんしてみる

「ありがとう」

エレノアはスネジアナの様子を盗み見た。学校に行く時間になると元気がなくなるのはいつものことだが、今日はよりいつそう落ち込んでいるように見えた。ハムキュウにはいつさい手をつけてない。

「食べないの?」リュックが声をかける。「朝食は大事らしいよ。テレビも言つてゐる

「食べたくないなら、無理に食べることはないのよ」

エレノアは罵倒覚悟で話しかけた。スネジアナは口をぎゅっと結んでかぶりを振つた。

「ぼくがもらつてもいい?」

スネジアナはリュックの手をはいた。

「だつて、もつたいないだろ?」

「きらいなの」ぼそりと言つ。「だれにも食べてほしくない」

同情するように観客がため息をついた。エレノアは肩を落とした。やつぱりダメか。今日は朝から一度も目を合わせてくれなかつたし、料理をいくつか覚えたくらいで仲直りできるはずがないのだ。リュックが心配そうな視線を送つてきた。

「なら、置いといて」エレノアは無理やり笑つて言つた。「あとで片づけるから」

スネジアナが顔を上げたので、エレノアはどきつとした。が、いつもガソル飛ばしではなかつた。ペットを飼つちゃダメと言われた六歳の女の子みたいな顔だつた。

「片づけないで」お願いするよつに弱々しくつぶやいた。

「どうして?」

「食べたくないわけじゃないの。あのね、キ、キュウリがきら

いなだけなの」

たどたどしく言い終えると、Hレノアに向けて笑う練習をするようになつたを持ち上げてみせた。

Hレノアは打ちのめされた。息が詰まり、動悸がし、思わず胸に手を置く。

「ごめんなさい」笑顔がぼろぼろとぐずれ、顔を伏せた。

「わう？」なにか言わなくてはと、思いつくかぎりのことを陽気にしゃべつた。「謝らなくていいのよ。その 好きなサンディッシュがあれば、言つてくれる？ 明日つくるから。サンディッシュじゃなくても、なんでもいいの。あの あれとか。なんだっけ？ 知らない料理だつたら、勉強しなきゃいけないけど

「キュウリとトマトがきらい」スネジヤナは恥ずかしげに首をかしげ、困った顔をした。「それからね、ジャムはブルーベリーがきらいなの」

「トマトとピザにも入つてるんだぞ」リュックがツッコミを入れた。「ピザはいいのー」スネジヤナは元氣よく叫んだ。「今晚もピザにしてー！」

円卓のまづからウンザリするような声が上がつた。  
Hレノアはめまいがした。一か月分溜め込んだ感情が一気に押し寄せてきたみたいだつた。

チャイムが鳴つた。離れたがたつたがそうもないかない。奥さんらしくいそいそと、Hプロンで手をぬぐいながらリビングに向かつた。途中、例のカメラマンがいたので、すれちがいやまじつそりと親指を立てた。

「いいや。一氣にドラマらしくなつてきた」脚本担当Aがぱちんと手を叩いた。

「キュウリ、きらいの設定が役に立つた」脚本担当Bが得意げに叫ぶ。ジョンは立ち上がり、脚本女の背中にまわつた。ノートパソコンの画面に脚本エディターが表示されている。

「いま設定したのか」

「そう。サンディッチのネタがわかつてからすぐ」  
脚本家チームは乗りに乗っていた。勢い込んでノートパソコンに向かい、キーを叩きながらこれまでのあらすじとエレノアの成長ポイントを交互に挙げていき、今後の展開のアイデアを出し合つている。

ジョンはその様子を黙つて見下ろしていた。「その調子でいけ」玄関のチャイムが鳴つた。エレノアが奥さんらしいそと玄関に駆け寄る。

「ゲストを呼んだのか?」ジョンがメンバーを見まわして聞いた。

「いいえ。あなたは?」

脚本担当Aはちつこい手を上げて、おれも知らんとかぶりを振つた。

「わたしが呼んだのだ」

聞きなれない声がして、ジョンは振り返つた。浅黒い肌の老人が、いつのまにか後ろに立つていた。「エレノアにだいじな届け物があつてな」ジョンをじつと見つめる。

「だれだ、あんた」脚本担当Aが割り込んで、牽制した。「観客は

白いラインを越えるなど説明したはずだぞ」

老人は悪びれもせず、よつこらしょつと手近な席に腰を下ろした。「なにが白いラインだ。子供みたいなことを言つな」と、スタッフにコーヒーを持ってきてくれと頼んだ。

ジョンは腕を組み、老人を見下ろした。よりによつてこんなときに、こんなところで会いたくない人物といえばこの老人をおいてほかにいなかつた。「ひさしぶりだな」

「ひさしぶり?」声をひっくり返して答える。「まるで終生のライバルみたいな物言いだな。わたしはそんなつもりはないぞ」

「知り合いでですか?」

ジョンは片眉を上げて脚本担当Aに答えた。これでは答えたこと

になつていなかつたのではないかと思ひ、もう片方の眉も上げた。どうやら伝わつていなかつたので、結局口に出して言つはめになつた。「そうだ」

「知らんのも無理はない。 ああ、ありがと」スタッフから「一ヒーを受け取る。「若者が往年の映画スターを知らんのと回り、「スターなんですか?」ヘイミルが口をはさんだ。

「ただのたとえ話だ。このバカ芸人」

ジョンは老人に向き直つた。「いろいろと邪魔をしてくれたようだ。隠居のくせに。ケアハウスはそんなに退屈だつたのか」

「これからも邪魔するぞ。エレノアから身を引かないかぎりな」口一ヒーをすする。「わたしは原作者として、このドラマに手を加えにやつってきたんだ」

「原作者だと?」

「ああ、繰り返すな。一度言えばわかる」

「でたらめ言ひつな。書いたのはぼくらだ」と脚本担当A。

老人は具体的にだれかはわからないが悪意のこもつた口真似をした。「『そつちがパクッた』『こつちのほうが出版は先だぞ』『こつちは十年前に思いついた』などなどなど。『訴えてやる』か? その前におまえの作品はどれだけの価値があるのかと言いたい「なにが言いたいんだ」

「最後はおもしろいほうが勝つ、ということだ。どれだけ後から書こうが、キャラクターがほとんど同じといいくらい似かよつて」

ジョンは老人の言わんとしていることを頭の中でまとめ、ひとことで言った。「パクリに来たのか?」

「このドラマを書いたのはわたしだ」老人は必要以上に大きな声でおつかぶせた。「まだ書き終えていないのだが、いざれそうなる。あんたらが先に発表しただけのことだ。悪運が重なつただけで「パクリに来たんだろ?」

「盗作かどうかは、他人が決めることではない。自分が正しいと信

じていれば、それでいいのだ

「やれやれ」ジョンは田玉をまわした。それから妙な胸騒ぎを覚えた。生まれてこのかた、やれやれと書いて田玉をまわしたことなどなかつたからだ。老人のペースに巻き込まれているのではないだろうか。

脚本担当Aが体を乗り出し、老人に指を突きつけた。「いいか。あんたにそんな権限はないぞ」

「それが大きいにあるのだ。このジャンパーが見えるか？」紺色のジャンパーには『ベン&ジェリー』のロゴが印刷されていた。

チーム全員が、互いに目を見合せた。

「そういうことだ」

「あんた、この前までは『バスキン・ロビンス』だつただろう」「転職したのだ」有無を言わせない口調で言った。「さつそくだが提案がある」

「なんだ、アイス屋」

老人は答えず、穏やかな表情でセットに目を向けた。ジョンも見やる。エレノアが玄関で荷物を受け取り、配達員の指示に従つてサインをしている。

「さあ、あつと驚く小道具が入つているんだろつな」

「明日はあの子の誕生日だ」

「生年月日はもう設定済みなのよ?」脚本担当Bがイライラを隠そ

うともせずに言った。

「こつそり通販で買つて、驚かそうといふわけだな」

「中身はなんだ」

「双眼鏡だ。スネジヤナは星を見るのが好きなのだ。屋根に登つて

」

「そんなバカな」脚本担当Aが歯みついた。「どう考へても、スネジヤナが星好きなわけはないだろ」

「最低ね」

「さうか。イヤなら撤退する。どこから制作費を工面するつもりだね？」

脚本チームは（ヘルマンを除いて）不満げな顔をジョンに向かって見ることなら追い出してほしいと訴えかけてきた。

「 言われたとおりにしの、ジョンが言つた。「生年月日もいまなら変更できるだろ？」 異論は？」

もちろん大ありだろ？が、だれも口を開かなかつた。

「あんたは？」

エイミルはいつもと変わらない様子でまぶたを痙攣させながらジョンを見た。青い目は完璧に死んでいるように見えたが、ほんの一瞬老人に向けたまなざしあじつけに鋭かつた。

「かまわないよ。わたしも星は好きだ」

「これで満足か」自分のイスに腰掛ける。「 そういうえば、あんたは物書きを目指していたな。ひとつ言わせてもらりうと、あんたには才能がない。やめておけ。苦労するだけだ」

「客観的な評価など信じないぞ」

老人は足もとからかばんをひっぱり出し、大量の紙とペンを取り出してテーブルに広げた。

「さあ、準備は整つた。あとは執筆に専念するのみ

「ぼくも異論はありませんよ」

ヘルマンが老人をつついて言つた。

「はじめてまして。いいネタがあるんですけど、聞きたくないですか？」 一家そろつてクイズ番組に出場させてですね

小包はサラダ油二点セツトくらいの大きさだった。エレノアはソファの肘かけにすわり、小包をひっくり返しては眺めた。これが次の展開のきっかけになるものだということは、すぐにわかった。口クなものでないのはたしかだ。耳を当ててみたが、時限爆弾がカチカチ音を立てていたりはしなかつた。がさがさと振った。それなりの重さがある。

差出人を確認する。テレビを買ったあのモールからだった。

スネジヤナがバッグを持つて、キッチンから駆け込んできた。「それなに？」

「わからない」振り返ると時計が目に入った。「もうすぐバスが来るよ」

「それ、誕生日プレゼントでしょ？」

バッグをソファに放つて、エレノアのとなりにすわった。背中に頭をもたせかけ、顔を上げて目を輝かせる。胸がいっぱいになり、三日はなにも食べなくてよさそうなほどだった。バッグがひとりで学校へ行こうとソファからずり落ちた。ごろごろ転がって玄関に向かつたが、この調子ではバスに間に合いそうにない。

ぼんやりしていたところをスネジヤナにつつかれ、エレノアはわれにかえった。

「誕生日？」エレノアはピンと来た。「あなたの誕生日のこと？」

「そう！」

「ええと、あなたの誕生日は」「カンペを盗み見る。「明日ね」「頼んでおいたものでしょ？　ずっとほしかったの！　三ヶ月前からヒントを出しついづけてたじゃない！」

「そうね。ああ、そうだった」

めまぐるしい展開に、エレノアは置いていかれそうになる。次々にめくられるカンペに目をやり、棒読みにならないよう気をつけな

がらづけた。

「明日までおあずけよ」『んなセリフをしゃべる田が来るとは思わなかつた。カンペがめくられる。』  
双眼鏡？

スタッフはもう一枚めくつて殴り書きし、エレノアに向かた。  
『せりふじゃない。なまの』と

『そなんだ』

エレノアはひとりとをつぶやいた。そして真つ先に頭に浮かんだのは、プレゼントをネタにふたたび対立させるつもりなんじゃないかといつことだつた。十一歳の女の子の誕生日に双眼鏡をプレゼントして、無事に済むはずがない。

『教えてくれたつていいじやん！ 中身は『そつ』からはじまるもの？』

ほんとうにそつらしい。

バスのクラクションが聞こえた。『そつよ』エレノアは立ち上がって、バッグを拾つた。『次のキーワードは、学校から戻つてきたら教えてあげる。最後のは、土曜の朝の枕もとでね』

スネジヤナは興奮してほっぺたを赤くしていた。いつもこんな気の利いたセリフがしゃべればいいのにとエレノアは思つた。

リュックとふたりで出かけるのを見送り、エレノアはふたたび小包を手に取つた。とりあえず茶色の包装紙をやぶいてみる。中身はきれいにラッピングされていた。いかにもおもちゃ屋っぽい真つ赤な包み紙で、スネジヤナが胸をときめかせながらけり飛ばすさまが目に浮かんだ。

エレノアはキッチンから果物ナイフを持ってきて、金ぴかのテープを剥がしにかかつた。これで中身が『そめん』だつたらお慰みだ。セロハンテープを爪でひつかいてはつまみを繰り返し、やがて白い箱がのぞいた。包装紙の片側が開けたので、慎重に箱を取り出した。大きさは、やつぱりサラダ油二点セットくらいだつた。頼むから驚かせないでくれと祈りながらふたを開け、中をのぞき込み、やつぱり驚かされた。

「やあ、ひさしぶり。またまた会えたね」

中身は双眼鏡だった。珍しく白い色でおもむかしそうだったが、持ち上げてみるとずつしり手<sup>じ</sup>たえがあり、チャチさは微塵もない。

「偶然だつて思つてる? それはちがうね。こいつやって再会できるのは、互いに潜在意識下で求め合つていたからなんだ」

「マーイエ?」

「そのとおり。ぼくはぼくであり、ぼく以外の何者でも……」しゃべりきれずにひと息ついた。「息苦しくて氣を失うかと思つたよ!」「双眼鏡に変身してるの?」

「ぼくがあの子の誕生日プレゼント。ずっとこつしょにいるんだ。いまから楽しみだよ、こつしょに星を見たり、こつしょにベッドに寝たり。最初の週くらいは持つかな」マーイエはため息の効果音を出した。「それとも、彼氏ができるまでかな。でも、いいんだ。役に立てるなら、喜んであの子の人生の一ページになるよ。だつて人生そういうものだからね」

双眼鏡としゃべつていてへんに思われないだろうかと客席を見まわしてみたが、だれも不審がってはいなかつた。それに、シットコムにはたまにこういうトチ狂つた回があるものなのだ。

「人生ね。わたしも人生を学んでるとこ」

「それはなにより!」

「テレビに変身できる?」

「まだ悪い習慣は断ち切れないみたい」

「そういうの。おじこさんと話ができるかと思つて。 リンにも」「驚きだつた。しばらくリンのことを忘れていた。「いつまでもここと、つづけていられないでしょ? 助けてくれるかと

」

「きみのしてこむことは立派だよ。いい母親だ。宇宙で一番田にすてきなことだよ。一番田はなんだと思つ?」

「観客に見られながら、言われたとおりのセリフを言つて「眉を寄せて言葉をひねり出す。「それに 勝手に母親役をさせられて。

『これが娘です。あとはよろしく』って。こんな状況、ふつひじやないでしょ？ どう思つ？』

マーイエはしばらく黙っていた。ぶるぶる震えながらつぶやく。

「ほんとにやめたい？」

Hレノアは答えなかつた。

「ぼくはおじいさんにお願いされたんだ。箱詰めされて、ここに送られるようになつて」

「ほんと？」

「ほんとさ。速達で送られたよ」うれしそうに言つ。「自分で送料も払つたんだ」

「すごい偶然ね。それで、おじいさんが助けてくれるの？」

「求めよ、さらば『えられん』大仰な調子で言つた。「おじいさんはそう言つてたよ。たぶんだれかのパクリだろつけど。でもそんなことはどうでもいいんだ。偶然が起じるのは、きみが望めばいいんだ。それが宇宙の法則なんだ」

「あなたをよこしたのは、なにかの伝言？ それとも？」

「夜になつたら、屋根の上に登つて。星を見ながら話すつよ」

「いま話せないの？」

「計画つていうのは、敵がないところで話すもんだよ！ だよね？」

円卓を見下ろす。ふだんは忙しそうにぱたぱたしている脚本家が、腕を組んでじつとこちらを見やつしている。なぜかおじいさんがいた。机に向かつてせつせと書きものをしている。Hレノアは声をかけた。おじいさんは顔を上げた。無言でうなずき、書きものに戻つた。思わせぶりなだけでなにもわかりはしない。

Hレノアはマーイエを箱に戻し、半分口を開けた包装紙をつぶさないよう慎重につまんで、リンの部屋に持つていつた。机に置く。テレビに変形させたおじいさんと話をしようと思つたが、やつぱりやめた。洗い物の残りがあるし、洗濯物も溜まつている。Hレノアはいそそとキッチンへ向かつた。

おしゃべりな小包が届いた以外、ほかに変わったことはなかった。午後はいつもどおりコーヒーを飲みながらテレビを見て鬱々とした気分になった。子供の誕生日の前日とこのひのせ、すばりこものだ。明日になるのが待ち遠しい。

夕方、スネジヤナが妙に晴れやかな顔をして帰ってきた。

電話が鳴った。

「お子さんのことについて、お話を」

校長先生だ。またかとエレノアはため息をつきかけたが、そんなことじゃダメだと自分に言い聞かせた。「わかりました。これから向かいます」

「いえ、いらっしゃらなくともけつひです。いらっしゃるといつがなくなってしましましたので」

「どうしたことですか?」

「お子さんが破壊してしまいましたので」

「なにを?」

「なにもかも」

意味がよくわからない。「つまり、校長室をめちゃくちゃにしたといつことですか」

「めちゃくちゃといつ表現はできとひではないかもしれませんね、この様子だと。たとえるなら」「苦しそうに」「三度も聞いた。いま、瓦礫の下敷きになりながら電話をかけてくるんです」

「だいじょうぶなんですか?」

「脚の感覚がなくなつてきました。でも、いいんです。校長室だけならかまわないので。わたしもそれほど登場するわけじゃないし」

「ほかにもなにか、そのめちゃくちゃにしたんですか?」「..」

「教室です。完全破壊ですね、わたしあちらつと見ただけです

が。もう授業参観には来れませんよ。お気の毒です」

「クラスメイトは

「

「避難しました。クラスメイトも、担任も。みんなわが家へ帰るために、バス停でバスを待っているところです。クラスがなければ生徒もいらない、担任もいらない、というわけでした。そしてこのわたくしも」

事切れたのではないかと思い、エレノアは呼びかけた。「もしもしち？」

「あのひとことよろしくでしょうか」

「なんでしょう」

「きついお仕置きを期待してますよ」苦しそうに咳き込む。「意識が遠のきかけておりますので、これで失礼して」

電話が切れた。

エレノアは眉をひそめて受話器を見つめた。耳のほうは油でテカテカし、話すほうは穴にほこりが詰まっていた。ほこりとテカテカでエレノアはあることをひらめいたはずもなく、それならなぜ受話器を見つめているのかといふと、たんにカンペで指示されたからだった。

円卓のまゝを見やつた。受話器を指差しながら呼びかける。「どういうこと？」

何人かがエレノアを見上げたが、ひとりも反応しなかった。

「あなたたちの脚本でしょ？」

やはり無視された。

エレノアはスネジヤナを探した。子供部屋に行くと、スネジヤナはやはり晴れやかな顔で、カーティーン側のベッドに足を伸ばしてすわっていた。カメラマンに事情を説明し、退出してもらつ。このところすっかり気が合つていて、暇な時間にはいっしょにテレビを見ることがあつたし、相棒のケーブル持ちのしゃべりも聞き取れるようになつていた。

スネジヤナは雑誌から顔を上げ、ほこりした。まるで別人だつた。エレノアは胸がざわついた。

「学校から電話があつたの」

「うん」スネジアナは一回まばたきした。「あたしの」とじょ  
エレノアは迷つてなんかないといふりをしながら、必死で言葉  
を探した。しかしいくら言葉を探しても、『いつべきい』とひとつし  
かなかつた。

「今日、校長室を破壊したの？」

「うん」

「教室も？」

「うん」

スネジアナはうんしか言わない。そしてこいつする。エレノア  
は本氣で心配になつてきた。ベッドのわきにしゃがんで、相手の顔  
をのぞきこむ。

「具合が悪いの？」

「うん」

「どうして破壊したのか、教えてくれる？」

スネジアナは答えず、またしてもにっこりした。とおりいつぺん  
の笑顔。こんなものを向かれてもぜんぜんうれしくない。エレノ  
アはマットレスのへりを握つた。

「教えて」やや強い口調で言つた。

すると一回まばたきして、にっこりして、言つた。

「助けてあげたの」草原でお花でも摘んでいたつなやわらかい声で  
言つた。「みんな困つてたから」

「クラスメイトのこと？」

「先生もね」

「みんなにケガは」

「無事よ。わが家に帰つていった」

わざかに上を向き、夢見るような表情を浮かべた。それから田の  
焦点を合わせてエレノアを見た。

「あなたもそろそろ帰る？」

口調は親しげだったが、バスで偶然となりになつた相手にするよ  
うによそよそしかつた。

「帰る？」ここが家でしょ？」動搖を隠そつと笑いかけた。それから、余つてまもないころスネジヤナがよく言つていたセリフを思い出した。「みんなの家よ」

「ちがう」静かにかぶりを振る。「ただのセツトよ」  
まばたきして、次のセリフを待つようにエレノアを見つめた。  
エレノアは混乱した。なにをしにきたんだっけ？ そう、お仕置  
きだ。子供が悪いことをしたときには、お仕置きをしなければ。テ  
レビで見た『お仕置き入門』の内容を思い出そうとした。番組では、  
子供がしでかす悪さを五段階にわけ、それに最適なお仕置きの  
方法を細かく説明していた。教室を破壊したときの謹慎期間が思  
い出せない。脳みその中でたらめに手を伸ばす。

「とりあえず、週末は謹慎よ」できるだけきつぱりと言い放つ  
た。「リュックが帰つてきたら、期間を決める。それからプレゼン  
トはああづけ。わかつた？」

「うん」

「じめんなさいは？」

思わず声を荒げる。するとスネジヤナはにっこりと笑い、言つた。  
「もう母親役を演じなくてもいいのよ」

雑誌に目を落とす。

じばらぐのあいだ、呼吸がとまつてしまつた。苦労してつばを飲  
み込んだ。しゃがんだまま、「三歩あとじさつて、立ち上がつた。  
目の前が暗くなってきた。いつたいどうしたというのだろう。脳み  
その反対側から声が聞こえる。いや、スネジヤナの言つたことは正  
しい。どういうわけか知らないが、正気に戻つたのだ。もうお互い赤  
の他人で、演技をつけなくともいいところ」と？ おじいさんが  
開放してくれたのだろうか？

エレノアはおぼつかない足もとで部屋を出て、自室に戻つた。机  
にある白い箱に手を伸ばし、イスの背もたれに膝をぶつけた。

マーイエを取り出し、がくがく揺さぶつた。「起きて」

「起きてるよ。返事しなかつただけ」

「携帯電話に変わつて。おじいさんと話がしたいの」

「その顔、えらく人相が」マーイエは途中で黙り込んだ。それ以上はなにも言わず、身もだえするようにパートを入れたり出したりし、電話に変形した。

耳に当てる。留守番電話の自動音声に切り替わった。アドレス帳からメールアドレスをひとつぱり出し、両の親指をせわしなく動かした。

「年寄りはメールができるんだよ」マーイエが忠告した。

「読むだけならできるでしょ」

送信するとすぐに携帯電話が震えた。「着信したよ」とマーイエが言った。

「最終回だ」

言葉足らずでよくわからない。エレノアはイライラしながら返信した。「最終回になるの？ 最終回にするの？」

「するの」改行。「現実を取り戻す最後のチャンス」

「その方法は？」

「メールは面倒。電話する。屋根に登つて。星を見ながらどいつもこいつも星を見ようと言いく出す。なにかの暗号だらうか？」だとしたら大失敗だ。

「スネジヤナの様子がおかしい。なにか知ってる？」

「わたしが変えさせた。設定を」改行。「いい子になつただろ」「着信したよ」とマーイエがふたたび言つた。

「だから？」  
「アドレスにはないね。迷惑メールかな」  
メールを開く。たしかにおじいさんからではなかつた。

「じいさんは拘束した。最終回になどさせるか。ジョンより」

玄関の呼び鈴が、えらい勢いで連打された。エレノアは階段を下りて玄関を開けた。

「郵便です」

と言つて、配達人はいつたん奥にひっこんだ。山盛りの封筒が入つた籠を抱えて戻ってきて、玄関マットの上にどさつと置いた。

「それでは」

「ちょっと待つて。うちのはどれなの？」

「せんぶです」配達人は言つた。「それでは」

電話が鳴つた。エレノアは籠を持ち上げようとしたが重すぎて持てず、足拭きマット」とひきずつて中へ入れた。玄関を閉めて電話に出る。

「おたく、エレノア？」

返事をしたとたん、電話の相手はまくし立てた。

「おめでとうござります！ わたし、テレビ局の者です。応募ありがとうございました。それで

「応募？」

「出場が決定いたしました！」

「出場？」

「クイズ番組『幸せ家族／絶望家族』に、一家そろつて

「クイズ番組？」エレノアはまたしてもおうむ返した。「応募して

ない」

「そうですか？ ならきっとお子さんが応募したんでしょう？」

「子供がいるってどうしてわかるの」

「知つてますよ、なんでもね。テレビの人間ですから

「あなたの声、聞いたことあるんだけど」

「気のせいですよー よくある声なんです」ヘルマンが言つた。「出場について

出場について

急に電話が切れた。

舞台の外が騒がしくなつた。円卓のほうを見ると、携帯電話を持つたヘルマンが警備員に取り押さえられていた。どうしてこんなところにいるんだろう。ジョンに向かつてなにごとかを怒鳴つている。ジョンは完全無視の体勢で、イスにすわつて脚本を見ていた。

ヘルマンはしばらくじたばた抵抗していたが、やがて退場させら

れた。

仲間割れが起きているのだろうか。エレノアは受話器を置いた。置いたとたんにまた鳴り出した。

「あなたはエレノアでしょ？」「返事をすると、相手は事務的にづけた。

「スネジヤナちゃんのおかあさん？」

「はい」

「わたし、警察の者ですが、お子さんがやらかした件で」

「ちょっと待つて」エレノアはさえぎった。「あなたの名前は？」警察の者とやらは黙りこくった。電話の向こうでかすかにがさがさという音が聞こえる。

「ああ、あつた。わたしの名前はニック・ノルティです。デ力です。スゴ腕の」

「外国人？」

「移民の子なんです」

「所属はどこ？」

まだがさがさがはじまつた。小声でだれかと話をしている。

「もしもし？」ようやく電話口に戻つた。「ちょっと待つてもらえます？」

エレノアは電話を切つた。

と思つたらまたまた鳴り出す。エレノアは天井を向いてうめいた。電話のコードを抜いた。

「そうだ！ それでいいのだ！」

おじいさんの声がした。エレノアは振り向き、舞台の前に進み出た。

「もうなにもするな！ なにが起きても無視するのだ」

円卓の近くでイスにすわり、必死な様子で呼びかける。おじいさんは手を後ろにまわされ、体を縄で縛りつけられていた。近くに巨大な男が仁王立ちしていた。角刈りで上半身裸に迷彩柄のズボンをはいている。

角刈りの男はエレノアに気づくと、目を光らせながら気ちがいじみた笑みを浮かべた。腰に吊るしたナイフを抜き、熱い風呂に浸かつたみたいな恍惚とした表情で自分の胸板にナイフの先を当て、斜めに動かした。もちろん傷口から血が出てきた。

ジョンがエレノアに言った。

「この男が次になにをする気なのか、わかるか？」

エレノアはとぼけて答えた。「もう一回、胸に傷をつけるとか」角刈りはそれを聞いてうれしそうに胸にナイフを当てたが、ジョンに制されてしまふしぶしる腕を下ろした。

「おまえの仲間の老人に、ひどいことをしようと思つているんだ。口では言えないようなことをな」

エレノアは引かなかつた。「ただの脅しでしょ。ホームコメディだもん。暴力描写は禁止されているはずでしょ」

ジョンは大きな顎を動かして大笑した。テレビ界の人間ならではの笑いかただ。

「それで賢くなつたつもりか。こつちはセットの外だ。暴力描写の規制は対象外でね」

ジョンは角刈りにうなずいた。角刈りはうなずき返した。とくになにもしないので、ジョンはもう一度うなずいた。角刈りはもう一度うなずき返した。ジョンは仰向いた。「拷問をはじめるという意味だ」ようやく理解した角刈りが、おじいさんの前に立ちはだかつた。分厚い手のひらを上げ、おじいさんの顔を平手打ちした。おじいさんは毅然と正面に向き直り、大男をにらみつけた。はやくも口から血が流れている。ジョンをにらみつけ、怒鳴りつける。「 sponge サーにこんな真似をして、ただで済むと」  
もう一発殴られた。今度は鼻血が出てきた。

「おまえおじいさんとで、番組を終わらせるつもりだつたんだろう？」

「そうはいくか」

血が出るのがはやさぎるような気がしたが、殴られるのを黙つて見ているわけにはいかなかつた。「やめて。なにが望みなの」

「簡単なことだ。これまでどおり、番組をつづける」「いつまでこんなことを

「さあな。ミーカが飽きるまでだ。メールが来てるぞ。おれの雇い主はそこそこ満足しているようだ。だが、まだまだだな。なにせはじまつたばかりだし、印象的なシーンもつくれていない」

背後でスリップパがばたばたいう音が聞こえた。エレノアは振り返った。スネジヤナが肩をいからせ、大またで階段を駆け下りてくる。

「このバカ！」

円卓に向かつて怒鳴つた。そのままダイビングしそうな勢いだつたが、セットの切れ目で急ブレーキをかけた。

「もうほつといて！ あんたたちなんかきらい！」

「いいぞ。もとに戻つたようだ」

ジョンが言い、尻の大きい女の耳もとでなにとかしゃやいた。女はうなずき、キーボードをかちやかちや叩きはじめた。

すると、家の外からぼよよんというアニメ的な効果音が聞こえてきた。玄関が騒がしくなつた。だれかが必要以上に大きな声で話をしている。酔っ払いかなにかのようだ。

玄関の呼び鈴が鳴つた。

「出ないのか？」とジョンがたずねる。

「出ない」

エレノアは女のノートパソコンをじっと見た。ああやつて脚本や登場人物を操作しているのか。そしてたぶん、スネジヤナの感情も。ボタンひとつでいい子にしたり、暴れさせたりしているのだ。

おじいさんがなにか言いかけた。角刈りがみたび殴りつける。血を流せるところがなくなつたので、動かなくなつた。

「さあ、出るんだ」ジョンが低い声で威嚇するように言った。

キッチンの扉が開いて、カメラマンが姿をのぞかせた。肩で扉を押しやってリビングへ踏み入れ、エレノアにレンズを向けた。ほかのカメラに目をやって、映らないように二歩きで移動する。エレノアはピンと来た。

「こっち来て！」

「カメラに話しかけるな」ジョンが言った。「『こちらブルームー  
ン探偵社』じゃないんだぞ」

エレノアは無視した。「いいから来て！」

カメラマンはケーブル持ちと顔を見合わせた。するとスネジヤナ  
がだと駆け出して、カメラマンのすねに蹴りを入れた。大げさに  
痛がってぴょんぴょん飛び跳ね、観客はメタ的展開に首をひねりな  
がらも笑っていた。スネジヤナは後ろにまわりこみ、ふくらはぎを  
蹴り、背中を押した。カメラマンはしぶしぶといった様子でエレノ  
アに近づく。

「ありがとう」

「どういたしまして！」エレノアを見上げ、息を弾ませた。「プレ  
ゼントくれるなら、なんでもやっちゃう！」

エレノアはカメラマンを捕まえ、円卓を指差した。「おじいさん  
を撮つて！」

カメラマンは困ったように眉をひそめた。

「お願い。カメラを向けられれば、暴力はできなくなるから」

「いうことをきいたらクビにするぞ」ジョンがすこんだ。「わが家  
に送り返してやる」

「一度助けてくれたでしょ？ 家事ができないわたしに、テレビガ  
イドを渡してくれて」どんなセリフが感情に訴え、どの順番で  
言えばより効果的かを考えた。だがカンペで示してくれるような気  
の利いたセリフは思い浮かばなかつた。「あなたはとつてもいい人  
よ。ケーブル持ちも。この前の晩、将来の夢について語つてくれた  
じゃない、映画監督になるつて夢。わたしたち、友達になつたと思  
つてた。友達だから話してくれたんでしょ？ わたし、友達つてよ  
くわからないんだけど、きっと

「ともだち」

カメラマンはフランケンシュタインみたいなセリフを言った。そ  
れからゆっくりとカメラを振り返らせ、円卓のほうにレンズを向け

た。

「殴るなよ」ジョンは角刈りの男に言い、カメラマンをにじみつけた。「おれにメタフィクションをやらせる気か？ おまえの将来はもうないだろうな。おまえの人生の可能性はおれがぜんぶつぶしてやる」

「とも だち だいじ 」

「すごい展開ね」スネジヤナがぼそりと言つた。「こんなのはじめて」

「あなた、だいじょうぶ？」

「なにが？」

「さつきはすぐ 落ち込んでたみたいだつたから」

「おちこみ？」きょとんとする。「なんの話？」

チャイムが連打される。スネジヤナはエレノアの手をつかんだ。

「たぶん、出前の人だよ！ 寿司を頼んだの！」

「寿司？」

玄関にひっぱられる。エレノアの制止も聞かず、スネジヤナは勝手に玄関を開けた。

スーツ姿の人間口ケット弾が飛び込んできた。うつ伏せで着地し、勢いあまって何度も跳ねながら床をすべりつけ、じゅうたんをひつぺがしつつ核弾頭部分をテーブルの足にぶつけてよつやくとまつた。

観客が爆笑する中、エレノアは小走りに駆け寄り、不発弾のように動かないリュックの体を反転させた。膝についてのぞきこむ。リュックが目を開けた。「ただいま！」エレノアに顔を向けるが、焦点が合っていない。

「酔っ払つてゐるの？」

「どうしてわかつた？」

「くさいから」

「そうだ。そうだ。酔っ払つてゐる。」「うしちやいられない」

リュックは弾かれるように立ち上がり、左右に揺れながら玄関

を指差した。「はやく玄関を閉めて」と言い終わらないうちに体が横にがくんと傾き、足どりしをケンカさせながら体勢を立て直そうとしてカメラマンにぶつかった。驚いて振り向くカメラマンに危なつかしい笑みを向け、「カメラだ!」と言つた。それから比較的真剣な表情で自分の背中を探り、ベルトにはさんであつた長方形の黒い箱を取り出し、カメラマンにしがみついて箱を顔の前で振つた。「それ、ベータ?」カメラをべたべた触つては眺め、肩を落とした。「なんでもかんでもデジタルだ。アナログの良さはどこにいつたんだよ」突然暴力的にカメラをひつたくり、床にたたきつけた。壊れたカメラの前にうずくまって泣き出しが、三秒で立ち上がつた。親しげに肩に手をまわす。「ごめん。酔っ払うと昔が懐かしくなるんだ。わかるだろ? CDよりもレコードのほうが音がいいんだ。きみのせいじゃない。きみが悪いわけじゃないんだ」あたりはしんと静まり返つていた。スネジヤナでさえ呆気にとられていた。

「あいつには気をつけろ」ジョンがスタッフに言つた。「なにを仕出かすかわからんぞ」

「ここにいたのね、リュック」

玄関口にメガネの女性が立つていた。今度はゲストだ。エレノアはめまいがした。これはスピードティーな展開というべきなのだろうか。完全に狂つている。

「玄関を閉めると言つたのに」

リュックがあとじさつた。メガネの女性はにこり微笑みながら、モデル歩きでリュックへ向かつた。正面に立ち、細つこい腕をリュックの首に巻きつける。観客はブーイングを浴びせ、スネジヤナは番犬のようになつた。

「今夜は楽しかつた」

女性の頭越しにエレノアをのぞきこんで言つた。「無理やり楽しませられただけなんだ!」

「そう

「信じてくれ」ヴァラが頭で視界をふさぐ。逆方向に顔を見せて言った。「これ、同僚のヴァラです？」

「そう？」

「なんでもないんだ、なんでも！　ただの　飲みニュケーション！」

「そう！」

「エレノア！」いつのまにか回復したおじいさんが怒鳴った。「頭の湯気を引っ込めろ！」

知らずに湯気が出ていたらしい。言われたとおり引っ込んだ。「忘れてはいかん。なにも感じるな。なにも演技するな。役者がうまそうにビールを飲むCMがあるだろう？」「エレノアはうなずいた。

「ほんとうは飲むふりをしているだけなのだ！」

まったくアドバイスになつていよい。

エレノアは雑音を打ち消そうと、テレビを見るようにリュックを見た。すると観客も、カメラも、スタッフも、リュックに抱きついている女性も、ほとんど気にならなくなつた。

静かに語りかける。

「話はできる？　ふたりだけで」

「いいよ」リュックが言つた。女性が抱きつきながら振り向いて、蛇のような笑みをエレノアに向けた。そしてリュックにキスした。

リュックは無理やりひつべがした。「おじいさんの言うとおり、この女性は無視して。なんでも話せるよ　□がふさがつてないときは」

「気にしない。あなたをテレビだと思つて見てるから」

「それ、最高の褒め言葉だな。ありがとう」「どういたしまして」

「こっちも話があるんだ。終わりにできるよー　現実を取り戻すことができるんだ！　ぼくらだけじゃない、みんなの人生を」

「ほんとに?」

「ああ。このテープで　　『残りのセリフはヴァラに吸い取られた。  
逃れようと暴れまわるが、ヴァラはびくともしない。』『こんなのが、  
狂ってるよ』

「わたしも同感」

「いい?　すぐに屋根に登るんだ。裏庭のトランポリンを飛んで

』

「なに?」

「トランポリン!　リンとは知り合いだろ?　ベータマックスのビ  
デオデッキを手に入れるんだ!」

「はあ?」

なにを言つているのかさっぱりわからない。ついにリュックは押し倒された。観客のブーイングも激しさを増し、半分以上が立ち上がりて親指を下に向けている。ヴァラの体勢はそれほど卑猥ではなく、ただ寝転がっているだけですよといつでも言い訳できるよう、番組に気を使つていていたみたいだった。

「おかあさんがかわいそう!」「

だしぬけにスネジヤナが泣き出した。それも転んで膝をすりむいた四歳児のよくな大泣きだった。わっと声を上げて抱きついてくる。エレノアも思わず抱きしめようと手を伸ばすと、急に突き飛ばされた。「あっに行け!　新しいおかあさんと暮らすんだ!」そしてふらふらと離れていき、ぐるりと振り向くとこいつと笑つた。「プレゼント、まだ?」

見てられない。エレノアは円卓を見やつた。でぶつちょの脚本家が頭を抱えながらノートパソコンに向かい、ヒステリックにキーボードを叩いている。「言わんこっちゃない!　スポンサーが口をはさむと、こうなるんだよ!」もうひとりの女性と激しく口論している。「それじゃダメだ!　ぜんぜん感情に訴えかけてこないだろ

』

「あれでスネジヤナを操作しているのよ!」エレノアはリュックに

呼びかけた。「あのパソコンをなんとかして！」

リュックは顎を上げて円卓のほうを見、うなずいた。ぎりぎりセーフな格好で絡みついてくるヴァラにビンタをしました。驚いている隙に相手を押しのけ、ふりつきながら立ち上がった。なにするかと思つたら、円卓に駆け出してセットからダイビングした。腹からテーブルに着地し、書類や食いかけの中華料理のパックや携帯電話を跳ね飛ばした。脚本家は驚いてイスを引き、その場から離れる。しばらく度を失つた昆虫みたいにテーブルの上でわさわさやつっていたが、パソコンが目に留まり、またわさわさやって立ち上がった。モニター部分をいっぽいまで開いて、液晶画面にかかとを叩きつけた。めきつという音がし、なぜか火花を散らして爆発した。リュックはひるまず、すべてのパソコンを破壊してまわった。

「なんとかしたぞ！」

両手を上げてバンザイした。後ろでおじいさんが怒鳴つた。「は

やく助けてくれ！」

ヴァラはのろのろと立ち上がり、ゾンビのように体を揺らしていった。なにかやらかしそうだったのでエレノアは身構えたが、急にぱつちりと田を開け、きょろきょろした。「ここのまどこ？」

元に戻つたのだ。これでスネジヤナも、本来の姿に戻つてくれる。脚本を操作されることもなく、自分たちでシナリオをつくり、セルフを考え、いつしょに暮らすことができるのだ。

エレノアはスネジヤナに声をかけた。スネジヤナは電池切れでぼうつとしていたが、声をかけられると顔をひきつらせて笑顔のようなものを浮かべた。後遺症かなにかが残つているのだろ？ またしてもエレノアは怒りを覚え、そしてこの子のためならなんでもしてあげたいと思つた。

「そんなヒマはないぞ」

いつのまにかおじいさんがとなりに立つていた。けわしい表情に鼻血を垂らし、鏡のような瞳で見つめてくる。そしていままでいちばん芝居がかつた口調で言つた。

「さあ、出発のときだ」

リコックもセットに飛び乗った。床に落ちていたビデオテープを

拾う。「すぐに行こう。寿司屋には悪いけど」

「どこに行くの？　なんの話？」　スネジヤナはどひつかるの？  
置いていけない」

「その子はほつとけ」おじいさんは冷たく言い放った。「ただのキ

ヤラクターだ」

「バカ言わないで。ほつとけない。わたしの子だもん、当然でしょ」  
「すっかり演技にのめりこんでいるようだな。母親役を楽しんでい

る」

口を開いたが、さえぎられた。

「いいか。あんたは母親ではないし、この子もあんたの子供じゃない。少し考えればわかるだろ？　目を覚ませ。そして現実を取り戻すのだ」

「現実ってなんだかわからない」

「十八歳未満ならみんなそう思っているよ。あんたはちょっとテレビを見すぎたせいで人よりじつぢやになつていて、取り戻すのに遅いということはない」

おじいさんが腕をつかむ。振りほどいてスネジヤナのもとに走った。そつと肩を抱いてソファに連れてていき、端っこにすわらせる。  
「ちょっと待つてね」

階段を駆け上がってリンに部屋に向かった。机の上に、箱に入つたマーメイドと半分開いた赤い包装紙がそのまま残っていた。そつと包装紙をつまんで箱を差し入れようとしたが、うまくいかない。むき出しの箱を抱えてリビングに戻った。  
となりにすわって笑いかける。

「プレゼントがあるの」

「なんの？」

「誕生日のプレゼントよ。覚えてない？」

スネジヤナは目を閉じてまぶたを震わせた。「　あんまり

「ほんとは明日になつてから渡す予定だつたんだけど」

「そうなんだ」

「これを」

箱を渡そうとするが、おじいさんが立ちはだかつた。世界でいちばんきらいなおじいさんだ。顔も見たくない。「時間がないのだ。いいからこっちへ来い！」

「イヤ！」腕をぶんぶん振りまわす。

「これはあんただけの問題じゃ」

「待て！　とめるな！」

まるで神さまみたいに、思い切りエコーのかかった声が天井から降りかかるつてきた。雷の効果音もあとからついてくる。まるでどうか、そのものだつた。実在する人間とテレビのキャラクターすべてをひつくるめでいちばん嫌いな男だ。

「じいさん、手を出すなよ」ミーカが脅しをかける。「いい場面、最高の場面だ。トイレに立つ暇もない。　まあ、つづけてくれ、エレノア。感動的なシーンにしてくれよ。総集編でもう一度見るから」

声と雷の効果音だけにもかかわらず、おじいさんはいつことをきいて引き下がつた。エレノアは思わずお礼を言った。「なんのなんの」とミーカが答える。困ったような顔で見まわすスネジヤナについて振り向かせ、プレゼントを渡した。

スネジヤナは箱を開けた。「これなに？」

「双眼鏡よ」

「　　テレビみたいに見える」

「そう、テレビよ。いまはね。でも、双眼鏡になつたり携帯電話になつたりトースターになつたり　　ただのテレビじゃないの。話しかけると返事もするのよ」

「ほんと？」スネジヤナはマーキュを振つて、かわいらしく話しかけた。「もしもし？」

「はいはーい！」マーイエは芸人みたいに答えた。「きみがスネジ

ヤナか。はじめまして！ きみの人生これからだよ！ やりたいことはなんだってできる。どんな人生が待っているんだろうね？ わくわくするよ！」

「はじめまして」

エレノアは完全に泣きそうになっていた。これは演技ではなさそうだった。声を震わせてつづける。

「でも、気をつけてね。食事をさせないと、機嫌をそこねて話さなくなるから」

スネジヤナは慣れない様子でタッチパネルを操作していた。「あたしと同じなのね」

エレノアは口を押さえた。「そうね。わたしたちと同じかも」「ここでお別れね」とスネジヤナが言つ。

「どうして」

「カットがかかるから」

ジョンが叫んだ。「カット！ 撤収だ！」

スネジヤナは消えた。

エレノアは半ば引きずられながら屋根裏部屋へ入った。途中までは半ばだつたが、キヤットウォークのあたりからは完全に引きずられた。エレノアは行きたくないことを示すために、脚をだらりと投げ出したり、手すりの柱を力こばさんでみたり、スネジヤナのようになじたばたしたりした。抵抗するたびに口でも「行きたくない」と付け加えた。大人の口調や子供の口調、脅してみたり哀れんでみたり、思いつくかぎりいろんなしゃべりかたを試した。

どれもまつたく効果がなかつた。

「あんたは扉を閉じるための鍵だ。置いていくわけにはいかん」おじいさんが右のわきを抱えながら言つた。

「番組は終わつたんだよ」リュックが左のわきを抱えながら言つた。

「今度は、みんなの番組を終わらせなきゃ」

「行きたくない！」エレノアはダメ押しで言つたつもりだが、そもそもはじめから相手にされていないのでダメを押そうにも押せなかつた。ネタ切れになつたのでエレノアはしょんぼりした。「スネジヤナが消えちゃつた

「いつまでこだわつている？あの子は脚本家の連中がこしらえた架空のキャラクターで、実際には存在しないのだ」

「存在するもん」

「しないんだつて」

「仲良くなつたのに！」ありつたけの声で叫ぶ。「やつと気持ちがつづじたのに。あんなかわいい子、会つたことない。そう思つでしょ？あんなにっこりされたこともないし、あんなに頼られたことも」

「いまは、ほくらがきみを頼りにしてるんだよ」リュックが言つた。「架空のキャラを愛るのはかまわん。イラストを描いたり、同人誌をこしらえたり、人それぞれだ、好きにすればいい。楽しいこ

とばかりつづけたい気持ちもわかる。だがいまは、現実の問題を解決するのが先だ」

なにが現実だ、とエレノアは思った。思つただけではイライラが収まらなかつたので、やつぱり口に出して言つた。「なにが現実よ」セツトは自分たち以外だれもいない。ジョンの号令とともにスネジアナは消え、スタッフも撤収した。観客も終わつたのだと気づくと、めいめい席を立つてセツトをあとにした。最後に残つたジョンは、がらんとした円卓から見上げ、エレノアに最後のセリフを吐いた。「おれにすべて任せれば、いい人生を送れたのにな」

男ふたりは屋根裏部屋へエレノアをひっぱり上げた。セーのと掛け声をかけて勢いをつけ、エレノアをマットレスに放り投げた。マットレスの上ではねつかえりながらどうにか体勢を立て直す。髪の毛をかき上げ、あぐらをかいて腰を落ち着ける。にらみつけるのも忘れない。

「それで?」自分でもとげとげしい声だと思ったが、構うことなくつづけた。「現実を救うんでしょう? わたしはなにをするの? チアリーダーになつて殺人鬼に襲われる?」

おじいさんは冷たい視線を向け、それから窓を指差した。「そこから屋根に登る。トランポリンに飛び乗つて、テレビ界に行く。ベータマックスを奪つて」

「トランポリン?」

「トランポリンが扉だ。自宅にあつたコートハンガーを覚えているだろ?」「どうしてわざわざ屋根から飛ぶの?」

「楽しいからだ」おじいさんは真顔で言つた。「スリルがある」「テレビだから、でしょ?」

「そのとおり」

「楽しい」とする気分じゃない

リュックが手を差し伸べてきた。エレノアはかぶりを振つた。  
「ぼくも悲しいよ。そう見えないとしたら、たぶん酔つ払つてゐるか

らだらうね

「あなたにわたしの気持ちはわからないよ」

「いや、わかる。きみはよく、好きな番組が最終回になるとガツクリ落ち込んでたよね。ぼくはずつと『たかがテレビ番組で』って思つてた。『存在しないキャラクターなのに』ってね。でも、なんとなくその気持ちがわかつた。いまはね」

鼻をすすつて、手を握る。ひっぱられながら立ち上がった。

木枠の窓をきしませながら持ち上げ、ひとりずつ屋根へ這い出た。ななめつた足場でまともに立つことができなず、エレノアは中腰で手をつきながら、もう一方の手で髪の毛を押さえた。ちょっと風が駆け抜けるだけで転げ落ちそうになる。

「ベータマックスってなに？」エレノアはつま先を見ながら叫んだ。「ビデオデッキ！」リュックが答える。「人生のビデオテープは、ベータでないと再生できないんだ。ベータは現実世界には存在しないくて

「どこにあるか、見当はついてるの？」

「さあね」

リュックは大工職人のように軽々とバランスを取っている。酔っ払っているからかもしれない。へりの近くまで駆け下り、裏庭をのぞきこむ。エレノアはその様子を見ているだけでくらくらした。

「ここから飛び降りよう」リュックは振り向いて、いたずらっぽい笑顔を見せた。

「ケガでもしたらどうするの」

「そのときはいちばんいい医者を紹介してやる」おじいさんは肩を叩き、しゃがみ歩きで屋根を下つた。

しぶしぶエレノアも追いかける。

風の音に混じつて、ピーという音が聞こえてきた。顔をゆがめながらへりからのぞきこむ。中庭の芝生の真ん中へんに、家庭用のトランポリンが見えた。飛び跳ね面があるべきところに、見覚えのあるカラー・パターンが揺らめいていた。

男ふたりはエレノアの両側に立ち、腕をつかんで引き起した。

エレノアは悲鳴を上げた。

「跳ね返つてとなりの芝生に頭からつつこむかも！」

「その調子だ！」突風に顔をなぶられ、おじいさんは目を細めながら

「子ギムニアラフミタルニテハジ」

「ミサノ」

卷之三

エレノアは自動的にリン・タウンゼンドを思い浮かべた。ほんとうに会うことができるのだろうか？ もしほんとうならば、テレビ越しでなく、実際に触れたり、握手したり、抱きしめたりできる。ずっとそうしたいと思っていた。長年の夢が叶うのだ。

答える前に、男ふたりが一、二歩助走をつけて屋根から飛び出した。エレノアはひっぱられながら悲鳴を上げ、トランポリンへ落下した。

エレノアは地面に着地し、驚いた。これまでにはミーカに落とされるたびに頭を地面に打ちつけたり首を折りそうになっていたのだが、はじめてまともに着地できたのだ。あたりを見まわすと、さりに驚かされた。

「面白黒だつた。エレノアは自分の手を見た。やっぱり面白だつた。

「侵入は成功だ」白黒のおじいさんが言った。頭をさすりながら顔をしかめている。ちょうど落ちたところに大きめの石が置いてあって、しかも上下逆さまに着地したからだつた。天罰だ。「テレビ界へようこそ」

「どうして白黒なんですか？」リュックがたずねる。

「衰退の証だな」

色のない世界を見まわすのはけつこう難しい。エレノアは一步一歩地面をたしかめるように歩きながらあたりを見まわした。小さな村のど真ん中に出現したようだ。道路は砂利道で舗装されておらず、古びて見えるポーチ付きの家がぱつりぱつりと建っている。道端の雑草が風に揺れ、建物のすきまから丘や谷がうねり、遠すぎてはつきりしないが森のようなものが見えた。遠近感がつかみづらい。

民家から離れたところに、聖堂の三角屋根がそびえていた。それもなんだかチヤチくて、コントで使う鉄骨にベニヤ板を貼った大道具みたいだった。なんかの拍子でばつたり倒れてきそうだ。

エレノアは目を細めてひととおり眺めたあと、目をこすった。妙に疲れる。

「頭が冴えてきたような気がする」リュックも目をじばたかせている。

「白黒映像は脳を刺激するからな」おじいさんが言った。「さあ、行くじゃ。ビデオデッキを探さなければ」「どうやって探すんですか？」

建物の陰から人があらわれた。足をとめてこちらを見ている。村人だろうか。明らかによそ者を監視する目だ。一行はゆっくりと近づいていった。頬がこけたおっちゃんで、薄いくしゃくしゃの頭に無精ひげを生やしている。何色かわからないネルシャツの袖をまくり、ほこりまみれのよれよれジーンズをはいていた。

エレノアたちは礼儀正しく用件を伝えようとした。だが不幸なことに、一行の中に礼儀正しい人間はひとりもいなかつた。

「現実から来たつて？ 昼間から酔っ払つてるとか？」

「酔つてなんかいないぞ」ほんとうは酔つているリュックが言った。

村人はひとりひとりに疑わしげな目を向け、たぶんそう答えるだろ？というセリフを言った。「そもそもに話すことはなにもねえよおじいさんが威厳を見せつけるように言つ。「われわれはある重

要な使命を負つて 「

「あんたはさつきからそれしか言わねえな」

「うちが明かない。だいたい、てきとうに出現した村で都合よく見つかるはずがないのだ。エレノアは話題を変えようと割つて入つた。「リンはどこにいるの？ 会いたいんだけど」「リンゼイちゃんの知り合いか？」

「親友なの」

村人の表情がわずかに和らいだ。「ついてきな」

まるで用件を伝えられなかつた一行だつたが、とりあえずリンに会つてみようかと村人の案内に付いていった。道を下つて小川を越え、五分もしないうちにたどり着いた。

「こいだよ」

山道沿いの平屋建てで、ほかの民家より大きい。屋根には何色かわからないがペンキのはげた看板がかかっていた。『お食事処リンゼイ』と書いてある。そのまんまだ。

リュックは窓から中をのぞきこんだ。「こんなところにビデオデッキが置いてあるわけないよね」

それを聞いた村人が、険しい表情でリュックに詰め寄る。リュックは窓から離れてあとじさつた。

「いいか。ここはよそ者が来るところじゃねえ」ほとんどのつつきそうになるまで顔を近づけ、目をむいて痩せた顎を動かした。「だれも歓迎しねえし、ビデオの話をするつもりもねえよ。昼飯を食つたらさっさと出ていきな。それがあんたらの身のためだ」

食堂に入ると、ほかの客がいつせいに振り向いた。さつきの村人が言つたとおり、友好的な顔はひとつもなかつた。中に進んでテーブルを探すあいだも、無遠慮な視線を送つてくる。エレノアは髪で顔を隠すようにうつむいた。監視カメラよりずっと不愉快だった。

「田舎は好きではない」おじいさんがむつりと言つた。

「なら、つくらなきやよかつたんですよ」

「そろはいかない。田舎が舞台の名作もあるだろ？』『かなり待ち

わびて』とか』

テーブルに着いた。リュックとおじいさんは、モノクロの傑作『かなり待ちわびて』のハンサムな郵便局員について話している。エレノアはリンを探そうと顔を上げたが、すぐにやめた。村人は相変わらずこっちを見ながら小声で話し込んだり、食事の手をとめて本格的に見つめたりしている。「あれ、エレノアじゃない?」とささやく声が聞こえた。

「なんでフィネラは六十年も手紙を待ちつけたのかな。直接行つて話を聞けば済むことなのに」

「女性の奥ゆかしさといつやつだな。だから人気があるのだ」エレノアは男どもを交互に見て言った。「ねえ、重要な使命はどこにいったの?」

と、いつのまにかエプロン姿の給仕が立っていた。

「どうも。注文は決ました?」

声を聞いて、エレノアは顔を上げた。白黒のリン・タウンゼンドが伝票を持ち、エレノアに笑顔を向けていた。

エレノアはふらふらと立ち上がった。リンが手を差し伸べたので、おそるおそる握った。やわらかくて華奢で、ひんやりしていた。リンはおひさしふりと言い、エレノアも言った。白黒だつたし、髪もだいぶ伸びていて後ろで束ねているのちよつと印象がちがつて見える。それでは抱き合いましょうかと両手を広げると、リンが手を上げて制した。

そこまでの仲じゃないか。エレノアは肩を落とした。

「ははは。そうじゃないの」リンは笑いながら背中に手をまわし、エプロンを脱いだ。「これ、かなり汚れてるのよ。白黒だとわかりづらいけど」

そして思う存分抱き合つた。

つづいてリュックにあいさつする。おじいさんを見ると、にこやかな表情が急に険しくなった。「こんにちは、おじいさん」

「行くぞ」

おじいさんがリュックの肩を叩き、席を立った。

「来たばかりなのに。食べないんですか？」

「そんな暇はない。それに、ビデオテッキのありがたを思いついた」「思いついた？」リュックは声を裏返した。「思いつきで行動するんですか」

「そう。常にな」

リュックはかぶりを振り、尻をすべらせて立ち上がった。おじいさんはとおりざまリンをちらりと見やり、弁解するよつと言つた。「連れてくるしか方法がないくて」

「それはそれは」リンは大げさに驚いた顔をして、うなつた。「これ以外に方法はないのだ、絶体絶命のピーンチ！ つてわけね」「ぼくは行くよ。きみはどうする？」リュックは腰をかがめてエレノアをのぞきこんだ。

「あなた、いつしょに行こうって言わないので？」リンがエレノアの代わりにたずねた。「恋人でしょ」

「互いの意見を尊重する仲なんです」

「なるほど」リンは妙な顔をして言つた。「年寄りになつた気分」「あんた、白黒だと往年の名女優みたいに見えるな」「リンにこりみつけられ、おじいさんは下を向いた。

「なら、はやく行つたら？ 探しものなら男ふたりでじゅうぶんでしょう」

「そうだな。そうするか」

「わたしはエレノアに話があるから」

エレノアは顔を上げた。「話？ なんの話？」

「奥さまふたりでする話」

「もう行く」

おじいさんは軽くうなづいて背中を向けた。頭をかき、首をひねりながらリュックもつづいた。

「ふたりとも、でつちあげるのよ」リンは眉を上げ、手をひらひら

と振つて見送つた。「女どもはここで待つてるから」

ほかの客の注文をとおしたあと、リンは厨房のほうに友人が来たから十分だけはずすと声をかけた。でぶつちょの主人はしょうがないというふうにうなずき、ストップウォッチを取り出して時間を計りはじめた。

リンはレモネードをふたりぶん運んできて、テーブルに置いた。「さて」と言い、エレノアの向かいにすわった。「よく来てくれました」と言いたいとこだけ。なにしに来たの?「おなじみの目を細めるしぐさ。「ほんとは許されないのよ」

「わたしもよくわかつてないの」エレノアはグラスを手のひらで包み込んで、うつむいた。窓から差し込んだ白い光がグラスに反射した。「ベータのビデオディックを探しに、って言つてたけど、なんのことだかさっぱり。ここにあるの?」

「わからない。でも、おじいさんなら見つけられるでしょ。コツを知つてるから」

たずねようとする、リンが先まわりして言つた。

「テレビ界で人や物を探すコツは、物事を都合よく考えることなの。勝手な思いつきとか、でつちあげとか。それなりに納得できる理由があれば、なんでもいいの」

「ふうん」

「暗いね。なにがあつた? それともスターになつたから、わ

たしにはもう興味がなくなつちゃつたとか」

「そんなことない」いつそなにもかもぶちまけてしまおうかと思つたが、迷惑だらうとやめておいた。てきとうに濁して話題を変えた。

「あなたはここでなにをしてるの?」

「働いてるの。お給仕よ。はじめは料理もしてたけど、なぜかやらせてくれなくなつて」

リンは大きな口を開けておどけてみせた。共通のネタに、高校生の女の子みたいに顔を見合わせてくすくす笑つた。少し気分がよくなる。

「仕事がなくなっちゃつたから、しかたなくね」

「カーティーンとリュックは？」

「別れた。あの番組が終わつたから」

「でも、ほんとうの子供なんでしょう？」

「うんにゃ。番組がつづいているあいだだけ」皿をぱちぱちせわ、  
平然と言つ。「終了すれば、赤の他人」

「現実はちがうの。自分の子供は、ずっと自分の子供で　あたり  
まえすぎて説明しづらいけど、そうなの」

「現実ね。いまはだいぶテレビ化してるみたいだけど？」

話を聞くあいだも、スネジャナのことを考えていた。あれからず  
つと考へつづけている。脳みそにはつきり焼きついているのは、無  
邪気な笑顔でも、すねを蹴り上げるときの怒り狂つた表情でもなか  
つた。消える瞬間に浮かべた、奇妙な表情だった。あきらめのよう  
にも見えたし、失望しているようにも見えたし、肩の荷が下りてほ  
つとしているようにも見えた。

「テレビ界では、あれがふつうなのね」エレノアはつぶやいた。  
リンは身を乗り出した。「わたしもあなたの番組を見てた」

「ほんと?」

「再放送でだけど。おもしろかつたと思つ。退屈で」

「退屈　つてことは　」

「退屈。よかつたって意味」リンはまじめくさつてうなずいた。「  
はじめはノリが悪かつたけど、あなたが家事を覚えたあたりからど  
んどんつまらなくなつた」

「一生懸命、退屈にならうとしたの。それでね　」

「だけどラストは最悪ね。まるでテレビみたいな感動のシーンだつ  
たじやない。ミーカは大喜びよ。現実であんなことしちゃダメ」

「最悪　」

言葉を詰まらせた。リンに悪気がないのはわかる。つまり、テレ  
ビ番組的にはおもしろかったということなのだ。ファンが選ぶ感動  
の場面。もう一度見たいあのシーン。エレノアとしては、べつに観

客を泣かせようとして演技をしたわけではなかつた。演技ですらなかつた。だけどリンやおじいさんは認めようとしない。現実は最初から最後まで退屈でなければならないのだ。

主人がストップウォッチをちらつかせた。「あと五分だ」「レモネード、飲まないの？」リンは場を盛り上げようと、冗談めかして言つた。「わたしが用意した小道具よ。ちゃんと使つてくれなきや」

エレノアも笑おうとしたが、うまくいかなかつた。言われたとおりにグラスを持ち上げ、口をつけた。レモネードは好きじゃない。モヤモヤは晴れなかつた。

「スネジヤナに会いたい」思わずこぼれる。

「あの子はキャラクター。現実には存在しないの」

「もうウンザリ」気づくと大きな声でおつかぶせていた。気持ちが治まらないので、さつそく小道具を使つた。音を立ててグラスを置く。「テレビも、テレビ番組も、キャラクターがどうのこのの。もうウンザリよ。わたしはあの子に会いたいだけ！」

布巾で皿をぬぐおうとしたが、汚いかもしれないのでやめた。

「テレビはもう見ないってこと?」

「見ない。口クなことにならないから」

「もう話しかけてくれないんだ」

「そんなどから、ミーカに皿をつけられたのよ」落ち着こうと息を吸つた。「それで、こんなふうになつて。つらい目に合つて」「リンが皿をそらしたので、口もつた。と、急に体を乗り出して言つた。

「母親役は楽しかった?」

「エレノアはうなずいた。

「わたしもそうだった」座席にすわり直す。「ほんとの子供はいいんだけど、番組のあいだはすぐ楽しかつた。ヘンテコ家族だったけど、充実してたし、ほんとの子供がほしくなつた」

「なら、気持ちはわかるでしょ? ずっとつづけたかった

」

「わたしね、再婚しようと思つてゐるの」

「ほんと？」

リンはうなずいた。「やうすれば、ほんとの子供が持てる。あなたもそうしたら？」

「でも？」

「お互に、べつべつの世界で」大きな声ではつきりと言つた。「実際に住む世界で。スネジヤナは、ちがつ世界の子なの。意地悪で言つてるわけじゃない。わかる？」

母親が娘に言つよくな強い調子だつた。エレノアは言わんとしていることを考えてみた。だが、すぐに納得できるものじゃない。視線を避けたかつたので返事をした。

「わかった」

「やりたいことがあるなら、やればいいのよ」表情が和んだ。「奥さんになりたいなら、なればいい。すてきな彼氏もいるじゃない。ちやらんぽらんみたいだけね」

思わず吹き出す。

「テレビもそ。わたしがキャラクターだから言つてるんじゃない。ミーカやあなたの親戚がなんと言おうと、見ると決めたら見る」とよ。好きなんでしょう？」

慎重にうなずく。

「まあ、テレビを見るのはたしかによくは思われないけどね」「じゃあ、どうすればいいの？」

「テレビを見るのはいい。だけど」

リンはエレノアの手を握り、言つた。

「あなたは少し、度が過ぎているの」

主人がいきなり叫んだ。「食い逃げだ！」ストップウォッチを投げつける。飛んだ先を振り返ると、ちょうど男が入り口のドアを肩でどついて逃げるところだつた。「リンゼイ、追つかけてくれ」

「こんなときに」エレノアはボヤいた。

「ちがう。新展開よ。なにがあつたんだ」リンはエレノアの手を離

して、勢いよく立ち上がった。「いつしょに来て！」

「コメティつぽくばたばたと密のあいだをとおり抜け、ドアを押していなくなつた。これが「都合よく考える」ということか。密全員の視線を受けながらあとを追つた。

だいぶ小さくなつたリンを見つける。走るのはしんどい。すぐに息が上がり、何度も砂利で足をすべらせ、ひざがくずれそうになる。リンの姿がどんどん小さくなり、白黒の背景のしみみたいになつていぐ。

リンが建物に入つていくのが見えた。背の高い、張りぼての道具のような安っぽい聖堂だつた。エレノアは顎を上げてせいぜいいながらたどり着き、玄関にしがみつくようにしてとまつた。しゃがみこんで息を整える。

たぶん、犯人を追つてたどり着いた聖堂に偶然ビテオデッキがありましたという展開なのだらう。しゃがみながら何度もノックした。扉がわずかに開いた。すきまを見上げると、老人の顔が半分あらわれた。のぞき見するように外をきょろきょろしている。

エレノアは無理やり笑顔をつくつた。「牧師さまでですか」

「なんだ」驚いた様子で下を見る。「フェイントかね」

老人は牧師だと言った。名前はなく、ただの脇役だとも言った。エレノアは、ここに女性ともうひとりが飛び込んで来なかつたかとたずねてみた。

「飛び込んできたよ」脇役の牧師がうなづく。「たくさん飛び込んできた。あんたはエレノアだな」

うなづくと、牧師は体の幅まで扉を開いて、胸の前に手を組んだ。「ベータマックスのお導きだな。ありがたいかどうかは、またべつの話」

中におされた。典型的な聖堂だつた。背の高い窓から白い光が射し込み、たぶん二色の壁に陰影をこしらえている。両端にはたぶんこげ茶色でつやつやしているベンチが整列していた。牧師につづいて（たぶん）赤いじゅうたんを歩き、正面を見て、思わず声

を上げた。

典礼用の段の中央が金色に輝いていた。

牧師はいつのまにか右手にある説教壇に上がっていた。ひとつ咳払いする。

「かつて、世界はカラーであった」唐突に説法をはじめた。「かつてはいくつもの人生があった。役づくりに失敗したとき、セリフをトチッたとき、整形しすぎて顔がぐちゃぐちゃになったとき、共演者と交際したがうまくいかなかつたとき　　人生はいつでも巻き戻せた。めんどくさくなつたら早送りすることもできた」

エレノアは目を細めて金色のものを見た。ようやく目が慣れ、なんのかがわかった。黄金のビデオディッキだつた。

「われわれの生きる時代はモノクロで、人生は一度きり。やり直しは利かない」

牧師を無視してディッキに近づく。おじいさんとリュックも来ているはずだ。だが牧師とふたりきりで、ベンチにもだれも腰掛けていない。

「嘆き悲しむことなけれ。汝、ベータを信じよ。さすれば人生巻き戻されん。　　試練は幾度となくおとずれる。ときには途中でテープが絡まつたり、兄弟が勝手にアニメを重ね撮りしていたりするかもしれない」

「長引きそうなので、エレノアは失礼を承知で口をはさんだ。」もうけっこです

「けつこうとは？　あなたはベータを信じないと、やう言われるつもりか」

「そうじゃなくて」

「ベータ信者は数少ない」穏やかに微笑む。「しかし、ベータのほうが画質がいいのだ。EDベータは水平解像度が五百本以上だって、知つてた？」

「知らない。　DVDしか持つてないから」

牧師は顔を曇らせた。「あなたはどこから来られたのかな

「現実」

「なるほど、現実から。それはたいへん高画質なことだ。さしづめ天からの使者といったところだね」

エレノアは牧師をのぞきこんだ。「うさんくささが鼻につくようになってきた。

「天使がいれば悪魔もいる。それでは」「登場願おう」意味不明な説法が終わり、奥の扉が開いた。同時に開け放しだつた入り口からも、村人たちが二十人ばかり入ってきた。

牧師の顔が、笑みを張りつかせたまま不自然なCGみたいに固まつた。それからなめらかに継ぎ目なく、顔から顔へ次々と変化した。牧師から山羊になり、スピルバーグ監督になつた。それから親戚のおばさんになり、スネジヤナの学校の校長先生になり、ミー力になつた。それからスタンガンを食らつたようにびくりと全身を硬直させ、ようやくふつうに動き出した。

ミー力は「じゃじゃーん」と手を広げ、げらげら笑つた。「驚いた?」「べつに」

「でも、おもしろいだろ? さあ、クライマックスだ」

黒服のすそをたくし上げ、壇からひょいと飛び降りた。ビデオデッキの前を行つたり来たりしながら、べらべらとしゃべりまくる。

「ぼくの考えるクライマックスは、いろいろある。たとえば、ぼくは怒り狂つてきみを襲う。きみは抵抗するが、非力な女性だ。もうダメ、助からない」そこへ間一髪、きみの彼氏が助けにやってきてぼくをぶつ飛ばす。ふたりは再会、そしてキス。どう?」「ぶつ飛ばされたいの?」

「おもしろいなら体も張るよ。だけどそんなにおもしろくないかな。あついたりだしね」奥の扉をのぞきこむ。「おーい、はやく出でこいよ」

いかめしい顔の看守が警棒を手にあらわれた。つづいて囚人服を着た集団が列になり、足をひきずりながら出てきた。おじいさんに、

リュックに、リンだ。いちばん後ろにもうひとりいたが、たぶん食い逃げ犯だろう。要領の悪いことだ。

「 考えたんだけど、いちばんおもしろいのはきみがスネジヤナを取り戻すことだ。そのときのきみの笑顔。これこそ視聴者がいちばん望むことだ。どう?」

エレノアは思わずたずねた。「できるの?」

「もちろん。その代わり、ビデオテッキはあきらめるんだ。そうすれば感動の再会をさせてやる。ハンカチも大量に用意するよ」

エレノアは眉間にしわを寄せたまま、いつもどおりのニヤニヤ顔を見つめ、ミーカの頭の中を探ろうとした。探れば探るほどただのアホに見えた。だが楽しければなんでもオーケーのテレビの神さまならそれもおかしくないかも、と思つた。

「スネジヤナを返してやる。またあの家で、家族として暮らすんだ。これぞハッピーエンド。そう思わない?」

「罷だ」囚人のおじいさんが言った。看守が黙れと警棒でこづいた。「罷なもんか。利害の一致だよ」ミーカは振り向いて大げさに手を広げた。「ぼくはテレビを見つづける。エレノアは愛する娘を取り戻す。お互い幸せ。なにがいけない?」

「みんなの人生を取り戻さなければ」とリュック。やはり看守にこづかれる。

「ほかの連中なんて知つたことか。それにテレビを見るかぎりじゃ、現実の人間はだいぶ演技を楽しんでいるみたいだつたよ。『えられ人生だなんてだれも気にしていないし、そんなことはどうでもいいんだ。楽しければね。平凡な人生に戻してやるなんて、それこそひどい話じゃないか。だろ?』エレノアを向く。「きっとみんな、きみを恨むよ。だれも感謝なんてしない」

「ほんとうに、スネジヤナを返してくれるの?」

「壇上に立つて、聴衆の前で宣言するんだ。それだけでいい。その瞬間から、きみの番組は再スタートする。シーズン二がはじまるつてわけ」

「ダメだ」今度はおじいさんが言つたので、看守は急いでこづきに引き返した。

エレノアはつま先を見つめ、かぶりを振つた。「あの子がほんとうに、わたしと暮らすことを望んでいるなら

「そいつはきみの自由だ。きみがあの子にそつ望んでほしければ、心から望むようにする。なんでもぼくに言つてくれ。どんなスネジヤナがいいか、いまのうちから考へるといいよ。着てほしい衣装、きみが好きなヘアスタイル、いい子か悪い子か、ふつうの子か。なんでもきみの思いどおりだ」

「そのままでいいの。わたしの都合で変えなくとも

「それは無理だな。あの子はキャラクターだから。想像上の産物なんだ。脚本がなければ中身がカラッポの器にすぎない。『えなれば人形と同じなんだよ』

「そのとおりだぞ。いいかげん目を覚ませ！」おじいさんは言つた。次はリュックだと思って戻りかけた看守が裏をかかれてイライラしながらこづきに来たが、振り払つてつづけた。「あればただのキャラクターなのだ！」

「ただのキャラクターじゃない！」

エレノアは怒鳴つた。どいつもこいつもキャラクター、キャラクター。あれは実在しないのよ、つくりものなのよ、いいかげん現実を見たらどうなの、などなどなど。生きていなければどう扱つてもいいというのか。こんなことで怒るのは自分で、それもテレビを見すぎて頭がおかしくなつたせいだと思っていたのだが、ふいにそうではないと気づいた。ふざけてるのはそっちのほうだ。

「お願いだからそんなふうに言わないで。わたしにとつては大切なの。わたしにとつては、よ。存在しないかもしれないし、あなたにとつてはただのキャラクター、どうでもいい存在でしょうけど」

おじいさんはもと神さまの肩書きをちらつかせながら、冷たいまなざしで見つめ返してくる。今度ばかりはエレノアも引かなかつた。看守がどつちをこづけばいいのかと困り果てるほど長いあいだにら

み合いで、ついにおじいさんが目をそらし、うつむいた。

神さまに勝つとは。よっぽど恐ろしい顔をしているにちがいなかつた。

「わたしもあなたのキャラクターだつた」そのまま怖い顔をミー力に向ける。「好き勝手にいじられるのは、とてもイヤな気持ちになるものよ。他人の都合で人生を決められたり、着たくない服を着させられたり。中身がカラッポだつて言われるのも」

ミー力はまつたくひります、ニヤニヤしながらエレノアを見ている。いつのまにか聴衆全員がエレノアに注目していた。

「じゃあなにがしたいの、つて聞かれると、すぐには答えられない。そうは見えないかもしぬけど、これでもすつと考え方つづけてるのよ」

聴衆のひとりが立ち上がつた。「おれには人生の目標がある。オリンピックに出場して」

ミー力がその聴衆にリモコンを向けた。なんの競技でメダルを目指しているのかを言つ前に、ポンという音と煙を残して消えてしまつた。

「ひどい」

「いいところを邪魔するからだ。エキストラのくせに」リモコンを囚人たちへ向ける。「はやく最後の宣言をするんだ。でないと、大事な人間がまた消えることになるぞ。ひとことでいい。『スネジアナと一生暮らしたい』と」

「あなたは大嫌い」まるで告白するみたいに、真剣に言った。「だけど、やっぱりテレビは嫌いになれない。いろんなキャラクター。みんな大好きよ。できるだけ長く、番組をつづけてほしい。視聴者なんか気にせず」

エレノアは段々に上がり、宣言した。

「だから、テレビはほどほどに見ることにする」

静まり返つた。

「なんだつて?」ミー力が言つた。ニヤニヤが顔からすつと抜

け落ち、啞然とした表情にすり替わる。

「それから、テレビに話しかけるのもやめる」

「自分がなにを言っているのかわかってるのか?」

「それから テレビを見ているときに電話が鳴つたら、ちゃんと応対する。話しかけられたら、ちゃんと返事をする」ちりつヒリュックを見、息を吸つてつづける。「テレビガイドもぜんぶ買わないで一冊だけにする 番組表は同じだもん。ドラマは一話からずつと見ていくという理由だけで見つづけない。つまらないなと思つたら、見るのをやめる。見たい映画はなるべく映画館で。たぶん、そういうものだから」

「やめろ、やめろ」ミーカは悪靈払いの最中みたいな声で言い、何度もかぶりを振つた。「そんな、心にもないことを」

「あ、あともうひとつ。好きな女優に必要以上に入れ込んだりしません。表情をまねたり、同じものを無理して好きになるのはやめます。赤の他人で、しかもテレビの人だから」

リンはずつと、まぶしそうに田を細めながらエレノアの宣言を聞いていた。田が合い、きらわれるかもしれないと頭をよぎつたが、思い切つて言つた。

「アイスクリームつて、じつはそんなに好きじゃないの。嫌いでもないけど。あなたが好きだったから、好きなふりをして食べてたのよ」

エレノアの言葉を脳みそに染み渡らせるように田を動かし、しばらくしてうなずいた。リンは列から離れ、おじこさんの腕に触れた。顎で外のほうを指し、エレノアの前をとおりすぐれる。最後のひとことも、お別れの抱擁もなかつた。一度も「かうを見ることなかつた。

「やるべき」とはわかっているな「おじこさんはうなずき、いそいそとリンの後を追いかけた。

エレノアは鼻をすすつた。涙で声をゆらゆらさせながら締めぐくつた。

「以上、そういうことです。意味はわからないかもしれないけど

観衆を見まわす。たしかに全員、意味がわからなそうな顔をしていた。するとひとりが手を鳴らしながら立ち上がり、後を追うように次々と拍手がふくれ上がり、「氣づけば全員が立ち上がり、笑顔で手を叩いていた。エレノアのスピーチが聴衆の心を動かしたはずもなく、たんに聴衆の役を演じているからやっているだけのことだつた。

ミーカは腕を振り、拍手をさえぎつた。エレノアに振り返る。

「それじゃ、まるで　まるで　赤の他人を見るような目つきで言った。「ふつつの視聴者だ」

「そうかもね」

「なんて　ふつうな女だ　」「ミーカはあとじさり、すそを踏んづけてよろめいた。「そこいらへんにいるただの女　その他大勢のエキストラだ。わざわざエキストラの道を選ぶなんて」

「ふつうでけつこう」ぼんやりしているリュックに聞いた。「今日の夕飯はなにする?」

ミーカは頭を抱えて金切り声を上げた。

「ああ、ふつうだふつうだ　」

黒服を脱ぎ捨てる。カツラを脱ぎ、コントакトをはずし、運動靴に履き替えてから大またで出口に向かった。

「まったく、こんな女に惚れていったなんて　人生やり直そうかな

」

「現実世界にエキストラはいないんだぞ!」リュックが背中に向かつて叫んだ。「みなそれぞれの人生においては主役を演じているんだ!」

「なにそれ。マーイエみたい

「言つてみたかっただけ」

段に上がり、ゆっくりとエレノアのそばに寄つた。背中に触れる。

「マーイエって?」

「おしゃべりトレーディング。宇宙の法則のことばっかりしゃべるの」「テレビの話とか。信用できないな」

「そうね」

「でも、まちがいじゃないかも」

「どっちでもいい」エレノアはあくびをした。「眠い。しゃべりつかれちゃった。今日はもう、なにもしたくない」

「けつこうだね。『今日はなにもしない』って、いちばんわくわくする決断だ。そう思わない?」

エレノアとリュックは現実世界に戻り、がらんとしたセットの家でのんべんだらりと過ごした。翌日になつて、黄金のベータマックスをテレビにつなぎ、失われた人生のビデオテープを再生してみた。なにかしなければいけないような気がしたが、それどころではなかつた。テレビでは決して見せられない大人のお楽しみのあと、ふたりはこれからのこと話を話し合つた。

それからテレビを見た。それなりに、ぼちぼちと。番組はもとのおもしろおかしい内容に戻つていた。自殺率が急増しているというニュースが頻繁に流れ、どうやらその原因は退屈な現実へ戻つた反動にあるようだつた。ここにきてふたりはよつやくやるべきことを思い出し、またほかにやることもなかつたので、ビデオテープに収録されている人物を探し出して自己に呼び、目の前で再生してみせた。テープの人生はいろいろなパターンがあつて、どれもたいして代わり映えがしなかつたが、その人が好きなものを選んだとたん、悩ましげだつた顔が一気に晴れやかになつた。そしてそのとおりの人生がはじまつた。

リュックはホームへ勤めた。戻つてから『買い物』技がいつさいできなくなつっていたので、お金が必要になつたのだ。なぜ『買い物』ができなくなつたのかは、なんとなくわかつたような気がした。ほんとうにまじめに仕事をこなしながら、倉庫からビデオテープを少しずつ持ち出した。ホームはまともな会社に戻つていた。エイミル

も元気ハツラツだった。ビデオテープをすべて運び出すころ、リュックはクビになつた。

エレノアはかたっぱしから自宅へ人を呼んだ。簡単な料理でもてなしながら、人生のビデオテープを再生する。ある資産家を呼んでテープを見せた際、これでほんとうの人生を取り戻せましたとけつこうな額の謝礼をもらつた。いつのまにか、呼んでもいないのになが集まつてくるようになつた。ある場所に行くとほんとうの人生を取り戻せるという評判を聞きつけ、やつてきたのだった。ふたりはテープを見せる代わりにけつこうな額の料金を取ることにした。

がらんとしていた客席では、順番待ちの人があおせい腰掛け、思い思いにしゃべりながらセットを眺めている。このころエレノアはちょっととした有名人になつていて、たびたび雑誌やテレビの取材を申し込まれた。喜んで申し出を受け、法外な出演料を請求した。

仕事を終えたある夜、自分たちがインタビューで出演した番組『徹底検証！ 現実のテレビの神さま』を見ながら、すべてが終わつたときのことを話した。じつは自分たちのお気に入りのビデオテープを見つけていて、最後のひとりが片づいたらいっしょに見ようかと考えていたのだ。見終わったそのときから、そのとおりの人生がスタートする。再生するべきかどうかは、いまのところわからない。

## 23話 最終回（後書き）

お疲れさまでした。いかがでしたでしょうか？ 感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4514m/>

---

エレノアTV！

2010年10月8日12時22分発行